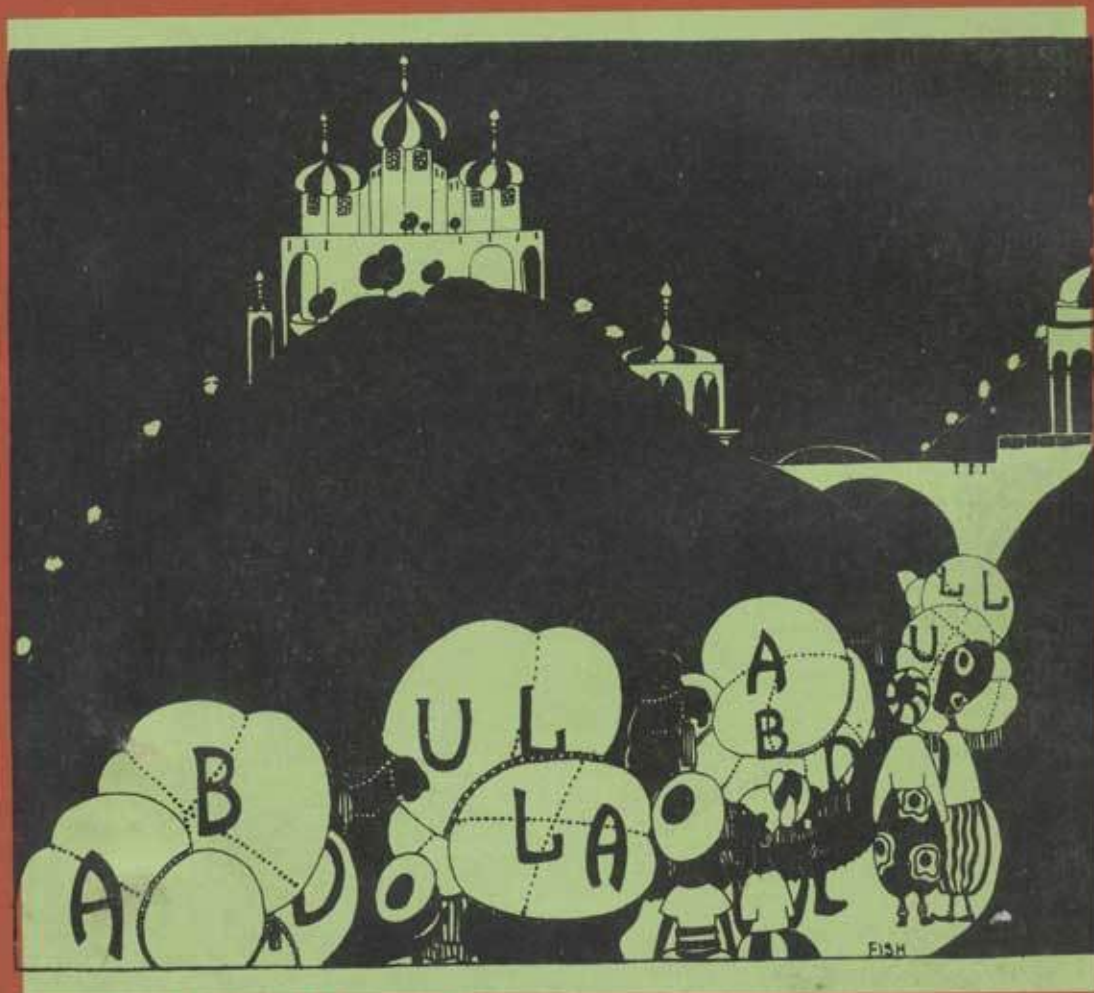


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

5月号



1963・5

奇譚クラス

5月号

定価二百円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



日本版
サド侯爵虐絵巻

画の大きさ **A5判**

21種×15種(本誌の大きさ)
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9」

はいこの練習画風
通信画割作伯豊
信集に約ごを伯を
販譲に約ごを伯を
売品と生をそてア
の成ら歳を燃アイ
のいしわ。え押世
により強口。えア
分まし烈絵。え風
譲した。に於せ靡適
します。く。せめた無
す。これ。種構奔四比
な。々々。想放馬の

の一般書店では、一切販売しない。お願ひ致します。

内容はサド侯爵と自称する或る億万長者の青年が、その巨大なる富を背景として訓練し、美貌のうら若き女性を飼育して熾烈な嗜むところという華麗にして雄大な絵画化であります。



「日本版サド侯爵悦庵繪巻」解説

一、女体食卓（大テンプルの中央に股を開いてアグラ縛りにされた全裸の美女が仰向けに寝かされている。ボクは今夜の調理人だ）

二、逆さ吊り女体（ベッドの傍では膝で吊られた真白く輝く女体が逆さになって目の前にブラさがっついてる。ボクはムチを持って紅潮した美しい顔を心ゆくまでいたぶるのだ）

三、針のトイレ（針の植った奇妙なトイレ、浣腸を施された美女が今や排泄を強要されている。ボクは覗き窓から眺めている出歯亀）

四、女体燭台（厳重なアグラ縛りで乳首に結んだ紐がピンと張っている。仰向いた顔に立つ蠟燭に火をつけたボクは額をつけた）

五、拷問室のベット（お前はボクの可愛い愛玩物、衣服をすっかり剝

六、浴室の女神（むつちりと肉のつ
 いた女体にグルグルと巻いた太い縄
 が水を吸って縮み、足を釣られた女
 神のような清純な美女がムチうたれ
 て後光を放って悶える）
 七、蛙腹の実験（水道の蛇口からゴ
 ボゴボと否応なしに口に注がれ、き
 やしななお腹が妊婦のように膨らむ
 ）のボクはじつと見つめる）
 八、アクロの舞（アクロバットの前
 歴をかってボクは君に、こんな奇妙
 な恰好を強要している。闇に輝く女
 体は素晴らしい舞踊だ）
 九、排尿の図（さあ、鏡にうつった
 お前の姿をく見てごらん。赤ちゃ
 んは、こうして抱っこされてオシツ
 コするのだよ。さあ、オシメカパー
 をはずしませうね）



連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り
略号(りつ)

八枚一組 A5判

五〇〇円 (21 × 15 匁)

感光紙焼付
(送共)

第二集

逆胴吊り
略号(りつ)

八枚一組 A5判

五〇〇円 $(21 \times 15 \text{ 種})$

感光紙焼付
(送共)

吊責にあえぐ美人モデル 梨花悠紀子嬢の裸身があますところなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていただくために、**A5判**（21種×15種）の大きさに廓大いたしました。宙にういた梨花嬢の悶悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フオトの圧巻であります。この全写真は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。

全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思うままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がビシビシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたものですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出していることを信じます。

第一集（逆エビ吊り）
両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいる。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上った美しい逆エビの裸身――

第二集（逆胴吊り）
ヒューツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによって、くぐもってしまふ。縄は徐々に滑車によって巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとした裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。



凄絶！とおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待

画の大きさ A5判

(21纏×15纏) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

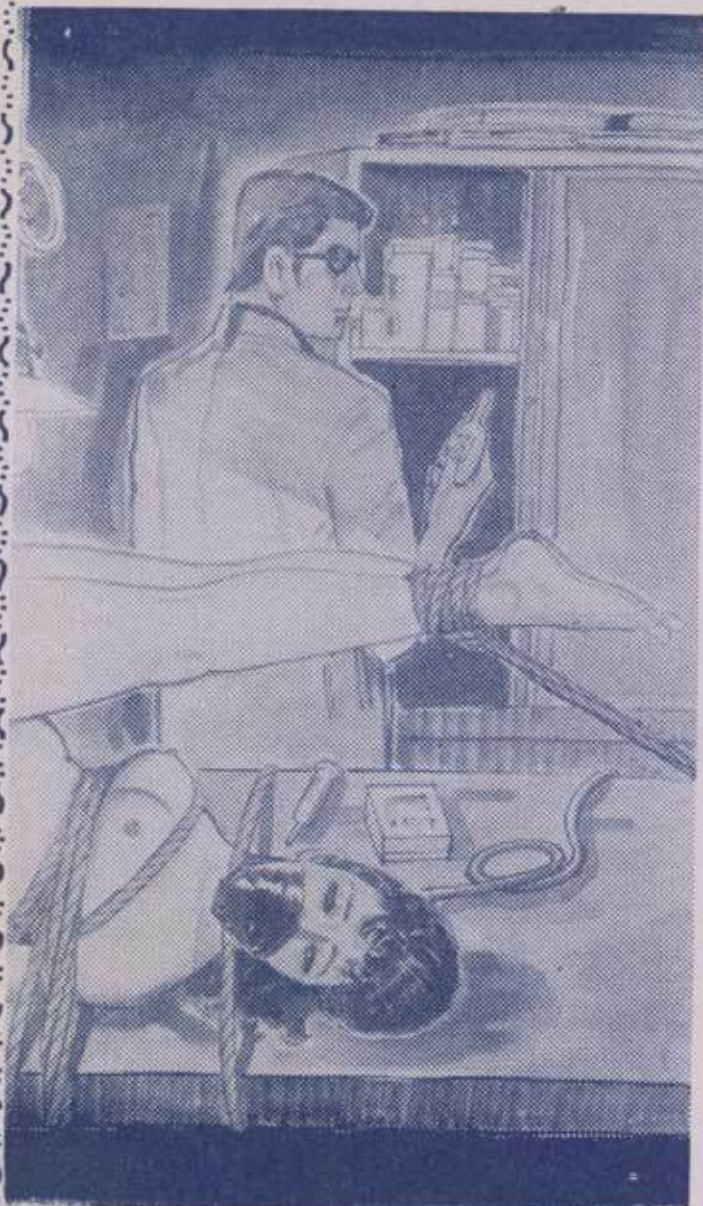
二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイルリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれぬばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを、四馬孝画伯の豊富なアイディアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、きく久しい間の垣をのぞき、まいろぬでこの一端、浣腸の面白さ、頂果てぬ夢の一端、四馬氏の背景、数々の女体浣腸ある姿、背景、小

道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニアの方には勿論のこと、Sマニアの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニアのため、引続いて刊行するために、御支援下さるようお願いいたします。



奇譚クラブ 五月号 目次

華麗なるファッション・モデルの縛りプレイ

(一) サジスチンと可憐なペット 三木 浜田

(二) 責め疲れた愛情の交錯

猿ぐつわのための鼻なぶり 絹川 文代

美貌と美しい鼻の醜弄 大塚 啓子

緊縛のスローカーブ・ライン 愛川 悦子

ロープの乳枷

アイデア画 倉庫の中の美しい荷物 四馬 孝画

四馬孝 (舌吊りの構想) 四馬 孝画

傑作画 (鼻を灼(や)く) クロード・コガ

異色畫画 乳首のおもり 黒川 不二男画

無頼の徒に取り囲れて 滝 れい子画

女性切腹の幻想図「切り裂く」 四馬 孝画

女体自決画「差し違え」 滝 れい子

マゾ画 ヘッド・ロックの法悦境

麗貌と怨嗟のまなざし 絹川 文代

水責めと水垢り 大塚 啓子

和装縛りの美的感覚 館 典子

マゾ・フォト (人間馬) 絹川 文代

長襦袢と縛しめに耐えた表情 梨花 悠紀子

太股と足首のアップ 梨花 悠紀子

ムチ打ちに悶える関谷夫人 関谷 富佐子

ニヤグラビヤ

あるミミック師の最期

死霊の谷間 野中 愛三 (34)

ガン作・マニヤのノート 芳野 眉美 (43)

△女と女の血斗、娘切腹、女の生首▽シリーズ

駿府城女曾我 牧 真二 (46)

ふんどしをしめた女の美にとりつかれた愚者のたわ言 室井 英山 (44)

サジスチック・ストーリー

美しいなき声 伊関 康明 (56)

颯子の足 芳野 眉美 (68)

おむつ受難記 原 由貴子 (76)

「奇譚三十九夜」物語 (第二十四夜) 辻村 隆 (82)

長期刑へのあこがれ 花田 一郎 (100)

結婚——木枯しの章—— 久留木 栄 (122)

女人切腹秘話

勝子の最期 堀川 七郎 (103)

小説 十字架の妻 (続) 竹谷 十三 (118)

読者告白 浣腸の旨酒に酔いしれて 竹野 圭子 (126)

女性男装管見——回想から—— 田島 直士 (128)

バンドフォト 雑感 安田 高夫 (136)

〔告白〕愛の惑い 万田 不仁 (138)

——被虐愛さんげ——

ルポルタージュ 女房連の女相撲 円山 景三 (148)

創作 銀杏屋敷の女 三条 卓史 (150)

随筆 春霞 六尺二景 百田 章二 (164)

△モデルの手記▽

いけにえの幸福 大塚 啓子 (168)

読者通信 (178)



奇譚クラブ 五月号 目次

華麗なるファッション・モデルの縛りプレイ

(一) サジスチンと可憐なペット 三木 浜田

(二) 責め疲れた愛情の交錯

猿ぐつわのための鼻なぶり 絹川 文代

美貌と美しい鼻の醜弄 大塚 啓子

緊縛のスローカーブ・ライン 愛川 悦子

ロープの乳枷

アイデア画 倉庫の中の美しい荷物 四馬 孝画

四馬孝 (舌吊りの構想) 四馬 孝画

傑作画 (鼻を灼(や)く) クロード・コガ

異色畫画 乳首のおもり 黒川 不二男画

無頼の徒に取り囲れて 滝 れい子画

女性切腹の幻想図「切り裂く」 四馬 孝画

女体自決画「差し違え」 滝 れい子

マゾ画 ヘッド・ロックの法悦境

麗貌と怨嗟のまなざし 絹川 文代

水責めと水垢り 大塚 啓子

和装縛りの美的感覚 館 典子

マゾ・フォト (人間馬) 絹川 文代

長襦袢と縛しめに耐えた表情 梨花 悠紀子

太股と足首のアップ 梨花 悠紀子

ムチ打ちに悶える関谷夫人 関谷 富佐子

ニヤグラビヤ

あるミミック師の最期

死霊の谷間 野中 愛三 (34)

ガン作・マニヤのノート 芳野 眉美 (43)

△女と女の血斗、娘切腹、女の生首▽シリーズ

駿府城女曾我 牧 真二 (46)

ふんどしをしめた女の美にとりつかれた愚者のたわ言 室井 英山 (44)

サジスチック・ストーリー

美しいなき声 伊関 康明 (56)

颯子の足 芳野 眉美 (68)

おむつ受難記 原 由貴子 (76)

「奇譚三十九夜」物語 (第二十四夜) 辻村 隆 (82)

長期刑へのあこがれ 花田 一郎 (100)

結婚——木枯しの章—— 久留木 栄 (122)

女人切腹秘話

勝子の最期 堀川 七郎 (103)

小説 十字架の妻 (続) 竹谷 十三 (118)

読者告白 浣腸の旨酒に酔いしれて 竹野 圭子 (126)

女性男装管見——回想から—— 田島 直士 (128)

バンドフォト 雑感 安田 高夫 (136)

〔告白〕愛の惑い 万田 不仁 (138)

——被虐愛さんげ——

ルポルタージュ 女房連の女相撲 円山 景三 (148)

創作 銀杏屋敷の女 三条 卓史 (150)

随筆 春霞 六尺二景 百田 章二 (164)

△モデルの手記▽

いけにえの幸福 大塚 啓子 (168)

読者通信 (178)

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

女スリと岡っ引き

牡丹の刺青が女盛りの脂ぎった肌に鮮やかにうかぶ女スリが今や美男の岡っ引きに捕えられて取縄をあられもない姿を白昼下にさらけ出す美しさ。

大公方と侍女

お犬さまに無礼を働いたという美しい侍女が、お庭先でぐるぐる巻きに縛られて激しい折檻を加えられている。恐怖におののく美女にとびつく土佐犬。

新撰組と芸妓

祇園の名妓に難題をふきかけた横恋慕の隊士が後手に縛り上げた手首の間へ短槍をねじ込んで締めつける。忽ち盛り上る二の腕の縄目のむごたらしさ。

山法師と静御前

義経の行先を白状させようと賞金目当の荒法師たちが、可憐な静御前を剥玉子のようにはがして後手に縛り上げた。恥しさにもだえる美女のもたえ。

小紫と悪旗本連

水野邸へかつぎ込まれた小紫が白柄組の悪旗本に囲まれて猫に弄られる鼠のように股間縛りにされて天井から吊り下げられなぶり者にされるのであった。

十郎左衛門と腰元

意に従わぬ美貌の腰元を腰巻一枚に剥いで、その雪のような白肌に刀の提緒できりきりと縛り庭先へ逃げようとする黒髪をむんずと掴み引き寄せる。

淀君と千姫

大阪落城迫る頃、淀君の指図によって、侍女たちが千姫を後手に縛り上げ敵方への逃亡を防ぐのだった。はかない運命をなげきながら端坐する千姫。

八百屋お七

引廻しのために裸馬にのせられたお七は、白装束にひしひしと掛けられた本縄の痛ましさと非人の荒くれ男にかこまれたお七の白い素足が目にしみる。

梨花悠紀子逆吊り写真特集

吊り責めが大好きだという梨花悠紀子嬢の強烈にしてトリックのない真正正銘の吊り責め写真は誌上に分譲写真に大好評を博しております。殊に「りつ1」「りつ2」は注文殺到の大盛況のため、ここに新作の嗜虐味あふれた逆さ吊りのフオート三集を発表いたします。美貌の梨花嬢が苦痛と悦虐にあえぐ表情と全身、殊に吊られた足首の喰い込む縄目に御注目下さい。

第一集 両足首括り逆吊り

略号「さか」

大中判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組

一〇〇〇円

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上にして逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子両手は背中後手に縛られ、胸に

は乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えている痛さをよく耐えうるのも梨花嬢なればこそ。

第二集 逆吊りの女体折檻

略号「させ」

大中判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組

一〇〇〇円

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に對して、更にあくなき暴虐の手は情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美し

い眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女。両足の間を竹にてこじられ、剥がれた衣服の上にて悶える凄絶にして、しかも美しい逆吊りフオート。

第三集 手足逆宙吊り

略号「さと」

大中判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組

一〇〇〇円

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子、柔肌に

は恐ろしいほど縄がうずまって、吊り責めの真価が鮮明なる印画紙焼付によってマニヤの皆さまのコレクションの中に發揮されるでしょう。

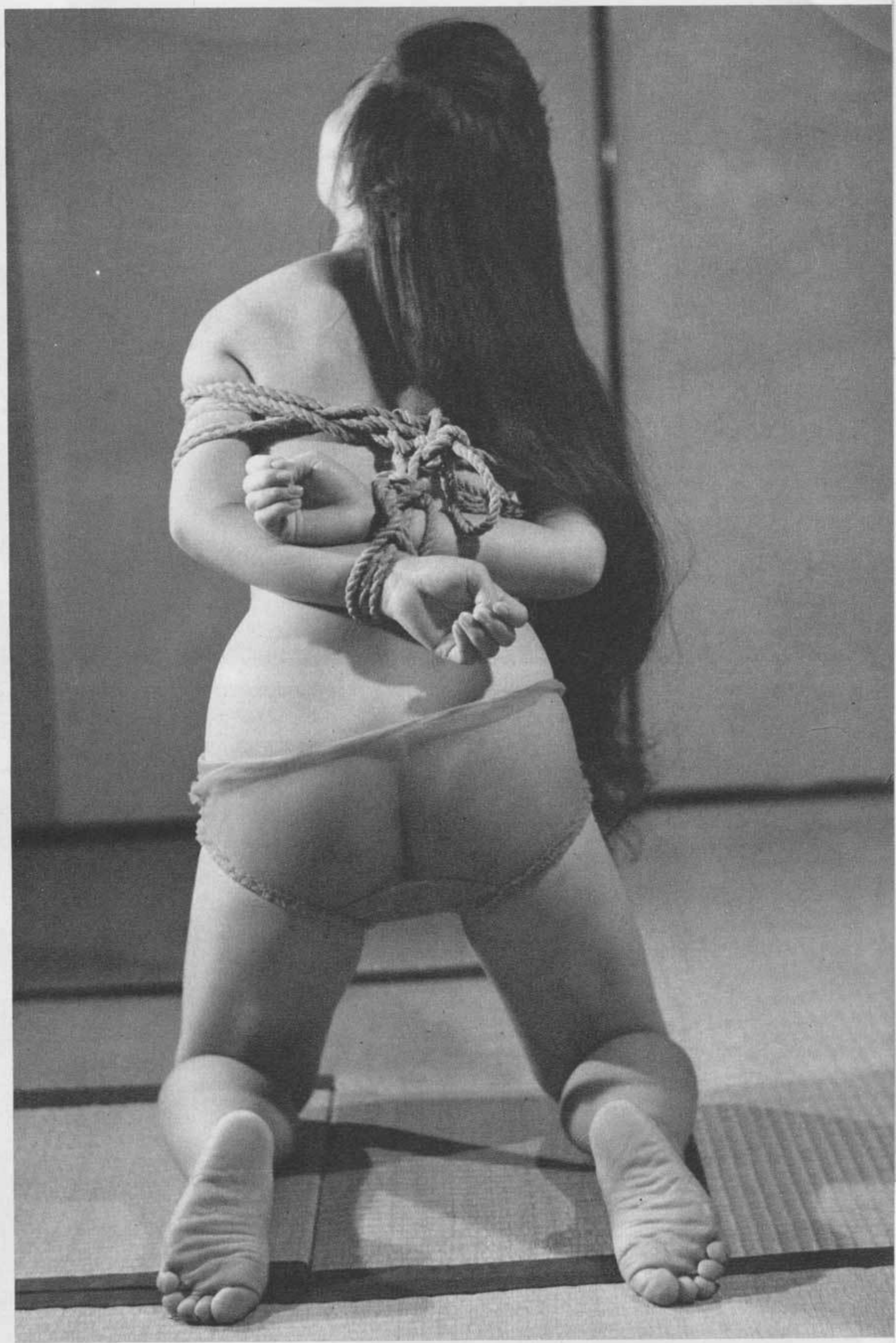




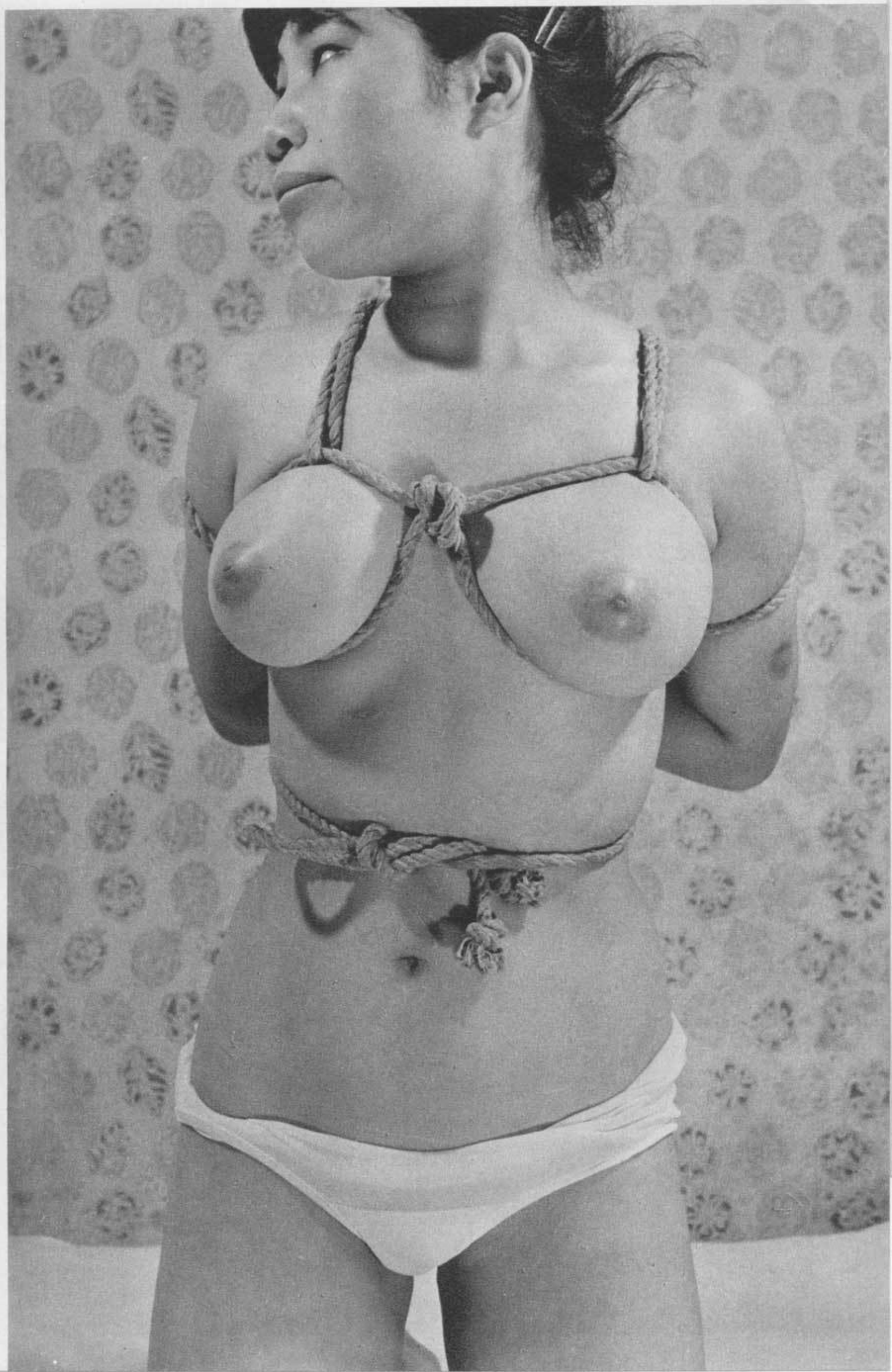






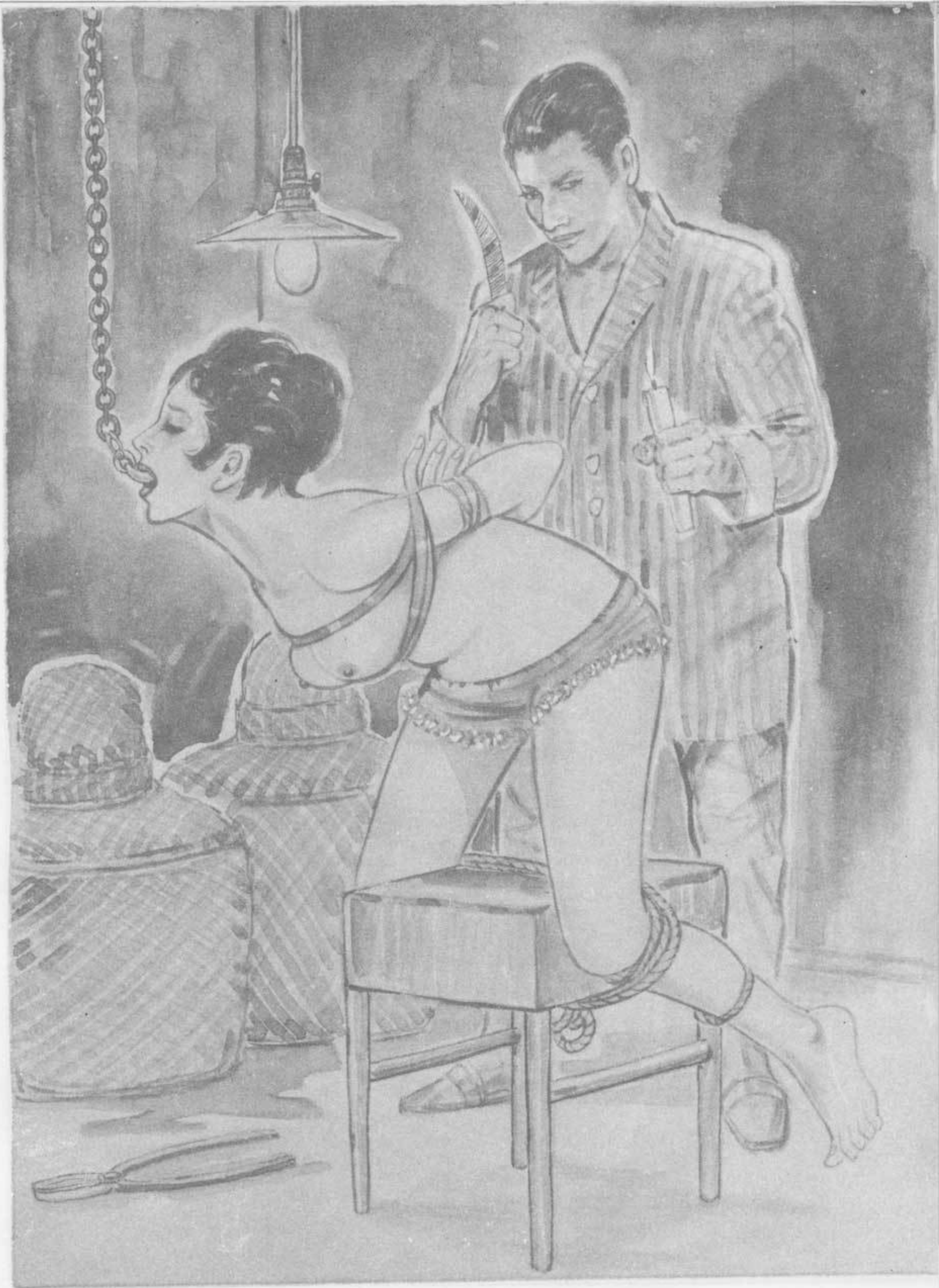








倉庫の中の美しい荷物



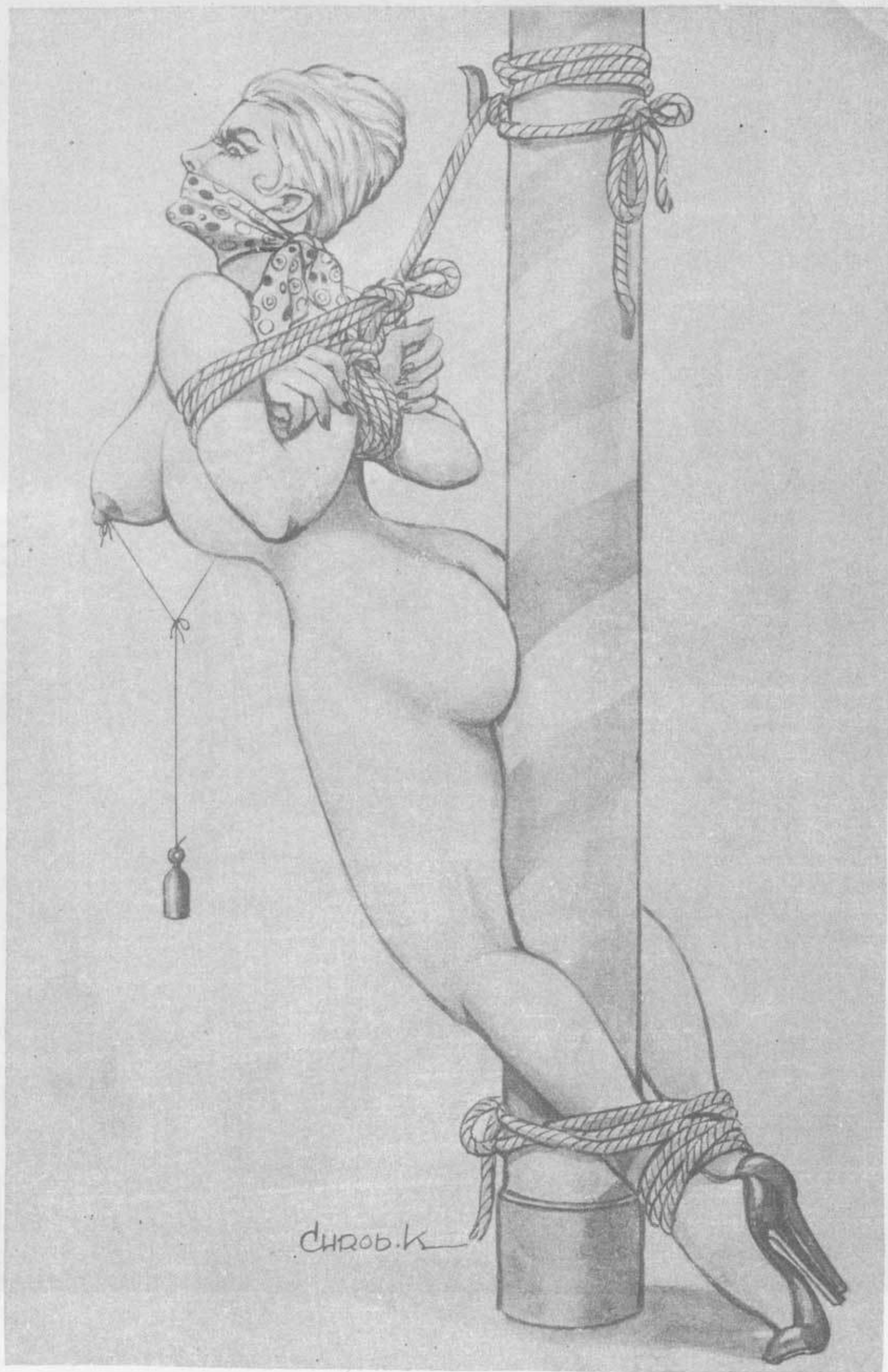
舌吊りの構想

四馬孝・画



鼻を灼く

四馬孝・画



乳首のおもり

クロード・コガ画



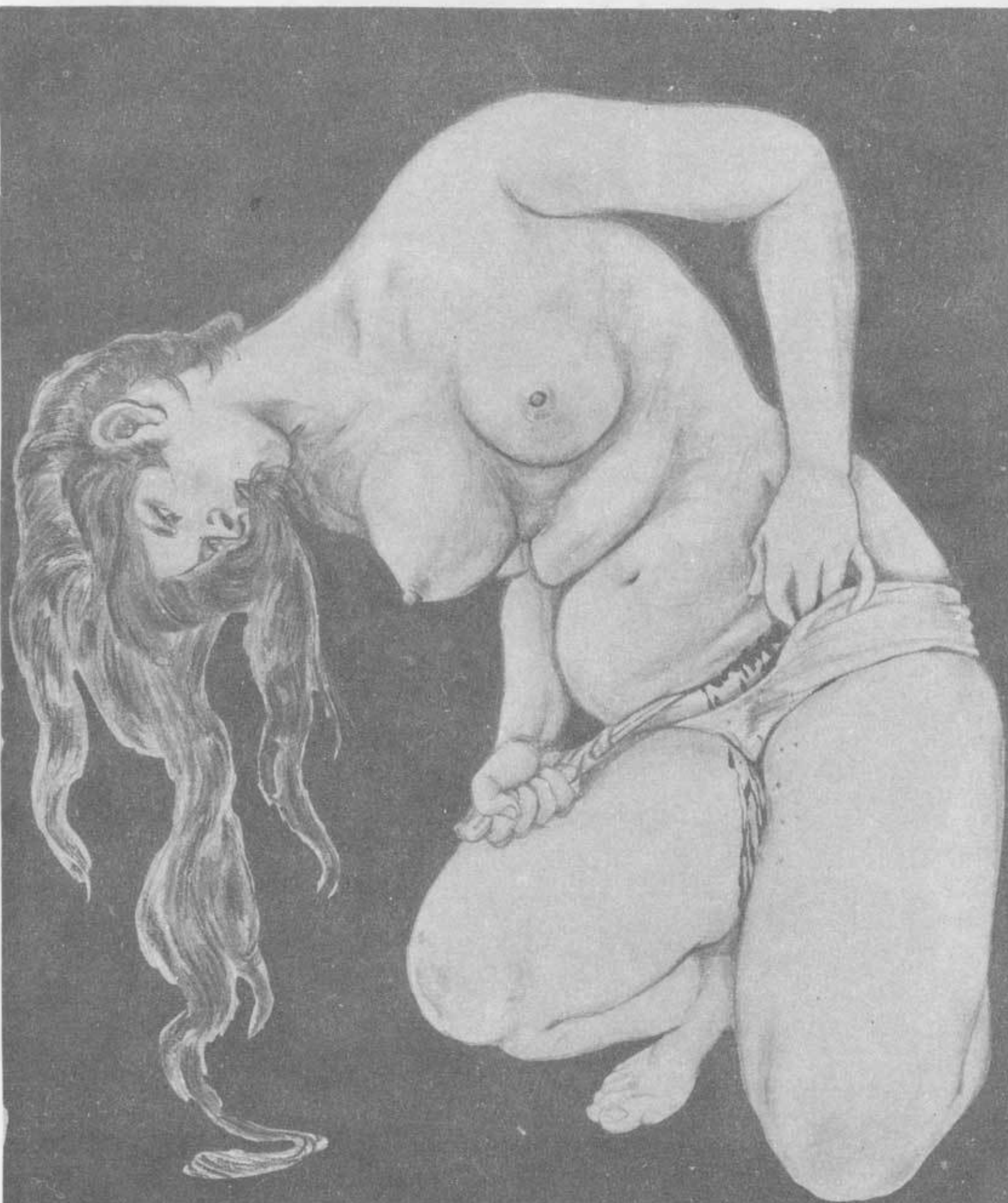
無頼の徒に取り囲まれて

黒川不二男・画

女性切腹の幻想図

「切り裂く」

瀧れい子・画





女体自決「差し違え」



ヘッド・ロックの法悦境

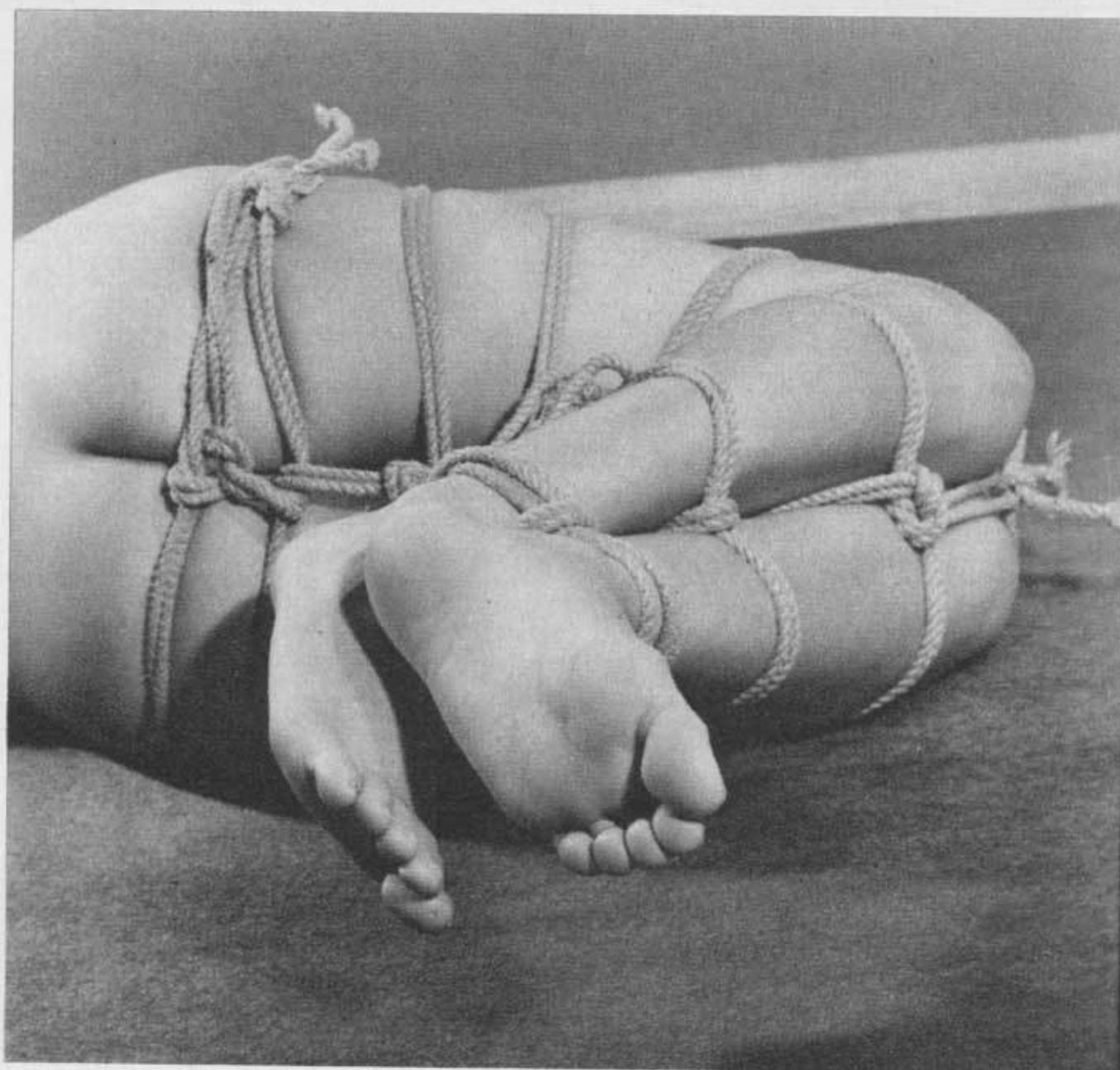
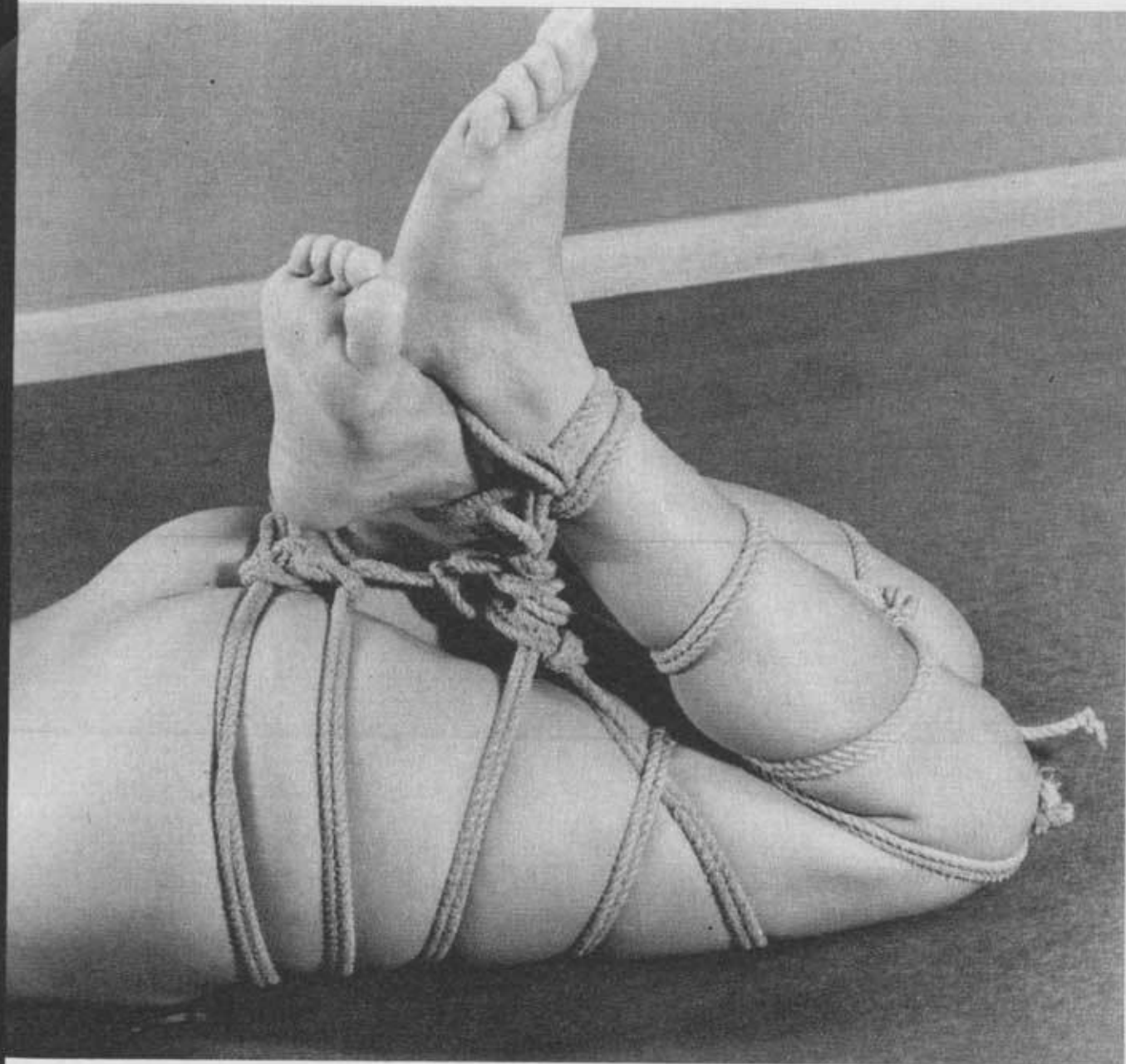


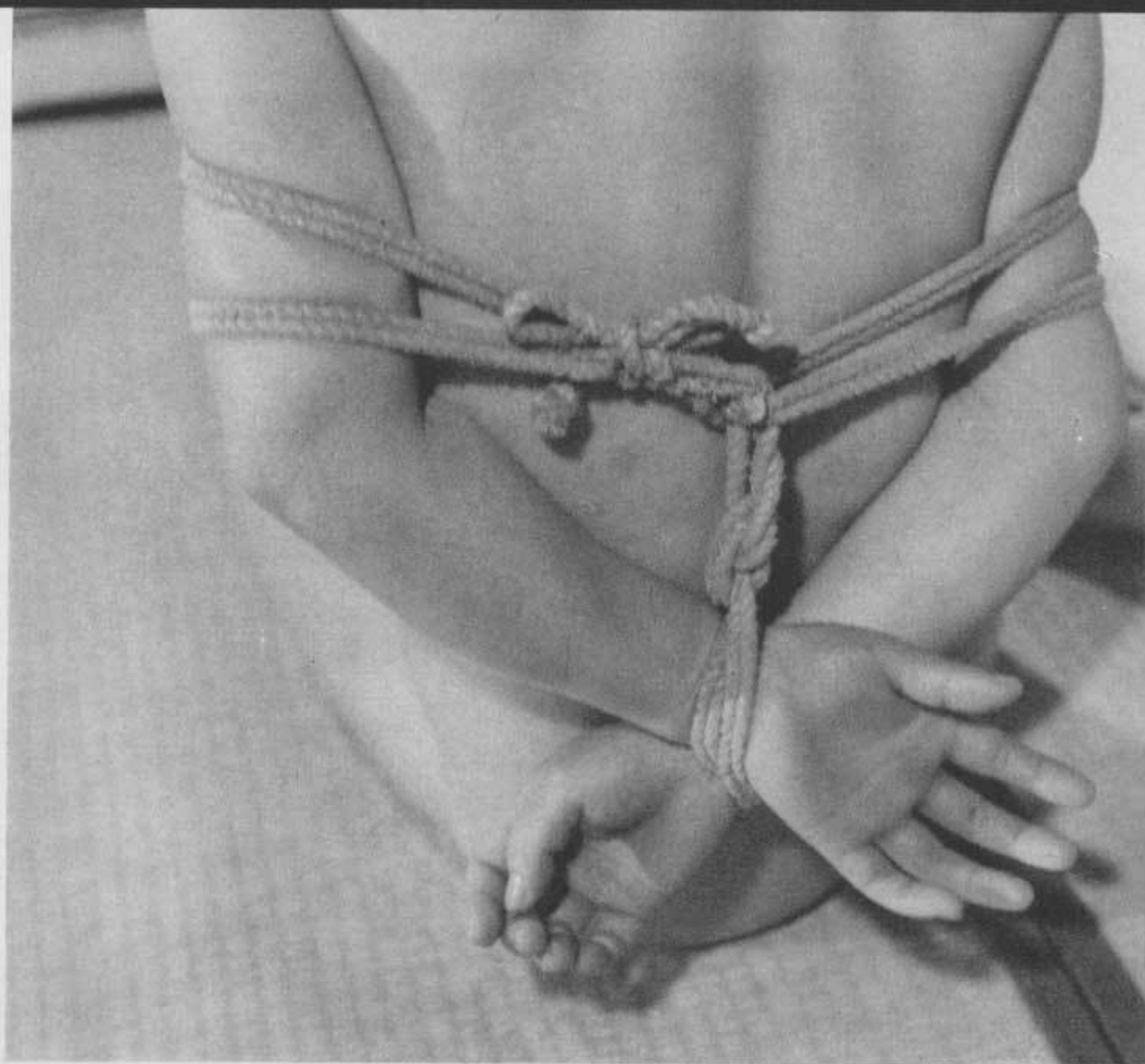










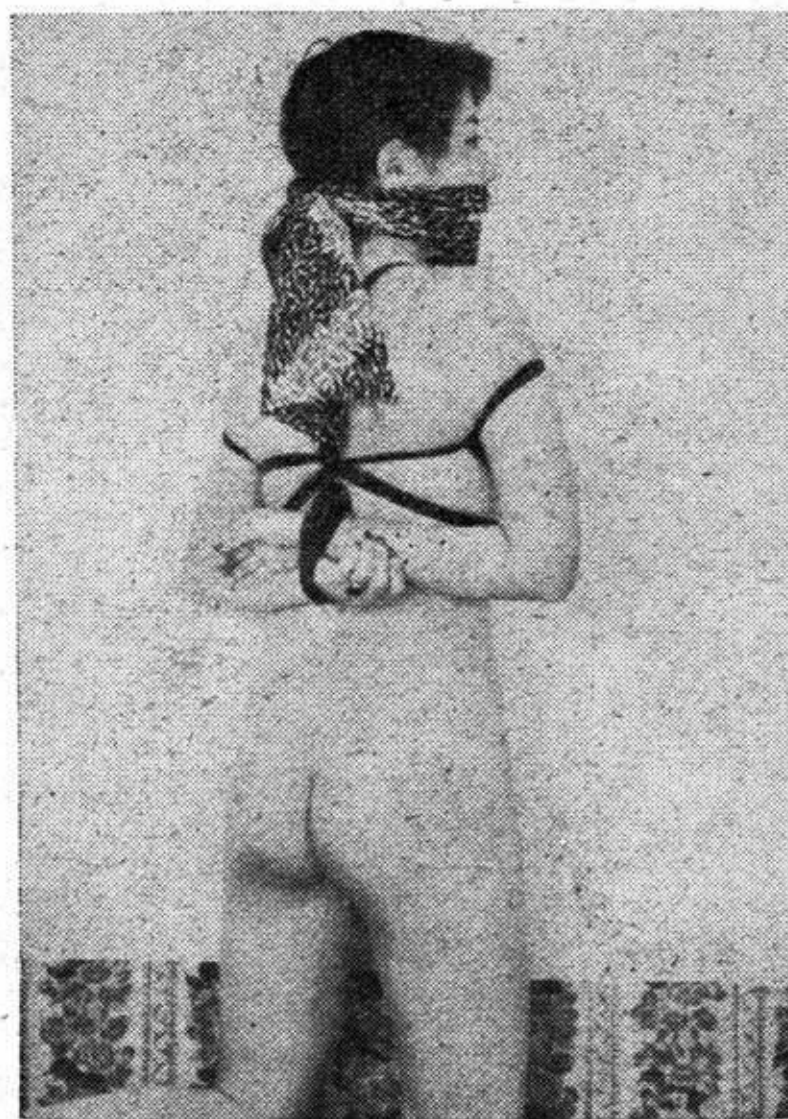


新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 5月号

(第17巻 第5号 通刊 第176号)



或る緊縛ポーズから

絹川文代

あるミミツク師の最期

死^し 霊^{りよう} の 谷^{たに} 間^ま

野 中 愛 三

ク モ 娘

大分街道から別府へ抜けるという、草深い
美彦山連峯。その道中の八十八折りから左に
曲って一里ほど入ったところに、峻しい洞山
がある。灌木が密生して、名もない禽鳥が始
終「チッ、チチチ」と啼いている。

そんなうっ蒼とした樹木のあいだをわけ入
って山裏へ廻ると、すぐ三角地帯になってい
る。いくつもの洞山があり、人跡未踏のよう
な谷間が見られる。

近在の部落の人たちは、

「死霊の谷間」

と呼び、怖れてその穴には近よらない。何
んでも昔は、屍体焼場だったそうで、いまで
もその附近へ来ると、

「死臭の匂いが、ぶんぶんして来る……」

と噂されている。ふかい谷間にも樹木が生
茂っていて、その底には細い流れがあるらし
く、溪流の音がさらさらと聞えて来る。

いまその谷間から、炊煙がめらめらと燃え
上って来た。谷底には、五十前後の、年のわ
りには白髪で、そのクセかまいたちのように
鋭い眼をしたひとりの男が、古びた鉄鍋で蛇

を煮ていた。山男は猫背で骨格が逞しい。し
かも胴着の腰には、蔦の蔓で拵えた一本の鞭
を挿している。乱れた長髪をうしろへ掻きあ
げながら、鉄鍋の前で舌ナメずりしていた。

時折り赤子とも青年ともつかない、

「ギャァ！」

という奇声が、背後の暗い谷底でする。と

山男の眼は、燐のようにキラキラ光り、

「うるさい餓鬼だ。いま餌を食わせるから黙
ってる！」

と、ぶつぶつ呟いたかと思えば、

「ペッ」

と唾を吐く。

この時、男の上の崖で突然、

「あッ！」

と、野鳥を引裂いたような悲鳴がした一瞬
ピンクの腰巻をチラチラさせた女が、まるで
マリののように転落して来た。勢あまって谷底
の溪流へ、

「ピシヤリ……」

と、激しい飛沫を上げて飛込んだ。

その山男は微動だにせず、ドロドロに燃え
る眼をちよつと剝いただけで、又もや鉄鍋の
中を栗箸で掻き混ぜては、白魚のように透き
通った蛇の中身を掴み、口の中へ放り込んで
ゆく。

よつぽどつむじ曲りの頑固者だと見えて、
うんともすんとも云わずに枯枝を差し加えて
いる。その側には、二メートルばかりの鉄棒
が、雑木と一緒に置かれていた。青い焰がゆ
れ昇っていく。

「ああ、痛たい」

先刻転落した女が浅瀬からはい上って、右
腕を撫でながら炉端へやって来た。彼女は二
十五六にもなろうか、ロウのように白い顔だ。
テキヤ、山窩暮しでもあろうか、頭髪は無雑
作にぐるぐるまきで、棒縞の着物を着ている。

瀬ぶりには馴れている女だと見えて、手甲脚
絆の嚴重な足拵えの上に、腰に懐中電灯をぶ
らさげていた。

この辺一帯は蝮、熊、野猿などの荒っぽい
獣のほか、山鼠が多い。それがこの時節の
芽が吹き出す山肌ともなれば、人間でも構わ
ずに襲うのだ。だからその用心のために、ど
うしても灯の光りが必要だった。

女は、ふり向こうともしない男へ、

「——お父さんは相変らず邪慳だねえ。わが
娘が落ちたら、少しは心配したっていいじゃ
ないの」

といいながら、腰をかがめる。

「うるせえ。おるい。お前は何をしに帰って
来た。商売の方はうまくいっているのか」

「そのことより、この腕の針を早く抜いてお
くれよ、私しや痛くて我慢が出来ないのさ」

「吹針？」

「そうよ」

「どれ、みせろ……」

「畜生ッ……クモ娘の奴、たたき売ってやり
たいわ」

「はっ、ははは。バカを云え。仲々味なこと
をやるわい」

男は何やらひとり合点して、おるいの腕を

掴み、サッと吹針を抜いた。

「どうだ」

「痛いわよ」

「ふふふ。われほどの阿女も、この六文針に
は一コロだと思える。そうだろう。でなけり
や、滅多に音をあげる女じゃねえ筈だ」

「……」

「——少し痛めるかも知れねえが、谷間のギ
シギシでも塗りたくって置け」

男は余り、気にもとめない様子だった。ギ
シギシというのは、岩肌のたまりに密生して
いるクシのような葉と、根の赤いやつで、そ
の絞り汁は傷口の止血には特効があった。

「——この針を腕に一発、プスリと刺されち
や、落ちるのも当り前だ。お前がスキを見せ
た罰だ」

「何を云ってんのよ。こちらが夢中で飛んで
いる時だもの。スキも出るわ。第一、あの化
ものが憎い。太郎に色目ばかり使いやがって
……」

「一寸法師を？」

「そうだよ。お父さん。こん夜はクモ娘にヤ
キを入れて……」

「うん。見せしめに——しかしお前、太郎は
止せ。あれは商品だぞ。芸を仕込まなくちゃ

ならねえ。それが鈍るんだ」
 「へーんだ。私は私。お父さんだっ
 て……芸を仕込むんだかどうか、
 わかったもんじゃないわ」

ミミツク師

濡れたラッコのような眸を彼に浴
 びせた。

「何をいうか……」

「でしよう。ほっほほ」

おるいは勝ち誇ったように笑って
 奥の部屋へ行きかけた。

「おるい。何処へ行く」

「私のことは抛っというて頂戴！」

「檻へ近づくんじゃないぞ。困った
 阿女だ」

「……………」

彼の声を黙殺しておるいは、すた
 すたと洞穴の方へ姿を消した。

谷間の住人は、興業界に名を知ら
 れたミミツク師の源吉だった。ミミ
 ツク師というのは別名を傀儡師とも
 いい、幼児を一定の鑄型にはめ込み、
 一人前の芸を仕込ませて小屋男に育
 てあげる者をいう。娘のおるいを使



って町から村へ、村から町の助産婦
 へ連絡して、

「畸型児」を貰いうけさせた。例え
 ば、生れた赤子が指四本とか、脚が
 一つになったり、頭が二つで出産し
 た時など、親戚の者たちが逸早く手
 をうって助産婦に頼む。助産婦はそ
 ういう畸型児の仕末をおるいに任せ
 た。こちらはそれが商売であり、な
 お衣裳やら祝儀も入る一方、小屋男
 (サーカス団の曲芸師)として、興
 業界に渡りをつける。彼らに云わせ
 れば一石三鳥式の、実に面白い仕事
 でもあった。

源吉は常人に見られぬ執拗さで、
 小者たちをきびしく、あるいは喚き
 ながら彼等の成技するのを楽しみに
 していた。青年時代から各都市の興
 業界を渡り歩き、非を理にまげて鞭
 を振るい、哀れな不具者たちを震え
 上らせたものだが、この道だけは老
 いてますます熾烈である。蛇の刺身、
 煮物は精気をいやが上にも燃えさせ
 た。源吉のテラテラと脂肪に沸った
 艶のいい顔が確証でもある。現在、

奥の檻二つには、クモ娘と一寸法師が居り、その仕上に丹精をこめていた。

クモ娘というのは胴体を太く短かくするため、胸から腹をロープでいくまきにも締上げ、手指、足指を尺余にするのが名人作である。

一寸法師には小樽詰にして、伸びる五体を圧縮し、頭だけを樽から出さしめるのだ。その際、因果者の足を腐敗させないのが、ミミック師のコツである。

源吉はこれまで随分失敗して、いく十人となき殺してきた。それが仕事である以上、注意して育てていくのだが、あまりに拵えが凝って、つい栄養失調とコマギレの呼吸へ追いついてしまふ。それを別に、酷いことだとは思っていない。面うち師が面を途中で投げた時のように、ケロツとしている。ちょうど、ホテルのコックが、生きた鶏、魚類を料理するのと同じ神経の動かしかなたである。惜しいことだ、もったいない事をしたとは思っても、毫にも人道的悔悟はない。

彼は今日まで渡り歩いて得られなかった残忍な慾求を、この小者たちの悲痛な悲鳴からムシリ取ってはホクソ笑み、また次の苛責によつての技を仕込んでいくのが何よりの愉しみでもあった。

クモ娘は名を桂子といつて十八になる。一寸法師の太郎は十七である。勿論、桂子だって太郎だって、自分の不具は承知していても人間である。内心に圧縮されたものが、いつ爆発しないとも限らない。

クモ娘には吹針。一寸法師には空中曲技を強導した。普通よりちょっと不具者を村里から貰うけ、それを無理に不具者に仕込んでいくのだから、どうしても健康的に無理がいく。それを承知で一本立ちにさせるのだから、仕込まれる方は並大抵の辛苦ではない。

源吉から秘術を施されていく桂子は、昨今ではもう五体がくたくたに疲労していた。

「いや……」

その一言で、真赤に焼けた鉄棒をふり廻すのである。深山の谷底、美女、狂った世界の渦であった。

先ず檻に訪れた源吉がいつものクセで、ヒューン！と罵の鞭を鳴らす。ハツとして桂子が身をちぢめると、

「カチッ、と錠を開く。」

「ギャオ……」

桂子はそうはさせまいと、クモの脚見たいに鋭くなった双手で、源吉の責め苦に對して敢ない抵抗を繰り返し、側へ寄せつけない。

「ヒヒヒ」

キリキリひきつったような声をあげて彼は仕方なく後退する。

ガチャン。扉を固く閉めて錠をする。

「よし。じゃ、いまご馳走を食べさせてやるからな。おとなしくしろ」

彼はすたすたと炉端へ来ると、雑木をどしどし焚く。その中へ鉄棒を差し込んだ。

「ギャッ！」

奇声が聞えてくるのは太郎が逸早く直感して、別の檻の中で叫んだ声だ。

その余韻が、森山の谷底へ鈍くつき当たり、やがて静かになる。

「やかましい。これからひと汗かくからな、黙って見ている。うっ、ふふふ」

彼は独言しながら、三十分も蹲みこんでいたが、

「どうやら焼けたようだ……」

と云つて、めらめらと燃え上る雑木をかきわけて、さっきの鉄棒を掴んだ。それはタイマツのようにゆれ流れる焰のようだった。

彼は、ゴクンと生唾をのみこんで、たつたと馳けた。幽鬼の火が、闇の中を飛びまわっているようで、非常に美しくも、気味悪い妖火にも見られた。彼の眼は夜光虫のように、

妖しく燃えあがった。

その味は？

おるいは、源吉が若いころ諸国の見世物小屋の中で品定めした女達のうちでは、いちばんきりょう良しと云えよう。それがため、こうして商するために引取ったのである。

母親はどこの女だったか、いまでは記憶さえない。渡鳥のように旅の小屋で、行きずりに旅の女に生せた。だからおるいも母親と、多感な彼の血脈を享けつぎ、尻が軽く多情に育成したのは無理もない。

その上、源吉に似た、いかもの食いのクセが染みついている。彼には、おるいがこの谷間へ商もせず、戻ってまた氣持や魂胆が分るだけに、苦々しい顔を一層曇らせた。

「——何故、早々に戻って来た。町や村には赤子はいねえのか。あれほど手ぶらでは帰るな……と云っておいたじゃねえか」

暇を見ては娘につっかかる。

「会いたくなかったからさ——」

おるいは冴えた顔を、チラッと洞穴の向う側の小屋に向けながらいう。

「——会いたって誰れのことだ」
空トボけてみせる。

「わかっていないじゃないか」

「バカ！ 親に向かつて抜けぬけという阿女が何処の世界にあるか」

「あろうとなかろうと、私にや太郎が入用なんだよ」

「ホザクナ。ケダモノ！」

「どちらがケダモノだい。私はねえ、何もとって食べるんじゃないよ。ただ一ト目、会いたくなっちゃった。だから、ふっと氣を変えて、戻って来たんだよ」

おるいは十五の春、太郎に眼をつけ、源吉が薪を拾いにいった留守、こっそり一寸法師に鞭を揮い、奇妙な征伐感に酔って以来、その嗜虐の面白さをぞっこん忘れかねている。あのこんこんとして湧く心の底からの氣持が、いまふつふつと甦えつつ来るのであった。

「ねえお願い、太郎をアタイにお呉れよ。」

「バカ野郎ッ！ 商売物と玩具とのケジメもつかねえのか。ありゃ、桂子とツイにして売り出すんだよ。あきらめるんだナ」

「何さ」

美しい狂女の顔が、憤懣と不平でキリキリ引き繫る。

「お前がいくら氣張っても、やつはお前の鞭を喜ぶようにはならねえよ。」

「だから、あきらめられないんだよ」

「……………」

「私は一度、こうと決った事はとことンまでやるタチなのさ」

「この阿女奴！」

「お父さんだって、そうじゃないか」

「つべこべ抜かすな。さっさと次の玉でも探して来い。この谷底では、指一本触れさせねえぞ」

「だからお父さんは、山から降りないンだねえ」

「俺はこの谷間より他は、住むところがないんだ。というよりも、ミミック師という業は都会の真ん中や村じゃ出来ねえ仕事だ。それ位のことはお前だって分る筈だろう」

「分らないよ」

「畜生ッ……」

源吉が平手うちを食わそうとした一瞬、彼女は一間ほど、

「ヒュッ」と飛び退った。その恰好は正にかまいたちだ。

「おるい、味な術を覚えたな。何処で習って来たんだ」

「ふっ、ふふふ」

まるで井戸端にギョロッと眼を剝いた墓の

構えだ。瀬ぶりから瀬ぶりを放浪するうちに、自然と身についた妖術でもあった。山猿のように身は軽く、一間位飛ぶのは訳もないのだ。

蛇性の妖女

源吉の住む谷底へ、旅の興業師たちがちょいちょい訪問した。云わずとした奇型児の取引であったが、

「こりゃ、ちょっと手ばなせねえ」

と、クモ娘と一寸法師を願っている。

「……商しろや。云い値で引取ろう」

見世物小屋の親分たちは、腰を据えて仲々帰ろうとはしない。彼等たちはクモ娘の素晴らしい綺緻と、傑作に近い変貌に感嘆の声を洩らした。

「おい。悪いようにはせぬ。俺に売らんか」

「そうだわ。お父さん。取引するならいまのうちよ」

おるいも促す。

「お前は黙っている。俺には考えがある」

「源さん。そこなんだ。花は満開せぬうちが値だぜ。俺の小屋には、品物が不足でいけねえ。何んとか手を打たないか——」

「お父さん。遠路からのお客様を粗末にするんじゃないよ。はい親分さん。蛇酒を一杯……」

……

「やあ、こりゃご馳走さま。おるいさんも、親孝行になったね。婿殿は俺に任しなさい」

「まあ……」

やはり女だ。客から真面目に云われてみると、耳たぶあたりがぼうっと赤くなる。

「桂子の素朴美に、おるいさんの美貌……源さんも両手に花というところか」

「……」

「どうだろう。源さん。十万出そうじゃねえか」

「十万？」

「不服かね」

相手もさるもの、こう切り出したからには嫌応なしのセリになって来た。

「いや——未だ早い。吹針だって未熟だからな」

「じゃ、一寸法師でもいい」

「太郎は子供だよ」

吐き捨てるように源吉が云った。おるいが、
「お父さん。何が未熟なもんか。飛ぶ小鳥さえ落すんだもの。もう一人前の桂子だわ。さっさと値をつけなさい。私が屹度、次の商品を仕入れて来るよ」

と、懸命になる。

「ははア、読めたよ。おるい。お前はクモ娘が邪魔何んだらう？」

「どうしてさ」

「それを俺に云わせようというのか。このバカたれ奴。こうなったら、餓死しても売らんぞ。手離さん。皆んな帰ってくれ。きょうの取引はご破算じゃ——」

源吉は不意に怒鳴ると、すたすたと洞窟の奥へ消えていった。

「頑固な爺さんだ。いや、又来るとしよう」
興業師たちは仕方なく腰を上げた。

「おるいさん。ひとつ親爺に渡りをつけてくれ」

「はい。ワザワザ済みません」

彼等は谷間からごそごそ這い上って、崖の蔓を頼りに登っていく。

「全く馬鹿々々しいったらありやしない。折角、買うという客人をパイしちゃってさ……」

彼女は、自分の気持を知っていて素知らぬ顔の父が憎らしかった。彼女は源吉の側で十七年間暮らした。それから毎年一回旅廻りをやらされた。町へ出て商取引がない時は二年三年——谷間へ帰って来ない時もあった。しかし、時折コッソリ帰って父の留守を見計ってはクモ娘の檻へ近ずき、鞭をビシビシ当て

た。その度に、
「ギャアッ！」

夜鳥を裂くような奇声を発するの、桂子ではなくて太郎である。

「太郎。よく見るンだよ。これでも食らえ！」

二、三回鞭をふり廻しては、桂子へビシビシ当てる。太郎に鞭を揮う前奏曲でもあるのだ。ミノ虫みたい、樹皮でつくられた彼女の胴に噛みこむ不具者製造の拘束具をギシギシいわせて転げまわる肩先のところどころに、食い入った鞭のあとが斑点を描き、蚯蚓腫れになっていた。

残酷な遊びを知ったおるいは、こうして虐待していくことが、この上もない心の慰めであった。

太郎は、おるいのラッコのようにギラギラ沸る瞳で睨まれると、まるで蛙のようにどうする術もしらなかった。それは恐ろ



しい軟体動物に威嚇されたように、ただ小さくなっていくだけである。おるいは一人前の調教師のように、鞭をふるうことだけは忘れなかった。太郎をそれで従服させようとする、テクニクに他ならない。

「太郎。お前、奴隷っていうことを知ってるかい？」
そっととじこめられた樽から出して、ツンツン鼻をつく新芽地帯へ引張り出し、その影にかくれて服従を誓わせようとする。

妖 火

桂子は二十になった。彼女は両親の顔も知らないうちから、源吉に養われていた。気質は優しく、品の良い顔をしている。が、一度、樹皮変形具を脱がせてみると、そこに展望されるのは世にも類のない「牝クモ？」の生態ではな

いか。顔は乙女相応の美しさではあるが、胴から下は針金のように細く、ツルの足と見違えるばかりだ。おまけに双手は糸みたいにひよろひよろ長い。触れたら、ポキンと折れるかと思われるきゃしゃな手だ。

「ぞっとする変化。人面獣身！」

彼女はミミツク師から、このようにつくられて来たが、年々歳々、怖ろしいものは芽を吹き出して来た乙女心である。それがためであらうか。顔は日増に艶やかになり、太郎を慕う気持が嵩じ、自由を奪っている源吉が恨めしく、呪わしくさえた。なつた。

太郎も又、理由なく鞭を振うおるいを退けては、桂子を想った。

もうこうなったら、源吉の命じる芸事には身を入れないばかりか、何か物の化に憑かれたように、ぼうと考えこむことが多くなつていく。すると源吉は、

「ピシッ！」

と鞭を鳴らしながら、

「くそッ、何んちゅうこった」

ところ構わず殴りつけた。その鈍い鞭の音が桂子の耳へ、

「うあん」

と響く。と彼女は、頭を抱えてこんで口惜し

がる。

「やい、これでも未だ覚えねえのか」

宙返りのレッスンである。太郎が仕損じてひっくり返ると、

「この野郎、俺をあまく見やがって……」

パンパンと平手うちだ。

「ギャァッ！」

太郎は泣く。

「肝腎の仕事に熱中しないと、吊し上げだぞッ！ いいか」

源吉が彼の頸をひっ掴んだ。

「えいッ！」

一声と供に、雑草地帯へ抛り上げる。と、

太郎はくるくる二、三回回転して、高い小枝にひっかかった。

「ざまをしろ。いつもこれだぞ」

源吉は鞭を腰に挿すと、洞窟の中へ消えていく。岩石の上に載せている蛇酒を、ラッパ飲みにしてから、ゴロリと寝ころんだ。

風来坊の彼が、妻らしい妻さえ取らず五十

余歳をふみ越えて来たのは、ミミツク師という職人氣質もさることながら、もう一つは性来の残酷性が秘んでいたからであらう。この山間へいんとん生活を送るようになってからは、おるいを手先に使って因果者を更に数倍

の因果者に変形せしめ、人間から獣？へひきずり落とし、容赦のない鞭のもとに商品化する残忍な悦びに酔っているのだ。

完全なる取引をする前に、十分なる芸を仕込んでおくという主張が先か、鞭を振う口実のための芸仕込かとにかくそれは彼に与えられた職得とでも云うのだらう。いつも悲鳴を挙げる対象に不自由しないところに、彼だけのアブノーマルな心がむくむくと頭を抬げ出したあのである。彼はますます狂った刺激へ駆り立てられていった。

こればかりは彼にとってはどうしようもなく、三食の味を変更するように、一段と生贄達を泣き喚かせた。それによって一日の憩いをとる愉しさが生れるのだ。

深夜――

彼はそっと洞窟を出た。そして裏側の、桂子の檻へ足音も荒く踏入った。

「呀ッ！」

突然、彼女が低く唸いた。本能的に抵抗した。

「ギャッ……」

と泣き叫び、狭い小屋の中を逃げ延る。果てはあの、研ぎすまされた手足で、源吉を引っ掻こうとする。

「ばかたれ。喚くンじゃねえ。ここは地獄の底だ。誰が来るもンか。藻掻くだけ痛い目に合わすぞ！」

残忍な笑みを浮べて近付く。その度に彼女は飛び上り。また引っ掻いた。

「桂子、何も恐がることはない。芸を仕込むンだよ」

「私には……」

「いうな。聞く耳を持たぬ。いつもの責めじやぞ」

ぐいぐい燃え上る嗜虐の炎に堪え切れなくなった彼は、パッと檻から出るが早いか、

「カチッ」

と錠をした。たったつと炉端へいく。そこにいぶしていた丸い三メートルもあろうかと思われる鉄棒を掴み、又もやツツツと引返して来る。その尖端は真赤な炎が上り、枯草をじりじり焦していく。

桂子は鉄格子になっている間から、ぎよろぎよろした眼で睨もでいたが、

「ギャッ！ ギャッ……」

異様な叫びを上げた。

あたりはうしを塗ったような闇夜である。その中であって、ぶすぶす煙を上げていく鉄棒の周囲だけが、仄明るい。

「ヤッ！」

彼は気合をしめて突き出す。カチン。

目標が外れて、鉄格子に当る。

「畜生ッ！ これでもか——」

再度、ハッシとばかり火の粉を散らして突き出したが、彼女はヒラリとかわした。

「チッ！ 味なことをやるわい」

身わなわなと武者振いで、槍ならぬ鉄棒をくり出すが、桂子も突かれたらおしまい。

だから必死だ。右へ左へと退けて、死の焼け鉄棒を逃げる。まるで蝶々のように一向に手応えがない。そこが又たまらない魅力となつて彼は、息使いも激しく、真赤になった顔をふり立てるように凄む。

「それッ！」

狙いが外れて彼が、ととと、と泳いだ。雑草の蔓に足を拘われ、へなへなと尻持をつく。

「ほっ、ほほほ。だらしがないわ」

不意に大樹の影から声がする。

「誰だ。いま笑、た奴は……降りて来い！」

ひょいと彼が向うの幹を見ると、何んとおるいが、小枝に腰をかけて、ニヤニヤしているではないか。彼の血は一時に逆上した。頭の中が一瞬真暗になった。嗜虐の血が流れる

方向を誤って彼を狂わしたのかも知れない。「阿女！ 殺してやるから念仏でも唱えろ」

宿命の毒針

妖火に狂ったような源吉は、くるっと向きを変えるが早い、か、たつたつと洞窟へ走った。そして戸棚の片隅からどぶろくを掴んだ。ラッパ飲みに五合——一升を平げてしまう。その勢いで、山刀を引っ張り出す。又もやふらふらと穴から飛び出した。檻へ近づく。中を凝々と覗いた一瞬、

「ウム？」

と呟いた。よく周囲を見ると、錠も外されている。たつたいままで死の試練から逃げまわっていた、クモ娘の姿が見えないではないか。彼はハッと直感して、隣部屋の洞窟へ行く。その小屋を見た。

「呀？」

のけぞらんばかりに驚愕した。見よ。まさしく中は空っぽ。樽の底へ手を当ててみた。まだ温みが残っている。

「畜生、どうするか見ている」

彼は四方八方を睨んでいたが、あたりには人の気配はなかった。

山刀を一ふり二ふりしながら、憤怒の形相

もの凄く、谷底につながる鳶の蔓を掴んだ。

「未だ遠くへはすらかるまい」

いつものように登っていく。

「おるい。おるいはおらぬか……」

しかし、彼女の返事も得られない。山はシンと静まりかえっている。

運、不運はいつ、何処にどう秘んでいるか分らない。彼の場合は、逆上と、強烈な酒の酔いもあったに違いない。否、それらがなかったも、犯し続けて来た鬼畜の所業に対する当然の受けるべき天罰であつたらうか。

ちょうど源吉が崖上に来た瞬間、その手へ

ぶすつと、六文針が突き刺った。

「うあ……」

はずみを食らって、足を滑らした。空中転回して、まっ逆さまに溪流へ。

暫く、口をパクパクさせていたが、見る見るうちに濁流へ吞まれていった。

謎の毒針はいうまでもなく桂子が、呪咀をこめて吹いたものである。彼女に教えた吹針で、こんな最期を見ようとは……

これも自業自得であらうか。

源吉の溺死体は翌朝、小川へ洗濯に來た部落民によって発見されたが、身元引受人がな

いたため、山谷の無縁墓地へ埋められた。更に四、五日の後、訪れた興業主によって洞窟の奥に両眼と喉に六文針を射込まれてこと切れているおるいのはかない屍が発見されたのだった。

哀れな二人の因果者は、その後どうしたのだろう。部落の村民の間に噂も起らないところを見れば、誰の目にも触れなかったであろうが……。悪虐非道な人非人を消滅させるために、空から降りて來た天の神の使徒の化身であつたのかも知れない。

ガン作・マニヤのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

A

「梨香の引越しを手伝ったそうですね」と私「手伝わされたんだ」とA。

「どうだか」

「いや、本当だよ。温泉に連れて行け、というから、アパートに迎えに行ったら……」

「話がうますぎた」

「そう、まんまとひっかかった」

「新しいアパートの権利金を払ったそうじゃないですか」

「バレたか」

「二部屋ですか」

「三帖と四帖半、だったかな」

「高いデイトですね」

「温泉に行くつもりだから金是用意してあるし、まさか出さないわけにもいかないじゃないや

いか。利口だよ、梨香は」

「感心しているんだからな、被害者が」

「まあ、いいでしょう」

「御本人がそうおっしゃるなら、何も云うことはありませんけど……」

「けどね、なんだ」

「いや、梨香が私にカギをあずけてあるんですよ」

「カギ？ アパートのかい」

「そう、二つあるうちの一つ」

「それ、どういう意味」

「一人じゃ淋しいから、たまに遊びに来てくれって」

「おいおい」

「留守だったら勝手に上って待っていてね、って」

「そんなのないよ」

「実はね、カギをすぐなくすからあずかっていて」

「おどかすなよ」

「心配ない、心配ない」

B

客を送りに行った梨香が帰って来た。

「どこで浮気をしていたんだ」とA。

「喫茶店に誘われたのよ」

Aのコップにビールを注ぎながら、

「私もいたどころかな」

「ビールでいいのかい」

「ええ」

「今日はいやにしとやかだな」

「だって、処女ですもの」

「うそつけ」

「あら、私、まだ十八のショジョ(少女)よ」

「こいつ」

「この間は御親切に引越しを手伝っていただき有難う御座居ました」

「えっ、いや、なに」

「本当に助かりましたわ」

「なんだか変だな」と私。

「薄気味悪い」とA。

「あら、どうして」

「馬鹿に丁寧だからさ、梨香らしくない」

「そうかしら」

「そうかしら、だって。梨香には驚いたよ。」

俺が部屋をはいたり、畳をふいている間、運送屋の若い野郎と二人で何処かへしけ込んじやうんだから」

「コーヒーを飲みに行ったのよ。そのくらいサービスしなくちや」

「それはいいよ。運送屋と俺とに荷物を運ばせておいて、窓に腰掛けて煙草吸ってんだ」

「ははあ」

「三面鏡はそこ、テレビはこっちって、まだ手で指示するならいいんだよ。足で指すんだからいやになる」

「足で、ですか」

「そうなんだ。それもわざと高く上げてね。」

俺はいいけど、運送屋が怒らないかと思っぴやひやした」

「で、どうでした、運送屋」

「それが、まだだらしないんだ。女には甘いんだな。にやにやして何も云わないんだ」

「チップ、先にあげたの」

「いや、終ってからだ。それも俺が野郎にやっただ。梨香がやれと云うから」

「こりやしやくだった」

「パンティ穿いていなかったんじやないの」

「失礼ね。ちゃんと穿いていたわよ」

「じゃ、小さな透けて見えるヤツだ」

「そういえばそうね」

「それだ。それで読めた」

「梨香のはモヘヤだからな」

「馬鹿」

「失敗したな、よく見ておけばよかった」

「残念でした」

C

「結局、梨香は何もしなかったの」

「そういうわけ」と梨香。

「いや、全く驚きました。誰の引越しだかわからない。用意した権利金は、そのまま貯金できたでしょうし」とA。

「御苦労様でした。で、梨香は何もお礼しなかったの」

「あら、したわ。お土産あげたじやない」

「お土産？」

「さっきから、驚いた、驚いたと云っているけど、何よ」

「そう一息にビールを飲むなよ」とA。

「いいわよ。驚いたのは私の方なのよ。ビール注いで」

「はいはい」

「いらぬものを整理して捨てたの。そしたらね」

「またいいつける」

【最新版】 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1 全裸エビ責仰向け (関谷)
B 2 逆エビ責め全裸像 (水本)
B 3 乳首ペンチ挟み (竹野)
B 4 後手十字縛肩口上 (梨花)

B 5 足の裏擦り責め (竹野)
B 6 おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7 剥いだバタフライ (関谷)
B 8 貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9 乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B 10 無防備双手吊り (絹川)
B 11 豊満臀部エビ縛り (水本)
B 12 糸纏わぬ股間縛り (水本)
B 13 全裸亀甲股間縛り (関谷)
B 14 足踏付け二つ折り (大塚)
B 15 尻突出しムチ打ち (関谷)
B 16 手錠にもだえる (竹野)

B 17 尻突出てエビ責め (水本)
B 18 椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19 息もつがせぬ猿轡 (竹野)
B 20 投げ出した全裸 (関谷)
B 21 美しき尻部の露出 (絹川)
B 22 首絞めの悦虐境 (竹野)
B 23 後手柱縛り脚線美 (竹野)
B 24 強制鼻挟水呑ませ (梨花)
B 25 苦悶にねじる裸身 (関谷)
B 26 責めに気を失って (関谷)
B 27 さアどうでもして (関谷)
B 28 豊満乳房膨隆縛り (竹野)
B 29 投げだされた女体 (竹野)
B 30 裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31 強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B 32 全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33 踏みつけマゾ境地 (東浦)

B 34 すべてをさらけて (関谷)
B 35 ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36 クリップ鼻挟み (絹川)
B 37 台上のマゾポーズ (大塚)
B 38 吊られゆく美体 (絹川)
B 39 拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40 マゾ女性の表情美 (東浦)
B 41 喰い込む股間縄 (絹川)
B 42 灸責めに悶える (梨花)
B 43 犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44 美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 45 裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46 手枷足枷大写真 (四方)
B 47 鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48 蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 49 鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50 女囚菱縄さらし (絹川)

「いいじゃない。わざわざ、ほじくり返してね、拾っているのよ」
「何を拾っていたの」
「スリッパ、パンティ、ストッキング」
「ああ」
「古くなって、捨てるつもりだから、洗濯なんかしてないじゃない」
「なるほど」
「何をしているの、って云ったら、見つかった」

「たかつて」
「それで」
「捨てたんだからいいだろう、って。俺にくれよ、ですって」
「戦利品は？ Aさん」
「黒のスリッパが二枚、花模様のブラジャーが一枚、ストッキングも一足、パンティが五枚、そうそう、その透けて見えるヤツが一枚あったな。白は一枚も無し」

「それがお土産？」
「何がお土産なもんか、二万円を買わされたようなもんだ」
「ハハハ、でも、それだけの収穫があったんだったら、二万円も満更高くないんじゃないですか」
「廃物利用ってわけ」
「いい気なもんだ、これだから嫌になっちゃう」
(おわり)

△女と女の血斗、娘切腹、女の生首▽シリーズ

駿府城女曾我

牧

真、二

一

(ああ、おそろしい夢——)

松平琴姫はむっくりと錦の蓐の上に起き直って、白綸子の寝衣の上からそっと左の乳房をおさえた。全身はぐっしより汗にぬれて、夢の中の女に刺された乳の下は、なおうずきを覚える。彼女は誰とも知らぬ一少女に組み伏せられ、首を搔かれる夢を見ていたのだ。(事もあるうに自分の首を斬られる夢など……。夢でよかったが、不吉な——) 更におのれの頸筋をさすって見る。さしも

物に動じぬ姫も、あまりのことに胸の動悸がおさまらないのだった。

(そうそう、瑠璃殿とあのような話をしたが故に見た夢であろう。余り気にすまい)

やっと昨夜のことを思い出すと、いくらか心も安まってきた。

瑠璃姫とは、琴姫の亡夫松平重政の妹、即ち義妹に当る本年十七才になる愛くるしい娘であった。いつもは江戸の父重信の許にいたのだが、このたび、江戸城の御台所の用命を承って、ここ駿府城に住む前將軍秀忠の所に来り、そのついでに、姉の琴姫に面会を乞う

た。

琴姫は秀忠の末娘である。すぐに招かれて城内で酒宴が催され、姉妹共に今駿府城に寝ているのである。寝所に赴く前、二人きりになったときに瑠璃姫がささやいた。

「姉上さま、お気をつけなされませ。かの、一条兼弘のわすれがたみ絃姫とやらが、姉上さまのお首を狙っているとか——」

「一条の姫……?」

一条兼弘は後水尾天皇の側近にあつて、反幕府派の巨頭であつた公卿。その彼が亡びたのは二年前の春。謀叛の企てありとて京都所

司代の襲撃を受けて、兼弘は討死し一家は離散した。その時の所司代松平重政の新妻であった琴姫は、その武技を見込まれて、宮中、公家の間を暗躍し、反幕派を一掃した。殊に一条邸襲撃に際しては、姫自ら指揮をとり、兼弘その人の首を挙げ、その武者振りは当時京童の語り草になったものだった。

それから一年、重政は急死し、人々是一条一族の霊が祟ったとも噂し、また一条の姫が琴姫を仇と狙っているという風聞が当の姫の耳にも入った。しかし腕に覚えのある姫は気にもかけず、その中姫は父秀忠に引き取られて、駿府の近くの館に移っていたのだ。

「ここまで追ってくるとは執念深い。それにしても公卿出の小娘の細腕で、この妾を討てまいに……」

「必死に小太刀の修業をしているとか」

「ホ……。妾も近頃は意気地なく、とんと竹刀も持たぬが、それでは油断なりませぬな。首をよく洗っておきましょう」

「天下無双の姉上の剣。まさかとは思いますが、御油断は禁物」

笑い合っただけだ。

（とすれば、絃姫のことが、そんなに心にのこっていたのか。明日ともなれば、心利きた

る者と呼んで、一応調べさせるとしよう）
思いつつ、再び蒲団を引き掛けて仰向けになったときである。

ミシリ、ミシリと廊下をしのんで歩いてくる足音。ハッと聞耳を立てる琴姫は極度に緊張した。何者かこの離れの部屋を目がけてやってくる。それも物静かな足音。

とすれば、絃姫か？ 夢は正夢であったのだ。琴姫の手がのびて枕元の刀をつかむ。

とたんにサーッと障子を開けて廊下の闇に立った人影。

「起きよ、琴姫！ 一条の姫が、父の仇を討ちに参った。尋常に勝負しや」

銀鈴を振るような声は正しく乙女のそれ。一条絃姫に違いない。

だが、琴姫もここまで来てはおびえていなかった。

「心得たり！」

と蒲団をけって刎ねおきる。しかもカチカチと手早く行灯に火を入れた冷静さ。

パッと明くなった寝室に相対した二人の美姫。縁に立った絃姫は、年の頃は十七か八。

白梅のように楚々とした姿を、甲斐甲斐しい襷、鉢巻に固めて、右手には早くも鞘を払った小太刀が持たれている。漆黒の黒髪に掩わ

れた爪実顔の目鼻立ちは、おっとりとした気品につつまれて、この世の人とも覚えぬ程美しい。一方の琴姫はこの時二十二才。如何にも武家娘らしく、パッチリ開いた眼、高く通った鼻筋、キリリと引き締った唇、凄え程の美貌。かつて加えて五尺四寸もあろう肢体は武術で鍛えられて見るからにのびやかに、しかも薄い寝衣を通して見られる豊かな肉附きの線もなまめかしく、絃姫とは正に対照的。紅いしごきを襷に掛けながら。

「仇討ちとは健気じゃが、その細腕で、この琴姫は討てぬ。怪我せぬ中に帰りや」

「問答無用。この一筋に生きて来た絃姫。討たずば討たれるまで。参りますぞ！」

思い切った絃姫は、意気込みすさまじく、小太刀を晴眼にジリジリと歩を進める。と見て琴姫も、自慢の一刀を引き抜いて上段に構えると、

「さらば、容赦は致しませぬぞ。天下の禍根を絶つ為、そなたの細首、琴姫が申し受けます」

言いざま、振り下す烈剣。カチリと刎ね返して絃姫も懸命に反撃する。

はしなくも深夜の駿府城内に人知れず起った、美姫同士の一騎打。

「えいっ」「やあっ」の気合もなまめかしく寄っては離れ、離れては寄り、二つの女体が美しい曲線を描いて相搏つ乱舞。何れが先に散る花か、互いにかけてえのないその美首を賭けて一上一下とわたり合う様は、まさに天もおびえ、地もすくまん許り。

（八幡！ この姫を討たいでは……。とうっ！！）

必殺の気合をこめて斬り込む絃姫。体をくねらせて交す琴姫。しかし続けさまにその影を追って、胴へ、肩へと、執拗に迫る。小太刀の鋭さには、さしもの琴姫も押されてタジタジと退る許り。

（こんな筈はない、たかが小娘——）

思いしにまさる敵の乙女の手剛さに、あせればあせる程、琴姫の太刀先には乱れが生じて来た。そして何よりも

（夢、さっきの夢。あの夢の通り、妾が負ける運命なのか）

その心のおびえが、この大事な時に、一層琴姫の手足をになえさせるのである。

「ええっ！」その妄想を振り払うように、目を瞑って琴姫は必死の反撃に出た。絃姫の真向目がけて、微塵になれと斬り下したのだが——。何と、その切尖は敵の額ならで、どう

狂ったのか、鴨居にザクリと斬り込んで、「不覚——」

あわてて引き抜いたが、時すでにおそく、得たりと猛進して来る絃姫の姿、その手許から繰り出された白光が、ビュッ——と琴姫の目を射た瞬間、ジーンと烈しい衝撃が、彼女の右肩を襲った。

（殺られた——）

瞬間、プーッと飛ぶ血しぶき、おのれの血に目のくらんだ琴姫は、滅多やたらに刀を振り廻して見たが、五体がバラバラになるような傷の痛み、しかも引張ずされて、泳ぐその後姿目がけて、追すがりざまの絃姫の第二刀。

「ム……ッ」

柳の肩を三、四寸も斬り下げられて、一旦その長身を、グッと後にのけ反らせたが、やがてガクリと白い面を伏せると、ヨロヨロと前によろめいて、裳裾を乱しながら、柔かい蒲団の上にドッと倒れ込んでしまった。

「無念！」

更に一度身体を起しかけたが、力つきたのか、そのままガバツとつつ伏す。

絃姫の方は、流石に激動にふくよかな胸を喘がせながらも、血刀を提げたまま、倒れた

仇の姿をじっと見守る。やがて——もう動く気配もないその様子に充分と見たか、小太刀を投げ捨てて、仇の首をとるべく、乳の下に懐剣の柄に手を掛けつつ、静かに歩み寄る。

と、その一瞬である——、それまで絶命したと見せかけていた琴姫が、ムックと上体を起すや、握りしめていた一刀を横なぐりに、

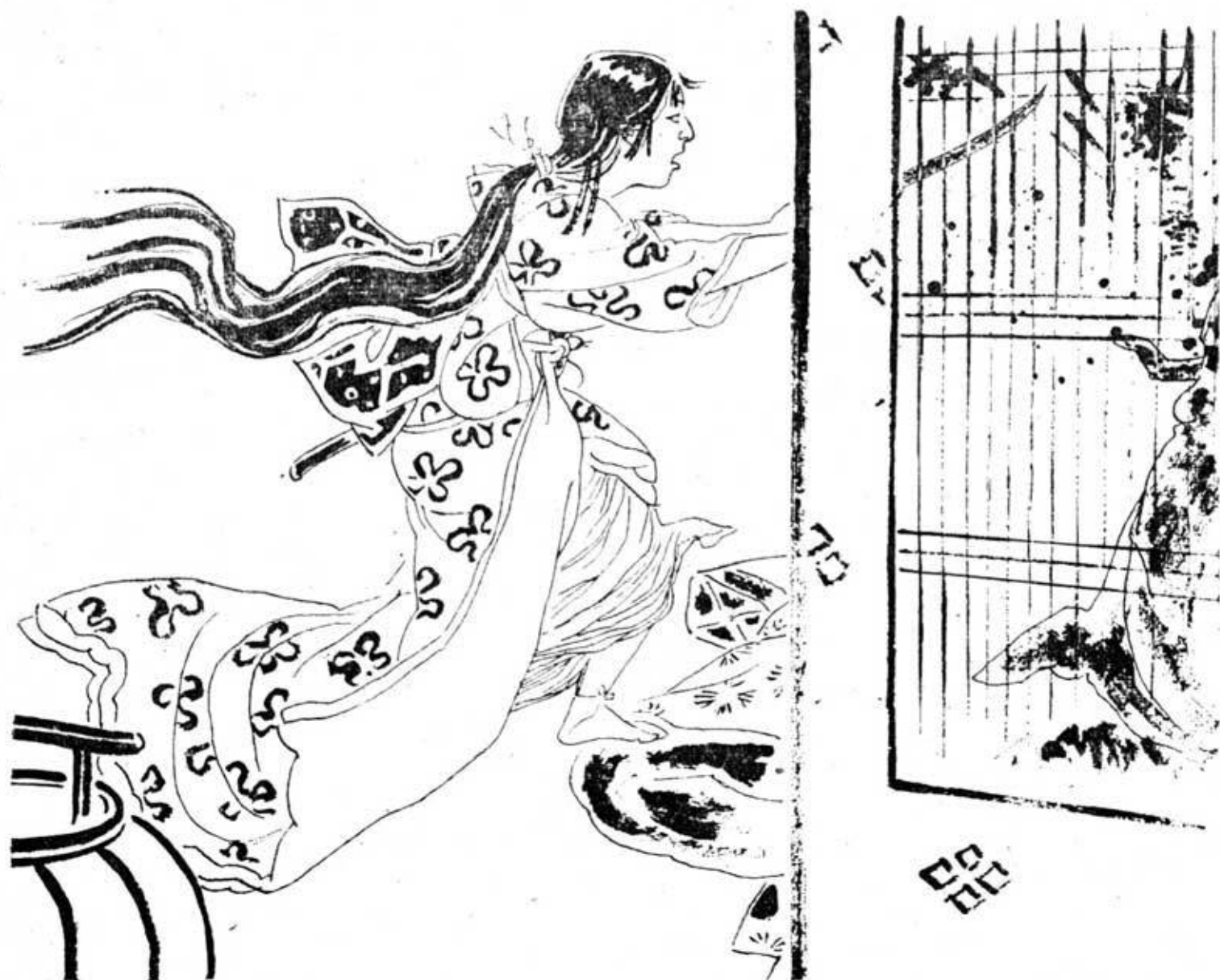
「えい——」

と一声、絃姫の足元目がけて斬り上げたのだ。何でうたまろう、心弛んですっかり備えを忘れていた年少の絃姫、しかも天下無双と謳われた女剣士琴姫が起死回生の狐尾剣に、あわれ、血けむりあげて打ち倒れたと見たのだが……。

何たること、ヒラリと飛上って、その烈剣を交した絃姫の身の軽さ。しかも次の瞬間には、空を斬って反身になった琴姫の上にとび降りると、その弱腰の上にむんずと馬乗りになって、何時の間に抜き放ったのか、右手の懐剣を、白く滑かな琴姫の咽喉笛に、切尖三寸、ピタリと押しあてていたのだ。

「アレ——」

これまで大の男にすら恐れを知らなかった琴姫も、この少女の神技の前にはすっかり、度胆を奪われて、なす術もなく、哀れな悲鳴



をあげておののく
許り。

その相手の様子
に、初めて勝利の
微笑を洩らした絃
姫は、

「如何に、琴姫殿
そなたが最後の卑
怯な手段も、天の
加護ある妾には通
じませぬ。今こそ
人を滅ぼす悪業の
深さを思い知りま
したか。父の仇、
いざ、お覚悟！」
透き通るような
声で引導を渡すと
右手に力をこめて
突き下す止めの一
刀。寝衣もはだけ
て露わになった琴
姫の雪白の咽喉元
を、グサッと刺し
貫いた。
「ア—ッ、夢—

—、妾の首——」

断末魔に惑乱した琴姫の脳裡には、夢に見
た自分の生首がありありと映って意味になら
ない絶叫を上げたが、その声の消えぬ中に、
早くも返す刀で、もろくも掻き落された現実
の琴姫の首が、畳の上に転がっていた。

やがて絃姫の纖手にとり上げられたその死
顔は、生前とは逆に眼は閉じ、口はぱっかり
と開けて、無念というよりは、何か、こんな
美少女に討たれた驚愕の表情を残していた。
「父上の霊も御照覧あれ、仇琴姫の首級をこ
の通り、絃姫が討ち取りました。」

床の前に端座した絃姫は、懷から取り出し
た紙位碑の前に、今斬った許りの琴姫の首を
供えて静かに合掌する。その姿には一瞬前の
活劇をやったのけた人とは思えぬ可憐さがあ
った。

二

「げえっ!! 義姉上がお最期——」

別の寝所にあつて、今夜の変事を聞かされ
た瑠璃姫は、のけ反らん許りに驚いた。

「して、相手は何者？」

「一条の姫とか……」

答える腰元の顔は真蒼に、唇はわなわなと

ふるえている。

「さては絃姫、おのれ！」

瑠璃姫の頭にもとっさに前夜の姉との問答が浮んだ。

（あれ程、御注意申しあげたのに……）

きつと唇をかむと、矢庭に身仕度もそこそこ、おっとり刀で部屋を飛び出そうとする。

「何所へ、姫君……」

「いわずと知れた、姉上の仇討ちやっ」

「いけませぬ、あんな、おそろしい女を相手に、危いっ」

とりすがる腰元を払いのけて、一散に琴姫の寝所につけた瑠璃姫は、中の惨劇を目見るなり

「おお」

と一瞬、立ちすくんだ。

辺り一面の血汐の中に、横たわっている首のないむくろを中に腰元達が、よよと泣き崩れている。

近寄って眺めると、首こそなければ、白綸子をまとった豊艶な四肢は、紛れもなく姉琴姫の変り果てた亡骸。思わず瞑目すると、

（姉上様、さぞ御無念でござりましょう。このお恨みはこの瑠璃が、きつと霽らしてまいりまする）

祈るは心の中、固い決意を面に漲らせて、

何と思つたか琴姫の刀をとり上げると、驚く侍女達を尻目に彼方の廊下へ走り去る。

こちらは絃姫、目指す琴姫を討ち取って、

もはや思い残すことはなし、この上は一か八か將軍秀忠をも討ちとらんと、奥殿へ踏み込んだが、忽ち見咎められて、警固の武士達に取り囲まれた。しかし、もとより斬死は覚悟の前の姫、少しもひるむ色もなく、

「一条兼弘が娘絃姫、父の仇の松平琴姫を討ち取って候。我と思わん者は、この首取って功名にされよ」

とさわやかに言い放って、近寄る武士達を次々に斬って落す。たかが小娘と侮って、琴姫の仇と許り挑んだ局や侍女達は一たまりもなく、討ち取られて、曾我兄弟の十番斬りもなくやと思われる武者振。さしも腕自慢の武士達も、余りにも、目覚ましい美少女の働きに、神の化身か、魔の娘かと恐れをなして、ただ遠まきにする許り。

絃姫も流石に疲労したか、ホッと一息、刀を杖に、しばらく乱れた己れの黒髪を掻き上げて流れる汗を押し拭っている時である。

復讐に燃えた瑠璃姫が、血相を変えて走り寄って来たのは。味方の人垣をかき分けて前

へ進み出ると、

「其方、絃姫よな。妾は、松平重政の妹瑠璃姫。姉琴姫の仇もさりながら、女は女同士。いざ、一勝負！」

流石、武家の娘、淀みもなく名乗りを上げる。挑まれた絃姫は、相手が、今までとは打って違って、おのれと同年輩の花も恥ろう美少女なのに、一寸驚きの目を見張ったが、相手にとって不足なしと見たか、

「松平の姫とは、願ってもない敵、京女朧と侮って、後悔遊ばしますな」

と血刀を取り直して、相對する。

折しも、東の空が白み始めて、お互いの顔かたちも、今やはっきりと読みとれる。決死の気持で詰めよった瑠璃姫だったのだが、改めて正面に相手の面貌に見入った時、その人の余りの美しさに思わずハッと息を呑んだのである。瑠璃姫とて、逸早く現將軍の目に止った程の無双の美女だったし、琴姫始め絶世の美人には見慣れているその目にも、今宵の絃姫の姿は、一際美しく映じて、

（こんな綺麗な姫を斬ろうとしているのか）と気後れに似たためらいが、胸を去来したが、もうその時には絃姫の方から激しく斬り込んで来たのである。

「えい」

「やっ」

少女に似合わぬ心魂に徹する気合と共に、

二つの女体は丁々発止と打ち合つて又パツと離れる。

絃姫の上段、瑠璃姫の晴眼激しい両者の息づかいと共にえも云われぬ芳香が辺りに漂う。世にも珍しい美少女同士の一騎打ちに並居る武士達は、瑠璃姫に加勢することも忘れて、固唾を呑んで見守る。

しかし、流石の絃姫も、相継ぐ激斗の疲労は掩うべくもなかった。それだけに一気に勝負を決しようとするのだが、敵の美しさに、初めの火のような斗志を鈍らせた瑠璃姫は、却って、冷静に受け流してその手に乗らない。ツツとあせり気味に詰め寄る絃姫。さからわずに退る瑠璃姫。



たまりかねた絃姫は、無理とは知りつつ、しなやかな体を躍らせて、猛然と、相手の面上目がけて斬りつけた。しかし、充分間を見

切っていた瑠璃姫は、パツと飛退つてそれを避けると、空を打つてトントンと前のめりに体を崩す絃姫の細腰を狙つて、始めて猛然と反撃に出たのである。

「エイ」

「アッ」

電光の如く横に走つた瑠璃姫の一刀。避ける間はない。が、流石に絃姫、危うく踏みとどまると、刀を返して、間一髪にガッキと、腰の所でこの烈剣を受けとめた。

しかるに、何と、武運の神に見放されたのか、次の瞬間、ビーンと異様な音と共に、絃姫の刀が、鏗元から折れてとび散り、勢余つた、瑠璃姫の切尖がサッと相手の腿を薙いだからたまらない。

「ケエッ」

苦痛のうめきと共に、ヨロヨロとよろめいた絃姫はガクツと廊下に片膝をつい

してまった。それでも氣丈の姫、素早く乳の下
の懐剣を抜き放ったが、勝負はあった！

獲物の差、次の瑠璃姫の一撃に、絃姫血け
むり上げて倒れるのは必定と、並居る誰もが
そう思ったのだが、意外や、瑠璃姫は、刀を
提げて向おうともせず

「刀が折れたのはお氣毒。勝負はまだつきま
せぬ。辺りの者から好きな刀をお選びなさる
がよい」

と花も実もある言葉に、見物の間には思わ
ず感動のどよめきが聞えた。

絃姫の美しい面にも一瞬、感情の流れが走
ったが、これは又、多くの人の思わくとは反
対に、一旦抜いた懐剣を前に置くと、キチン
と坐りなおして、瑠璃姫の顔を真直に仰ぎな
がら、悪びれたさまもなく言うのだった。

「辱けなきお言葉ながら、この勝負は明らか
に妾の負け。松平の姫に討たれるのは無念な
れども、武運尽きたる絃姫のこの首、潔く御
身に進ぜましょう」

「流石は絃姫どの。しからは御生害なされま
すか？」

「いかにも。武士の情に切腹お許しあれ」

言いながら手早く、襷、鉢巻を外してキチ
ンとたたみ、ついで固く締めていた帯をぐる

ぐるとひもどく。

余りの事態の急変に、居並ぶ男女も、動き
もやらず、息を吞んで見守る中に、絃姫は何
のためらう色もなく、帯を解き捨てると、今
度はぐいと双肌を押し広げる。汚れを知らな
い処女の匂うような白肌が、まぶしい程の輝
きをもって衆人の目に映じる。

（女の身で腹を召されるとは……）

敵の姫の壮烈さに、瑠璃姫はかえって怖毛
づくのを覚えたが、再び懐剣をとりあげた絃
姫に、

「女子の切腹とて、見苦しき様をお見せする
かも知れませぬ故に、願わくは、瑠璃姫どの
の手で介錯を——」

いわれて、衆人監視の前、引くに引かれな
い。

「さらば——」

と刀を提げて後へ廻る。絃姫は白魚をのべ
たような手先を顫えもさせず、懐剣を懐紙で
巻いて、切尖を三寸程出して逆手に持った、
しばし頭を垂れて瞑目する。

その後姿の神々しい程の美しさ。細そりと
した両肩からすんなりと流れる身体の曲線、
それにむっちり肉附いた腰から尻へのまるい
ふくらみなどが妖しいまでに瑠璃姫の目を奪

って、彼女は今の一騎打にも感じなかった程
の胸の動悸に、手足がガクガクするのをどう
しようもないのだった。

（こんなことでどうする。ここで斬り損じて
は、この勝負は妾の負けだ）

必死に心を鎮めようとする瑠璃姫は、それ
を紛らすように声を掛けた。

「絃姫どの。この刀は御身に討たれた琴姫の
差し料。これで御首級いただきまする」

「そうでしたか。では姉上の仇、その刀で見
事、この細首を刎ねて下さい」

振り向いて始めてニッコと笑う。その切れ
長の目の涼しさ。口元の愛くるしさ。しかも
サツと首を振って丈なす黒髪を前に束ねると
露わになった項の後れ毛を、細い指で静かに
かき上げるしぐさの艶なこと。そしてその頸
すじの抜けるように白く、長く、形の良いの
に瑠璃姫は又々目のくらむ思い。

しかし、その時にはもう、絃姫は健気にも
思い切りよく、右手の懐剣を、左の脇腹にグ
サリと突き立てていたのだ。

瞬間、その衝撃で姫の身体はピクンと顫え
たが、しかし声は出さなかった。

後は型の如く、薄く切ったのであろう。身
体を反らし気味に、右脇まで引き廻したが、



十字には
せず、そ
こで引き
抜いた刃
をゴムマ
リのよう
にはずん
でいる。
左の乳房
に押しあ
て、後に
向って、
「いざ！
介錯」
と声を
かけ、さ
らでだに
長い頸を
思い切り
前にさし
出した。

「エエーッ」

肺腑をつんざく気合と共に、白刃が美しい襟足の上で一閃した、と見る間に、それははや、シューッとくびれの深い頸の下へ抜けて出で、ピューッとほとばしる鮮血の中に、絃姫の首は、膝下に落ちて、それを抱きかかえるように細い上体は、正しく下肢の上に打ち伏して、もうピクリとも動かなかった。

「オオーッ」

比類なく凄絶な美姫の切腹と、それを年端もいかぬ少女が介錯した見事さに、哀惜とも賞讃ともつかぬ異様などよめきが、駿府城内の隅から隅まで伝わっていったのである。

瑠璃姫も、血刀を提げたまま、しばし呆然と美しい敵のむくろを眺めていたが、やがて我に返ると、その傍へ近寄り、瞑目合掌した後、静かに纖手をのばして、絃姫の黒髪をつかみ、その死首を掲げて見た。

一瞬前まであのように美しく輝いていたその顔は、今は化石のように蒼白化し、つぶらな瞳も固く閉じ、変り果ててはいたが、覚悟して討たれた為か、その表情には苦痛の色は

なく、かえって安らかな和ぎがあった。

戦は終わった。瑠璃姫は武士達に手伝わせて絃姫の首級を、琴姫の刀の切尖に貫かせ、「今宵の曲者一条絃姫は、松平瑠璃姫が討ち取ったり」

と高らかに呼ばわけて廻るのであった。

三

その朝、駿府城の大広間で、絃姫の首実験が行われた。実験者は前將軍秀忠だが、古今未曾有の美女の死首を見んものと、近侍の武士達はもとより、大奥の女性達までつめかけて、さしもの大広間もぎっしりと人一杯。

やがて、老臣に先導されて今晚の殊勲者松平瑠璃姫がそれへ現れる。すっかり衣裳を改めて、いつもの目も覚めるような初々しい少女にかえった彼女の姿は、つい先程凛々しい一騎打をした人とはどうしても思えず、しとやかに設けられた坐につく。

その後から三宝を捧げた侍女と、首桶を抱えた武士が続き、秀忠と瑠璃姫の間に三宝を据え、首桶を置くと、後へ退る。入れ換りに秀忠の傍らから、お局が一人現われ、首桶の前へ進み寄ると、その蓋をはねのけ、白い手の中さし入れ、房々とした黒髪を掴んで、

それへ取り出したのは、今は洗い清められ、綺麗に化粧まで施されて、生けるが如くなまめかしい絃姫の生首。それを三宝の上にのせて、秀忠の方へ向ける。

一瞬、シーンと水を打ったように静まり返った中に、玉を転ばすような瑠璃姫の聲が響いた。

「琴姫様をうちまつた一条絃姫を松平瑠璃姫首にして持参致しました。御実験の程を」

「うむ、その場去らせず打ち果して、武門の

名を保った働き天晴じや。絃姫やらの首、これへ——」

「はい」

膝行して首級をとり上げた瑠璃姫は、秀忠の近くへ進み寄って、型の如く、右手の指を死首の耳穴につつまみ、左手は、スベスベと滑かなその顎へ掛けて、切口を示しつつ差し出す。しげしげと見入った秀忠は、

「噂に違わぬ美しい姫じや。女性の身で、父の仇を討ちに駿府城の奥深く踏み込むとは敵

ながら見上げたものじやが、將軍の姫を殺めた罪は罪。衆人への見せしめ晒首にいたせ」
鶴の一声。絃姫の首は城下町の辻に梟けられた。

しかし、晒されたその首も、房々とした黒髪に掩われた面は、雪をあざむく程白く、糸の如く閉じた眼、高く通った鼻筋。丹花の唇如何なる名工も及ばぬ、天然の美しさに輝いて、死んだ後までも艶名をほしいままにした一条絃姫であった。
(おわり)

ふんどしをしめた女の美にとりつかれた愚者のたわ言

室 井 英 山

「ふんどしをしめた女の美しさ」——私は女性裸美をこのように云いたい——に対する憧れは「奇ク」によって開眼されて以来、益々高められている。若い女性のヌードは確かに美しいが私にとってはどこかしまりが欠けているように思われる。ビキニスタイルも私にとっては少し不足である。やはりふ

んどし一本をきりりと股間にしめこんだ裸女の美しさに私は止めをさしたい。形よく発達した臀部を割ってきりっとしめあげられたふんどし一本の裸女の後姿もまた、たまらない美しさを感じさせる。私にとってはふんどし一本の美女の姿は倒錯美の最もたるものとしている。

私の倒錯的な趣向は女性の男装に対する憧れから発している。中学時代、ふとして読んだ大衆小説誌のさし絵に、昔の女小姓の図が出て来たのがそもその始まりであった。髪を美しく結い上げ、大振袖に袴もりりしく二本差した女小姓の姿に私の血は異様にうずくのを覚えた。そして次にこの美女二人が今しも大小を引抜いて斬合いを演じたならばと云う妄想にかられた。それ以来、私に美女の斗争図絵にあこがれ、女相撲の図をみては女ながら男の如くふんどし一本の姿になって取組み合う女力士の図にみせられてしまった。そして私はまた、日本髪的女性にたまらない愛着を感じるの

でもある。「奇ク」旧号に現われた女のふんどし姿の中、畔亭数久氏の「娘相撲」の図（三十年三月号）はふんどしをしめた荒い、はち切れそうな健康美に溢れた乙女の姿態は強く印象に残る。その前のものには同じ畔亭氏の「切腹幻想」の中の立腹の姐御の図も素晴らしく思っている。見事な刺青の背をみせて、晒のふんどしをきりりとしめ、晒の腹巻を胸高に巻いて、黒髪をなびかせた姐御が捕手に囲まれて、今はこれまでと太刀を腹にぐさりと空立てている図は正に倒錯的な美に溢れた作品であった。

それから、山田正美氏の「アブ追求三十年の回顧」（卅年十月復刊一号）中に現われた芸妓のふんどし踊の図はそれまで芽を出しかけていた日本髪の中のふんどし姿に対する憧れを生長させた。この憧れに更に火をつけ、更に私の趣好を現在のものに略々固定せしめたのは京洛生氏の「大奥裸女血斗」の出現であった。以来五年余り、私は全くこの種のふんどしをしめた裸女の血斗図絵にとりつかれている。この京洛生氏の作品に魅せられたのは何も私のみでなく他に多くのファンが考えられるのは毎号の通信をみても明らかであり、昨年十一月号

にはこの続編とも云うべき「大奥裸女血斗の果て」が吾嬬氏によって発表されているのをみてもこの作品はこの種のものとしては今や古典にも比すべき存在となっていると思われる。

京洛生氏の作品は二頁足らずの短編であったが全編を通じての無惨美溢れる描写はけだし倒錯的な美の極致を生き生きと描き出している。大奥の美女達が相撲の勝負のもつれからふんどし一つの裸のまま血みどろな血斗を演じ、遂にはすべて斃れ伏して、大奥を血に彩って、ふんどし一つのあられもない姿の屍を累々これにきづいて果てるに至るまで、少しくどいと思われる描写もここでは左程感ぜしめずにいるのは流石であった。添えられてあったさし絵は至極簡単なものであったがふんどし一つで死闘を演ずる御守殿の姿を生き生きと表現していた。槍を構える裸女、その向うで脇腹をえぐられて今や、果てんとしているまで若いふんどし一本の女中の姿もよく、私は今に至るも愛玩している。

これに端を発して私の頭の中には様々な階層の女がふんどし一つとなって姿を現わしては消えて行く。次に二、三私のイメージを紹介したい。

櫛巻の髪、小麦色の肌の脂ののり切った身体に黒襦子のふんどしをしめた姐御と、島田鬘に、輝くばかりの続肌に一きわ鮮かに緋のふんどしをしめた娘姐御との果し合い。

紫ふんどしの年増芸妓と紋縮緬のふんどしの若い芸妓との痴情からの出刃庖丁で演ずる待合の庭の果し合い。

間夫の奪い合いから遂には揚屋を血に染めての花魁の血斗。花魁はいずれも錦のふんどしをしめて、豪しやなムードを出している。

恋の鞘当てから流血沙汰にまでなった二人の小町娘の、神社の境内での血斗、娘島田も初々しい十七、八の乙女二人が、一人は緋鹿子縮緬のふんどしをしめ、も一人は朱のふんどしをしめ、匕首を構えて睨み合っている……

その他これらを基礎にして様々なイメージが作り出されんとしているが、私の目的はやはり絵にして欲しいのである。このような願いを云えるのは、やはり本誌のみしかない。同好諸氏と共に力強く運動して実現してみたいと思う。全く、ふんどしをしめた女の姿は素晴らしい!!

サジスチック・ストーリー

美 しい な き 声

伊 関 康 明

一

明子の卒業式の日、叔父の垂水は挿絵の仕事のため雑誌社の編集部員と一緒に箱根へ出かけて、式に出席できなかった。

この東京に身寄りとして他に一人も無い寮住いの新納明子は、ただ一人遠縁に当る垂水伊作が式場に列席してくれることを心頼みしていただだけに、垂水が先の挿絵の仕事のため出席できない旨、電話で言つて来た時には電話口で、ずいぶん駄々をこねていた。

血筋は薄い、明子のこの三年間の高校生活の一切の費用をまかなってくれたのは垂水であつて、云わば明子にとって垂水は親代りであつたし、また、新納明子を彼の好みに仕立てた男であつたとも

言える。

卒業式の翌日に、垂水は仕事を早く切上げて箱根から戻つて来ると、すぐに学校の寮に電話をして、明子を自分の家に呼び寄せた。日本画ではかなり重きをなしている垂水伊作の住居は、江東区のK町という裏町にあつて、全体地下室めいたこしらえの手狭な汚ない家である。金は有つても、家とか調度品とか服装等に就いては、垂水はまったく無頓着であつた。

人形町から電車を乗り継いで行つて、明子はそのむさくるしい叔父の家に着くと、黄色っぽい裸電灯が点った板敷きの四畳間程のアトリエで、垂水は水島靖子を責めていた。

靖子は齡の頃廿七八で、銀座の或るグラウンド・キャバレエのダン

サーだが、ここ数カ月垂水と同棲しているのだ。

「ああッ、もう許して——」

壁ぎわにへばりついて、双つの盛上った隆起を真っ赤に鞭で撲ちしばかれ、靖子は音を上げだしている。

「これ位でも音を上げるのか」

「でも、先生、鞭責めだから辛い——」

びしーっと垂水は鞭をあてた。

「ああッ——」

責めが一段落するのを、明子は垂水のうしろに温和しく端座して待った。靖子の次には自分が肌に皮鞭を受けることを、ちゃんと心得た態度であり、垂水もまたその腹積りで、明子に物を言いかけるでもなかった。

「お蔭でめでたく卒業いたしました」

やがて、靖子に対する責めにひとくぎりつけて、垂水がどっかりあぐらを掻くと、明子は両手を突いて鄭重に頭をさげた。

「式に行けなくて悪かった。おまえに駄々をこねられて弱ったが、どうしても箱根の風景を取って来なければならなかったんでな」

垂水は明子の白い綺麗な衿足に接吻するように顔を近寄せて、

「この可愛いセエラ服とお別れだな」

「先生がお好きなら、明子当分着ています」

垂水のことを明子もまた先生と称ぶ。

「いや、明日辺りでも、おまえに新しい服を買ってやろう。靖子と一緒に銀座へ行って、靖子からよく見立ててもらえ」

「うれしいわ、先生」

「さて、今度はおまえを責めるか」

「はい」

明子が仕度をしだすと、壁際に突伏していた靖子が、やっとこっちへ匍い寄って来て、

「おめでとう、明子さん」

「ありがとう。お姉様のお蔭だわ」

「何言ってるの。何んにもしてやしないのに、そうかしこまらないでよ」

「でも、英語を教えて戴いたわ」

「あら、あたしの英語、怪しいものよ」

靖子の英語は正規のものであった。所謂片言英語では毛頭ない。稼業に似合わぬ彼女は仲々のインテリである。その上容色も美しい。垂水には過ぎた美人であろう。垂水は風采の上らぬ小男で、すでに白髪頭の初老でもあるが、しかし何よりも第一彼が比較的異性と縁が薄いのは、彼の特異な性癖に原因するものらしい。

靖子を美人と言ったが、しかし、新納明子の花のような清楚な美しさに及ばないのだ。乙女の美しさが全身に盛られている。細づくりのかおにも、胸のふくらみにも、腰のまるみにも。

明子は純白の下着一つになつて、

「はい」

と、垂水にまるい腰部を向ける。

「靖子、おい起て」

と、垂水は靖子の躰を引き起し、

「明子を責めろ」

そう命令した。

「どうぞ、おねえさま」

明子は顔をねじって、微笑んで、

「ひさしぶりだわ、おねえさまの責め」

「可愛いわ、このひと」

靖子は皓齒をほころばすと、「ねえ先生」と垂水の顔を仰いで、

「あたしの思うように責めていい?」

「よし」

垂水は壁際の木椅子に体を移して、

「思うように責めてみる」

大声でけしかけた。

「じゃ」

と、靖子はまず皮鞭を握ったが、それでは一寸芸が無いと思ったものか、

「明子さん、四つ這になりなさい」

「はい」

明子が腰を高々と四つん這いに這うと、

「先生、ふんどし解いてもいいでしょう」

垂水に断って、自分が締めさせられていた緋紅の六尺ふんどしを靖子は解き、明子の胸の一卷きしてその背中で輪に結んだ。手綱である。

「騎馬責めをするの?」

明子は九分察して言う。

「そうよ。貴女は力が無いから騎馬責めがいちばん辛いでしょ」

靖子は全体重をかけて、明子の肉づきの薄い華奢な背の上に中腰に乗って、左手でしっかりと手綱を握り、右手をひと振り、

「すすめ!」

びしっと明子の柔肌を撲ち据えた。

「あきこ! 潰れたら承知せんぞっ」

椅子に座って垂水伊作は打興じる。

「ウハハ。靖子、もっと叩け、もっと!」

散らかったガラクタの上を跨いだり、よけたりしながら、背中に靖子を乗せ、靖子の手でびしびし叩かれつつ、明子は懸命に力を絞りだしてよたよたと匍い進んだ。

こうして、板張りのアトリエを五周させられると、明子は膝頭の皮がすり剥けて赤く血がにじみだし、

「も、もう、お馬は休ませて——」

とうとうへたばってしまった。

「五周したのだから、まあまあね」

靖子は明子の胸から手綱をほどいてやりながら、これも白い胸をはあはあと大きくあえがせる。

明子は突伏して起き上らない。

「さあ、起きて四つん這いになるの」

「膝がすり剥けて痛い」

騎馬責めで明子は殆ど参ったらしい。かぼそい感じでさえある華奢な少女である。その花のような美しい顔とスタイルを見込れて、学校生活ではずっと演劇部に属していた。運動部には興味のない生徒であった。

「さあ、起きないか」

靖子は髪の毛をひっ張った。

「ああ——」

明子は痛む膝をまた板土間に突き、両肘を突張って再び四つ這っ

た。

二

およそ小一時間、靖子は明子を責めた。素手撲ちについて、今度



は明子を壁の前に中腰に立たせておいて板で打ち責めた。

「ああッ——痛いッ」

キメ板がバンと響くたび明子は板壁にへばりついて足踏みした。さっき、垂水から責められていた靖子の状態とそっくりである。

「おねえさま、手で撲って」

「だめ！」

この美しく可愛い少女を責めるのはひさしぶりのことなので、靖子は責めに熱が入り、酔うような心地だった。その靖子の態度は、結局垂水を満足させることになる。

「よし、もういいだろう。あとは俺が責めてやる。靖子は二階に上って休んでいいぞ」

と、垂水伊作は上機嫌で言った。

「明子さん、ごくろうさま」

靖子はそう言い残して、中二階になった屋根裏の部屋へ上って行く。

床に突伏して明子は身動きしない。白い肌が赤く炎症を呈して痛々しい。

「だらしないぞ、明子。おい」

ぴしゃ、ぴしゃと垂水は手で叩いて笑う。

「先生、一寸湿布させて——」
ぴしっと撲たれた。

「寝たまま俺にものを言うのか」

「——すみません」

痛む躰を明子は無理に起した。

「湿布させて」

「ならん！」

声はバカでかいが、垂水の表情には悦虐の笑みが揺れ、

「さ、今度は皮鞭を受けるんだ」

壁の前に立て、と垂水は呶鳴る。ビューと鞭を素振した。

観念して明子はまた板壁を支える。

「どうぞ責めて、と言うんだ」

「——どうぞ責めて……」

明子は歯をくいしばった。

「そらっ」

懸声もろとも風を切って鞭が襲う。肌に火が走るような激痛である。「ああッ」明子は身悶えて狂ったように叫ぶ。

「ああッ——ああッ——」

鞭で撲たれる責めが、一番辛いのだ。

「ああッ——」

皮膚が破れて、血がほとばしるのではないかと、新納明子は思った。今日の責めはそれ程苛烈であった。

「——ゆるしてっ」

休え切れなくなつて、明子は高く悲鳴を挙げて階段へ走った。二段登りかけたが、逃げてもうどうせ掴まるものだから、進退窮してそこに泣き崩れてしまった。

「先生、ゆるしてえ——」

「辛いかな？」

「だって、今夜はいつもの倍も責められていますわ」

明子が泣き声で懇えると、

「おまえの卒業記念だ」

「——でも……」

「よし、じゃあと十回鞭撲ちだ。それで今夜は許してやろう」

その十回の鞭責めに明子はやっと耐えた。

「いたい、いたい」

中二階の部屋へ上ると、明子はどさっとベッドに打ち伏して嗚咽した。

「ずいぶんひどく責められたわね」

隣りのベットから靖子が言った。

「鞭痕が凄く赤く捺いてる」

そう言う靖子も、傷ついた肌を湿布してまだぬれないうでいたのだが、湿布を除いて明子のベッドへ移って来ると、

「手当てしてあげるから、じっとしていなさい。もう泣きやまないと、先生から叱られるわよ」

靖子は親身に手当してやった。

「明子さん」

夜中近い頃、靖子は明子を揺り起した。

「え？」

「私を責めてよ」

靖子はささやいた。

「先生はもう寝まれたわ。だから、いいでしょう。分りはしない」
明子は身を起した。

「おねえさまだったら、こんなに責づいていくせに、まだ責められたいの」

「鞭がないのが残念ね」

「鞭で撲ったら物音を聴いて先生が目をさまされるわ。手で叩いてあげる」

明子の瞳は活々としてきていた。

三

新橋のGビル三階にあるKM商事会社に、垂水伊作が明子を伴なって行ったのは、一週間余り経った午後であった。

KM商事の社長は朴という三国人で、垂水は彼と前々から親交があり、自分と同じ傾向の性癖の朴に明子の身柄を預けることにしたのである。

「俺に依って、おまえは折角マゾ娘に仕上げられたのだから、その特性を生かして身を立てた方がよい」

ついては、新橋で貿易関係の会社をやっている友人が居るから、おまえはその男に飼われながら世の中を知ってみてはどうか、と伊作は明子にすすめていたのだ。すすめる、というより一種命令的であり、その叔父の垂水の意向には万事明子は抗えなない。

新納明子は、粗末な社長室で朴に引合わされた。朴は、四十年配のひじょうに精悍な顔つきをした男であった。

一目見て彼は明子を気に入っていた。

「先生——」

垂水が帰る時、明子は急に泪声になって垂水の瘦せた背中へ呼びかけた。垂水伊作は、振返らずに社長室を出て行った。

朴が運転する事に乗せられて、明子が連れて行かれた朴の家は、練馬の端のずいぶん淋しい処にあった。

「誰も居ない家だ。だから、誰にも気がねする必要はない」

と、家に這入って朴は言った。

ただっぴろい家で、朴と二人で暮しだすと明子は次第に垂水を恋しく思う気持が薄れて行った。あの薄汚ないアトリエに遊びに行ってみたい気持も、段々おさまってきた。

新納明子は、完全に朴の奴隷であったが、同時にそれは明子のマゾが完全に成長して行く過程であった。

朴は日中は会社に居て活動している。仕事は仲々多忙であった。朴が外に居る間、明子は普通の夫人のように細々とした雑事も処理するかたわら、竹鞭の製作に精出した。よくしなう細竹をさらに薄く割って、軽い華奢な鞭にしていくのだった。朴は決して皮鞭を使うことはせず、肌に傷を残さないその竹製の鞭でもって明子を撲つのである。この特殊な鞭は時々折れてしまうことがあるので、明子は常に鞭のスペアを作って置く必要があったのだ。

夕方朴は家に戻ると、すぐその竹鞭を手にとって、台所へやって来たりする。明子は炊事の手をやめて、板土間に四つ這わなければならぬ。肌を撲つ竹鞭はゴムのようにしなやかだった。しかし、小やみなくつるべ打ちに撲ちしばかれていくと、皮鞭を当てられるのと変らない灼けるような苦痛を生んだ。

「ああ——」

幾ら明子が苦痛に泣いても、朴は容易に許すものではない。竹鞭が折れると、代りの竹鞭をすぐ取って撲ちつづけた。

或る月明の晩、朴は庭のテラスで、明子を膝の上にうつ伏せにさ

せて素手撲ちを加えながら、
「今度の日曜日、芝居に連れて
行ってやろうか。おまえは、芝
居が好きか」

びしっぴしっとなぐられる痛さ
で、明子は口がきけなかった。
で、黙って撲たれていると朴は
手を休めて、

「それとも映画の方がいいか」
「どちらでも、明子は構いませ
ん」

答えて、明子は朴の手を握り
「叩いて」と、自分の肌に押し
当てていた。

「痛いくせに。ハハハ」
「いいえ、もっともっと叩いて
ください」

日一日と明子のマゾは成長し
て行っているのだった。

芝居よりも、明子は本当は映
画が観たかった。朴は熱心に見
ていたが、明子は幕が下りるの
が待遠しかった。その退屈な芝
居は別にして、明子は久しぶり
に歩く銀座の景色の方が愉し



った。朴に飼われるように
なって、こうして外出した
のは始めてである。まるで
女学生の気分に戻ったよう
に明子の心ははしやいでい
た。

東銀座の或るレストラン
トで夕食をとっていると、
朴は偶然顔馴染の金融業者
と顔が合って、自分の席に
彼を招じ、何か熱心に相談
事をしはじめた。

相談を持ちかけたのは無
論朴の方で、

「そうか、そうか」

と、相手は専ら相槌はか
りうっている。二人の声は
ひくかったし、明子も横聞
きを遠慮して音楽に耳を傾
けていたので、どういう相
談なのかは分らなかったが
やがて、

「突然だが、明子、俺は沼
津に行ってくる」
と、朴は言う。

「沼津まで？」

「ああ、急用ができた」

「あたしも連れて行けないの？」

「ばか、仕事があるんだ。おまえを連れて行ったりしたら、変じゃないか」

「お帰りは？」

「さて、行ってみだ都合だが、まあ三四日はかかるだろう。留守を頼む」

朴たちはすぐにその場から東京駅へ車を飛ばして行った。

急に淋しい気持になって、明子が一人で銀座の雑踏の中を歩いていると、向うから和服姿の垂水伊作がやって来ている。

四

「おお」

そんな声を垂水はだしていた。半白の髪が額に乱れた顔が、大きく眼をみはって、まじまじと明子をみつめた。

「先生——」

なつかしさが胸一杯にあふれてきて、明子は泪ぐんで絶句していた。垂水のこととは忘れてしまった風な自分だったのに、どうしてこんなに胸がたぎって泪ぐんでしまったのか、その極端な感情の奔騰が、明子は自分でも不思議に思えた。

「元気か？ 明子」

やっと垂水は口をひらいていた。

「先生こそ、お元気なの？」

「うむ」

どう見ても、垂水は元気の無い様子であった。ひどく淋しそうに見え、何か心痛している風な翳りがある。

「お体が悪いの？」

そう訊いてみると、

「いや。体は別にどこも悪くはない」

そう言って、

「朴君は？」

「朴は今、沼津へ参りましたわ」

「ほう。相変らず多忙なのだな」

垂水は辺りを見回して、

「とにかく何処かでお茶を飲もう」

靖子が居なくなつたのだ、と喫茶店の中で垂水は言った。つぶやくようなひくい声が、垂水の傷心をにじませていた。

「悪い女だ。俺をだました」

「——」

「二十万円盗って男と駈落ちしたんだ」

「まあ」

「盗られた金は惜しくない。しかし、つまらぬ若い男などと逃げたのが憎い」

先生は、生れつき女にだまされるようにできている人なのかも知れない、新納明子はそんな気がした。これに似たケースが、これまでも何度かあったらしいのを明子は知っている。垂水が、実に可哀想な人に思えた。まして、自分の三年間の高校生活をみてくれた恩人の叔父だと思つと、明子は心が烈しく揺さぶられて来た。

「明子、先生の許に帰ります」

「――なに」

「先生が可哀想で放っておかれない」

「――」

「また、明子を先生の鞭で責めてください。靖子さんの分も、あたし、鞭を受けます」

「実はな」

垂水は感動したように声ふるわせ、

「俺もそう考えていた。勝手のいいことだが、靖子が居なくなるとおまえをまた朴君からとり戻したくなったのだ」

「朴はわかってくれますわ」

「しかし、言い難いことだ。何もおまえを金で売ったわけじゃないのだが、どうもこれは言い辛いことだ」

「でも、私の自由意志で、きめられることではないでしょうか、先生」

「うむ」

垂水は明子の手を握った。

「か、帰って来てくれ」

激情的にそう言っていた。

垂水の家に新納明子はその足で戻った。タクシーの中で、彼女は伊作の瘦せた胸に顔を凭していた。朴の顔は、彼女の頭の中で遠くへしりぞいて行っていた。

垂水の家は、女手が無くなってから、前にまして汚なくなっていた。玄関の土間には捨てられたゴミが溜まっている。その土間で垂水は明子に「向うを向け」と命じた。

「アトリエで責めて、先生」

三年間マゾへの訓練をされたなつかしいアトリエ。明子はその室で責められたかった。

「ねえ、お願い――」

と、靴を脱ぎ捨てて花のようにスカートをひるがえして、土間から奥へ走り込んだ。

遅れて、垂水がアトリエに這入行くと、明子はもう手早く服を脱ぎ捨てて、白い桃果のような隆起を高く上向けて床に四つ這っていた。

「先生」

明子は首をねじって、

「どうぞ責めて」

「よし、よくそのせりふを忘れなかった」

「感心でしょう」

「ふふ」

びしびしとまず素手撲ちを加える。

「先生、もっと強く叩いて」

「だんだん痛いようにしてやる」

明子も、同時に垂水伊作も、このとき新しい感動に胸襲われていた。水島靖子が逃げた痛手も、この瞬間に垂水は消え去ったことであらう。

新納明子というこの類い稀な美少女を、三年の間言わば手塩にかけてマゾにしつけたのだから、垂水はこの乙女だけを、乙女のままに大切に手中にしていればよかったのである。他に異性を求めることはなかったのだ。明子を、乙女のままに守ることに垂水は自信がないわけではなかった筈だ。壮年者の朴に守れることが、叔父であ

り初老である垂水に守れぬ筈はない。

垂水は今に至って、そのことを悟った。これは祝福すべき境地である。

「ああ……」

長い烈しい素手撲ちがやむと、明子は流石に苦痛の呻きを洩らし、赤く爛れた色になった肌を両手で揉んだ。

「次は鞭？」

と、あえいだ声で訊いている。煙草を一服しながら垂水は笑って打眺める。

「いやん、笑ってばかりいて」

垂水は静かな幸福の境地にあるのだ。

「まだ笑ってる……」

明子はいきなり垂水の煙草を奪って捨ててしまった。

「早く鞭で撲ってください」

「よし」

と、垂水は皮鞭を手にする。

「這え！」

「はい」

愴美の気が颯とアトリエに流れた。

五

朝、垂水が目をさますと、明子の姿が甲斐甲斐しくアトリエに動いていた。パンティ一つで、背中や腕に汗を光らせながら、ひどく汚れた室を懸命に掃除しているのだ。すでに台所の方は綺麗に片付けられ、垂水の溜めていた洗濯物もすっかり洗ってしまった様子で

ある。窓の方を見ると、矢張り竿に干物が見える。垂水はいささか驚いた。

昨夜あれだけ猛烈な鞭責めを加えたのに、よくこんな仕事ができるものだと思う。あの美しい華奢な体が想像以上に強く責めに馴らされ鍛えられていることを垂水は知った。自分が思っていたより、はるかに深く明子は鍛えられているものであろう。

「おい」

垂水はベッドから呼んだ。

「はい」

すぐに雑巾を置いて、走るようにしてそばに来るのは、朴からしつけられた習慣でもあった。昨夜の無惨な鞭傷を垂水は見つた。

「ばか、こんな傷で掃除なんかして」

「いいの」

汗が光る明子の顔は爽やかに美しい。

「お掃除しないと、とても汚いんですもの。あたし、靖子おねえさまとは違うわ」

「綺麗好きなのはいいことだが――」

しかし、無理をするな、と垂水はやさしい気くばりを示した。すると明子は、どうとりちがえたものか、四つ這いになって責めを受ける恰好になった。

「どうぞ責めて」

朴が明子に課した習慣を、垂水は知った。と、垂水伊作は、はじめて朴に対してかすかな嫉妬をおぼえていた。

「毎朝そうして責められていたのか」

「ええ、朴は会社に出かける時間まで、いつも素手で撲つの」

明子は振り向いて、

「どうしたの先生、責めないの？」

「めしの仕度をしろ」

と、垂水は言った。隆起一面の青黒い鞭痕が妙に痛ましくて、すぐには手を下しかねた模様である。

涼しい午前中に垂水伊作は仕事をする。彼が画筆を揮うときは、誰もアトリエに這入ることはできない。新納明子もこの例外ではなく、午になるまで彼女は錦糸堀に居るクラス・メートの家に邪魔していた。

錦糸堀の盛り場で金魚を買って、明子が帰って来ると、垂水は仕事にくぎりをつけて一服しているところだった。

「映画が観たかったわ、楽天地で」

「そうか」

「でも、帰らないと、先生に叱られると思って、金魚を買ってすぐに」

「俺も久しぶりで映画が観たくなった」

一緒に行くか、と立ち上った。

「まあ、うれしい」

と、手を打つところは、あどけなく無邪気な美少女である。

「責めてやろうか」

と、わざと垂水が言うと、

「いやいや、帰ってから責めて」

新宿のM劇場にいい洋画がかかっているの、二人はそこまで足をのばして行った。映画を見て食事をして帰って来ると、もう暗かった。明子は先に家の中に這入って、アトリエに灯を入れると、

「あっ——」

その声は玄関の垂水の耳にも届いた。

垂水伊作は大声で、

「どうしたっ」

「わたしだ、垂水先生」

アトリエにぬつと朴が突立っていた。瞬間、垂水は明子を守る意識が働いていた。朴が明子に立腹の余り乱暴しないとは限らなかったからである。立ちすくんでいる新納明子を伊作は背中にかばい、

「朴君、落着いてくれ」

「私は落着いてますよ。ただ、無断で部屋に入ってお帰りを待っていたことは、大変不作法なことですがお許し下さい」

「朴さん、わけがあるのです」

明子は声をはずませた。

「明子も、何もびくびくしないでもいい。私は、乱暴する気はないのだ」

朴は静かだった。

「垂水さん、わけは聴かずとも大体察しがつきます。明子はやはり手塩にかけた、そうとも言えるあなたが、お手許に置くべきでしょう。得がたいマゾの美少女を失うのは、私は断腸の思いもします。が、しかし、これはあなたに帰すべきものでしょう」

朴はそれから明子の顔を見つめて、

「さようなら。——明子、私はこの「さようなら」を言いに来たのだ」

「朴さん」

ハラハラと明子の顔に涙が走った。

「さいごに此處で明子を責めて行つて——」

明子の伸びやかな肢体が、がばっと二人の足下に白い花が落ちたようにうずくまった。か弱い嗚咽の音が、しずまりかえった部屋の中に、いつまでも続いていた。

垂水と朴の心の中には、複雑な心境が渦まいて、急に言葉を出す氣持になれなかった。沈黙の静まりが明子のすすり泣きを一層感動的なものにしていった。投げだされている真白い素足が、激しいムチ打ちに悶え狂っているときの明子の様子を思い出させて、二人の

胸の中に、煮えたぎるような熱いかたまりをつかえさせていた。

マゾづいた可憐な少女明子の全身を投げだして床にうつ伏したポーズは、華やかにも妖しい魅力を放って二人の視線に映じていたがやがて沈黙の破れるときがきた。

「さようなら」

言つたとき、朴の姿は小走りにもう外に出ていた。朴が泣いている、垂水は卒然として彼の最後の声を聴いた。

美しい泣き声が、垂水の足もとから湧き上って来ていた。(了)

限定版 特別号 案内

第一弾、第二弾、第三弾、第四弾と引続いて刊行された本誌の限定版特別号は、その豪華なモデル陣の美女を縦横に駆使して、素晴らしい緊縛ポーズを展開しております。第二弾はいち早く売切れとなりましたが、第一弾、第三弾、第四弾も今や残り少なくなりました。縛られた美女ばかりの艶妖ポーズと四馬孝画の緊縛画集によって、どうか痺れるような責めの醍醐味をお楽しみ下さい。

第一弾

緊縛フोट・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた句うばかりにあでやかにも美しいフोट集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフ集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラビア・フोट集です。

第四弾

緊縛フोटと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。

颯子の足

谷崎潤一郎「瘋癲老人

日記」に就いて

芳野眉美



A

谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」は、中央公論に三十六年十一月号から、翌年五月号迄連載された日記スタイルの中編小説です。完結後単行本が中央公論社より発売されました。

この日記は、三十七年度最高の作品と評価され、朝日新聞ベスト5、読売新聞ベスト3のトップにランクされました。一月十八日、

日記は毎日新聞の毎日芸術大賞を受賞しました。

さきに、川端康成が「眠れる美女」で毎日出版文化賞を受けていますので、三十七年度は、老人文学の花ざかりといったところででした。二つの小説とも、モチーフは性的不能の老人の性欲です。日記では颯子の足で表現されます。颯子の足が日記のすべてです。

左半身不随に悩まされている老人が、小悪

魔的な息子の嫁、颯子を崇拜し、颯子の足を舐めまわし、その足に踏みつけられることによって、生きる楽しみを味あい、命を支えているという、足フェティシズムの作品です。

日記の結論を原作にさがすと、

「老人の病気は異常性欲と言うべきもので、目下の状態では精神病とは云えない。ただこの患者には性欲が常に必要であって、それがこの老人の生命の支えになっている」

(佐々木看護婦看護記録抜萃)

とあります。

颯子の足が老人の生命なのです。

主な登場人物は、

卯木督助(主人公、日記の筆者、七十七才

夫人長男夫婦孫と共に東京麻布に住む)

婆さん(督助の妻)

浄吉(督助の長男、三十七才、会社部長)

颯子(浄吉の妻、小説の女主人公)

経助(浄吉颯子夫婦の長男、七才)

春久(督助の甥、颯子の男友達、テレビ放送局勤務)

送局勤務)

佐々木看護婦。

日記は、老人一人の日記で押し通した一元描写ですすめられます。

「とにかく日本語があれだけ正確に思った通りのことを表現できるのかと思って、巨匠の作だという感銘を受けた」

(三十七年十二月廿九日東京新聞夕刊、本多秋五)

とありますから、足フェティシズムの作品というだけでなく、日本語のためにも一読するとよろしいかと思えます。

颯子の足を原作に追ってみますと、

(ハカラズモ予ハ彼女ノ素足ニ触レ得ル機会

ヲ擲ンダ・彼女ハソフアニ両足ヲ伸バシ、ナイロンノ靴下ヲ脱イデ見セタ。予ハソノ足ヲ自分ノ膝ノ上ニ載セ、五本ノ趾ヲ一本々々握ッテ見タ。

「触ッテ見ルト柔イゼ、胼胝ナンカアリヤシナイジャナイカ」

(六月二十日の日記)

(予ハ寝タフリヲシナガラ、颯子ノガウンノ端カラ覗イテキル支那履ノ小サク尖ッタ尖端ヲ見テキタ。コンナニ繊細ニ尖ッタ足ハ日本ニハ珍シイ。

「今日ハドウシタノカ寝ツキが悪イ」

「アタシガ傍ニキルカラジャナイ?」

(六月二十三日)

「頸ニ接吻スルクラキ、オ許シガ出タッテヨササウナモンダノニ」

「頸ハ弱イワ」

「何処ナライイノサ」

「何処ダッテ駄目。なめくじに舐メラレタミタイデ、一日気持が悪カッタワ」

「相手が春久ダッタラドウカナ」

「膝カラ下ナラ一度ダケ許ス。一度ダケヨ。」

「膝カラ下ナラ一度ダケ許ス。一度ダケヨ。」

舌デ触ラナイデ唇ダケ着ケルノヨ」

膝カラ上ハ、顔マデスツカリ隠シテキテ、

バスカーテンノ裂ケ目カラ胫ト足ノ先ダケ出

タ。

「セメテカウシテル間、シャワーヲ止メテ貰ヘナイカナ」

「止メル訳ニ行カナイ、触ラレタ傍カラ直グト綺麗ニ流シチャハナイト気持が悪イ」

予ハタダ水ヲ吞マサレタ気がシタダゲダッタ。

(七月二十八日)

「ココ開イテルワヨ」

ト云フ声ガシテ、珍シク彼女ガ朗カナ顔ヲ出シタ。シャワーノ音ガシテキル。

「今日ハ春久ハ来ナイノカネ」

「エエ、這入ッテラッシャイ」

早クモ彼女ハバスカーテンノ中ニ隠レテキタ。

「今日ハ接吻サセタゲルワ」

シャワーノ音ガ止ンダ。カーテンノ蔭カラ

胫ト足ガ出タ。

「何ダイ、又内診ノ恰好カイ」

「サウヨ、膝カラ上ハ駄目。ソノ代リシャワ

ーヲ止メテ上ゲタチャナイノ」

ソシテ附ケ加ヘタ。

「今日ハ唇ダケデナクテモイイ、舌を着ケテモイイ」

予ハ七月二十八日ト同ジ姿勢デ、彼女ノ胫ノ同ジ位置ヲ唇デ吸ッタ。舌デユックリト

味ハフ。ヤヤ接吻ニ似タ味ガスル。ソノママズルズルト脹脛カラ踵マデ下リテ行ク。意外ニモ何モ云ハナイ。スルママニサセテキル。舌ハ足ノ甲ニ及ビ、親趾ノ突端ニ及ブ。予ハ跪イテ足ヲ持チ上ゲ、親趾ト第二ノ趾ト第三ノ趾トヲロ一杯ニ頬張ル。予ハ土踏マズニ唇ヲ着ケル。濡レタ足ノ裏ガ蠱惑的ニ、顔ノヤウナ表情ヲ浮カベテキル。

「モウイイデシヨ」

急ニシヤワーガ流レ始メタ。彼女ノ足ノ裏ト予ノ頭ダノ顔ダノヲ水ダラケニシテ。

(八月十一日)

一週間たった八月十八日、颯子は、老人に頸にネッキングをさせながら、三百万円もするキヤッツアイ(猫眼石)を老人からせしめます。日記の第一のクライマックスです。

B

日本文学に男性マゾヒストを輸入したのは谷崎潤一郎だとされています。

「痴人の愛」のナオミと河合譲治「春琴抄」の春琴と佐助、「蘆刈」のお遊と芹橋慎之助など有名なものが数多くあります。

足そのものを書いた短編としては、

「富美子の足」(大正八年潤一郎三十四才)

「蘿洞先生」(大正十四年、四十才)「続蘿洞先生」(昭和三年、四十三才)などがあります。主人公はやはり老人です。

精神分析学によると、幼児の頃女性の素足をみて興奮した記憶が、足フェティシズムと発展する発端になるそうですから、谷崎潤一郎にもそのような記憶があったのではないかと思います。

そう思つて「瘋癲老人日記」を読んでいると、九月五日の日記に、

(母モ美シイ足ヲシテキタ。シカシ颯子ノ足ヲ見ルト、ソノ美シサガ全ク違フ。殆ド同ジ種類ノ人間ノ足、同ジ日本人ノ女ノ足トハ思ハレナイ。母ノ足ハ予ノ掌ノ上ニ載ルクラキニ小サク可愛イカッタ。ソシテソノ足ヲ畳表ノ下駄ノ上ニ載セテ、極端ナ内股デ歩イタ。

颯子ノ足ハ柳鰯ノヤウニ華奢デ細長イ。普通ノ日本人ノ靴ハ平ベツタクツテアタシノ足ニハ合ハナイト、颯子ハ自慢スル。反対ニ母ノ足ハ幅広デアル。奈良ノ三月堂ノ不空羅索観世音菩薩ノ足ヲ見ルト、予ハイツモ母ノ足ヲ思ヒ出ス。)

と注目すべきことが書いてあります。対象は「母」だったのでしょう。

この足フェティシズムでもわかるように、

老人の性格として、一種の嗜虐的傾向があったことは、日記にもみられます。

(痛い時デモ性慾ハ感ジル。痛い時ノ方ガ一層感ジル、ト云ツタ方ガイイカモ知レナイ。或ハ又痛い目ニ遇ハセテクレル異性ノ方ニヨリ一層魅力ヲ感ジ、惹キツケラレル、ト云ツタ方ガイイカ。

若イ時カラ嗜虐的傾向ガアツタトハ思ハレナイガ、老年ニ及ンデダントコンナ工合ニナツテ来タ。)

とあり、

(予ハ鼻ガ長クテ高スギル顔ハ嫌ヒダ。何ヨリモ足ガ白クテ、華奢デアルコトガ必要ダ。悪イ性質ノ女ノ方ニ余計魅セラレル。時ニ依ルト、顔ニ一種残酷性ガ現ハレテキル女ガアルガ、ソナノハ何ヨリ好キダ。ソナノ顔ノ女ヲ見ルト、顔ダケデナク、性質モ残酷デアルカノヤウニ思ヒ、又サウデアルコトヲ希望スル。)

とあって、

シモンシニヨレと炎加世子の顔をあげています。颯子のイメージはこんなところにあるのかもしれない。

さらに、

(予ハコレ以上生きナガラヘテキタトコロデ

格別ノコトモナイノダカラ、モシ今の世ニオ
伝ノヤウニ現ハレタラ、ムシロソノ女ノ手ニ
カカッテ殺サレタ方が幸福カモ知レナイ。少
クトモコンナ生殺シノヤウナ手足ノ痛ミヲ忖
ヘナガラ生キテキルヨリ、ヒト思ヒニ残酷ナ
殺サレ方ヲシテ見タクモアル)

(七月十二日)

はつきりこう書かれると「少年」「悪魔」
から始まって、悪魔派だとか、唯美派だとか
いわれた系列の作品の終点、集大成がこの日
記だと思われてきます。

ここで思い出すのは、「細雪」の結びの一
節です。「源氏物語」の延長と云われた「細
雪」が、女主人公雪子の下痢の描写で終るの
は有名な話で、この美しいものを、冒瀆する
嗜虐的な傾向が、谷崎潤一郎の好色思想なの
で、その精神は日記の老人と少しも変わりませ
ん。

C

ラジオで、谷崎潤一郎自身が語り手と老人
になって放送しました。

颯子は淡路恵子です。

潤一郎は以前から淡路恵子が好きで、日記

のドラマ出演の交渉を受けたさい、颯子役に
淡路恵子を指名したものです。

一本調子の淡々とした日記の朗読でしたが
原作の味がでていてなかなかの名演でした。

大映で日記が映画化されたとき、老人にな



った山村聰は、老人に森雅之を推薦したそう
ですが、東宝で淡路恵子と森雅之で映画化し
たほうが、原作に近い味をだしたのではない
かと思われます。

颯子の体臭は淡路恵子の体臭らしいです。

(四)

昨年の十二月一日のフジテレビ「夜の十時
劇場」で録画中継された、新派の老人日記を
茶の間で観賞した方は多いのではないでしょ
うか。

東京新橋演舞場新派十一月公演で、

老人 花柳章太郎

颯子 水谷八重子

浄吉 伊志井寛

演出は千田是也です。

章太郎が潤一郎に似ているので、面白い芝
居になりました。舞台という限られた範囲で
する芝居ではないかと思われませんが、喜劇的
にあつかった演出や、章太郎の持味で、いや
らしくなく、ただ明かるい老人のフウテンぶ
りをみせて好評でした。

颯子が八重子でなく、娘の良重だったら見
に行くんだがな、と、云った老人もいました
が。

しかし、よく芝居にしたものです。

大映で映画化されて、原作より問題になりました。

老人 山村 聡

嬢子 若尾文子

浄吉 川崎敬三

監督は「痴人の愛」の木村恵吾です。

週刊平凡三十七年十一月一日号の、映画批評を招介してみましよう。批評家は（I）です。

（喜寿の祝をむかえた卯木督助は、息子浄吉の妻嬢子の足に異常な執着を示します。彼女が浴室でシャワーをあびているところへはいりこみ、まるで犬のようにはいつくばって、足をなめまわします。嬢子はそんな老人をてきとうにあしらい、からかいながら、自分のお色気を小出しにして、さいしょは三万五千円のハンドバッグからはじめて、ついには三百万円の猫目石までせしめます。この不能者の老人と、若い嫁との異常な性生活が、これでもかこれでもかとはばかり、画面いっぱいに展開されるのです。

そのもつともひどいのは、間接キスと称して、寝て口をあけている督助に、上から嬢子がツバをおとすくんだり、いやはやまったくも

のすどいものです。）

十月二十二日の報知新聞、大黒東洋士の映画批評は、

（嫁の足にしがみついてなめづりまわす場面がサディステックで残酷な異常な見せ場になっている。このような場面の表現には神秘と暗示のベールをかけた演出が必要だが、こうマトモにカラカラとカメラをまわされてはやりきれない。深刻無残な場面がコッケイ劇になった。）

山村はただだど苦労さまといえる主演ぶりで、若尾も妙にとまどいし、くすぐったげな演技である。役者はつらいかなと同情がわく。）

若尾文子は、

（嬢子を、あたしなりの、解釈で考えてみたの。功利的で頭がいい魅力的な女、世間なみの常識でいったら悪女でしょう。でも、女のなかにはこういった一面もあるのだし。

わたしはユーモラスにやってみたつもり。かわいらしい女の一面が出せたら成功じゃないかと思っています。

老人の気持は、正直いってわからないわ。）

（週刊平凡三十七年十月十一日号）
はつきりいって、若尾文子では、嬢子のイ

メージとはかなりかけはなれています。ミスキャストでしょう。

といって、若尾文子の責任じゃないでしょう。若尾文子の言葉が、そのまま一般の人達の意見であり、感想だと思います。それが常識だと思っています。

紹介した二つの映画批評にも、それは云えます。

潤一郎が描いた、ある異常なエロティシズムの限界が、ここにあるように思われます。繰り返しますが、いわゆる常識的なモラルに縛られた一般階級には、理解出来ない老人の性生活なのです。観客は、若尾文子の足にすがりつく山村聡の老人を見て笑い、ただこっけいしないやらしい老人のあさましい姿しかうつらないのです。

映画は失敗だったと思います。映画化するのが無理な小説であって、若尾文子や山村聡の責任ではないでしょう。

「春琴抄」の映画の中で、春琴の足に佐助をすがりつかせたら、とても美しかったと思うんですが。湯殿で佐助が春琴を洗うシーンがあったはずですよ。京マチ子の春琴はまさに適役でしたし。やれないことはないんですよ。足フェティシズムを理解出来る人は少い

から土台無理かもしれません。

映画化するにあたって、蠅子の足には苦勞したらしいです。

東京新聞の夕刊に

「山村聰がなめ回す」

と題して、

「老人が自分の墓石にまで蠅子の足を刻みたいという異常な執着をもつだけの美しさが必要となって、若尾文子は自信がないわ。かくて、大映東京撮影所に所属する八十七人の女優の中で最も見事な足の折り紙をつけられ、足だけの出演をすることになったのは、三浦

友子という新人」

大変なさわざで、選ばれたのはいいのですが、

「必要とあらば三浦の足の裏までなめ回さんばかりに、三浦友子はくすぐったがったり恐縮したり、困るわ、あら、どうしましょう」
そうでしょう。

ところが、またまた、
「足だけの出演者変わる」
となって、

「二転三転、やっと本決まりになったのが長谷川峯子。長谷川一夫のメイの娘」

腸露出 「無念腹」 女体切腹写真

A5判(本誌の大きさ) 感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号(せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさ

いてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。
今まで試みられなかった腸露出の有様を今回はじめて写真化した女体切腹フォトの決定版ともいうべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。

まだやっとならぬ十八才のニューフェイス。

「山村先生に足の指までしゃぶらせるのが悪く、くすぐりたいどころか、ほおががくくしそんなのをこらえているんです」

若尾文子の足として通用しなければならなところ、若尾と上半身のバランスがとれていないとだめなので、こうも苦勞をしたものらしいですが、長谷川峯子、性の開眼が足だったとは、全くうれしくなる話ではありませんか。

映画は十八才未満は入場出来ず、成人向きに指定されましたが、老人向き映画になったようです。いや、マニヤ向き映画といったほうが適当かもしれません。

映画も舞台も喜劇としてあつかいましたが原作はあくまで喜劇ではありません。

D

原作にもどって、第二のクライマックス、蠅子の足を自分の墓石にしようとする老人を追ってみます。

十月十五日の日記

(出来レバ蠅子ノ容貌姿体ヲ菩薩像ニ刻マセテ密力ニ観音力勢至ニ擬シ、ソレヲ予ノ墓石ニスル訳ニハ行カナイモノカト。ドウセ予ハ



神仏ヲ信ジナイ。宗旨ナドハ何デモイイ、予ニ神様カ仏様がアルトスレバ颯子ヲ措イテ他ニハナイ。颯子ノ立像ノ下ニ埋メラレレバ予ハ本望ダ。」

死に直面した老人が思い詰めると何をしで

かすかわかりません。京都に自分の墓地を捜しに出発します。

この颯子菩薩の計画は、その後颯子の足を仏足石に転化し、技術的にいって安易な颯子の足型を自分の墓石にきざむことに決定します。

仏足石とは、お釈迦様の足を石に刻んだもので、靈驗あらたかなものとされ、日本では奈良の薬師寺にあります。

老人はとうとう颯子をお釈迦様にしてみようのです。

老人は朱墨を磨り、タンポを作り、拓本をつくるための準備をします。

十月十六日の日記

「君ノ足ノ裏ヲ叩カセテ貰フ。サウシテコノ日唐紙ノ色紙ノ上ニ朱デ足ノ裏ノ拓本ヲ作ル」

「ソナモノガ何ニナルノ」

「ソノ拓本ニモトヅイテ、颯チャンノ足ノ仏足石ヲ作ル。僕ガ死ンダラ骨ヲソノ石ノ下ニ埋メテ貰フ。コレガホントノ大往生ダ」

十七日の日記

（仰向ケニ、両足ヲ行儀ヨク揃ヘテ寝タ。足ヲ少シ反ラシ加減ニ予ニ足ノ裏ガ明瞭ニ見エルヤウニ。

漸ク両足ヲ満足ニ塗り終ッタ。右足カラ先ニ少シ高く拡ゲテ、下カラソレニ色紙ヲ当テ足ノ裏デ印ヲ捺スヤウニサセタ。」

何度も失敗し、色紙を新たに切り寄せ、老人は颯子の足に朱を塗り続けます。

（立ッテ椅子ニ掛ケサセテ、予ハソノ下ニ仰向イテ臥、窮屈ナ姿勢ニ堪ヘナガラ足ノ裏ヲ叩キ、色紙ノ上ヲ、両足で踏マセテ捺印サセタ。）

（彼女ガ石を踏ミ着ケテ、「アタシハ今アノ老耆レ爺ノ骨ヲコノ地面ノ下デ踏ンデキル」ト感ジル時、（中略）泣キナガラ予ハ「痛い」と叫ビ「痛イケレド楽シイ、コノ上ナク楽シイ、生キテキタ時ヨリ遙カニ楽シイ」ト叫ビ、「モット踏ンデクレ、モット踏ンデクレ」ト叫ブ。）

これが老人の気持です。

颯子は老人より先に帰京し、夫の浄吉に相談し、老人夫婦に内密にして、友人の精神科の医者呼びます。その結果は（佐々木看護記録抜萃）として、先に書きました。結論です。

老人の精神状態はすでに限界を越えていたのです。

日記はプール工事で庭の芝生が掘り返され

ているところで終わっています。颯子の水着姿が見たい老人の願いがこめられているわけです。即ち、

(浄吉が颯子に云った。

「約束通りプールの工事が始まっているのを眺めるだけでも、父の頭にはいろいろな空想が浮かぶんだよ」

(城山五子手記抜萃)

すべてが空想だというのでしょうか。

E

小説新潮三月号文壇クローズアップより、

「颯子老人日記」の批評。

河盛好蔵「小説を読むよろこびを感じた」

平野謙「谷崎文学の集大成」

中村光夫「これまでにない新しい激しさが感じられる」

江藤淳「性と死の葛藤という悲劇的な主題

を見事に喜劇に転換させてみせた秀作」

川口松太郎「谷崎作品の系列中トップクラスにあるものではない」

大岡昇平「ゆがんだ性觀念の誇示にふける

のは、時代風俗としてもグロテスク」

山本健吉「大岡の批評は、良識的であり正

論である」

この中で、江藤淳、大岡昇平の批評は、的を射ていないように思います。中村光夫の批評は好意的です。

即ち、老人にとっては、必死に目前にせまった死と戦っている姿であっても、第三者には老人のいやらしいフウテンぶりがただこっけいに見えるだけということ。老人の性慾を、簡単に異常性慾と笑ってすまされない問題がここにあるのではないのでしょうか。

この日記を読んで、どれだけの人が老人を理解したか、それは疑問です。読みなれた批評家たちでも、本題からはずれた批評を恥かしくもなく書いているのですから。

老人の性慾を簡潔にえがいたものに「少将滋幹の母」があります。その中に、五十以上も違っている若く美しい妻をもった老人が、自分の体力の衰えを自覚して、

「最近になって老人はだんだん愛し方が執拗になり、冬の間は、毎夜北の方を片時も離さず、一と晩じゅう少しの隙間も出来ないようにぴったり体を喰って着けて寝」たり、また、

「北の方を手を以って愛撫するだけでは足らず、ときどき一二尺の距離に我が顔を退いて彼女の美貌を讃嘆するように眺め入ることが

好きだ」

とあります。

老人の性慾は、崇拜する女性の手や足を愛撫したり、唯眺めているだけなのです。それが、足なら足というひとつのものに狂崇したりすれば、老人の性慾は足フェティシズムに転化されたのです。

老人の性慾、それは自分自身が、その立場に立ってみなければ理解出来ないかもしれないかもしれません。

これはまた、老人の性慾ばかりではないことは云うまでもありません。

年令に関係なく、性慾は種々な型をもって無限に広がっているものなのです。

颯子は多くの人の胸にその足跡を残したことでしょう。性慾というものがどういふものであるかを教えたことでしょう。仏足石のように、靈驗あらたかに。

【代理部だより】○本誌二月号まで広告しておりましたハマゾ資料、Mフォト三十態Vは都合により分譲中止いたしました。但し特に焼増御希望の方には、大手札型印画紙焼付にて、三十枚一組二五〇〇円にてお引受けいたしますからお申込み下さい。

おむつ受難記

原 由 貴 子

一

由梨子は可愛い顔立ちとのびのびと育った美しい肢体とに恵まれた十七才のお嬢さんで、ある私立の女子高校に通っていました。母は早く亡くなり、彼女が高校へ入って間もなく新しいママが来ました。新しいママはしばらくは優しく親切でしたが、一度流産してから由梨子に対して意地悪になりました。しかも、パパの目のとどかないところなので

ある夜のこと、ママは眠っている由梨子のお布団の中へ、そっとおやかんのお茶をかけて濡して置き、翌朝それをとがめました。「あら、これ、どうしたの？あなた、その年

して、おねしょするの？ まあ、あきれた」可哀そうに、真赤になった由梨子は全然身に覚えのないのに、お布団を洗って干さねばなりません。こんな事が二、三度あった後由梨子のママは更に意地悪のことを思いつきました。

ある病院の『特殊診療室』という札が出ている一室です。

「次の方、どうぞ」という看護婦さんの声に呼ばれて、十七、八の年頃のセーラー服の可愛いらしい女学生が母親につれられ、おずおずと入って来ました。

「夜尿症ね。どう？ 相変わらず粗相をするの？」

カルテを見ながら、中年の女医さんがたずねると、女学生は

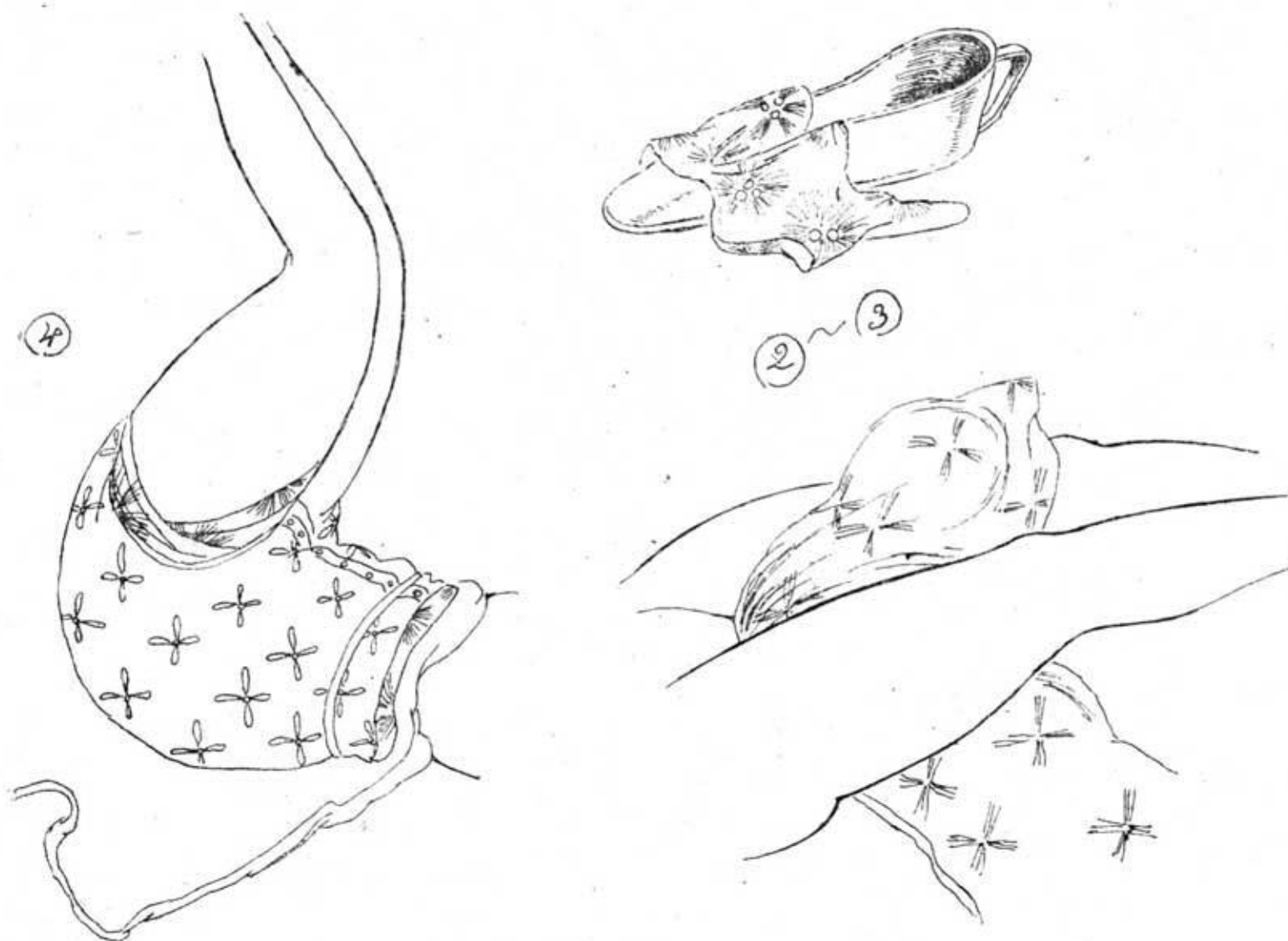
「ええ……」

と羞しそうな小さな声で答えました。

「先生、この子達、もう直ぐ修学旅行があるんでございますのよ」

「え？ そうなの。じゃ、もうあと日数もありませんね。それで、万一つてことがあるといけないから、お薬の他に器具も用意してあげましょうね。……一寸、サイズ計りますから横になって」

看護婦さんは、青いビニール張りの診療台の上に横たわった少女の腿と腰囲りを計りました。



「先生、この方でしたら丁度B号が間に合いますわ」

「そう。じゃすぐ用意して。さ、あなたは下穿きを脱ぐのよ」

女学生はためらいながらも、言われるままにスカートをまくりました。そしてさすがに羞しそうに、穿いていた真白のズロースを膝まで下げた時です。看護婦さんが横のガラス戸棚から何か取り出して拵げたのを見て

「あら！」

と小さい叫びを立てると、ぱっと頬を赦らめました。大型のピンクのおむつカバーではありませんか。裾は可愛いレースで飾られています。

「嫌だわ。羞しいわ、

あたし……」

「それなら大丈夫ね。さ、由梨ちゃん、あててもらわなければ駄目よ。そして悪い癖を早く治すのよ」

「ママ、嫌っ……」

由梨子は力一ぱい両膝をしめつけていたのですが駄目です。さっとズロースを脱がされてしまいました。

「さ、あてて見ましょうね。……大きな赤チヤン。おむつあてますよ。アンヨを拵げてお尻を上げて……そうそう」

茶目な看護婦さんは用意したおしめを取り上げ、手早くあてがうと、拵げたおむつカバーはお尻の下から差し込まれ、前はお臍のあたりまで由梨子の下半身はひんやり冷いゴムの感触で包まれてしまいました。

「……はあ……」

ため息と共に、羞しさのあまり両手で顔をおおっている由梨子のお尻から、白い太腿までゴムはピッチリ締めつけ、裾のレースは風でそよぎました。

こうしてとうとう由梨子は、夜尿症という名目でママや看護婦さんから無理やりにおむつカバーをあてられ、旅行にもおしめと、おむつカバーを持って行かされる事になりました

た。

二

由梨子は家でも寝る前にちゃんとおしめとおむつカバーをあてるようにママに云いつけられたのですが、嫌がってどうしてもあてさせません。そこで、一人ではとても駄目と思つてか、翌晩のこと、ママは由梨子の寝る前に秘かに彼女に催眠剤を飲ませておき、熟睡している彼女の寝室へ入ると、お布団をそつともたげました。そして彼女のズロースを脱がせると、用意しておいたおしめを重ねて、由梨子におしめをあて、上から更におむつカバーをあてるとホックをかけてしまいました。が、由梨子はこうしておむつをあてられても何も気づかず、ぐっすり眠っています。

翌朝、時間一ぱいまで寝かされていた彼女は、急に起され、股や腰のあたりの変な感触に気づきました。みると、ズロースの下に、ちゃんとおむつカバーをあてられているではありませんか。由梨子は見る見る赤くなりました。死にたい位羞しい思いです。でも、すぐご飯を食べるようせき立てられ、はすす暇もありません。

「由梨ちゃん。ゆうべはどうだったの？ 粗相してお布団濡らしたりしないようにちゃん

とおしめあてておきましたよ。しばらくはおむつに慣れなきゃ駄目だから、今日はそのまま学校へ行くのよ。いいわね。さ、ご飯がすんだら早く出かけないと遅刻しますよ」
ママにせき立てられ、由梨子は仕方なしにそのまま学校へ出かけました。

何だか、じろじろ見られているような気がしても、途中でどうすることも出来ず、電車の中でもお尻を気にして、スカートの上からそつと手で押えて見たりしながら、羞しさをこらえ、学校へ急ぎました。

一時間目は何も頭へ入りません。次の放課におトイレにかけ込むと、ズロースを下げ、すぐ前ホックをはずし、おむつカバーとおしめを取りましたが、そこへ捨てる事も出来ず今度は仕末に困ってしまいました。仕方がありませんので、また丸めて、スカートの下へそつと持ち帰り、鞆の奥へ入れて置きました。

最後の時間は家庭科で、前の方の席です。教科書を出そうとした途端に、ピンクのおむつカバーの端が現れてしまいました。

「あら、由梨子さん、それなに？」

運悪く彼女と仲の悪い景子が眼敏く見つけると、丁度こちらを向いた家庭科の先生も眼

をとめ、パンティ等の普通の下穿きとも又生理バンドとも違うのにすぐ気づきました。

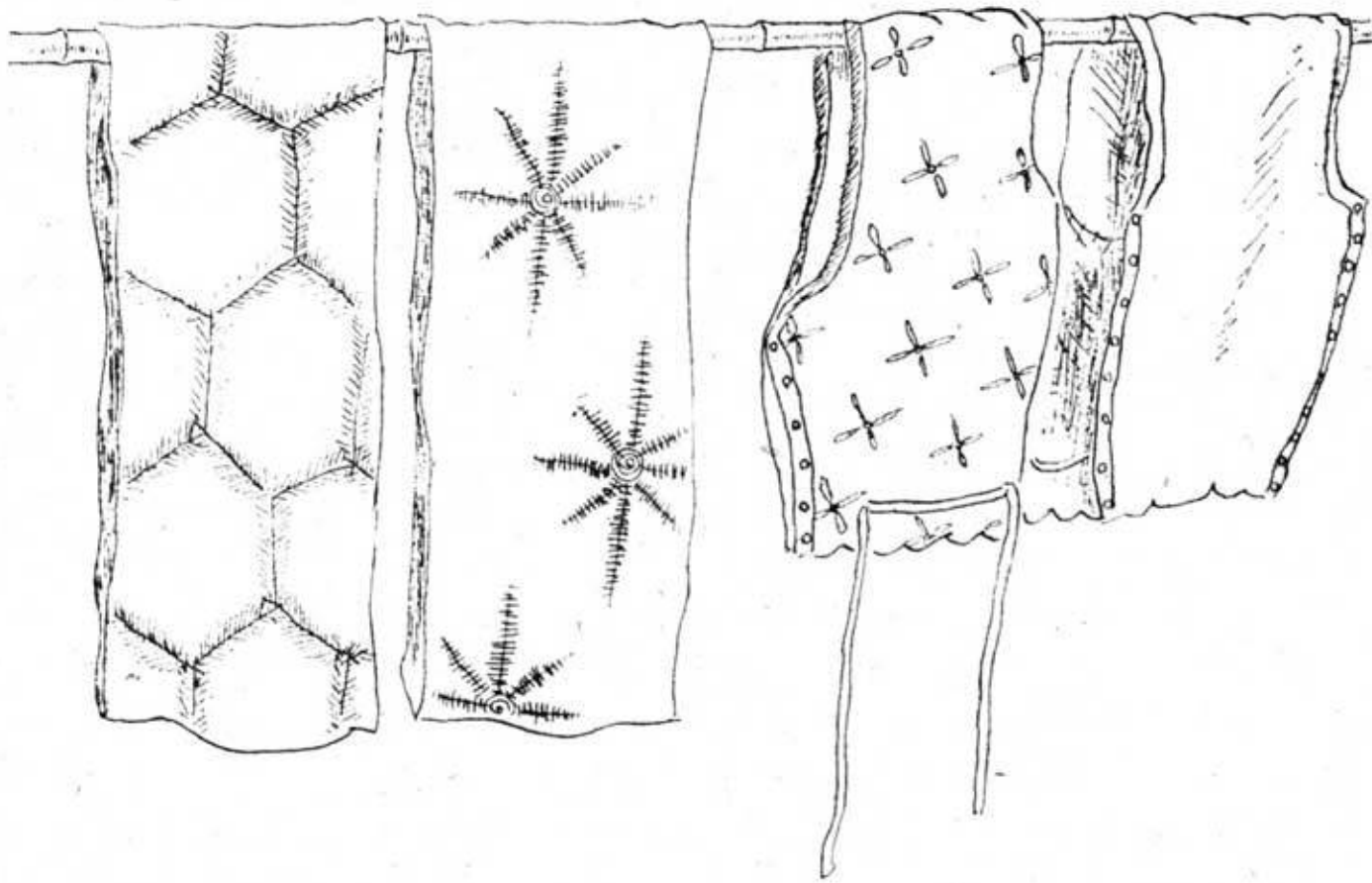
「あ、あなた一寸それ借してごらんない」
そして、先生は窓側の人にカーテンも閉めさせ、ドアを固く閉じると皆に向って言いました。

「『育児について』の頁を開いて下さい。今日は丁度よい教材を持って来て見える人がいますので『おしめのあて方』を習います。いづれ皆さんも、将来ママになって、赤ちゃんにおむつをあてる時が来ますし、家庭に病人が出て、看護の役割は主婦の任務の一つです。又近いうちに旅行もありますので、急病人が出た時など、浣腸やおむつが必要な場合が多い事でしょうから、よく心得ておいて下さい。さ、あなた前に出て下さい」

由梨子は前に出されました。家庭科の作法室は座布団が置いてあります。それを並べると、彼女は横になるように命ぜられました。もういやおうありません。横になると、顔をハンケチでおおいました。

「さ、始めますよ」

スカートはまくられ、級のお友達の、悪戯っぽそうな、興味深げな顔で見ている前で由梨子のズロースが脱がされました。



「赤チャン用のおむつカバーにはブルマー型とか、いろいろな型がありますが、この前開き型が一番便利で普通です。その他、生地とかゴム質とか柔い肌ざわりのものを用意して選んで下さい。まずおむつカバーを払いたら、おしめを二、三枚、T字型に重ねて置いて下さい。こんな具合に。そして、さ、羞しがらず両足を開けて、はい、お尻を上げて……ずっとお尻の下から前にまわして、あ、まだ足を閉じては駄目よ。おとなしくして……そして横のおしめをお腹へまわして、はい。前もおむつカバーでくるんで、ホックをかけて終りです」

しばらく声がなく、激しい息使いがあるだけでしたが、間もなくあちこちでぼそぼそ、そささやくのが聞えました。

「さ、今度は皆さんでお互いに練習して御覧なさい」

とうとう由梨子はブロースを脱がされたまま始めから終りまで、

おむつの練習台にされてしまいました。そして、おむつカバーをはずされたりあてられたりしているうちに、粗相をして、おしめを少し濡らしてしまいました。

羞しい思いで一杯のうちに、しばらくして腰のあたりがひんやり冷いの気づくといつの間にか由梨子は自分のベッドの中に寝ていました。昨夜、寝る前にママに取り替えてもらったおしめを本当にぐっしょり濡らして居ました。もう朝日は高く昇っています。

「あら、お寝坊しちゃったわ。そうそう！今日は日曜だったのね」

昨日の土曜日、学校で羞しい思いをして一度またその日家庭科の時間が『保育』で、おむつのあて方を習って（もちろんお人形で）その時の強い印象に刺激されて、由梨子はこんな羞しい夢を見てしまったのでした。

三

家庭科の時間で、激しいショックを受けたのは由梨子だけではありませんでした。景子も又思い出を持っていたからです。彼女が小学校の六年の時の事です。風邪を引いて一週間ばかり寝たのですが、その時腰が冷えて激しく尿意を覚えました。あいにく、家の人が近くに居ない時で、立とうとしても立てませ

ん。とうとう濡らしてしまいました。そして下着から畳までびしょびしょになりました。その後しばらくは一人で起き上れるまでおしめをあてられていました。

旅行当日のことです。途中、汽車の中でお昼になり、お弁当を出そうとして包みをあけたところが、間違えておむつカバーの包みを拡げてしまったのです。

「あら、由梨子さん、それ何？」

あわててしまおうとしたが、間に合いません。前の席に座っていた意地悪の景子がさつとそれを持って行って、高々と両手でかざしました。

「ちよいと皆さん、これ、おむつカバーよ。

ごらんなさい、由梨子さんが持っていたおむつカバーよ」

「あーら、嫌だわ、赤ちゃんみたい」

「まあ、あたしも、あててみたくなっちゃったわ」

たちまち皆の視線が集り、車中騒然となりました。由梨子はたまらず、真赦な顔を伏せてしまうと、隣に座っていた遼子さんが、

「何云うのよ。これ、由梨子さんのお母様からあずかって、鎌倉の叔母さんのところへ持って行ってあげるのよ。もちろん、赤チャン

がいのるのよ」

と、救ってくれました。

「遼子さん、ほんとにありがとう」

由梨子は遼子に感謝しました。

夕食後旅館へ荷物を置き、皆、自由行動の時間を思い思いにお土産物買いに出かけました。近くのあるデパートの五階では『赤チャン用品大売出し』が開かれていました。『おむつカバーの宣伝即売会』としてある所で、美しい女店員が色とりどりのゴム製やビニール製のおむつカバーをモデルのベビーにあてています。少し離れたところに、さつきから立って見ていた二、三人の女学生のうち一人が、一寸頬を赤らめ

「あのう……女の子用の、特大って、あります？」

と聞きました。

「はい、丁度、只今宣伝用の特製がございしますが、これでよろしうございます？」

取り出されたのはピンクの、綺麗な可愛いおむつカバーでした。

「有難うございました」

使用法を教わり、それを包んでもらって、由梨子だけは、途中で薬局に寄って帰りました。汽車の中の事でくやしくなってならず、仲

良しのお友達と相談したので、今度は景子がかたきを取られる番というわけです。

「景子さん、お飲物一杯いかが？」

「珍らしいわね。いただくわ……。あら、一寸妙な味ね。まさか何か入れたんじゃないでしょうね」

三、四時間たって、景子のかすかに尿意を催したのを覚えました……。続いて深い眠気に襲われ、ぐっすり寝入ったのを見ますと、由梨子達はそっと起き上り、景子の布団をまくりました。景子は額に汗をにじませ、寝間着をはだけて寝ています。近くに寝ていた遼子や、その他の人も、気づいて起きました。

「あら、何しているの？」

「しっ！ 静かにしてよ。意地悪したから、

景子さんに仕返ししちゃうの。手伝ってよ」

「まあ、そうなの、ええ、いいわ」

「あーら、私も賛成だわ。家庭科の実習ね」

先生は、さつき廻って来られたのですが、異状がないのを見とどけ、先に帰ってしまったのです。

日ごろ高慢で、反感を買っていた景子は、こうして眠っている間にズロースを脱がされてしまいました。

「浣腸するの？」

「そうね……ここじゃ不便だし、あまり可哀そうだからこれだけにしましょうね」

「あら、おしめ足りないわ。ハンケチか何かないかしら。」

こうして皆面白がって景子におしめをあて始めました。

「さ、あなた両足を拡げて。よくって？」

「お尻、案外重いね。おしめ、おむつカバーに重ねた？」

「はい、ここへ差し入れて、前にまわして、いいこと？ 前ホックかけてよ」

景子は何も知らず寝ている間に、とうとう

おむつをあてられてしまいました。

そしてズロースを穿かせずに隠して置きました。

「さあ、あしたの朝起きてどんな顔をするかしら」

翌朝眼をさました景子は、腰部をおおっているおしめとおむつカバーの感触に気づき真赤になり、腰に手をやりました。

「大きな赤チャン、お眼ざめね。おむつの感じ、いかが？ 取り替えたいでしょう？」

由梨子達はこうからかってやりました。景

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

子はあわててトイレにかけ込もうとしましたが、あいにくかわるがわるふさいでいて、入れません。

「早く出てよ。代ってちょうだいな」

あせり気味の歎願の調子から、とうとう泣きそうな声になりました。がもう駄目です。間に合いません。とうとう我慢しきれなくなり、ついに

「はあっ」

という吐息と共に、体中の力で今までこらえていたお小用を洩してしまいました。

「あら、あたしたちがせっかくあてたげたおしめ、濡らしちゃったの？」

「じゃ、勘弁したげるわ。はい、これ貴女のズロース。ごめんなさいね」

お部屋にもどった泣き顔の景子を、由梨子達は取りかこんで、おしめをはずし、借りた古タオルとお湯でふいてやったり、世話をしやりました。

景子は、怒ったような羞しそうな複雑な表情でしたが、由梨子が、そのおむつカバーを包み、彼女のポストンバッグへしまっけてやり、仲なおりのつもりで、ウインクして見せると、初めてニコツとしました。

「奇譚三十九夜」物語

——第二十四夜——

辻村 隆

昨日も今日も、八年振りの寒さが続きます。生駒の麓、樹氷の覗くG閣の一室——。湯上りのほてった体に、冷たいビールが、快よく全身に泌み通って行きます。メンバーは八人、例によって退屈男達は、浮世離れのした面構えで、下界の寒さも何処吹く風と言った放談に、なごやかな笑いが渦巻くのでした。スバル氏が、口辺のビールの泡をぬぐうと、やっと一同を鎮めました。新年宴会を兼ねての例会は、ともすれば趣旨から逸脱し勝ちになります。

「この浴場に天然ラジウム泉の湧出した噂はききませんが、兎も角商魂の逞ましさ、こうした山麓に鉱泉を湧かせたのでしょうか。私達都会人にとっては、殆んどが家庭風呂の為、稀にしか市中の公衆浴場には行きませんが、この冬ボイラーの故障で、幸か不幸か、私は家から約一丁許り離れたK湯に、それこそ何年振りかで、冷え切

った体を温めに出掛けたのでした。そこで、私は意外な拾いものをしたのです。それは……」

第五十六話 団地の夜話

テレビの深夜放送を見終ると、十二時半に近かったが、家内に訊ねると、未だK湯ののれんは外されていないだろうと言うので、急に温かい湯にひたりたくなり、私はそそくさと、石鹼とタオルを攜んで、ホームゴタツから立上った。長年家庭風呂で過していると、わざわざ公衆の浴場へ行くのは憶却であったが、昨日も一昨日も入浴していないので、私の重い腰はやっと上った。ボイラーの修理屋の遅いのにぶつぶつ言い乍ら、寒風の吹きすさぶ、凍てついた路面へ出て、カラコロカラコロと下駄をならしてK湯へ行く——。

番台の若い女房らしい女は、カンバン間近に来たイチゲンの客に余りいい顔をしない。私が風呂から上って帰る迄には、恐らく二、三十分はかかるだろう。それだけ、女房の寝る時間は遅くなるわけだ。

湯槽に滾々と溢れる湯は、循環式によって、絶えず槽底から吸いこまれて、女人の跨がる鯉の口の陶器から浄化された湯がそそがれて、終い湯というのに足の爪先までも透きとおる美しさだった。――これで十九円なら安いものだ。ボイラーに焚く石炭の消費量にくらべて何と言う安易さだろう――私はのうのと体を伸ばして呟やっていた。

客は私の外に二人いた。独りは既に出口の近くで、しきりに蛇口から奔ばしる水で顔を洗って出ようとしていた。残る一人は、私から略々三十糎許り離れたところで、手拭を湯面にただよわせ乍ら、静かに眼をつむって、温気に仄々としたり切っていた。二十五、六才の痩せ型の、パリ髪にした一見好男子である。私は見るともななく、彼に眼を移していたが、オヤッ、と或る一点に眼を釘づけにした。ゆらぐ湯面にじっと眼を落すと、私は探るように、男の太腿の内側を凝視した。恰度ペン軸程の、太さ、長さの赤黒い痕をまざまざとそこに見出したからだ。

或いは、それは自動車事故によるものか、若しくは喧嘩出入の傷痕であったかも知れない――が、私の直感から、痴情関係によるものではないとしたら、あの不自然な個所の痕は少くとも、人為によるものではなからうかと言う気がした。

ザーッと水滴を撒いて、男は湯槽から出で、唯二人切りのこの浴場で、殊更にタオルでしっかりと前を押えて、湯舟を出た。文明人

の羞恥よりも、その傷痕を隠したい所為のように私にはとれた。そして男が、床几に腰を下して、鏡に向って、髭をそり出して、私に背を向けた時、私の直感が判っきり当っている証拠を、すっかり眼前に曝し出してくれたのであった。

脇から背に――腰から尻に、そして肩から首筋に、無数に桃色に浮ぶ、交錯した線状は、間違いもなく、それは鞭か、革バンドによる殴打の名残であった。ほてって赤らんで肌にそれが尚更くつきりと浮んでいた。瘦身の白い裸身だけに、その交錯の線は、妖しくもあざやか過ぎた。

△頭かくして尻かくさずと言うが、男は、前を隠して背中かくさずだろうか――。無理もない。己れの背中中、己れ自身に見えないのだからなあ――▽

私は顔中をシャボンにして、無心に髭をそる彼の背に、しばし湯槽の縁に顎をかけて見とれていた。

△まぎれもなく、彼はマゾヒストに違いない。それを望むのか――それとも強いられたものか▽

背の線は、既にかすれて、点状となって黒い痕痕となったものもあり、桃色にあざやかに浮き上っているものもあった。

私は何とかして、彼に声をかけたい衝動にかられたが、ズバリそれを訊ねるには、一面識もない行きつりの人であり過ぎた。

私はザーッと湯ぶねから上ると、体に温気の立った儘、広い二人切りの浴場内であるにもかかわらず、故意に、彼の隣りに、わざわざ床几を運んで、並べて腰を据えた。

ゴシゴシ、シャボンを髭面になすりつけて、私はさり気なくいった。

「随分、今年の冬は冷えますねえ——。」

「ええ……」

相手は虚心に上の空で応えた。

「どうも慌てて、飛んで来たもんだから、カミソリを忘れちゃって——、本当に恐れ入りますが、済みましたら、お貸し願えないでしょうか——」

「ああ、いいですよ……」

彼は始めて、意識して私はチラリと見た。

「いつもこんなに遅くいらっしゃるんですか」

「ええ、まあね……」

「まるで借り切りの風呂見たいですなあ——」

「……」

彼は無言で、カミソリをさっと湯桶で洗うと、

「さあ、どうぞ——」と私に差出した。

礼をいって、私は大急ぎでそり終る。咄嗟の計画を反古にしない為……。

私は無言で彼の背中に廻って、タップリと石鹼をつけたタオルで背を流し始めた。

ビッシリと彼の体が浮き上った。石鹼が桃色の線にしみたのであるうか——それとも。

「い、いいですよ……そんな——」

「いえね、カミソリをお借りした、ホンのおかえしのつもりですよ——、さあさあ御遠慮なく……」

彼はやむなく、浮き上った腰を床几に据え直した。私は故意に、新らしい癢痕に力を入れてぐいぐいこすった。

「あッ、あッ、もういいですよ——」

男は顔をしかめて、腰を再び浮かした。

「いや、失礼——。随分痛かったでしょうね」

「えッ??」

「強くやったのか、背中が真赤になりましたよ。こりや非道い……」

「……?」

「痛い個所はここでしょう——」

私は桃色の線にそって、数条、指で撫で上げ、押しつけて背に筋を引いた。

男は急におずおずした。いや、ドキマギしたに違いなかった。小さな声が洩れて、

「そんなに非道いですか?——」

「背中は見えないでしょうからネ……脱衣場の鏡に背をうつされては如何?」

「……」

男は再び無言にかえた。頬が真赤である。

「私の友人で、『K』と言う雑誌を読んでいる男に、恰度貴方そっくりの、背一面、いつも傷だらけの男がいますよ。その男は太腿や股にも、非道い傷を残しています。鞭打たれるのを歓ぶたちの男でしてネエ」

彼はハッとして顔を挙げて、マジマジと私を凝視した。

「私の場合……」

男はそこで口を切った。

「とは申しませんよ。けれど、でないとも言切れない様ですね。」

うち風呂なら誰一人気付かない体の傷も、こうした公衆浴場となれば、何時、何処で、誰が見ているかも知れない——。ふとそう考えて、貴方の大胆さに、敬意を表したくなっただけですよ」

「あ、あなたは一体誰方なんですか？」

そこで私は、正確に私の氏名と職業、住所を知らせ、知る人は知る雑文書きであると告げた。

彼は大分安心したらしかったが、警戒はといていなかった。

「で、私の体がこうだから、貴方は私に一体どうしろと仰有るのです——」

「アブを探求する。私の半身が、貴方の体験を聞きたい聞きたいと囁やきかけているのです」

「聞いてどうするのです——」

「我が意を得たりと、同好の士として交際したいのです——」

「貴方は変っている——」

「そう、変っています。併し、貴方も変ったライフを持っていられしやる」

「喋べりたくないと言ったら……」

「喋べるまで待とうホトトギスですか。浴場はここ一つでないかも知れませんが、循環浄化式の、最新設備のこの浴場は、どうやら貴方の御気に召したようです。私も度々、機会を見て、裸同志となつて浴場で待つことでしょう——」

「あきれた人だ、ここではのぼせて長話も出来そうにありません。」

私はこの先の、団地のB区の二階三十一号室に住む青山と言う者です。よかったらいらっしやい」

「でも、もう午前一時過でしょう」

「今夜は独りっ切りですよ——」

「今夜は独りと言うと……」

「まあ、その意味はボツボツ分りましょう」

私達は揃って脱衣室へ出た。番台を降りて、床を電気掃除機で掃いていた女房は、チラリと私達を見て、ホッとした様に、掃除機を持つ手に力を入れた。男二人の裸身に女房が視線をそらしたのが幸いして、青山の鞭跡（彼は、既に鞭跡であることを、暗に認めていた）は気付かれず、私達に勿々に浴場を出た。時計は一時二十五分をさしている。私にしては珍らしく長い風呂だった。しかし期待すべき収穫はあったのだから……。

団地の入口の、公衆電話ボックスから、家に電話して、知人に逢つて少し遅れると家内に告げて、私は、さあと彼をうながす様にして、常夜灯に黒々と浮ぶ、団地の建物に足を踏み入れた。

× × ×

以下私と言うのは青山照顧の事である。

「父母を知らず、祖母の手で育てられた私は、中学を卒業する頃、もういっぱしぐれていました。アルサロのドアボーイから、愚連隊の仲間になり、ヤクの立売りをして、サツに挙げられ、更生してから、なったのがゲイボーイですから、何処迄も悪の因縁につきまわっていたのです。京都の清水谷辺りの、一見しもたや風のバーでしたが、ゲイの味は、少年刑務所で、無理矢理教えこまれたものです。色白で痩せぎすの私のスタイルがゲイ趣味に叶うのか、バーカマトトでは、案外に客受けがよかった様です。」

そこで私は、一人の男に身をひかされました。私が勤めて、半年許りした頃、その人は始めてやって来て、私が相手をしますと、ど



う思ったのか、いろいろに私の素姓を訊ねました。その夜から、彼は三日にあげず通って来て、何時もカンバンになる迄私と同席していました。黒枠の太い眼鏡に、ベレー帽のその人は、体付きもガツシリとして、到底四十七才には見えぬ逞ましさでした。

私は次第次第に彼に惹かれ、同棲しないかと言われた時、喜んで、

妙この上もないものでした。

昔から、僧侶が稚児を愛する風習があったとは薄々聞き囁いていましたが、それが現代にも生きていたとは想像もしませんでした。

住職の彼が、有髪であった事にも、私は幻惑されていたのです。寺でダイコクと呼ばれる梵妻さんが、眠そうな顔であられまし

その気になったのです。バーで作ったわずかの借金をその人は、キチンと清算してくれて、私をつれて自宅へ車を飛ばしたのは、祇園祭の宵宮で、町中祭り気分浮々としていた夜です。その時、私は二十三才でした。

二条城はくろぐろとそびえ、車はネオンを避けて闇を走りました。私は満ち足りた気で、その人の胸に顔を埋めていたのです。

とある寺院の前で車が泊まり、私は彼につれられて、ギリギリと重い鎖のついた潜り扉を開けた時にも、未だ彼の正体に気が付きませんでした。そう言えば、私はそれまで、何一つ彼について知らされていなかったのです。

ただ広い庫裡に立って、彼が五燭光の豆球をつけた時、私はへんだなと感じたのです。数分後、彼が、この寺院の住職であると知った時の、私の驚きは誠に奇

た。下ぶくれの嚙かし、若い時は美人であつたろうと、咄嗟に思ったカンには當って、聽てその人は祇園でならした名妓であつた事も、旬日ならずして知りました。

「番僧として、仏に仕える青年じや。明日は得度するから、支度しておきなさい——」

住職、戸田興照は重々しく、梵妻のしのぶに申しつけて、私をとまなうと、本堂の裏の茶室めいた四帖半の部屋に私を引き入れました。闇で熱い吐息が、私の顔に振りかかり、骨もくだけの許りに私の体は抱きしめられました。

「明日は得度じやぞ——」

興照はとぎれとぎれに私の耳で囁やきましたが、私は得度の意味が分かりかねて、唯、彼のなすが儘になっていたのです。

翌日になって私の驚きは倍加しました。得度とは、髪を剃って坊主になって、仏に仕える体になる為の儀式だと分つたのです。ゲイ時代の自慢の黒髪が、バサリバサリと眼前に落下する度に、思わず不覚の眼頭が熱くなったのを覚えています。

△こんな筈でなかった。ボクは彼をパトロンにして、何処かゆつたりしたアパートの一室で、たんまり小遣をもらつて、好き放題に遊び、偶に彼の御気嫌をとり結ぶするつもりだった。あわよくば、ゲイから売出した黒衣の歌手、富士木隆の後釜でもねらうつもりだったのに、何と言うことだ、坊主になって、チンプンカンプンの御経を読まねばならぬとは……▽

私は実際泣きたくなりました。しかも師の住職はその日から、まったく人が変わった様に、私が少しでもなまけたりすると、容赦なくキッスの雨を降らせるのです。苛責ない態度で住職は、嘗てあ

のバーで、散々私とたわむれた事など、今は忘却の彼方へ捨て去つて、刻々と、私を忍従一すじの道へと追いやつて行つたのです。

梵妻のしのぶさんは、私の素姓を知つてか知らずか、案外な程、優しく私をいたわつてくれました。住職が法事で朝から終日出掛け留守、私は、堅く住職から口留めされていた自分の素姓を、唯わけもなく、年上の女にでも甘える気で、告白してしまいました。

「そう、そうだったの——」

しのぶさんは、駄々っ児をなだめすかす様に、繊細な手で、私の体を撫でさすつてくれました。私はわけもなく、彼女の膝に顔を埋めて涙していました。

その日から、しのぶさんは住職の目を盗んでは、納所の片隅や、庫裡の暗がりや、或いは本堂裏の廊下で、そつと肩を抱いたり、冗談のように軽くくちづけをしたりする様になりました。

そんなある日、奥の客間を掃除しようとして、床の間の如来像にそつとハタキをかけた瞬間、コロリと如来像の首が、タタミに落ちたのです。私は真蒼になって、しのぶさんの処へかけつけました。日頃住職が、国宝ものだと、逢う人毎に自慢していた如来像の首が落ちたのでは、どう言つて住職に弁解していいか、咄嗟の思案もなく、唯オロオロと、その事をしのぶさんに告げたのです。

「まあ——、困つた事をしてくれたのねえ」

流石にしのぶも息をつめて、思案にくれた様でした。

「出来たことは仕方ないから、私からを詫びして上げよう」

私はしのぶさんの後ろから、魂も凍る思いで随行しました。住職は、その日、茶室で独り、静かに茶を立てていたのです。

しのぶさんの報告をきいた瞬間、住職の顔色がサツと変り、こめ

かみがピクピクとケイレンしました。

「莫迦者奴ッ！」

住職の怒声と同時に、手にした茶碗の茶がしのぶさんの顔面に、さっと飛び散り、

「仏罰のこわさを見せてやる——二人とも来いッ！」

と、声も荒々しく住職は立上りました。

居室の奥に、赤茶けたたたみの四帖半の古い居間があるのですが日頃は、物置同然に、雑然とした道具類が積み重ねられてありましたが、住職は無言でその居間に入り、屠所の羊同然の二人が這入ると、三方の板戸を締めました。カタリと音がして、その戸はしまると同時に、自然に戸に仕掛けた棧がしきいの穴にはまり込んで、一旦締めた上は、外部からは、引けど押せど開かない密室の仕組になっていたのです。

戦国時代の剽盗に備えて、つくられた、寺の自衛手段の密室でもあり、代々の住職が、秘密を愉しんだ、開かずの間でもあったのです。

「しのぶ——照順の衣を剥いで、裸にせい——」

怒りに震えた住職の一かつに、しのぶさんは、私の衣をあわてて剥ぎとり、平常着の白い着物も脱がせました。私はパンツ一つにされて、震えつづけました。心の片隅では、しのぶさんの詫びを期待していたのです。それを見抜いたかの様に、

「しのぶ、一切口出しは許さんぞ……わしの折檻がどんなものか、よく見とれ——」

住職は、古だんすの上から、しの竹にこよりをまきつけた鞭をとると、力任せに私の背を打ち振えました。脳天をつらぬく激痛に私

は飛び上り、転び、海老の様に体を丸めて必死に泣き叫びました。

「お許し下さい——、お許し下さい——」

「莫迦！これが慈悲じゃ、ぐっと歯を喰い縛って、しっかり慈悲の鞭をうけい——」

丁々発止と二十回許り、続け打った処で、私の意識はもうろうと霞んで来ました。

殴打される私を、しのぶさんはジーンとまたたきもせず、キラキラよく光る眼でみつめているのが不思議に臉に焼きつきました。その眼は、むしろ、殴打される私を眺めるのを愉しんでいる様に見うけられたのは、私の思い違いだったのでしょうか。

パシリと尻に焼けつく痛みを感じて、私の意識は戻りました。私にとつては長い時間に思われましたが、意識を失っていたのは、ほんの数分間だったのでしょうか。

「しのぶ、その古い井戸繩をとれ——」

そんな住職の声がもうろうと耳に入りました。私のぐったりと伸び切った体を、住職はまるで荷物でも括るように易々と太い綜紹縄で、後手に縛り上げ、部屋の片隅の熊手の様な棒で、天井の中央を押してずらししました。部屋の真中に、ポツカリと黒い穴が浮かび上り、熊手で天井の裏板の穴の周囲をかくと、ドサリと音がして、木製の大きい滑車と一条の太縄がたたみに落ちたのです。生きた心地のない私の縄尻をとって滑車に通し、

「しのぶ、繩を引け——」

住職は威丈高に命じました。

言われる儘、しのぶさんは、太縄を引くと、どう言う滑車の応用か、ギリギリと軋み音を残して、私の体はズルズルと一寸又一寸と

持ち上って行きます。

数分後、私は頭を天井の高さスレスレにして、高々と吊り上げられていました。

その時、庫裡に足音がして、人の訪れる声がしました。寺は、如何なる時でも、門も閉ざさない法則があるので。

ホッとしたのも束の間、

「しのぶ——、わしの不在の間に、若し此奴の縄をといたら、その時は承知せぬぞ、仏罰の恐ろしさが分っているであろうな——」

「ハイ、分っております」

しのぶはおずおずと応えました。

怖ろしい顔を残して、棧を上げると住職は庫裡に出ました。

まるで、地獄から極楽へ移った人間の様に、にこやかに、物静かに応待する住職の声と、寺の役員らしい二、三人の声が庫裡でしましたが、一同は客間へと消えた様でした。

「可哀相にねえ——、私の力のないのを堪忍して頂戴ね——」

しのぶさんは、眼に涙をためて、宙に浮いた私の足に頬ずりし、まるで、宝物のように、私の汚れた足の指を丹念に口に含んで舌で舐めてくれました。

こそばゆい様な、その癖うら悲しい親愛感が、どっと溢れて、私はその刹那から、しのぶさんの言うことなら、どんな辛いことでも我慢する気になりました。私と言う人間は、何処迄も受身に出来る人間のようなのです。

随分長い間、しのぶさんは、私の吊り下げられた足許の畳の上に丹座した儘、じっと恍惚とした面持で、私の惨じめな姿を、喰い入るように見つめていました。

二時間近くも私は、そうして天井を破った梁から、吊り下ざられていました。

庫裡に談笑が響いて、役員達は帰ったようです。存分にそれらの人に優しいねぎらいの言葉をかけて、人々が寺より姿を消すのを見定めると、住職はのそりと入って来ました。

しのぶの帯や、着物の乱れにじろじろと眼をつけ、引っ張った太縄の端の、柱につないだ縄の結び目を丹念に見直し、私が息も絶えだえに喘いでいるのを、ジロリと見上げて、住職はおもむろに煙草を啣えました。シュツとすったマッチの火を、私の足裏に近づけ、熱さに私が、宙に身を躍らせると、フフと軽いうめき笑いを残して燃えつきようとする火を煙草に移したのです。

吸い終るまで、数回、煙草の火が、私の足裏を、しのぶさんに舐められた足指をジリジリと焼きました。

「しのぶ、お前が此奴を可愛がると、此奴はいつもこんな眼にあうぞ、分ったか——」

しのぶさんはうなだれて、唇をかみしめていました。ともすれば気の遠くなりそうな私は、すっかり全身の感覚が麻痺している事も忘れて、

△しのぶさんの為なら、ボクはどんな若しい責苦でもうけてやる。
住職奴、ざまあ見ろ——しのぶさんの心は、すっかりボクのものなんだ▽

と悲愴な快感に酔っていたのです。

二十三才の私が、若く見えるとは言え、三十三才のしのぶさんに、十才も年上の女であると言うことをすっかり忘れて、命をも投げ出したい気で、情感をこめて思慕していたのでした。

折檻のあった翌日から、しのぶさんは、故意に意識して、よそよそしくしました。それが私にとって、どんなに悲しい事だったでしょう。住職の嫉妬を恐れる、しのぶさんの気持は分り過ぎるのですが、分るだけに私はたまりませんでした。

これ以上、危険な三角関係——と言っても精神的なものですが——。私としのぶさんとはくちづけ以上の交渉もなく、ゲイ時代から住職とは、肉体的なものもなかったのです。

しかし、執拗にして陰險な住職とは、これ以上一緒にいる気持はなく、しのぶさんに余る未練を残し乍らも、彼女に思いのたけをかけた書置を残して、私は某夜、寺から姿を消しました。

京都は危ないと大阪へ来て、再び元の水商売へと逆戻りしたのです。

三年間、私は稼ぎに稼いで、さっぱりとこの道から足を洗い、この団地の一室を借りるまでになりました。ある人の奔走で、ミナミの片隅で、ささやかなおしゃれコーナーの、ちっぽけな店を営業しています。

ここへ移っても、思い出すのは常にしのぶさんの事です。夢寝にも忘れ得ぬ人は、梵妻として、横暴な住職の下で、ひっそりと息づいているのです。

私は清水の舞台から飛び降りるつもりで、呼出電話で、しのぶさんを呼んでもらいました。若し住職が出て来たら、無言できつてやろう。その心にきめ乍ら、いとしい人の声を待つうち、電話口に出たのは、まぎれもなくあの、優しいしのぶさんの声でした。

私は息をつまらせ、私だと告げました。

「まあ——青山さん——……」

溜息とも、喜びともつかぬ声が、じかに耳に伝わりました。今の団地の住所を告げ、一度逢いたいと、切なく語りかけると、微かに「ええ」と応答がありました。

一日千秋とはこの事です。何時しのぶさんが現われてもいい様に部屋を飾り、薫香をたいて、今日か明日かと、ミナミの店も人任せで、毎日痩せ細る思いで待ちつづけたのです。

あれから九日目の昼下り、その憧れの人は何の前触れもなく私の前に現われました。

「主人の眼がきびしくて、どうしても出られないのよ。逢えてよかったわ——」

私の眼前で、しなやかに震える指を、私はきつく噛みしめ、そして、幸福の絶頂の刹那、私の眼は彼女の腕首に走り、愕然としました。縛られた者にのみ分る。くっきりとした条痕が余りにもまざまざと、しのぶさんの手首に痕跡を留めていたのです。

三年間の年月が瞬間に消えて、吊り上げられたあの惨たる記憶が昨日の事のように浮かび上って来ました。

「どうして縛られたの——」

「えっ？」

「縄のあとがくっきりしていますよ。その手首に……」

「分かったのね……」

しのぶさんは、見る見る頬を染めました。

「貴方がいなくなつてから、事毎に私が逃がしたんだといって折檻するの。運悪く、貴方の置手紙みつかつちやったの。それやこれやで、非道く、うたぐり深くなって、見つかった時の折檻なんて、とても口では言えやしないわ——」

「言って下さい。すべてボクのために起った事なんですから——」
「本当に気にしないでね。昨夜も夕べの勤行を済ませて、寺の扉を閉めたあと、本堂の右側の、空井戸に私を裸にして吊り下げたの。そして口で言えない非道いことを体に加えたのよ。すっかりよくならまで二カ月かかったわ——」

「畜生——殺してやる……」

「それを言わないで……。私と貴方がこうしてあっている事自体、本当は罪悪なんだから。主人を恨むことないわ。唯、私の気持を分って貰いたかったの。でもあの時は、私も、貴方を縛って思う存分に責めて見たい気にフトなったわ」

私は、しのぶさんが、私を責めて見たい気が分る様な気がしました。この苦しみの幾分かを私にも分け与えたかったからでしょう。

「貴女が責められた分だけ、私がこの体で、貴女から責めさいなまれないと、私の借りが返せない様な気がします。責めて下さい——縛って下さい——。鞭で思い切り、叩いて叩いて叩きのめして下さい。逆吊りにして下さい」

私はうわ言の様に叫び続けました。愛する人の責めを自分もじつくりと味わって見たいと言う気が、この人になら責められても本望だと言う気になり、やがて、この人に責めて欲しいと言う切ない願望に変わってきたのです。

「そんなに責めてほしい？」

しのぶさんは冷やかに私をみつめました。その冷やかな態度すら熱し切った私にとっては、彼女が思い余った様にしか見えなかったのです」

しのぶさんは無言で、しとやかに着物の裾をまくりました。白磁

の太腿にぞっとする様な、焼火箸の焼痕が、赤黒く烙印せられてあったのです。

「密室で滑車に吊り下げられた時の名残りよ。吊り下げておいて股に焼火箸を当てたのよ。それでも我慢出来る？」

「出来ます。出来ます。早く縛って下さい」

私は夢遊病者のように繰り返していました。

しのぶさんは始めて艶然と笑いました。これが三十六才の女かと思われる、不思議な妖しい若さでした。妖美人とはこう言う人のことを言うのでしょうか。憑かれた様な私に、彼女は辺りを物色して、手当り次第の、細引やネクタイで、私を雁字搦目に身動きの出来ぬ様縛り上げました。勿論、それを待ちうけていた私は、欣喜として肌につけていたものをすべて自分の手でとり去っていました。

自動ガスコロに、めらめらと青い火が走り、ブルーファイヤはやがて起る、地獄の苛責も知らぬげに、火箸をじりじりと赤く焼き続けました。

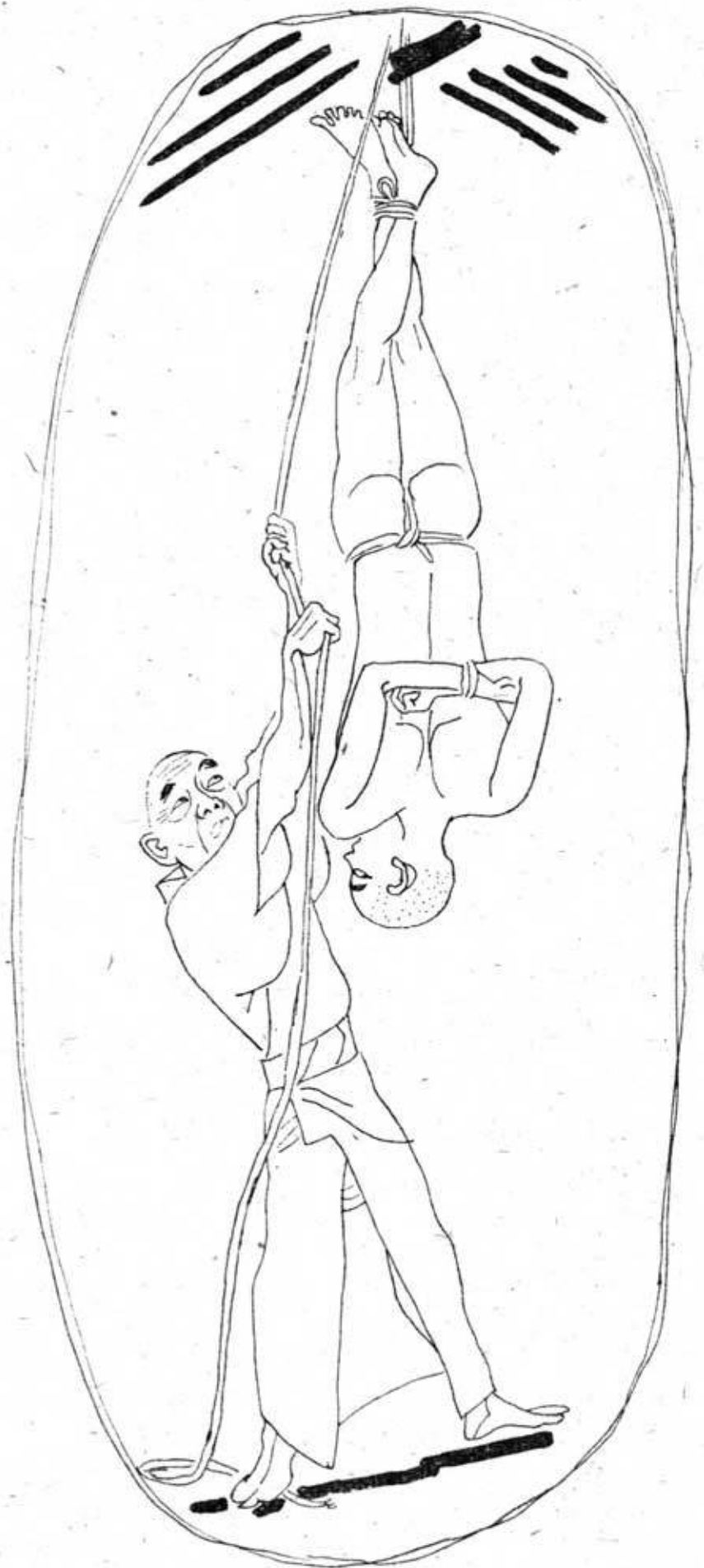
「いいこと、ぐっと歯を喰い縛るのよ。二人の強いきづなと思ってね。同じ個所に寸分の違いもなく灼きつけるから——」

ガラガラと燐のように瞳をきらつかせて、しのぶさんは手拭で焼火箸の根元を握りしめると、私に近附きました。

露呈されて、焼き易くした位置に、股を開いた。私の内腿深く、火箸は押しつけられたのです。

絶叫しそうな、疼痛——。皮膚のジリジリと焦げる悪臭——、私は失心寸前の気力で、しのぶさん、しのぶさんと心に叫んで、それを受けました。

半死半生の私を、しのぶさんは、私の革バンドで叩いて叩いて、



叩きのめして、全身に血をふかせて、息も絶え絶えに横たわる私を
その儘残して、静かに出て行きました。

あの優しい、しのぶさんの、何処にこうした魔性が秘んでいるの
か、私は不思議でならないのです。

しかし、今の私は、しのぶさんに鞭打たれねば、生きる甲斐なき
男に成り果ててしまいました。

十日に一度とか、三日目にひょっこりとか、三カ月も来ずして、
何の前触れもなく現われたり、しのぶさんの来訪は不規則ですが、
来れば、必らず、私が半死半生の息も絶え絶えな姿になるまで、ぶ
ちのめさねば帰らない事は、確実に規則正しく実行されているので

らいいのでしょう。

もう体がもたない。駄目だ——。しのぶさんの事をきっぱり忘れ
様とする。激痛のさなかの思索も、傷がいえろと、朝に夕に、しの
ぶさんの来訪を、唯わけもなく待つ私なのです。

電話は絶対かけてくれるな。くる時は、こちらからの時だけと言
う、一方的なしのぶさんの言分に、私は、まるでスレイブの様に服
従して、易々として従っているのです。

しのぶさんの身の辺りの、ダイヤの指輪にしろ、毛皮のコートに
しろ、鱷皮のハンドバッグにしろ、スイスの時計にしろ、すべてが
しのぶさんの一声によって、私は易々と買わされているのです。

す。

私の店がどんなに多
忙でも、団地からかけ
るしのぶさんの訪れの
一声で、私は息せき切
ってかけつけてくるの
です。

愛と残酷——。何と
言う奇妙なとり合せて
しょう。

手を変え、品を変え
時には責め道具を私に
つくらせて、さも愉し
げに責めるしのぶさん
を、私は何と理解した

彼女の脂肪は益々艶を帯び、私は愈々蒼白く痩せて行きます。このジレンマ——。にもかかわらず、しのぶさんの奴隷と化した私は今ほど、幸福な時代はかつてなかったと、自負し、満足しているのです」

「午前四時、凍てつく道を、私は青山君の妖しい物語を反すうし乍ら、踏みしめていた。」

妖しい女の魔性に魅いられた哀れな男——と思う反面、微かに血の気すら頬に浮べて、話し来り、語り去る彼の真情に、私は私なりの一抹の共感も覚えたのでした」

スバル氏の話は終わりました。菩薩か夜叉か、妖美人しのぶの片鱗にふれて、一同、酒のひえるのも忘れて聞き入りました。

「寺と言うのは〇〇寺じゃない？」

ワイン氏が、何かに気附いた様にスバル氏に問いかけます。

「青山君の話では、確かにその〇〇寺と言いましたよ——」

「知ってるよ！」

とてつもない声でワイン氏は叫び、急にニヤリと笑うと、

「知ってるんだ、そのしのぶなる女性を——こりやとんだお話だ。」

じゃあ、スバル氏の話の、こちらは解決篇と行くな——」

そう言っ、ワイン氏は、ちょうしの酒をコップにガバガバと注ぐと、ぐいと一息に酒仙らしく呑み乾して、さてと改まりました。

第五十七話 魔女の住む寺

K大のM教授にインタビューした彼（ワイン氏）は、M教授の話の面白さに誘われて、ついつい長居をした。近頃テレビで人気を誇

る、ベン・ケーシーの物語について、精神医学の面から、その泰斗たるM教授の御高説を聞くうち、精神医学の如何に奥行きのかい知った。脳神経の働きの狂った人の奇行の数々の雑誌や小説にのらぬ一面をきくうち、既に、予定の時間はとうにオーバーしていた。

特にM教授自身、サジストの傾向があるのではなからうかと思うくらい、教授の話は、此等一連のサジストの実話を濃みなくきかせてくれた。

「サジストと言い、マゾヒストと言い、これの真髄に走らんとする者は、精神医学面から言っ、脳神経の何処かが狂っていると見てもいいんだよ——」

そんな言葉の結びに、彼自身、

「俺も脳神経の何処かが狂っている一人ではなからうか——」

と、寸時、いやな気がした。そうと断定する教授自身すら、幾分末梢神経で狂っているのかも知れないと彼は皮肉な考えにとらわれたりした。

「これについて、折角来られたんだから、土産話のつもりで、一人面白い、いや、変っていると言った方がいいかな。そんな女性を君に紹介するよ——。行って見給え。書ける、書けぬは別として、きっと面白いネタにぶつかると思うよ——」

言われた通り、車を駆って彼は出掛けた。この辺り、元の赤線地帯とかで、何となく、街並がなまめいて見えた。

寺のくぐり戸を通って、広い庭先をよぎり、彼は来訪をつげた。

住職の戸田氏は、法事とかで、高尾まで出向き、運よく、教授の紹介した、しのぶと言う梵妻が、しとやかに三ツ指をついた。

教授から紹介された事を伝えると、彼女は、少し困った顔になって、首をかしげ、そして艶然と微笑んだ。

彼女の心尽して、手早く料理された。ウインナソーセージとピーマンのからあげで、ビールに、酒仙の彼の、稍々生硬だった態度も崩れ、しのぶも意外に愛想よく相手をしてビールを一気にのみ乾した。

「改まれるとお話がしにくいわ。私、これでもこの界限では、善良なる梵妻で通っていますのよ。嘗って、愛情の交換をした教授の紹介だから、私もありの儘の赤裸々な私の姿を曝してお話しますわ。」
 往年の祇園の名妓は、齡女の盛りを越しても、何ら容色に衰えはなく、彼女の愛の遍歴は、それだけで一篇の物語だった。しかし、その話は、林芙美子の「放浪記」に似て、アブの探求を以って自他共に任ずる、彼にとっては、さして興味の深いものでなかった。教授の紹介の趣旨からも、それは程遠く、謂わば、去りし青春を回顧する。彼女の自己耽美に外ならない気がした。しのぶは彼が余り、過去の愛情の遍歴に興味を示さないのを知ると、サラリと話題を変えた。

「貴方も教授と同様、アブが好きな様なのねえ。こんな話どう——」

以下私とあるのはしのぶさんの事である。

「愛の遍歴を重ねて、この寺に身を落付かせた時、私はやっと人生の最終の憩いの場と悟ったの。前身を知らない私にとって、この寺の住職、つまり戸田は非常に低姿勢でした。近所の噂では、男色好みもあり、又、若い時、相当極道で女に手をつけて産ませた子供も

あるって話だったけど、それはお互様のこと——。私もしおらしく、又真実いい妻になろうと心掛けて、戸田につくしたわ。主人も私には親切でした。唯、ふっと夜のひととき、灼け尽す様な激しい恋に我が身を忘れ、嗜虐の限りをつくした、東京のHや、アブノーマルな世界に沈溺した、深海魚の様な、Mとの生活を思う時、主人は余りに単純で、平凡すぎたの——。しかもゲイバーで時偶、精魂をすり減らして戻ってくる主人に、私は、言い様のない、不潔感と、嫌悪を抱いたものでした。表面はさりげなくおだやかな生活の反面、私にふときざす背德的な、魔女の性格がチラリと顔をのぞかせては慌てて、自分でどきりとする事もありました。

若い日、画家のHと駈落して東京へ去り、そこで露悪的で、偽善を押し通す彼に、まるで奴隷かのように扱かれて、恰好の嗜虐の対象となり果てた一時期がありました。

伊藤晴雨の向うを張って、寒中の大雪の日谷中の墓地を借りて、一糸纏わぬ裸身を、荒縄で犂々と縛り上げ、梯子に縛りつけて逆さに立てたり、雪中に無惨に突き倒されて、ふみにじられた私の姿を彼は次々とデッサンして行きました。寒さで息もたえだえの凍死寸前の私を、彼はけいけいと眼を輝やかせてデッサンしつづけるのでした。

突飛もない画心が湧けば、真夜中でも叩き起して、私を縛り、態々に肢態を変えさせて、画きまくるのです。Hの子を宿し、妊娠八カ月で、逆吊りにされた時、私は全身から絞り出る程に、体内のすべてのものを吐き出し、私の顔は吐露した汚物にけがされ、悪心と嘔吐のつづく中を、彼はやめようとせず、喰い入るように、私のふくらんだ腹部に眼をやり、時には私の腹を竹で叩いて、辛抱させ

ました。私はそれがもとで流産をし、一生子供をうめぬ女になり果てたのです。

残酷に残酷に、非情に非情に走る彼は、到底ついて行けなくなつたのは、私の内腿の肌を、焼火箸で焼いた時でした。

「ヒヒヒ、小口末吉の妻の様に、お前の体中に、俺の名を灼きつけてやろうか——」

そう言つてHは、羅刹の様に、失神した私に飽く事なく、焼火箸がさめきるまで押しつけていました。私は遂にHの許を逃げ出し、京都に来て、ふとした縁でMを知りました。Mの嗜虐はHと違って私の全身を隅から隅までつねりまくるのです。Mと逢つた夜は、私の体は紫と赤とのあざで、パツと花片が開いた様に、くまなく、つねり跡で蔽われました。

Mには妻もあり、私は所詮、嗜虐だけの対象と分つた時、私は判つきりMと手を切る気になりました。

それが、戸田と一緒になつてから、折ふし、そうした嗜虐の対象として苦しめられた日々が、不思議になつかしく蘇がえってくるのです。余りにも彼がおとなしく、ノーマルすぎたせいでしょうか。

その彼が、最近やっと私の内腿の焼痕に気付きました。執拗に彼はその理由をききますが、私は頑として白状しませんでした。

「余んまり強情をはるなら、折檻してでも聞くからそう思え——」一緒になつて以来、夫は本気になつて怒りました。私は内心頼もしく思い、どんな責め方をするか見てやろうと、益々かたくなに、押し黙りました。

業を煮やした主人は、私を本堂に引ずって行くと、本堂の丸柱に縛りつけました。久し振りに味あう被虐の快感——、私が彼のする

が儘になっていると、彼は益々怒り、数度平手で私の頬を打ったのです。

彼と結婚以来、始めて私は頼もしく思い、身内の疼く思いにかられました。

「もっとぶつて——もっともっと。どんな事があつても言わないから——」

言うのは簡単であっても、言わない事によつて、主人に嗜虐の觀念が、徐々に芽生えると思つたからです。

Hに較べたら、それこそ月とスッポン程も違う、単純な責めでも主人は後悔を表に現わして、責めくたびれて縄をときました。とても私は頑くなに、身を本堂に横たえていつ迄も動こうとせず、見る者は見よと許り、曝け出していたのです。

次第に主人に嗜虐の念がうつると共に、不思議なことに、主人自身、何かと口実を設けては私に縛る様に仕向けました。ゲイボーイを愛する彼には、サジストと言うより、どちらかと言えば、受身のマゾヒスト的な血が流れていたのも知れません。

私は、この意気地のない坊主を縛るのが、無精にたのしくなり、初夏の夜など、寺のくぐり戸をしめてから、禪一本にして、後手に小手高々と縛り上げ、棒切れで尻をつついては、広い境内を引廻してやりました。

戦時中献納した、梵鐘のないかねつき堂の、私の手首程もある吊鐘をかける釣金が、彼のかっこうの曝し場所でした。

女一人の手では、到底主人の体は吊せませんから、植木屋の置いていった。折畳式の足継ぎを釣鐘の下に三角に立て、主人と私が、両側から、一段一段昇ります。後手に縛った縄の端した輪をこしら

え、やっと背伸びして釣鐘に通すと、下へ降りて、足継ぎを外すのです。吊鐘堂の中心に、夫の体は宙に吊り下ります。縛り方がまずいと、彼は今にも骨の折れそうな悲鳴をあげます。上手に縛ると三十分位は辛抱するのです。

私は残された、太い鐘つき棒をゆすり、弾みをつけて、彼の体に打ち当てるのです。吊る時の高さによって、その鐘つき棒は、或いは脛に、或る時は股に、時には背に当たりますが、当たり所によって、この人間鐘は、その時その時の奇妙な唸りを発して、凡々たる梵鐘より数倍面白い音色を発するのです。

吊り下った彼が、それと共に大きく揺れ動いて、みしみしと太繩が皮肉に、一掻きごとに喰い込むのです。

こうして私の単調な生活は、主人の献身によって日々好日となつて来ました。いえ、それは仏門に仕える身の日々の背信かも知れません。

勝手気儘に振舞い出した私に、段々と手を焼き出した彼は、法事のあと、いつしかゲイバーに出没していました。

そんな彼が、或夜、そうそれは、祇園祭りの前夜だったと記憶していますが、一人の青白い美青年を伴なって帰りました。

得度して番僧にするのだと、彼は申しますが、私は一目でこの青年をゲイボーイだと見抜きました。最近、私の責めの続くのに辟易した主人が緩衝地帯のつもりで連れ帰ったに違いないと私は思いました。

私は好奇心をもって、彼がこの青年、そうそうたしかAと言いました。Aをどう捌くかに興味をおぼえました。

主人は私の手前、翌日厭がるAを得度させて、クリクリ坊主にし

しかも蔭ではいざ知らず、努めて厳しくAに当りました。私をけんせいしての、表面さも番僧に仕込むと言う態度を見せたのだと思います。

Aは、主人の厳しさに負けて、遂々私に自分の素姓をすっかり告白しました。

その弱々しい態度に、私は表面出来るだけ優しく粧おい、その癖内心は、思いきり、この青白いゲイボーイをいじめて見たい欲望にかられたのです。そして私は彼の告白をきくうち、フト異様なことに気付いたのです。彼の祖母と言う女性の住む辺りに、戸田が若き頃、住んでいた事を思い出し、と、同時に、このAの、眼元や口許に、戸田そっくりの相似点を見て、若しや、これは戸田のかつての落しだねではないかと考えたのでした。

主人の戸田は、このAの素姓をきくうち、自分の若き日のあやまちで、産ませた子だと知って愕然となり、それで思い切つて我が寺に連れ帰り、ゲイボーイの足を洗わせて、行々は自分の後釜に座らす気で、厳しい仕込みを始めたのではないか。そうと見れば、戸田がAを見る眼は、口で喧ましく叱つても、確かに慈愛にこもっていました。

私は努めてAをやさしくいたわり、尚もいろいろと素姓をきき訊すと、秘かにAの戸籍を調査しました。私生児でAの母は「さく」となっています。

私は戸田を例によって、本堂の柱にはりつけにし、千枚通しで、彼の体をチクリチクリ突き乍ら、遂々、さくと言う女と、若き日に関係のあった事を白状させました。

私はAがさくの子供、つまり戸田の子供である事を、心の奥底深

くたたみ込み、戸田にはAの素姓を知ったことなど、気振りにも見せず、反面、Aの心を抱きよせにかかりました。思惑通り、Aは私の心の儘に、段々と惹きよせられて来ました。私はわざと、戸田に気付かない振りをして、Aの体を抱いたり、くちづけの真似事をしました。戸田がちゃんと見ている事を計算に入れて――

戸田は眼に見えて焦り出しました。自分の実子が、現在の我が女房に恋心を抱いている――。これは彼にとってたまらない事だったでしょう。判っきりとそれと言えず、焦燥の色が日に日に戸田の顔を蔽って来ました。

時こそよしと、私は一つの計画をめぐらせたのです。戸田が最も大切にしている如来像の首をやっとの思いでもぎとり、そしてそつと元の姿にして置いておきました。何も知らぬAは、数時間ならずして、慈母とも仰いでいる私の足許にひれ伏して、真蒼になって、如来像の一件を報告しました。

「まあ――困ったことをしてくれたねえ――」

私はもっともらしく、思案するふりをして、泣きじゃくるAをその場にのこし、片附けものをする様に見せかけておいて、茶室の主人の間に現われました。

「Aが如来様の首をもぎ取りましたよ。貴方が余り非道く当るから……」

「何――そんな莫迦な――」

「本当よ。どうするつもり？」

「それが事実なら折檻してやる――」

「当然ですわ。それにAったら、まるで私を恋人かなんぞのようにヘンな事を言ったり、しまいには貴方に内緒で、何処かへ遊びに行

こうなんて言うのよ。いやらしいったらありゃしないわ」

「ケ、けしからん、断然性根を入れかえてやる――」

「恰度、密室の天井を抜いて、梁から吊り下げた滑車が出来上った頃でしょ。貴方を吊る筈の滑車がネー――ホホホ。貴方の苦心の拷問道具が、うまくゆくかどうか、一度試して見たらいいわ。私も手伝うから――私、Aをつれてきて一芝居するから、貴方は怒鳴ればいいわ。私にお茶でもかけて、ウンと怒ることだわ。それが最もAにとって効果的なんだから――」

私の吹込む悪魔の声に、戸田は一寸面を伏せ、悲しげにうなづきました。この際、私に関心を持たせぬ為にも、心を鬼にして、我が子を折檻する気になったのでしょうか。

私は、おどおどするAを連れて戸田の居間に来しました。事はすべてうまく運び、私はさもAに味方する振りをして、いそいそとこれから始まるAの折檻の準備に動きまわりました。

戸田を日頃打つ、特製の竹にこよりを巻きつけた鞭が、今日は容赦なく、Aの背に、胸に、尻に飛びました。

手ぬるい手ぬるい、もっと打てと、私は戸田に眼で合図する度に、戸田の乱れ勝ちの鞭は、力を得て、Aの体に飛ぶのでした。

吊鐘堂に主人を吊す、井戸用の丈夫な綜紹縄で、彼はAを犂々と縛り上げ、自分の作った天井の滑車に彼を結びつけて、私に縄を引けと、彼は命じました。

いそいそと喜び勇んで私は、青白く弱り果てたAの体を引き上げました。数個の滑車の連動で、僅かの力で、Aの体はグイグイと天井まで高々と吊り下ったのです。

その時、戸田に來客があつて、主人は私に縄をとくとなと念を押し

て、出て行きました。解けと言われたって、どうしてこの美青年の吊り下った惨酷図の極みの、このよきシーンを解くなど致しましう。

「可哀相にねえ——、私の力のないのを堪忍して頂戴ね——」

私は心とは裏腹に、そう言って近附くと、Aの足に頼ずりしてやりました。魔女の様な私の心も知らず、最も信頼し得る人として、信じ切っている、Aが急に哀れに思えたのです。私の計画にまともに引っかけた、私の手でこわした如来像を、私の身代りになって責苦をうけている、そして真実を知れば、最も憎むべき私に、切ない恋慕の情さえ訴えているのです。

私は衝動的に、彼の体を抱きしめてやり、くちづけしたく思いました。しかし、彼の体は、私の手の届かぬ天井まで、高々と吊り上げられており、私の彼に接し得る肉体は、眼前にダラリと伸びた二本の足でしかありませんでした。私は良心に責められる思いで、ヒタと、Aの足指に唇をふれ、そして指を口にくわえて、しやぶって見たのです。

感泣するように青年Aは、体を宙によじらせ、私の仕種に胸をつまらせていました。

主人が戻る迄の間、私はこの美青年に心を奪われ、恍惚として、彼の足許のたたみに丹座して、この一幅の美事なる惨酷図に、魂を天外に飛ばして見とれておりました。

幾時間そうしていたでしょうか、主人の足音に、私はハッと我に返りました。

その日から、Aの私を見る眼が、更に思慕に代り、只単に私を何処からともなく見続けておりました。

戸田の忘れ形見に復讐してやろう。としてはかった私の心は、ともすれば崩れそうになるので、私は心を鬼にして、Aを避け様とつとめ、憎むのだ憎むのだと心に言いきかせました。漸やく私の心に憎悪が湧き、機会があれば、吊し責めにも況して責めてやろうと、虎視眈々とその機をうかがううち、Aは、私の素振りに失望して、手紙を残して寺を出てしまったのです。

もう少し、手加減すべきだったと悔んだが後の祭りです。

今となつては、隠していても意味ないと、私は戸田をせめる口実に、更に又一つ、Aが隠し子であった事をばらして、戸田の立場を抜きさしならぬものに迫りました。

併しこうした、嗜虐に身を灼く日々にも限度がある様で、変りばえのせぬ、戸田一人を手をかえ、品を変えせめても、いつしかその嗜虐の行為自体に、慢性的な飽きを感じる様になりました。人間はどんな刺激でも、それを以って飽和状態になると、感受性が鈍くなるようです。

数年経って、Aの事を忘れかけた頃、突然彼から珍らしく電話がかかりました。

眠りにつこうとしていた、私の魔性は、この電話によって、再び不死鳥のようによみがえりました。

私はさまざまに彼を弄ぶ手段を考え巡らし、その事を考える事によって、単調になっていた生活が、生々と活気づいて来たのです。

飛び立つ思いで行くより、数日じらす方が効果があるだろうと、そんな計画のもとに日を遅らせているものの私の心は毎夜、美青年Aの許に通っていました。

美青年を心の儘に責めさいなむ——それが、私に残された生甲斐

の様に感じられたのです。

八日目の夜、私の心はもう待てなくなりました。いぶかる戸田を縛り上げ、まるで前夜祭かトレーニングのつもりで、彼を大汗かいて空井戸に吊しました。懸命に引っ張り上げた太縄が、ずるずると戸田の重みで下る度、私は胆を冷して、必死の私の腕首に縄を巻きつけ、やっと、井戸の側のけやきの大木の根元に結びつけました。私の手首はまるで、縛られた縄跡の様にくつきりと、太い縄目を残しておりました。

秋の夜寒が、ひしひしと戸田の肌に泌みなのか、許しを乞う彼の声が、吊り下げた空井戸の石垣の辺りから、陰に籠って響いてきます。

そう言われると私は反対に益々反発して、墓地へ行く入口にある水桶をくむ水道の蛇口から、撒水用のホースを伸ばし、蛇口を一杯に開放して、既に冷めたく感じる水道の水をザアザアと、空井戸に吊り下った戸田の頭からかけてやりました。

「助けてくれー、もう許してくれー」

戸田は泣声になって悲鳴をあげました。

鼻であざ笑って私は暫らく、その儘で放置して、井戸のけたから懐中電灯をともして、戸田の哀れな姿を見下しておりました。

案の定、彼は翌日より風邪を引いてねこみました。アスピリンを与え、近所の仕出屋に彼の食事を頼んで、私はAを訪れたのです。

あの日から、この愛すべき美青年は、仕事にも行かず、毎日私のくるのを待っていたそうです。

懐旧の情に、私達はヒシと抱き合い、そんな時にでも、私の細かい計画振りは、ちゃんと、私の手首の縄跡を、彼の眼に留まるよう

意識して手を動かさせていたのです。

果してAは、理由をきいてきました。予定通り総てうまく運びます。私はAの置手紙を見られて、戸田に日毎夜毎折檻されたこと、昨夜は井戸に吊されたこと、戸田の吊ったあの時の責めを心に浮べて自分に立場を置きがえて、さめざめと口説いて見たのです。

青年はすっかり感泣し、これも自分のせいだからと言って声を震わしました。

一言、責めて見たいと言ったのが図に当って、彼は私に責めを乞い、果ては、責めてくれと、私の膝に泣き伏す始末です。悪魔がこうもうまく囁やくのか、私はHに灼かれた私の股の焼痕を、戸田のせいにして煽り立てました。のぼせ切っている青年は易々として私の言うが儘でした。

ジリジリと皮肉を焦がす臭いが鼻につき、もう私の心神は消耗し切り、脳神経は分裂している様です。革バンドで、焼傷にうめく青年の皮膚を、完膚なき迄に、叩いて叩いて叩きのめして、やっと、私の神経の分裂は止まり、フト現実に立帰りました。窓をつらぬいてさす、秋の陽光はやわらかく、私のうなじに陽だまりをつくってさながら地獄図のこの部屋の光景とは、凡そチグハグな雰囲気をもし出しているのです。

前後不覚の、突発的な、発作ともいえる、嗜虐の衝動にかられては、私はフラフラとAの許に足を向け、脳神経の分裂を起して、非道く悪心のもよおす、嘔吐を覚えて、Aのもとを去るのです。

「君は絶対的に分裂症状者のデーターになる人だよ。人に逢えばすぐに露悪的に洗いざらい、腹の底の底まで喋べらずにはおられぬ君に、俺は激しい意欲を覚えるのだー」

Mはいつもそう言います。そして私は激しい後悔をするくせ、すぐに自分のありの儘を、今も又こうして一面識の貴方（ワイン氏）に告白せずにはおられぬのです。

しのぶさんの話は終わった。彼自身妖美人の吐き出す、あやかしにたぶらかされた気持で、今更乍ら、M教授の紹介した意味が、わかった気がするのであった——

「嗜虐版『羅生門』って処だね——」

長期刑へのあこがれ

花 田 一 郎

週刊朝日の中に、毎号「あちらの話」という欄が一ページあり、七つ八つの海外のエピソードを並べています。

昨年末十二月二十一月号のトップ記事は一寸驚くべきものでした。全文を紹介します。

鎖につながれ二十年

ギリシャのオモリオン村で民家の地下室に二十年間もクサリでつながれていた婦人、エルピニキ・アポストロウスさん（四二）が救出された。まっ暗な部屋の汚い床に横たわ

ゴルフ氏が、感嘆これ久しうして、泌々と溜息をつきました。「さあ、もう一度ラジウム源泉に入り直すか——、妙に酒の酔いがさめた感じだよ——」

ナイロン氏の声につられて、一同は空中温泉へと、ゾロゾロと足を運ぶのでした。

樹氷は益々白く、いつ頃からか、視界一面牡丹雪が、風に吹かれて、吹雪となって舞い狂っておりました。

っていた彼女は、踏みこんできた警官隊に野獣のような叫びをあげるばかりだった。エル

ピニキさんは十七のとき結婚、まもなく実の妹に夫をとられ離婚——そして、以来ふつりと消息を絶っていたもの。カン夫カン婦がご用になったことはいうまでもない』

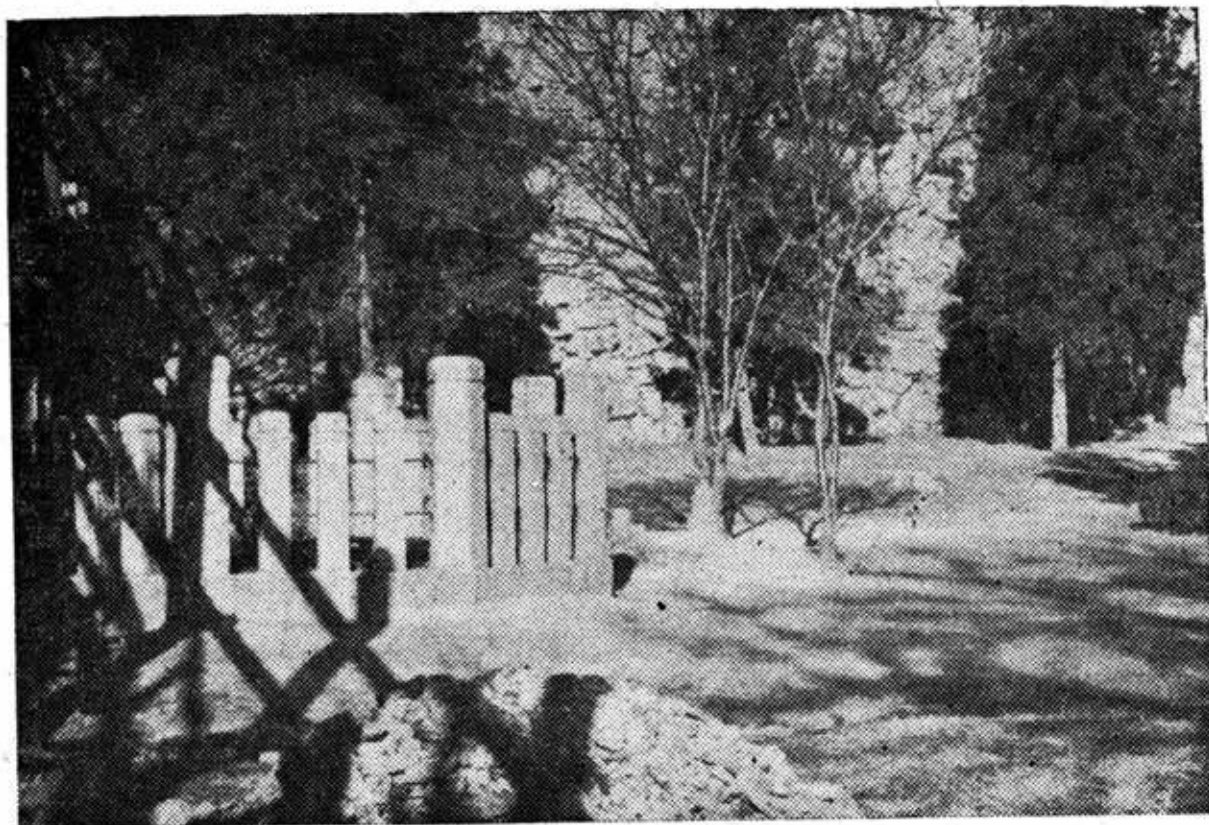
以上です。大戦をふくむ二十年間の間に、

ギリシャの警官の制服がすっかりかわり、ふみ込んで来た警官を、殺しに来たものと思っただという意味でしょうか。しかし少し違った角度からの解釈も可能です。

それは三人の暗黙の合意による、世にも長い長期刑のプレイだったということです。又始めはそうでなくても、二十年の才月はどんなにマゾ的な要素の少ない女性をも完全なマゾヒストにしてしまうだろうと思われま

す。そうだとすれば、このエルピニキさんは世にも幸福な女性だといえるでしょう。その快楽が汚い地下室での二十年間の生命をつないだとも、「カン夫カン婦」がこの大事なマゾのヒロインに、二十年間も餓死しない程度の（その間には食糧事情の悪い大戦がふくまれています）食糧をあたえたとも、考えられます。

このニュースの後日談に接していませんがエルピニキさんがこの長期刑のプレイが第三者によって破壊されたことに絶望（ふみ込んで来た警官に対してあげた野獣のような叫び



は抗議の叫びか?)し、それに女性の打算と更に自分を完全な悲劇の主人公にしたてゐるために、「カン夫カン婦」に莫大な慰料を請求したという後日談に接したとしても、私のこの仮説は説得の力を失いますまい。そ

れ程、長期刑は甘美なものです。

本誌が誕生したころ、吾妻新さんは毎号華麗な論陣をはっておられました。マとしては古川裕子さんの経験がよく採り上げられました。古川さんが御主人によって地下室に監禁、折檻された長期刑は大体一週間程度であったようです。人口密度の大きい日本ではこの程度が技術的に可能な限度でしょう。でも古川さんはその経験を活字にすることによって、読者の一人ひとりの部屋の片すみに、後ろ手に縛られ、犬の首輪と鎖でつながれ、金属の容器に入れた犬の食事と尿瓶をあたえられ、折檻するために帰宅する恋人を待ちながら住むようになりました。すなわち古川さんは活字によって一週間の刑期を十数年に延長することと成功したのです。戦時中日本の憲兵隊から拷問を受けた女性が手記を発表するのも、同じ操作だと考えます。本当に刑が不快だったら忘れてしまうはずですよ。

大げさになりますが、八百屋お七の肉体を炎がほろぼしたのは数分か十数分だったでしょう。江戸の町中引きまわしの時間を加算してもせいぜい半日だったでしょう。しかしお七火あぶりの図はあらゆる雑誌、単行本に描

かれ、数百年にわたって、その無残な美しさは幾百万、幾千万の人びとに鑑賞されて来ました。お七の火刑の時間は永却となったわけです。

歴史に残る責苦を受けて、その処刑時間を無限にひきのばし得た女性は、世にも幸福な女性といえるでしょう。本誌のモデル諸嬢も読者の思いに残る無残なポーズを演技し得た人は、それだけ幸福だといえるでしょう。

尚、二月号の小生の拙文をクロード・コガ氏の美しいさし絵で飾っていただいたお礼に先月大改修工事を見物に行った姫路城内の「お菊井戸」を撮影しましたので二葉同封します。いい方を使って下さい。お菊はこの井戸のほとりの桜の大老樹に吊られ、七日七夜、横恋慕の武士に青竹で責められ、遂にこの井戸の中へ斬りおとされたと伝えられます。写真の中の桜の小さい木は、その老樹から芽生え芽生えて何代目かにあたるといえるでしょう。

関谷夫人の最初の通信に「……思いきりきついむちうち、拷問、逆さ吊り……にしてほしいと願っております」とあったそうですがモデル諸嬢の中、この井戸の写真と組み合わせで、吊り責めの写真をけいさいされたいと思われる方があれば、どうぞ御利用下さい。

結 婚

木 枯 し の 章

久 留 木 栄

(一)

みのりの秋というのに野分きの吹きはじめ
頃から一種異様な悲しみがすべての景色の
中に顔を出しはじめる。木枯しの押寄せる頃
になると冬將軍の来襲におそれおのいて自
然は灰白色に武装しはじめる。だがそれも結
局はこの逞しい兇暴な責苦の前に屈服してし
まうのだ。

耕介は身もだえしたあげく赤土を露出した
山腹、うずたかくつもった褐色の枯葉、素裸
にふるえあがっている柿や桜や楓などをみて

思わず深い吐息をもらした。

その頃である、耕介と喜美子の愛情が昂ま
って結婚式を挙げたのは――。

だがその夜早くも二人は二人の間に深い溝
が横たわっているのを発見しないわけにはい
かなかった。

というのは長い冬の間の忍従の生活のよう
に人生の頹廢の底に沈んでいた耕介にとって
気も心も許しあった結婚第一夜の陶醉は余り
にも幸福すぎた。幸福すぎて不安をすらよび
おこした。これまで兎に角生きる寂しさを女
を責めることによってのみ忘れようとしてい

た耕介にとって、この幸福はいままで耕介が
克ち得てきた嗜虐の悦びを完全にくつがえし
過去の耕介を嘲笑するようで不安どころか一
種の恐怖すらよびおこしたのだ。耕介は自分
の腕にだかれ次第に薄桜色に上気してゆく喜
美子の顔を凝視しながら、嫉妬ともつかぬい
きどおりと自己嫌惡とを覚えたのだ。

一方喜美子はどうかだったろう。彼女は夫の
どんな責め苦にも耐え、そうすることによっ
て、むしろ逆に積極的な大きな愛情で押しつ
つみ、縛られても縛られてもなおかつもえさ
かる愛の焰、縛られても縛られてもなおかつ

自由にとびまわることのでる情熱によって、夫を幸福な生活に導くことができる夢みていた。その甘い考えが一ぺんで叩きのめされた。第一日の余りに甘美な胸醉は、異常であること以上に、正常であることの情愛の深さ、細やかさを立証したのだ。信頼し信頼された瞬間の交悦の極地が、生命の火花をとばして融和するのを知ったのだ。だがその反面彼女には彼女なりの不安があり、おそれがあった。というのは一夜の中に表現された夫の頭の鋭さ、理解力の深さ、感情のデリケートさ、強靱な実行力、そういうものにとつてい及ばない自分を発見して驚いたのだ。そればかりではない、夫はただその能力を自覚していない、故意に自覚しようとしただけで、もし夫が自覚しはじめたとしたら、彼女は今まで自分が宮々としてきずきあげてきた生活様式、日常生活の幸福が一ぺんにくずれ落ち、自分は滅茶苦茶に破壊されるのではないか、と思われた。これは喜美子にはとうてい耐えられないことだった。喜美子はこれから新しくきずく幸福な夫婦生活以上に過去の幸福、自分だけの幸福をねがう心があったのだ。かくて奇妙な因縁で結びついた夫婦は再びアブノーマルな生活に追いやられねばならな

かった。すなわち二人はお互が主人であり主婦であることを自覚した瞬間から、お互に過去を忘れ去るために異常な努力をかたむけねばならず、あまりに幸福な現実生活を追い求めたあげく、精神的な煩悶、ずれをひきおこし、そのことが夫婦生活を正常のものから逆に異常なものに近づけたのだ。日ましにつの結婚愛への不安、お互があまりに自分を愛しすぎることから出発したこの愛の不安のため二人の生活は建設的なものから耽美的なものとなり、お互の愛情はその細やかさに反比例して、全く逆の粗暴な、激しい、荒々しいものにかわって行った。

(二)

初冬の小春日和が絶好の責日和であるように、不安の哲学に支持された二人の結婚生活は、申し分のない責場だった。耕介は容赦なく責める夫になった。一寸した失敗をたてに喜美子を縛り、鞭をふるった。

月の間と呼ばれた離れを居室に改造した二人は、喜美子がつれて来たキヨという女中に仕事をまかせ、時間の自由になるかぎりここで暮した。この部屋は耕介にとって別天地であり、喜美子の家における唯一の我が王国で

あった。そこでは耕介の絶対的な支配権が確立していた。それ故耕介は、たとえば朝食の時に笑わなかったとか、買物に行く時間が早すぎたとか、肌着に皺があったとかいう理由で喜美子にお仕置を課した。このお仕置は主としてお客に縁のない真夜中とか、早朝行われるのが常であったが、時にはお客を無視して行われることもあり喜美子はむしろいじめられることを好むかに易々として、このお仕置に従った。

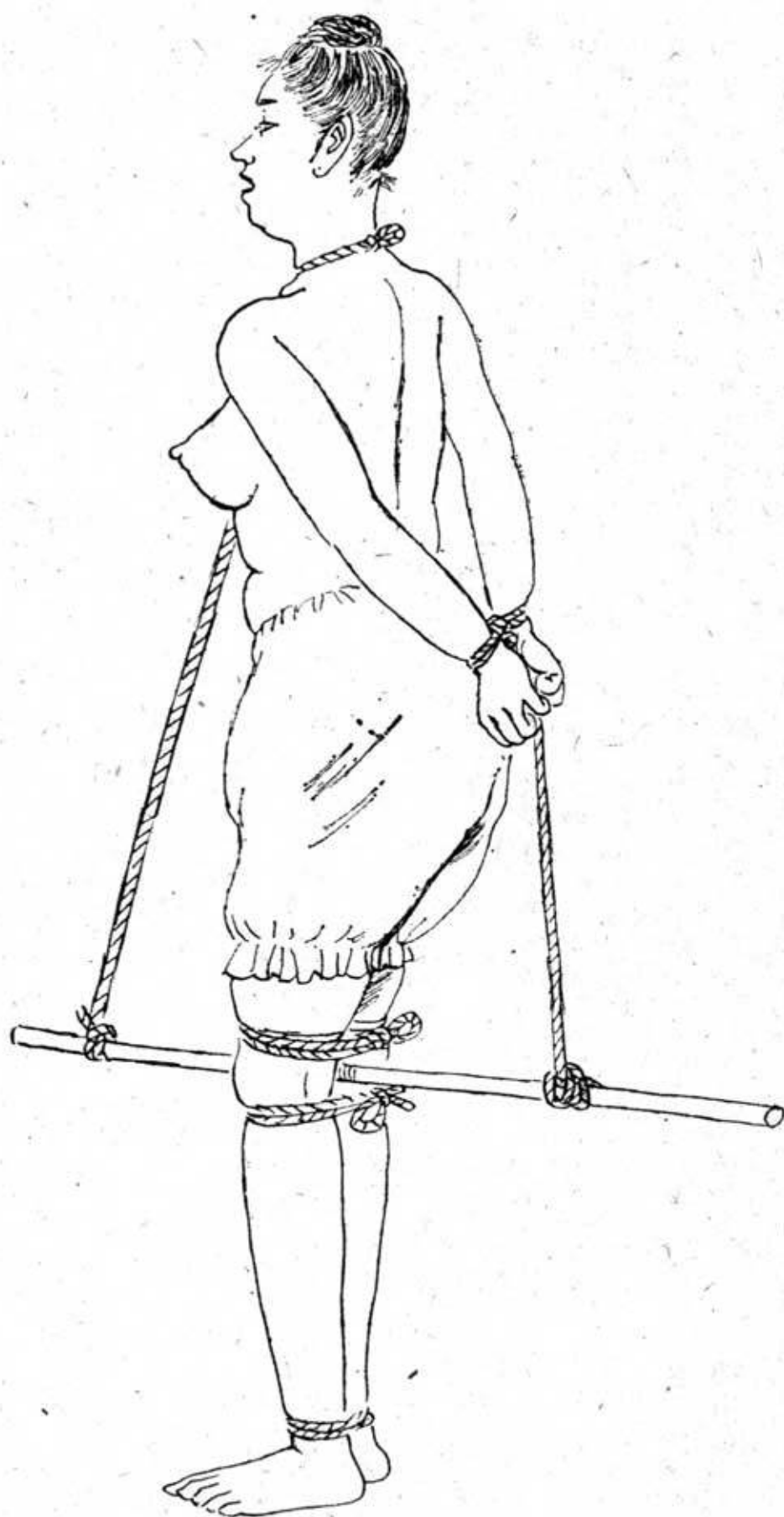
喜美子は全く耕介の自由になることによつて、耕介の関心をかうことが出来、耕介の心を慰めることができると思えていたのだ。

ところがこれは誤解であった。

耕介が喜美子をせめるのは妻の反撥を予想してであった。

『みっともない、そんな生活よして』

といわれたいからであった。というのは喜美子の反撥によつて喜美子の耕介への愛情の深さを知ることができると思っていたのだった。従つてこの耕介の考えは、思わくは喜美子の無抵抗主義によつて完全に打ちやぶられた。耕介はついに立腹した。喜美子の無抵抗主義は自分のだらしない生活を嘲笑するものだと思え、日ましに苛酷な刑罰を加え、くた



くたになるまで喜美子の肉体をもてあそぶことを考えた。

高手小手、棒しばり、エビ責め、
そういうありきたりの責めから出発した耕
介の責めはやがて――

逆手吊り、芋虫、逆立、梯子、くさり、
ローソク、
と変化し、やがて彼独特の
テンプラ、とか、網責め、とかにかわって

いった。

耕介は縄で縛る時、まるで俵をしめる時のように喜美子をふんまえ、麻縄を胸にまきつけ力一杯ひきしぼった。それ故時には喜美子の肌は細くひょうたんのようにくびれ、時には呼吸もできかねる程の圧迫感をうけ、喜美子は縛られただけで、思わずうめき、泣き叫ぶこともあった。しかし耕介はそういうさいでも委細かまわず泣く時はさるぐつわをかま

せ、もがく時はさらに緊迫度をまし、決してちよつくらそいでゆるそうとはしなかった。そればかりでない、意地悪な彼の精神は、精神的にも肉体的にも変化に富んだ刺戟を喜美子にあたえ喜美子の精神を、感情をたえず興奮状態にさそいこまずにはいられなかった。

だが、これほどまでにしても二人の間にひそむ溝はそう簡単にのりこえられそうにはなかった。むしろ逆に深まるかの感があった。花やかな社交生活を好む女と近所ずきあいすらわずらわしいという男とは所詮一緒に

なれぬものだろうか。体当りでぶつかれば或はとびこえられる程の中かもしれない。みえも、外聞もなく素裸になれば渡れる深さかもしれない。だが耕介には耕介の過去があり、喜美子には喜美子のプライドがあった。耕介は責めに、責めた。

そもそも耕介が喜美子に魅かれたのは自分で自分の手をいましめた瞬間の赤裸々な心情であった。それが結婚した現在、あまり赤裸

々すぎて逆に鼻もちならぬものになったとしたらどうだろう、耕介も喜美子もそういう意味ではまだまだお互に血の通わない点をもっていたのだ。それが溝となったのか、耕介の振う嗜虐の鞭の下で、今日も、またあすも喜美子の肉づき豊かな体が、のたうち、もだえうめき、泣き、叫んだ。

耕介はそのいう女の四肢にきつくくいこんだ縄を愛した、赤い血のにじみ出た鞭の跡を愛した。薄桃色の肌に香油をぬり、ラグランの香をしみこませた真白な綿ロープをもちいそこに頬をすりよせた。頬を伝わって押し寄せる縄のしめっぽい感覚を愛し、その縄の奥に沈む赤色ずいた女の肌と、その底を流れる赤い血の音と、次第に高まって行く鼓動を心ゆくまで鑑賞した。

真白なさるぐつわの下で陰にこもる吐息真黒な目かくしの下でキラキラ光る目、頬を伝わって流れる脂汗、耕介は喜美子をキリストのように柱に縛り、槍のかわりに鞭でたたいてみた。ふくよかな胸と太い柱と頑丈な縄の中間に鉄のような桎梏を差しこみ、ぐっと回転させながら、その苦悶がどのようなにしてこの美しい女性を虜にするか——それを黒い目で凝視した。耕介は耳を彼女の乳房やさるぐ

つわの上にのせ、荒々しくなる吐息を、怒濤のような鼓動を、呻きを、悲鳴を、嘆声を、哀訴を、嘆願を聞いた。

「あなた、あなた」

つぶやくがごとく、ささやくがごとくもらす言葉を聞きながら、時には身動き出来ぬ彼女の脇腹を竹でつつき、筆の穂先でくすぐった。乳房を手のさきでつねり、手のひらで押しつぶし、海釣り用のおもしを乳房につり糸でぶら下げた。洗濯ばさみで鼻をつまみ彼女が思わずもらす泪や吐息や、脂汗の中から耕介は彼女の生きる秘密、愛の秘密を探ろうとした。

責め方が激しくなればなる程、喜美子は無抵抗になり、その体はむしろ喜悅するかにみえた。その体は不思議ともえあがり、その心は遂に次第に澄みとおっていった。喜美子を責める時流れ出る雰囲気はまるで一種異様なユリリスの花のような美しさがあった。清純で、それでいて甘美な幻想にみちみちた責の雰囲気であった。耕介はそれにひたりきった。だが耕介の心には、態度にはいかに甘美なユリリスの香りに溺れたとはいえ、六十年ぶりに咲くといわれる寒竹の花のように素朴で厳格なところがあった。気分が沈潜し、

重い、よどんだ沼の底に沈んでしまう。その沼の底で咲いた竹の花の気持であった。

耕介はそういう折々、ふと喜美子の顔の中にふと宿る一抹の暗い翳を発見して「オヤ」と驚くのだ。

一体これはどうしてなのか。

一体喜美子は、こんな男のどこに惚れているのか——ほんとうはほれていないのではな

いか
そう思うと妻の無抵抗な態度が鼻もちならぬものになり、決まって妻の愛情に疑問が入道雲のようにわいてきた。それと同時に又深い絶望の世界がおとずれてきたのだ。

これほど総てを捨てきっている女を俺は何故愛しきらぬのか。

俺は、縛らなくとも人を愛し女を愛する方法を知っていた筈だ。

いや知っているどころか、それが本然の姿であることを知っているのだ。

ところが、今はそれができない。耕介は従順になりきった女の姿をみると深い悔恨にかられ、それと同時に立腹し、また依態の知れぬ割切れぬ気持悩み苦しみが湧いてきて遂に耕介を責めさいなむのだ。

ふと浮ぶ前妻の面影、妻として、女として

何の喜びも知らず、ただ開らないまま散ってしまつたあの女の素顔が、現実の夫婦生活と何の脈絡もなしにあらわれるのだ。心なしかその顔が微笑しているように見える。いやその顔が激しい苦しみに克とうとしているかにも見える。耕介は思わずその顔をにらみつけた。するとその顔はふっと消え目の前にはただもうみじめな姿態をさらけ出して縛られた妻喜美子が、うなだれて横たわっているばかりだ。

「こんな妻から養われ—俺は男といえるだろうか」

突然耕介の胸の中に夫としての自覚がわきあがってきた。すると妻を責めることによつて妻から食わしてもらっている現実の生活が強靱な鉄の枷のようになって耕介の体をしめつけ耕介は、いままでせめつけつけてきた手をはたとやめるのであった。

実際公平な立場でみると、こんな男のどこが良いのだろう。喜美子も喜美子だ、因果な奴だが一体そんな不幸な妻に誰がしたのだ。自分かそれとも——

耕介は無性に腹がたつた。それは喜美子にかかる性癖を植付けた男にたいする無意識的な嫉妬であろうか。何もしてやれない、何も

贈つてやれない自分である。耕介はそういう自分に酔えた腐臭を感じた。どうにもならぬ性臭であった。それと同時に今彼が味わっている嗜虐の喜びなどというものは結局人生の虚構、愛情の仮面、過去の生活の仮面じゃないかという気がしてきた。

責めることは悪い、つまらない、だが責めずにはいられない。

責めれば、悲しみや、悩みが雲のようにわいてくる。

責めれば嫉妬で狂い出すようだ。再婚なぞせねばよかった！

耕介はそこにのっぴきならぬ地獄をみた。自力では解決できぬデレンマの泥沼をみた。考えてみればいくら激しく責めたとして得られるものは、いとしいわが妻の傷ついた肉体とその肉体からはねかえってくる血だらけの愛情があるばかりだ。しかもその女の示す狂態が、呻きが、実は真の愛情でなく、これまた過去の生活の仮面であるとしたら、仮面をかぶった獣慾であるとしたら。

耕介は判断にまよつた。

狂いのたうつ肉体、針にさされた筋肉のひきつり、嵐とまがう吐息、数えられるほどに高なる鼓動、耕介は目の前に横たわった女の

示す狂態を歓喜を煩悶を誰よりもよく知っている。その女の肌にはたえず白い縄がくいま鞭の跡が赤くつき所々に紫のあざが沢山あった。耕介はそのあざのいわれも知っている。知っているだけに耕介はうなだれた。耕介の胸の中にはあのどうにもならぬ燐光に似た青白い火がちよろちよろ燃えたようだった。それは生きて行く悲しみにつまされて耕介の胸の中でもえる耕介の血の色だったろうか冷血動物のような焰が耕介の体をかけめぐる。人間に生まれた哀愁が、正常でないという自覚、落胆が、絶望感をともなつて燃えさかる。いやそればかりでない、精神の及ばぬ世界になおかつ精神の勝利を信じねばならぬニュロティツな煩悶、生きんがための苦悩が燃えさかるのだ。

だが耕介はこの苦悶を自らいやすべき技術を見失なっていた。

耕介はつかつかと喜美子のそばに近寄ると耕介のそういう気分が反映してか、一息ついてうなだれている喜美子の頭髪をわしづかみにし、その顔をぐいとあうむけた。ピリッと電気に打たれたようなショックがその髪をつたわり、手をつたわり耕介の脊髄に伝わってきた。耕介は喜美子の顔を凝視した。脂粉に

み苦しむ女を抱いて初冬の身を切るような寒さの中で深い吐息をもらすのだ。それからゆっくりと女のさるぐつわをとってやり、しずかにその唇にキッスするのだ。熟れたはたきょうのような唇、その唇から生あたたかい生気が、無限の情感をこめて耕介の口につたわってくる。耕介は思わず身ぶるいがした。

自分の唇を妻の唇の一せんちほど真上にもっていきまるで蛇が蛙をなぶるかのように喜びかつ妻をなぶりからかうのだ。ちよっとキッスするふりをしながら、いきなりザブンと冷水中につけ、妻が苦しみもがけばひきあげ、そのまま水中につけても呼吸がたえられぬというまで持続したり、水平面にただよわして指で鼻をつまんでみたりする。耕介はこのキッス責めを二人のからだから寒さのために変色し、ぶるぶるとふるえ出すまでやめようとしなかった。後に夫婦仲がしっくり行くようになってこの遊びは耕介にとっても妻喜美子にとってもたのしいものの一つとなり、テンブラにするぞ”とおどかす夫に妻は”テンブラがたべたいわ”と所望するまでになったのだが——いまは、責める男にとっても責められる女にとっても最もつらいものの一つだった。というのは、どこか耕介の態度の中にそ

っけない不安がかくされていたし、それが爆発するや否や寒さで歯の根もあわぬ妻をタイル張りの床の上に置き去りにして帰る耕介であつたから。そして妻がそのあんまりな態度をせめると、いきなり拳で殴りつけたり、ぬれたタオルの猿轡を御馳走して出て行く耕介だった。

ただ縄だけで縛られているのならまだ自由がきく。タイル張りの床の上をころげまわって暖をとることもできる。だが、体中びっしりと、強靱な細い網の糸で固められていると、ころがることはもちろん、微動だにすることができぬのだ。夫と戦うことはできても喜美子は寒さと戦うすべは知らない。やがて殺されるかもしれないという不安が生じ迫り来る死の恐怖とも戦わねばなくなる。我慢に我慢を重ねた挙句、金切声を出そうと思っても寒さで歯の根があわず、時には猿轡が口を掩っていることもあり、どうにもならず結局は無我夢中というより強制的に精神的な荒野を彷徨させられるのだ。喜美子は雪のつもった砂漠に、うもれながら死んで行くような夢をみた。

それでも喜美子は死ねなかった。それでも夫が憎めなかったのだ。彼女の憎んでいるの

は前の夫であり現在の夫ではなかった。逆説的ではあるが憎むだけの愛情が耕介にたいしては生まれなかったのだ。

網責めはこういう基盤に立脚していた。

(四)

かくて二カ月たち三カ月たち、木枯のふく頃になると——もうお互の溝は、どうにもならぬ程深く広くなっていた。

とある雪の日であった。珍らしく責め手を嫌った耕介は喜美子のほのかにただよってくる女の体臭と体温の中に我を忘れようと思っていた。だが暖たまつた友禅のふとんにくるまれ耕介の手はいたずらにとまどうだけであつた。女を責めつけることが毎日のようになってから、責めつけねば寝られぬ男になったのであろうか、耕介は息を殺して思案してみた。すると女のむせかえるようなラグランの芳香にまじって奇妙な、夫のころを不思議にいらだたせねばならぬ反抗意識を発見して耕介は愕然とした。耕介は今日こそ喜美子を縛らずに愛そうと決めていたのだ。ところが喜美子はそういう態度に体中で反撥しているのだ。寝物語でもちよっとした耕介の言葉尻をとらえ、耕介を侮蔑し耕介を立腹させた。

遂に耕介はたまりかね、机にしまっていた麻縄をとると長襦袢の上からありったけの力を出し後手にしりあげると、真赤な腰ひもで足をそろえて縛り、そのまま寝床の中に転した。これで耕介の計画の第一はくじかれたのだ。いつもなら直ちに責めにかかるのだが、

ただ今日だけはどうかあつかってよいか処置に困った。ただ胸一杯にひろがった空白をいやすかに喜美子を抱きしめると薄氷の川をわたるような愉悅がこみあげてきた。だがそういう愛撫にむせびもだえる女の吐息を聞くと、耕介の心はもえるどころか逆に冷え、怒ともつかぬ哀愁が次第に強く濃くなり、ぐんぐん憂愁の淵の底に沈んで行くのであった。もちろんこういう気持が妻に反映せぬ筈はない。喜美子の興奮はいつしか嘲笑とかわり、ちぐはぐな気持が岩のような重圧となって耕介をおそってきた。

『駄目なんだ俺は、俺はお前を可愛いがりがたかったんだよ、こうして、自由に、ああ、だが俺はお前を愛する資格はない』

耕介は誰にいうとなくつぶやいた。その声は低くたえいるような不安でみちみちていた。

『俺は人を愛する資格を失った人間なのだ。』

家ももたず職ももたぬ浪人だったのだ。そればかりではない、俺は人の愛情にすがって生きようとしていたのだが、やっぱりそれは間違いであった。少しはましな人間になれるかと思つたがやはり駄目であった。どのくらい悩んだかしらない。だが駄目であった。俺は一体どうしたらいいんだろう

喜美子、

俺はどうしたらいいんだろう。俺は、お前にこうして責めるほか、何もしてやれなかつたんだー』

耕介の語気には幾分すてばちなところがあった。それでも喜美子の耳には彼がまだ自分に深い愛情をもっているように聞えたのだ。だがある瞬間、耕介の声は、ぶつとりとだえた。声ばかりでない、愛撫する手も止つたのだ。その瞬間喜美子は深い穴ぐらに突き落されたようなショックをうけた。というのは無造作に喜美子の体の上をはいまわる十本の指がショパンの曲をきくような幻想を喜美子にあたえていたが、それから俄に解放されいきなり現実の世界に突き離れた感じであった。それと同時に

耕介の愛しているのに自分ではない。まして彼の前妻でもなければ何でもない。ただ自

分自身なのだ。耕介その人なのだ。

という直感が落雷のように喜美子の体をたたきつけたのだ。もしそうなら耕介は出て行くかもしれない。そういう不安がせきを切つた水のように喜美子の体を淹れて行った。

「貴方、いえ、貴方

そんなことはありません、そんなことありませんわ 貴方」

喜美子はもう無我夢中だった。だが彼女の意志に反し言葉はひきつりますます味けないものとなつていった。それと同時に彼女もまた彼女自身しか愛していないということを思い知らされずにはいられなかった。

「貴方それは誤解ですわ

貴方は真実私を愛して下さらない

貴方は別の人を愛していらっしゃる

貴方は卑怯者ですわ

貴方は男のくせに卑怯者ですわ

うそつき偽善者ですわ」

そう絶叫しながら彼女は自分自身を罵倒しているような錯覚にとらわれ、彼女はふとんからころげ出てあたりを荒れまわった。だが耕介はそういう喜美子の様子をみていたが「そうか」

とただ低く一声つぶやくとそれきり表情一

つかえずそのまま彼が始めてここに来た時の洋服にきかえ、じろっと冷たい一べつを喜美子にあたえたまま雪のふる町に出て行った。

喜美子は思わず大声をあげようとした。だが彼の冷たい一瞥に出あうと気も心もくじけ、べったりと座敷にうずくまってしまった。

彼は出て行った。

喜美子はひたひたと雪の降る中を裏口から裏山に抜けて行く彼の足音を、できるだけ聞きのがすまいと聞いていた。

やがてその足音は雪と木枯の為に喜美子の耳から永遠に消えて行った。

それと同時に、いままで死地に追いやられるようなマゾヒスティックな快感にひたっていた喜美子の胸に思わずきびしい現実の不安が恐怖が肉体的暴風雨がよみがえってきた。喜美子は何としてもあの男をひきとめねばならぬと考えた。そして彼をすくいに行くべく彼女は不自由な体を

くねらしてのたうった。

(五)

雪責めというのがある。真綿のようにふん

はもだえる。そのもだえが美しい。苦しみが雪をとかし女の肌は氷にとじこめられたほどの恐怖にふるえ、その心はそういうものを受けねばならぬ境遇におちいった不幸よりも、

体罰そのものの理不尽さに憤激すら覚えていくのに、

ひたすら我慢をする以外に雪の責苦からのがれることはできない。美しい自然、美しい肢態、それが白一色にぬりこめられて行く。

耕介は雪の中をさまよいつつ、ふとそういう情景を思い浮べた。

チチ チチ

その傍で地虫が鳴いているようだ。

それがまるで情慾の権化のようにきこえる。肩にしまった雪も頭に積った雪も重たいようで軽く、軽いよ

わりと降りてくる牡丹雪の中で目をあざむく

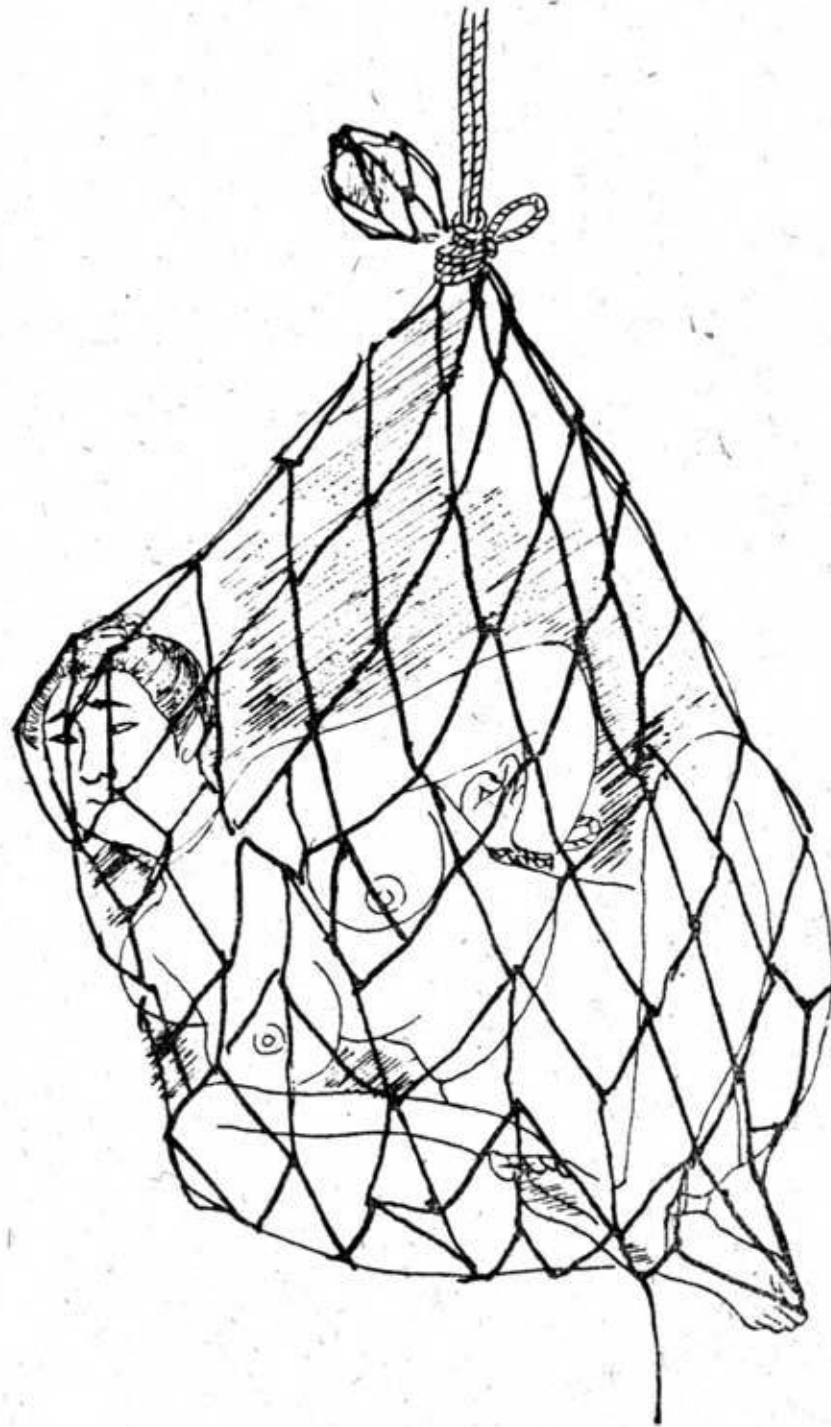
うで重たい。

ような艶やかな緋の長襦袢一枚にされた腰元

ただじんと体をしびれさすのだ。

が庭先の松の根方に括られ、その顔にも肩にも胸にも白雪が鳥毛のように積っている。女

自分なぞ、あの腰元のように雪の中で死んでしまったら。



いっそ幸福になれるのかもしれない。

家から抜け出した耕介はうすぐらい谷間を探してあてもなく彷徨って行った。行けども行けども雪であった。

雪に掩われた世界

その中で縛られた腰元の姿が、喜美子に化けたり、前妻の螢のような瞳を思い出されたり、また耕介そのものになったりした。

やはり俺はあれのことを思っていたのだ。

そう思うと遂に喜美子への思慕が高まり吹雪のような感情の渦が胸中で舞ったり、

いや真実

俺は自分自身しか愛しきらなかったんだとしびれるような陶酔を味わったりした。

そればかりか耕介はここ三年間の不摂生のためか自分の内部の肉体の一部を目も鼻もない虫たちが食いあらし始めているのを知っていた。彼は寒さと疲労で自分の肉体が耐える限度というものを知っていた。

耕介は道端にたおれた。

そして蠅が手足をなぜさするように手足をもみながら

意識が切れ切れになるのを知った。

雪責めの女の顔が、その中に現われたり消えたりした。

やはりこうなる運命だったのか

耕介は力をツと一塊の血を啜いた。

それは虹のような美しさをもっていた。

いや腰元の長襦袢のような美しさで雪の上にひろがっていった。そのように耕介には見えた。

それだけであった。

耕介は夜の静かさの中に、いつしか身をまかせていた。

それっきり意識がなくなった。

(六)

とらわれた女ほど美しいものはない。切ないきれぎれになった幻想――

喜美子はじつと耳を傾けて耕介の足音に聞き惚れていたが、それがハタと途絶えた瞬間から爆発的な夫への情感が彼女の胸の中にわきおこってきた。

失ってはいけない。

つかみかけた唯一の幸福なのにそれを失ってはいけない！ 追いかけてはあの人はずもう二度と帰ってきては下さらない！

そういう声が胸の中で雷鳴のようにとどろいた。彼女は何とかして追いかけてようと思っただ。だが、手も足もきっちり縛られているの

だ。ただ手にくらべ足は腰ひもで幾分やわらかかった。彼女は夢中で簞筒のそばにころがっていき、足をあげてその腰ひもを金具にあててこすり腰ひもを切ろうとあせった。肌が破れ血が流れた。それと同時にやがてひもは切れ彼女も下半身の自由をとりもどした。彼女は体ごとぶつかるようにして雪のふる夜にとび出すと雪の上に淡くのこっている耕介の足あとを唯一のたよりに後を追いかけた。

真紅な長襦袢の女がうしろ手にくぐられうつむいて乱れ足で恋人を追ひ慕う図はまさに一幅の懸け軸であった。

彼女はそういう自分を意識することがまたたとえようもなく、より深い甘美なマゾヒスティックな自己陶酔をよびおこした。それだけに彼女はまた夫ののびきならぬ愛情を身にまといっているかに思えた。

一步は一步

雪は一足ごとに激しくなった。

足跡は一足ごとに薄くなった。

真黒いつややかな髪が雪で真白にかわるころ、えりもとも胸も雪で一杯になりその雪はふるってもふるっても落ちそうになかった。

そして体は一足毎に冷え胸の情熱は一足毎に高まっていた。

やがて足音がふつとりと途絶え
それと同時に彼女の思いも、ふつとりと途
絶えた。体が四散したような感じだった。彼
女は思わず雪の中につくりと足を折りひざ
をついた。そしてくずれるようにたおれなが

ら耕介の最後の足跡の中に顔をうずめ、その
中に無限の愛情をこめてキッスした。
ただそれだけであった。
雪は次第に激しくなり 野を山を
耕介を 喜美子を

すべてのものを
とじこめ
ぬりこめてしまった。

(了)

〔新版〕女体悦虐フォト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13厘) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z1	ゴム猿轡	(梨花悠紀子)
Z2	囚女六三号	(柳初子)
Z3	猪手足吊り	(梨花悠紀子)
Z4	逆エビ縛り	(大塚啓子)
Z5	ローソク責	(東浦ひかる)
Z6	豊臀責め	(絹川文代)
Z7	淫らな縛り	(愛川悦子)

Z8	ザリガニ	(梨花悠紀子)
Z9	引き回し	(東浦ひかる)
Z10	全裸後手縛	(加茂良子)
Z11	豊満被虐	(大井小夜子)
Z12	黒髪いじめ	(大塚啓子)
Z13	足吊り嬌態	(絹川文代)
Z14	黒縄高小手	(四方清美)
Z15	強烈荒縄責	(梨花悠紀子)
Z16	喰込む白縄	(東浦ひかる)
Z17	くの字の足指	(桜井葉子)
Z18	裸身の受縄	(前本妙子)
Z19	無茶な猿轡	(竹野ひろ子)
Z20	ハリッケ	(梨花悠紀子)
Z21	臍なぶり	(大塚啓子)
Z22	逆手足吊り	(東浦ひかる)
Z23	美肌いじめ	(絹川文代)
Z24	鼻ゼメ仰向	(加茂良子)
Z25	恐怖の瞬間	(若原明子)

Z26	火箸責め	(梨花悠紀子)
Z27	全裸海老責め	(熱海容子)
Z28	ベッドの痴態	(絹川文代)
Z29	足の裏擦り	(大塚啓子)
Z30	閨の女体飾	(竹野ひろ子)
Z31	首絞めゼメ	(大塚啓子)
Z32	鼻孔責め	(若原明子)
Z33	悦虐放心	(梨花悠紀子)
Z34	手枷足くさり	(四方清美)
Z35	寝室のプレイ	(花本京子)
Z36	猿轡の妙味	(梨花悠紀子)
Z37	首縄柱しばり	(絹川文代)
Z38	巻煙草責め	(大塚啓子)
Z39	尻立てポーズ	(桜井葉子)
Z40	エビ責	(東浦ひかる)
Z41	彼女の好物	(竹野ひろ子)
Z42	ワンピース	(花本京子)
Z43	荒縄竹棒責	(梨花悠紀子)
Z44	浣腸責ポーズ	(大塚啓子)
Z45	鏡に映す裸	(山路ミヨ子)
Z46	苦悶に喘ぐ	(大塚啓子)
Z47	酔後の緊縛	(絹川文代)
Z48	逆十字エビ	(大塚啓子)

Z49	全裸猿轡	(東浦ひかる)
Z50	欄間宙吊り	(梨花悠紀子)
Z51	全裸逆エビ縛	(絹川文代)
Z52	荒縄仕置室	(梨花悠紀子)
Z53	庭園の惨虐	(館典子)
Z54	被虐の果て	(大塚啓子)
Z55	痛めた全裸像	(大塚啓子)
Z56	鏡の中の全裸	(愛川悦子)
Z57	セーラー服	(梨花悠紀子)
Z58	檻の緊縛裸体	(愛川悦子)
Z59	全裸股間縛り	(絹川文代)
Z60	オムツ逆エビ	(田中芳代)
Z61	胴縄の重量感	(桜井葉子)
Z62	ゴム人形	(竹野ひろ子)
Z63	縄トゲ責め	(梨花悠紀子)
Z64	女大生恥態	(田中芳代)
Z65	白肌全裸縛り	(絹川文代)
Z66	強制的開股縛	(絹川文代)
Z67	強烈的全裸晒	(愛川悦子)
Z68	亀甲乳房責	(梨花悠紀子)
Z69	ベッドの悶え	(愛川悦子)
Z70	恥しさに耐えて	(館典子)

女人切腹秘話

勝子の方最期

堀川七郎

私の友人和田君の家は山梨の旧家である。

時々仕事の息ぬきに都塵を避けて彼とざる囲碁を楽しんでくるのが私の習いである。

今年も又、押しかけ客とのりこんで腕前より舌が達者の囲碁を数局、さすがに疲れて雑談に過すうち

「そうだ、去年の暮土蔵の中を整理したら、こんなものが見つかった。」と言って彼は一枚の古文書を持って来た。所々紙魚食いのあるうす茶けたその紙片を一読した私は嬉びをかくせなかった。

——世に知られずに埋れた凄烈な女人の姿がここにもある——私の脳裡には次ぎ次ぎとそ

の有様が書き出されていった。

——その古びた文書には次の様に記されていた。

「佐久右京大夫春行室勝子方疵改並首書」

「おっ、あれは……」

朝霧の晴れ上った丘の上の物見の兵の一人が叫んだ。

「うむ、騎馬武者が二騎……はてな。」

「む、さては敵せずと見て降参の使者か。」

「かもしれぬ、とにかく、御本陣へ知らさねば。」

丘の上の物見の隊から伝令の兵が馬に鞭を

当てた。

時は戦国動乱の最中、群雄各々その勢を競い合い、朝に一城落ち夕に又一城開く、今日勝つと思えば明日は敗れるという変転定まらぬ明け暮れの日である。

信州の豪族佐久右京大夫は甲斐武田の一門大月弾正の兵に追われ追われて、今や八ッ岳山麓の一隅に形ばかりの砦を築いて立てこもり滅亡の寸前にあった。数度の合戦にもはや兵も少く、一族全滅か、はたまた降伏か、その運命は風前の灯である。物見の大月方の将兵がさてこそ降参の使者と察したのも無理からぬ事であった。

やがて知らせに答えて本陣より馬を飛ばせて来た侍と、先程の使者らしき二騎の武者が何やら話合ったと思うと駒を並べて弾正の本陣の方へ馳り去って行くのが望見された。

「うむ、確に降参の使者じや。こうなつては仕方もあるまい。」

「気の毒じやが佐久氏もこれまでか。」

さすがに豪族の末路を憐れむか、物見の達兵も彼方へ去って行く人馬の姿を言葉少く見送るのであった。

二

「なに、降参の使者と。」

「はい、只今佐久右京大夫殿令室勝子の方侍女一名をつれて見えられましたでございます。」

「右京大夫の室と……女な子が参ったというのか。」

「はっ」

「それはまたちと解せぬ……まあよい、使者とあらば鄭重におつれ申せ。」

やがて女の使者と聞いていぶかる大月弾正の前に現われたのは武者姿でこそあれ、まごうかたなき女性二人であった。近国にも美人の誇り高い右京大夫の奥方、勝子と、その侍女は血なまぐさい戦場に時ならぬ華やかさを画き出した。

「……」思わず息をのんだ弾正は併し、「右京大夫殿の御使者とな。」と太い声で尋ねた。

「はい。私は右京大夫が妻、かつ。またこれなるは私の侍女にござります。弾正殿に御意を得たくまかりしました。」と声はさわやである。

「むーして。」

「この間よりの数度の合戦、力戦すると雖も及ばず今日の有様。このまま更に戦さに及べば将兵ことごとく討死は必定、もはやこれ迄と存じ何とぞ降参の上、将兵の一命助けたくお願いに出ました。」

「いや、今日迄なかなかの御手並、弾正も敵ながら天晴れと存じ居った次第。なれどかく相なつては致し方あるまい。これも運命でござろう。さて降参の儀はさりながら、その時は一族方の主たる方の一命に代える習わし、よもお忘れではあるまいな。」

「はい。もとよりその覚悟にございます。」

「右京大夫殿には御覚悟あるとな。」

「その儀にござります。女の身もはばからず推参仕りましたのは。実は……」と勝子の方は口ごもった、

「実は、どうなのじや」声を改めた弾正に

「はい。実は、右京大夫は久しく病い、合戦の始りました頃より戦さの模様を心をもめ居りましたが、打つづく負け戦さに病い重り、既に亡き身にござります。」

意外の言葉に驚く弾正の顔を見すえながら勝子の方は憶する色もなく言葉を続ける。

「当主を失ったとは申せ、そのまま離散致しては烏合の衆と言われます。それでは佐久の家の名が汚れます。右京大夫亡き後はとりも直さず私が主。佐久家の当主としてわが一命に代え部下の者共に助命の程願ひ上げ奉ります。」と手をつかえて申述べた。

「ふーむ、右京大夫殿にはお子が無かったのう、そう申せば……」

しばらく手をつかえた奥方の白い首すじを見やっていた弾正は

「となると、奥方が腹を召さねばならぬ事と相成るが——」と言った。勝子の方は予期していたかの様に、つ、と顔を上げると、

「女ながらも佐久の当主、決して見苦しき様は仕りませぬ。御面前にていさぎよく腹を仕る覚悟にござります。」と言いきった。決意の程を見せたその顔には、うすく血の色がさしていい様もなく美しかった。

「よし、相解った。如何にも奥方の一命に代

え部下の方々の命は問わね。早々に退散され
い。当主殿、お腹の儀は本日申の刻、場所は
(女人の腹、おれ)

貴殿砦の内と致す。」

言いすてると弾正はすつと座を立てて行っ



三

た。右京大夫既に死去とあれば、もはや佐久
の家は亡んだも同然、この上の戦さは事実上
無用、女の身で敵将のもと迄乗りこみ切腹と
までの覚悟を見せた意氣に感じた弾正は、そ
うは言ってもよも女の身で腹も切れまい、の
がるるなればそれもよし、敢えて追うまい、
と考えたのである。

三

二騎の女武者が砦へ馳せ帰るとしばらくし
て、手負いの兵や、女房達の一団が互に助け
合いながら、はるか北の方——信濃の奥地へ
と落ちて行くのが眺められた。砦の内は人影
も無くひっそりと鎮りかえって見える。昨日
までの戦さの匂いに満ちたそれとはうって変
ったそれは静かな景色であった。陽が廻って
西の方に輝き始めた頃、よもやとは思ったが
武士の約に従って弾正は軍監塩川勘兵衛と馬
回りの武士二名を共に砦へ駒を進めた。砦の
入口までくると、既に弾正の来るのを何処か
で見ていたものと見え、一人の年老いた女が
近づいてくると、

「奥方様にはお待ち受けでございます。どう
ぞこちらへ。」と一礼して砦の内へ一同を導
いた。見るとゆい廻らされた柵の向側に白い
幔幕が張られ、その中には白無地の逆屏風、

白い絹でおおわれた切腹の座がしつらえられてあった。思はず足を止めた一同の前に幔幕のかげから

「御検視御苦勞にござります。只今それへ」

と勝子の方の声が聞えた。切腹の座に向い合った牀几に彈正以下の者が腰を下すと幔幕の裾を上げて入ってきた勝子の方は、先程のりりしい武者姿に髪を後に長くすべらかし白無垢に黒帯、白の袴襦の死装束にうす化粧のいでたちである。足どりも確に切腹の座に上ると正座した勝子の方は一礼して手を打った。先程の老女が腹切刀をのせた三宝を両手にささげ持って静に幕の内に進み入ると奥方の前に置いた。奥方は袴襦をぬぐと老女の手に渡し

「幼少の頃より長らく御苦勞でありました。

これを形見に進ぜるほどに、はや落ちゆきやるがよい。」と言った。

「奥方様お一人で御最期とは……」と後は涙に声も続かぬ老女をやさしくなだめる勝子の方の目にもうるむものがあつた。やがて目頭を押さえて老女が去って行くと

「お恥しい様をお目にかけてまして恐れ入ります。」と座を正した奥方は稟とした声音で、

「さらば腹を仕りますれば御見届け下されま

せ。介錯御無用。」と言いつてると、胸高にしめた黒縹子の帯をするするとほどいて後に投げた。彈正以下見つめる顔もひきしまる。

二十五才の豊かな体は白の細帯一つにとめられてゐる。勝子の方の手が白無垢の襟元にかかった。覚悟の上とはいえ女人の身として肌を白日の下にさらす今、さすが氣丈の奥方にも瞬時のためらいが見られたが、それもつかの間、さつと襟を左右にくつろげると右肩をすつとぬいた。ついで左肩もはずすと膝を立てると袖を太ももの下へはさみこんだ。

腕を伏せた様な両の乳房の先には桜色のつぼみが尖り、鳩尾からもり上った腹にはよく脂肪がのってひきしまった肉は弾力に満ちてゐる。例座の者が息をつめて見守る中を勝子の方が憶する色もなく細帯に手をかけると女盛りの体をつつむ白無垢をぐいと押し下げると、はりきつた腹の中程に臍が形よくきれ長にくぼんで蔭をつくっていた。その臍下三寸近く、十分に下腹迄大きく腹をむくと、わが腹を愛しむかの様に目をとちて一度、二度、三度、とゆっくり両の掌で勝子の方は臍から下腹の辺りを撫でた。胸から腹への曲線が息づく毎に微妙にゆれる。

白布を巻いた三宝の上の腹の切刀は切先二

寸ばかりが冷く照り輝き寸刻の後に血を吸おうと構えている。白絹の座の上にはやや西に傾いた陽ざしが赫々と既に紅の血を思わせる様に染めている。しんとした高原の氣は一段とひややかである。

すーつと影が動いた。勝子の方の右手が、三宝にのび白刃をつかんだ。

無言のうちに緊張の氣が座に張る。九寸五分の中程を逆手に握ると左の腰骨のやや上辺の傍腹にぴたりと切先を押当てた。ぐーつと腹の皮が凹む。

ごくり、と彈正の供の若武士の咽喉が思わす鳴る。しばらく氣息を整えていた勝子の方の顔にさつと血が上って朱か見がさした——と、

「うむっ——」

低いがずーんと体の中迄滲みこむ様な氣合と共に、ぐいっと刃が右に引かれた。すつと輝いていた切先が肉の中に吸われ、堅く結んだ唇がゆがんだ。力をこめた右の拳に左掌を重ねると更に一押し、腹中につきこんだ。二寸近く刃がつきたつと右手に刀を握り左手で刃の背を押す様にしてじり、じりと下腹を引きまわしにかかる。

——ぶりっ……ぶりりっ……

豊かな腹の皮肉が割かれる不気味な響——
一寸—二寸—一文字に引きまわす刃の切口は、肉がはじけて白い粟つぶの並んだ様な脂肪が現れたかと思うと、す——とうす紅に染まり、更に真紅の条となり、たらたらと筋を引いて白無垢のひだに朱の点を作ってゆく。

顔色がやや蒼白気味なのは、さすがに争えない。目はかっと見開られ、眼光はすさまじい。上体を少しうつむきかげんに全身の力を両の手にこめて切りまわす刃は臍下から既に右の横腹に移っていた。肩先が少し喘ぎを見せてきた。流れ出る血汐は、そう多くないが下腹から白無垢を朱く色づけ座をおおった白絹の上にも点々と落花の様を見せている。

やや荒い息づきながら唇をかみしめて呻き声一つ上げず、見事に下腹を一文字に右傍腹まで引ききると、刃を腹につきさしたまま左手を膝につくと、「ふ——」と大きく吐息すると顔を上げた。目の縁にはうっすりと暈が現われ死への近づきを見せていた。切り割かれた下腹の傷口は一寸ばかりくわっとはせて柘榴を思わせた。勝子の方は視線を落して切り口を一寸見ていたが、瞬間——

右の傍腹につたったままの刃を、ぐいっ
と捻ると右から左へぎりぎり——と一気に逆

に引きまわした。既に分厚い肉の大方を割かれた奥方の腹は返す刃に一たまりもなく破れた。どっと溢れる鮮血、その中にチラと灰青色の腸がのぞいたと思うと右横腹から臍下へかけてだらりと一条はみ出て来た。

「う——むっ」

この深傷にさすがにたまらず苦悶の呻めきを上げると、ぐ——と胸乳をそうし上体をのけぞらした。切り口はがば——と拡がり、ぞろぞろと臓腑が続いてはみ出し下腹から膝の方へ垂れ下って来た。苦痛をこらえる美しい顔、喘ぐ息に波うつ乳房、血汐と臓腑にまみれた円い腹。割腹美の極みである。

勝子の方は、小きざみにふるえる手を伸ばし、腹切刀の載せられていた三宝を引きよせると露出した臓腑をたぐりよせ、その上にのせた。血にまみれた腸が三宝の上にひくひくとうごめいた。

「こ、これを——引出物に……」

苦しい息づきながら勝子の方は、そう言う
と、ぱったり両手について頭を下げた。

「見事！ 確に引出物、受取ったぞ——」

弾正の声も奥方の目ざましい割腹ぶりに感動を示していた。その言葉を聞くと奥方は失われてゆく力をふりしぼると再び体を立て直

した。血の気は全く失せ、顔はすき透る様に白く、目の暈はいよいよ濃く、断末魔の相である。唇につけた口紅の色のみが異様に生々しい。刃を腹から引きぬくと血に染んだ切先を左乳の下に向けた。刃がぶるぶるとふるえているのは既に残り少い命の印しであろう。喘ぎながら白刃をふくらみの下に押し当てる「御免——」と、叫びにも似た声もろともがばと上体をつつ伏せた。

「ぐえ——と……」と咽喉をならすと奥方の体は、どうと斜め前のめりにのびた。白無垢の裾が翻るがえりすなりと形のよい脚がびくびくとけいれんとすると太股の辺りまで裾がまくれ上った。疵改めに臨む女のたしなみの股化粧がどこされてあった。折から赤い西日に一段とそれはなまめいて既に骸となった勝子の方の体は尚生命あるものの如くに弾正達の目にまぶしく映じていた。

先の疵改並首書には次の様に記されてある。

一、左乳下 幅一寸 深三寸 心ノ臓ニ及ブ止メ也

一、臍下一寸三分 右腹ヨリ左傍腹ニカケ幅

八寸七分 深二寸五分 切口ヨリ臓腑

切腹也

一、首級 一勝子殿首 搔首也

小説

十字架の妻

(続)

竹谷十三作

酔った末、遂に、お光と割ない仲になってしまった星夫は、精神的に苦悩の日を送って居た。一方こうした事を知ったお里や姉達は寧ろ、大喜びだったらしく、その後、余り智子を激しく責める事もなかった。と言っても目に見えない様な虐待は、数限りなく続けられて居たのだ。

割合に平穏な日が続いて居た。星夫は、お光とは、あれ以上、絶対に関係すまいと努力して居たが、これはなかなか困難な事でもあった。

経済的に豊かな山本家では、平面は美しく着飾った女出入りも多く、楽しそうだった。

その中で、何時も、粗末な姿で居るのは、和子と智子だけなのだ。和子は、金をためる以外に興味はなく、自分の好みでして居るのだが、まだ、若々しい智子には、本当につらい事だった。特に、良子の派手好きは、驚く程で、ダンス、音楽会と遊び歩いて居た。そして、こうした会と一緒に出られるのは、お光で智子は女中以下の生活をさせられて居た。

ある日の事、珍らしく、良子が智子連れ、友達の家パーティーに行くと言い出したのだ。これには怖ろしい計画がある事を知らない智子は、お里や良子の言う通りの仕度をして行った。

智子の着た夜会ドレスは、蠟で止めて作られてあったのだ。向うへ行き、暑い程の部屋に居る間に、蠟は溶け、ドレスはバラバラになって来た。良子もその友達も、始めからこの事を承知の上で、智子と呼んだのだった。その席に居る男女の客は、手を打って大喜びをした。それだけではなく、何の気なしにした良子のくれたズロースは、紐が特別の結び方になって居て、どうしても取れないのだった。生理的な苦悩と恥しさに、智子は死ぬ苦しみも味合わされた。

こうした遊びは、その後も幾度か、姿を変えて行われたばかりでなく、智子是有閑男女

の趣味の犠牲とされる事さえあった。

「それでも、出て行かないの」と言うお里を始め、姉達の迫害が強くなればなる程、智子の強情さも強くなって来た。智子は、意志薄弱な夫はあるが、星夫を限りなく愛して居たし、子供も可愛かった。たとえ、殺されても、この家の嫁として死ぬのだと智子は、固く決心して居た。こうなると責める方も、間違いの様になって苛立って来た。

次々と、新しい責苦が考えられて来た。産後五カ月もすると、乳の出が細くなって来た智子に対して、もっと乳が出る様にと、牛乳や水物をぐいぐい飲ませる責め方も始められた。毎晩、乳の出が細いと言っては、赤ん坊に飲ませようと、理由にもならない事を楯に、拷問が繰返えされるのだった。

この頃では、二階の寝室には、お光と赤ん坊が移り、下の六畳に智子が一人で寝かされる事になった。気の弱い星夫は、こうした事に対しても母や姉に反抗出来ないのだった。

お光は、完全に奥様気取りで居た。

お里達は、これでも満足しないで、次々と智子を恥しめる計画を立てて居た。それは、お光に智子を責めさせる方法を取った。

「智子！お前は家から出ると言うなら、星

夫と別れると言うなら、お金もやろうと云ってゐるんだよ。それでも、ここに居たいと言うなら、今日からお光の奴隷におなり。お光の命令は、私の命令と思って、何から何までする気があるかえ。お光は今では、本当の星夫の妻なんだよ。お前は、ここに居る間は、人間ではないんだよ。」とお里は、ある日誓言をした。

「ハイ、私は、夫が別れてくれと申します迄は、夫と別れません。」と智子は、拷問台の上でキッパリと言った。

その日は星夫が居ないのをよい事にして朝から奥の間で、かわるがわる拷問にかけられて居た。お里から「別れる！別れる」と一升、二升と水をゴム管で飲まされ、両手、両足を縛られ、臨月の様な腹になりながら、智子は頑張って居た。

「そんなに、ここが好きならいいさ。まあ、もう、一時間も、そうやって考えるんだね。お光の奴隷になるか、今日直ぐ別れる事にするか。」

お里は、そう言って部屋を出て行った。

とうとう智子は頑張り通してしまった。根負けをしたお里は、拷問をやめ、台から降した。

休む閑もなく働きに追いやるのだった。身動きも自由でない智子は、水責のためふくれた腹部には、平素着せられて居る男の作業ズボンは入らなかつた。それを無理に締め、男の上衣を着た。智子は、近頃全く下着を着る事は許されなかつた。フラフラの体で智子は御不浄に行く事が許されたのだが、働きながらも、何度も何度も行かねばならなかつた。

昼間は、人目に触れたり、働かせる都合で智子は、作業衣を着せられるが、夕方からは大抵の時は裸にされ、夜は六畳の部屋で足枷をかけられるのであった。

その晩、茶の間では、お光を家族の一員として迎えると同時に、智子が女奴隷として、今後しなければならぬ数々の規則を決める式が行われるのだった。

正面にお里が坐り、和子と良子左右に坐って、横にお光と、これに向って裸で後手に縛った智子が坐らせられた。

「さあ、お光さん、今夜から、あなたは、もう女中ではなく、星夫の正式の嫁として取り扱います。あんたが、山本家の嫁になれるかどうかは、この女の扱い方にあります。この強情な女は、自分では星夫の嫁だと思つて居るのです。この大それた氣持を治す事がある

たの仕事の一つです。殺さないなら、どんな無理な事でもさせていいですよ」

お里は、冷たい調子でゆっくりと言った。

「ハイ、解りました。では、申しますが、まだ、奥様方のやり方は、お優しいやり方だと思えます。第一に、私は、この女を私達の室で寝かせて下さいまし。第二、これからこの女を呼ぶ時に名前ではなく、何か下品な言葉で呼ぶ事にしたいと思います。」

お光は、真顔で言うのだった。お里達は賛成だった。

「まだ、あります。私の一切の世話をこの人にさせたいと思います。勿論、奥様やお嬢様のお世話をさせる外に、それから、乳搾りは私が致しますし、もっと日課の責め苦を考えたいと思います。」

さて、智子を何と呼ぶかとなると、いろいろ考えられたが、余り下品な名では、人前もあるからと、矢張名前を呼び、子の字を取りトモと、呼び捨てにする事になった。それから、皆で協議した十ヶ条の規則が作られ、それを一つ一つ守らされる事を智子は約束させられるのだった。

先ず、四人の女は、智子を奥の拷問室に引きづって行くと、両手両足を拡げて立膝のま

ま坐らせられた。両手は天井から下げられた細引で、手首を縛られ、拡げた立膝の膝の裏には太い棒が入れられ、その両端には、和子と良子が乗って、天井の綱を握って立った。お里とお光が、前に立ち、一条毎に誓約をさせられるのだ。若し、少しでも返事が遅いと二人の持つ竹の細い棒は、智子の乳房や腰部をぐいぐいと押したり、ビシリと打ったりした。

「第六条、どんな事があっても、星夫と二人で話しをしない事。星夫に話しかけられても返事をしない事。若し違反したら刑罰として灸責を受ける事」

「……」

智子は、この条文は、どうしても「ハイ」と承知しないのだ。

「約束出来ないと言うのかい。よし、お光さん、その戸棚にある革の乳当を出しておくね」とお里は言った。

お光は、始めて見る責め道具に目を見張った。巾の広い革帯の様なもので裏はザラザラとした革がついて居た。

「さあ、承知しなければ、仕方がない、これだよ」とお里は、智子の乳房にこれを当て、後へ廻った。お光が見て居ると、革バンドは

背中では太い紐で編上られ、その結び目をお里は、ぐいぐいと締め始めた。

「ウウ……アッ……」と智子は唸き出した。

「さあ、これでも承知しないのかい」

「アッ……ア……」と智子は、歯を喰いしばって唸った。どんなに苦しいのか、お光には解らなかったが、寒い冬なのに、智子の額には汗がにじみ出て来た。

そのうち、智子は、ガククリと首を垂れて失心してしまった。

「仕方がないね」とお里は、背中の紐をゆるめて、革の乳当を取った。二つの大きな乳房は、ゴムマリの様に飛び出て来た。今迄白かった乳房に赤味が加わって来て、美しく桃色になった。お里は、台の上にある注射器を取ると、片方の乳房を握み、ズブッと気付け薬を無雑作に注射した。

「ウーン」と智子は、気がついたらしい。

「さあ、どうだい、約束するかい、それとも又、これかね」とお里は、智子の目の前に革バンドを示した。智子は、低い力のない声で言った。

「お約束します。もう、かんべんして……」
「だから、始めから言ってるだろう。では規則を守るね。……よしよし、では、次……第

七条、お光さんの事を奥さまと呼ぶ事。何を命令されても、喜んでする事……」

「ハイ……解りました」

智子は、コックリをした。

「第八条、便所、食事、風呂は、すべて、私達四人の誰かの許しを受ける事」

「……」

「何故、返事をしないのだよ。不承知なのかい……」とお里は、竹の鞭で太腿をグイッと刺した。

「アッ……ハイ……解りました……」

「第九条、外出や外部の人と口は絶対にきかないばかりか、庭にも出ない事……」

「ハイ……」

「第十条、一切ものを書く事、読む事は許しません。唯、こちらから命令した時は別」

「ハイ……解りました……」

「よし、和子……許しておやり……さあ、皆も、この規則が、どれだけ守れるかトモを充分監視して下さいよ。」

この日から、智子の奴隷生活は文字通り始まったのだ。

星夫は帰宅して、母達から十ヶ条は見せられなかったが、「この女が家から出ると言う日まで奴隷として置きますから、一切口出し

をしないで下さい」と再び厳命された。お光が傍にびったりとついて、甘えた調子で星夫の気持を掻き乱し、無理に認めさせてしまったのだ。玄関に入るなり、お光が囁いた言葉「ねえ、私あんたの子供が出来たらしいわ」と言った言葉が、星夫の気持を掻き乱してしまったのだ。しかし、この言葉は、真赤な嘘で、実は、お光達の創作だったが、星夫は、そんな事を全く知らなかった。ある意味でやけになった星夫は、どうでもなれと智子の事を認めてしまったのだ。

ある晩の事だった。近頃は、毎日の様にやけ酒を飲んで来る星夫、十一時過ぎに帰って来た。家中は暗かった。玄関に鍵をかけ、二階の寝室に入ると、スタンドはつけばなしでだらしなくお光は眠り込んで居た。

「オイ、帰ったぞ！」と大声で言っても、お光は、寝返りも打たなかった。

「お帰りなさいまし」と隣の三畳の納戸に居る智子の優しい声がした。星夫は、洋服を脱ぎ捨てると、ソツと隣の部屋に入った。薄いせんべい蒲団に智子が寝て居るのだ。智子はニツと淋しく笑った。起きたくても起きられないのだ。星夫は蒲団を取った。例の如く、智子は、乳当だけで、両手は胴に細引に縛り

つけられ、両足は木の足枷をつけられて寝て居るのだ。

「可愛い智子」星夫は、熱い接吻をした。そして、そっと、手を解き、足枷を取ろうとした。

「いけません……私……怖い……」

「ねえ、智子、僕は、決心したよ。お前と逃げよう。二人で遠くへ行つて暮すのだ。そのために、僕は実は金を隠してためてるのだ。もう、一年待ってくれ……」

「……」智子は、嬉し泣きに泣き出した。

「ねえ、それまで待ってくれ……」

星夫は、力一杯智子を抱いた。夫婦は、何カ月振りだろう、こうして正常な抱擁をするのは。乳当が邪魔だが、これは取らない方がいい、星夫は我慢した。

「希望を持ってね……」と星夫は、再び、智子の足に枷をつけ、前と同じ様に細引で手を縛りながら言った。

「大丈夫よ、頑張りますわ。私は信じて居ます。」と智子は、隣を心配そうに見ながら低い声で言った。幸に、お光は、死んだ様に眠って居た。こうした二人の秘密の楽しい機会は、珍らしい事だった。

春も過ぎ、夏になった。智子の乳は、全く出なくなったので近頃は乳当も取られ、乳搾りの拷問もなくなったが、それに代わる日課の責めはいろいろと工夫された。冷水浴とか、アクロバット式の体操等があった。処が不思議に、智子の美貌は衰えなかった。寧ろ、こうした拷問は、彼女の若さをつくり上げる逆効果さえあった。痩せては居るが智子が芯が丈夫なのか元氣一杯だった。奴隷生活を従順に務めて居た。社交好きな、女達は自分の生活に夢中になって居て、案外、智子のこうした変化に気がつかなかった。結構、苦しませて居ると満足して居た。唯、和子だけは、大抵家に居て蛇の様に智子を監視して居るので、こうした拷問のやり方では、余り効果もない事を知って居た。和子は、本人を除くと一番早く、再び智子が妊娠した事を発見して居た。しかし、和子は誰にも言わず、時の来るのを待って居



たのだ。
遂に、誰の目にも智子が妊娠した事の解る日が来た。それは、丁度、星夫が仕事で二週

メチャにしまわなくては……」と和子がキッパリと言った。
「だけど、そんな事をして世間に知れたら」

間程出張して留守の日だった。お里も、お光も裂火の如く憤激して、裁判を開く事になった。久しく使わなかった拷問室には、一同が集まり、先ず真中に裸で直立不動で立たされた智子の体を熱心に調べた末、何時、こうした大それた事をしたか細かに白状させる事になった。天井から逆さに吊したり、例の草の乳当をさせたり、水責にしたりして、やっと「私が誘惑しました」と事細かに白状させられた智子は、もう、ぐったりと死んだ様に床に倒れて居た。
「私が油断したのだよ。お光さんに済まないね。どうしてくれよう……」とお里は皆に相談をした。

「だから私が言ったでしょう。あんな精神的な責めでは駄目なのよ。矢張、トモの体をメチャ

とお里は、考え深そうに言った。

「一生飼ひ殺しにするのよ。追い出そうと思
うから駄目」と良子がニヤニヤした。

「お母さんも決心しましたよ。今後は、その
方針でしましょう。だけど、殺す事だけは困
るからね……」

「ゆっくり、じわじわと責める方が楽しみが
ありますものね」とお光は、憎々しように智
子の腹部を蹴った。そして続けて言った。

「子供は、絶対に産せない事にしましょう。
腹違いの子供は一人で沢山……」

「本当にそうだよ。」では、手始めに、今日
は、お乳から、責めてやろう」とお里が提案
した。

「お母さん、それも、両方一緒でなく、今日
は左、明日は右と言った風にしましょう」

その日は椅子にがんじがらめにして右の乳
房だけを出した智子を四人は、ゆっくりと責
め出した。今迄と違って猿轡をして、どんな
に智子が泣き叫んでもよい準備をした。

「お光さん、あんたが第一番に復讐をしてや
るのよ」と良子が言った。お光は、くびられ
た乳房を掴むと、髪から簪を取ると力一杯ブ
ッリと刺した。智子は、ビクッと体を動かし
たが、叫び声は出なかった。ぐっと簪を引き

抜くと血がタラタラと白い乳房を流れた。

又、突き刺そうとするお光の手を和子が押
さえた。

「駄目ですよ。一度に、メチャメチャにして
は」

「そんな物より、これでチクチクやる方がい
いのさ」とお里は普通の針をお光に渡した。

暫くすると、乳房は血だらけになった。

「一寸、待って。血を拭いて、血止めの薬を
塗るから」とお里が言った。「今度は、少し
内股を責めてごらん、そのうちに、この血
が止まるから」

「では、私は指の爪に針を刺してみるわ」と
和子が、別の針を取って、手の指に刺した。
人の声と思えない叫びが、猿轡の間からもれ
るのだった。

拷問は、次の日も、次の日も続いた。蠟燭
で乳首を焼かれ、三日間には、半死半生にな
ってしまった智子は、拷問だけは許された。

しかし、次の日は、又水責めにされた。五日
目には、乳首と耳朶に穴を開け金の輪を通さ
れた。六日目は、釘抜きで体中を捻り廻され
たりした。星夫は、出張から帰ってからも、
智子は拷問室に監禁されたままだった。

星夫は、一日早く経済的に独立したいと願

訳の仕事等アルバイトに忙しかったので、智
子の身上を心配しながらも、何も言わなかつ
た。お光は、毎夜の様に星夫を悩ました。万
一、星夫が疲れて居るから等と言って拒んだ
りしたら、それこそ大騒ぎだった。それだけ
でなく、一家中総出で正式にお光と結婚式を
上げる事を強硬に主張し出した。智子の籍が
入って居ない事をよい事にして、一日も早く
お光の籍だけでも入れるとギャンギャン騒ぐ
のだが、この点になると意志の弱い様に見え
る星夫も、ガンとして聞入れなかった。

智子は、一カ月程して監禁が許され、前の
様に働きに出されて来た。傷もすっかり治つ
たのだが、前の様な元氣は全くなく、生ける
屍のようになって居た。余りの怖ろしい拷問に
精神が白痴の様になったのか、唯、オドオド
として居た。昼は働かされたが、夕方から拷
問室に監禁されて居たので、全く、星夫の目
に触れないと言っていたのだった。

ある夜、お光はヒステリックに星夫に迫っ
て来た。

「あんたは、どうしても結婚しないつもり」
「だって、僕には、智子と言う妻があると何
度も言ってるじゃないか。君と関係した事は
僕が悪かった。この点は……」

「そんな事開いてるのじゃない。フン、まだあの女が、あんたの妻になれると思ってるのね。よし、今夜、見せてやるわ。トモは、昔のトモじゃないのよ。あんたなんか見向きもしないで、この女王様の奴隷を務めるところをよく御覧なさい」

お光は、プイと部屋を出ると、暫くして、智子を引いて来た。文字通り、犬の首輪に鎖りで、四這いにさせて引いて来たのだ。

「智子、病氣じゃないのかい」星夫は、心配そうに言った。

「病氣なものですか、さあ、そこに立って元気に体操をして御覧」とお光は、首輪の鎖を取った。智子は芝居の黒坊の様に、手首から足首まで、黒い縫ぐるみを着て、顔も目だけ出した黒の覆面をして居た。そんな姿で、智子は、小学生の様に体操を始めた。一生懸命体操を続けて居るだけだ。

「止め！　ね、従順なものでしょう。今に段々、解らせてあげるから。さあ、口当だけ取って、私の体をお嘗め！」

お光は裸になって、床に横になった。智子は、覆面の口当を取ると坐って、お光の指を差す所をペロペロと細い舌を出してなめるのだ。「足の指を吸うんだよ」と言われると、

お光の足の拇指を吸うのだ。

「どう、安心して吸わせる程に訓練したのよ。さあ、今度はここだよ。上手になめるんだよ」とお光は、あらぬない姿をした。

「智子！　バカ、やめろ！」と星夫は叫んだが、智子はチラッと星夫を見ただけで、お光の膝をなめ出した。

「ホホホ……どう感心した。こんな女を奥様にして置ける……まだ、見せる芸があるの。一寸、待っててよ」

お光は枕下のコップを持って部屋を出た。

星夫が、智子に話し掛けたが、一言も返事をしなかった。お光は、部屋に帰るとコップに一杯になった黄色の水を智子に持たせた。「さあ、お飲み。飲むんだよ！」と鋭く言った。智子は少しずつ飲み出した。

「ホホホ……これなんだと思う。私のお小水よ。トモの大好物なのよ……」

「エッ！　バカ」と言うと、星夫は、智子の手からコップを奪い取った。

「そんな事しては、トモが困るわよ。では、そろそろ御覧に入れますかね。」

お光は、智子の上半身を裸にして、星夫の目の前に突き出した。

「さあ、お前の綺麗なオッパイを御覧に入れ

るのだよ。……どう、このオッパイ。これでもお好きになれますか？　この乳首は、焼きゴテで焼いたのよ。この穴は針の穴。こっちの乳首、ほら、横に穴があるでしょう。……でも、まだまだ苦しめてやる場所は、充分あるけど……」

星夫は、額に汗の流れるのを覚えた。智子は、ボンヤリとお光のされるままになって居た。顔は、全くの無表情だった。

「今度は、背中を見てよ。これは鞭の跡よ。さあ、立って、下半身をお見せ！」

智子は、黙って立った。そして、ズボンの様なモンペを取った。腹部はギリギリと白い布が巻かれて居たが、その他には何の下着もなかった。

「どう、あんたの、好きな処をよく御覧なさい。あの黒いのは、お灸で焦げた跡よ、凄いでしよう。……」

星夫は、お光の言葉よりも智子のふくれた腹部にじっと目を据えた。「妊娠して居る。それも七、八カ月だ！」星夫は、カーツと体の熱くなるのを覚えた。同時に、智子に対し

限らない愛情が湧いて来るのだ。星夫はある事を決意した。嘘でもいいから、お光と結婚すると言って、智子の責苦を軽くしてやり、

機会を見て逃げるのだ。もう金が貯えられるのなんのと言って居られない。

「お光解った。僕は、君と結婚する」

星夫は、お光の体を抱き寄せた。

お光も、母も、姉達も大喜びだった。氣の変らぬ間にと式も早目に決めた。お光の両親は、誰よりも大喜びだった。一度、お光を里に帰えし、再び興入れする事とした。

星夫は、何とか逃げるによい機会はないかと、そればかりを考えて居た。奥の拷問室に閉め込まれたままで、智子は一步も出て来なかった。

処が、結婚式の五日前の晩だった。もう、安心して切ったお里達は、女中を残して遊びに出てしまった。「チャンス」とばかり、星夫は、何とか和子を眠らしてしまう方法を考えた。女中は酒飲みだった。うまく話を進めて遂に、睡眠剤の入ってる酒を飲ましてしまった。九時頃には、女中はグッスリと寝込んで居る。お里達は、十一時頃でないと帰えられない。星夫は、前から用意した智子の洋服一式とトランク、それに金目の自分の持ち物を持ち、奥の間に行った。お里の寝室から鍵を取り、ドアを開けて内に入った。五燭の暗い光の下で、智子は、セッセと封筒貼りの内

職をして居た。これは、お里が婦人会から持って来たもので、智子の坐って居る左右には紙が山と積まれてあった。星夫が入って行つたのに、智子は顔も上げないで働いて居た。首には犬の首輪をつけ、鎖で柱に縛られて居た。乳から上は裸だが、腹部は例の如く白い布で固く巻かれ、机に向ってキチンと坐って居るのだ。

「智子！ 逃げるんだ、早く」と星夫は叫んだ。智子は、顔を上げて、星夫を見たが、何にも言わなかった。

「さあ、早く、洋服を着て！」

星夫は、犬の首輪を取った。そして腹部の白い布もといた。「ホッ」と智子は、大きな息をした。

「どうしたの、早く立って！」

と星夫は机をどけて、「アッ」と驚いた。智子は立てないわけだ。キチンと坐った智子の足は、一本づつ細い針金で固く縛られて居るのだ。針金は太腿の肉に喰入って居る。

「ウーム」と星夫は唸った。針金は、ねじって結んであるので、ペンチを使わねばならなかった。台所から、急いでペンチを持って来た星夫は、やっと針金を切った。長い間、坐ったままの智子は、針金が切れても、急に立

てなかった。

「可哀そうに！」と星夫は、優しく智子を抱き上げた。そして苦心して、スカートと上着だけを着せると抱いたまま部屋を出た。トランクも持つ事をやめた。智子は、余りの嬉れしさに、ただ泣くだけだった。

円タクで、友達の家に逃げ、前から借りて居た部屋に落着いた時は、智子は安心と疲労のため失心した居た。

その翌日から星夫は、智子の傷の手当、看病で会社にも出なかった。第一、会社に出る事は、家に居所を知られる事なので、当分行方不明の方がよかった。唯、手紙でお光とは結婚出来ない事、自分は智子だけを妻と思ってる事、当分家に帰らない事等を知らせた。

一カ月も過ぎると智子の傷は、すっかり治った。勿論、ひどい傷跡の残った所もあり、両の小指等は曲って伸せなかった。

智子の健康は、日に日に回復した。胎児もあんな拷問にも何の事もなく育ち、無事にお産が出来る日も近かった。

星夫は、家と交渉を始めた。お里達は驚く程ショゲテしまった。お光は憤慨して、もう寄り付かなかった。お光の両親に相当の金を

出さねばならなかったお里達は、やっとの事で世間体をつくろう事が出来たのだ。

智子は、無事に今度も女の子を生んだ。星夫達は、何時まで友達の家の間借りも出来なかった。第一、星夫の様な経済的に能力のないものでは、この生活は余り長く続かなかった。

「ねえ、矢張、お母様達と一緒に住みましょう

うよ」と智子は、片輪の様な乳首ではあるが矢張一方は乳が出たので、赤ん坊に吸わせながら目を細くして言った。

「バカ、今度、帰えると殺されるぞ！」

「でも、私、上の子と一緒に生活したいわ。

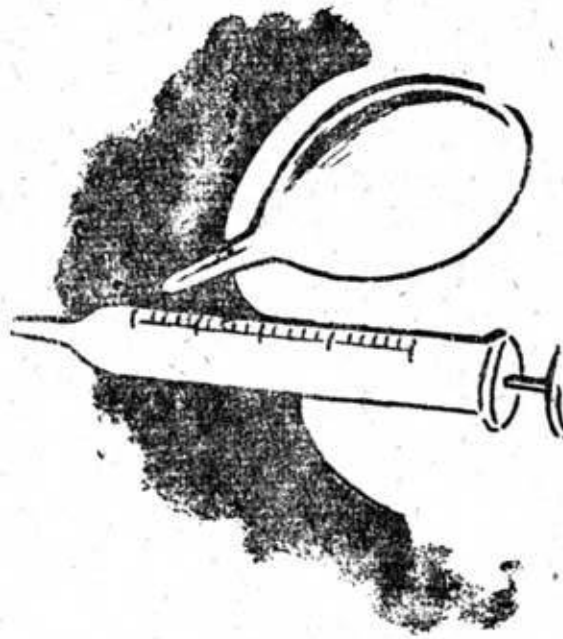
それに、又、いじめられてもいいの。お母様達も、もう前の様な事はない事よ。」

「どうか解るものか、もっとも……このまま

では生活も出来ないしなあ……」
星夫は、前の会社を蹴になってしまったのだ。

そして、三カ月目に星夫と智子は、再び家に帰って来た。お里達は、表面は優しく二人を迎え入れたのだが……。

(終)



△読者告白▽

浣腸の旨酒に酔いしれて

佐野圭子 (三十一才)

私は或る私立の女学院を出てから商事会社に勤めて三年になりBGです。この頃では、お仕事にもすっかり慣れてしまい、春秋二回の社員慰労会やボータスのあとの日本料理や中華料理の宴会の馬鹿さわぎにも馴染んで、ひとかどの先輩ぶりで独身の社員の品定めなんかも出来るようになった昨今です。

それだけに入社当時のあの毎日毎日が緊張の連続だった新鮮さも失われて、ちょっとした倦怠期のような気持なのです。結婚適齢期の私達同僚は、寄るとさわると結婚の話になります、割と今までのところ結婚を理由をやめる人は少いようです。

私は結婚ということを考えると、いつも自

分のかくれた性癖について悩むのです。それは本来、医療のために行われる『浣腸』ということについて異常なほどの関心といえます。執着を持っていることなのです。いつの頃から、このような気持を抱くようになったのか、自分自身でも、はっきりわかりませんが幼時に、特に何度も浣腸されたという記憶は

ありません。

少女時代の思い出としては、何ということなしにお便所に対して関心がありました。便所から発するあの臭氣に理由もなしにひかれるのでした。小学校の五、六年の頃、当時父の勤めていたゴム会社の社宅に住んでいたものでしたから、通学の行き帰りには近道をして工場の中を通りました。

途中に製品を運ぶトロッコの線路の脇に便所があって、その中の一個所の汲みとり口のフタがはずれていて、丁度夕陽がななめにさして、糞便壺の中がはっきりと私に見えました。人影のない、がらんとした工場の便所の臭氣が、私をひきつけました。

その頃から、私は便所、臭氣、ひいては排泄物などに興味があったのでしょう。その壺の中の新聞紙が赤く染っていました。でも、その当時の私は、それが何故赤く彩られているのかわかりませんでした。なんとなく魅力的に思われて、ふらふらとその便所へ入っていった用足しをしたのです。殊に、その汲取り口のフタのはずれた便所を選んで入ったというのは、壺の中をよく眺めてみたかったか、或は少女ながら露出症的な傾向があったのか、多分その両方の理由からだった

のでしょう。

私はその汚れ果てた便所の中で用足ししながら、異様な臭氣に酔ったのでした。排泄物に対する関心が、やがて思春期と共に排泄器官へ移行してゆきました。浣腸ということや浣腸器について知ったのも、この頃でした。辞書や百科辞典で、そういった言葉を引いたり、看護学教本とか、家庭医学大全とかいった本、或は婦人雑誌の附録などから、そういう浣腸に関する知識を探りました。

そういう本を古本屋の店頭で漁っている自分がなんとなく浅間しく、時には自己嫌悪から劣等感を覚えるようになりましたが、しかし、そういう本から得た知識をもとにして走らせる空想は、素晴らしい魅力をもって私を感動させ、やがては、そういう空想なくしてはとも自分の人生がないような気さえしてくるようになりました。

男の方と違い、まして娘の身であってみれば、あからさまに他人にそういう話をするなどとてもないことでした。この広い世の中で自分だけが、このような変わった趣好を持っているということが、おぞましいような気持ちでいっぱいでした。それでいて、夜、床の中へ入ってからの空想は、私をして甘美な花園

の中へと誘い込むのでした。

こういう矛盾した煩悶の中で過した数年、それがはからずも、お勤めに出て暫くして見つけ出した奇クによって、自分一人だけではなかったという安堵感に、まるでトンネルから外へ出た時のような気持を味ったのです。自分と同じような若い女性の方がいるということは、私にとっては本当に驚異だったので。それと共に、堂々と誌上に告白を発表された方々の勇氣に感心したのです。

今までのところ、私の浣腸に対する執着も読書と空想による範囲を出ていません。しかし、それが空想であるだけに、かなり広範囲に、しかも相当突込んだ場面まで及んでいるのです。例えば、浣腸される薬液を、ニトログリセリン（普通の浣腸液はグリセリン）のような爆薬にして、その先端に導火線をつけて点火するのです。

こんなことを空想する娘なんて、ちょっとどこか大変変っていますね。普通だったら狂人扱いされる位がオチでしょうけれど、愛読者の皆さま方でしたら、このような私も、お仲間に入れて下さるでしょうか。私は自分の未来の旦那様として、誌上のマニアの方を夢に描いています。

女性男装管見

— 回装から —

田 島 直 士

△1▽

三島由紀夫は、出世作「仮面の告白」で幼年時代、主人公が美しい青年に恋を感じる過程を、アイロニーとリリズムに満ちた筆致で描き出している。

その最初のエピソード（挿話）は、確か主人公が父の書斎で見出したジャンヌ・ダルクの画像に対して覚える恋情だったと思う。たくましい馬が疾駆している。若い騎士が剣を振りかざして馬にまたがっている。次の瞬間に騎士の死が控えている——と主人公は想像して陶醉する。だが後で彼は、この騎士が実は女性の男装だと知って失望し、呪わしい

気持ちにさえなる。というのではなかったかと思う。私がこの本を読んで惹かれたのは、三島の分身である青年が若く美しい騎士を恋情の対象として選び、それがジャンヌ・ダルクであったことだ。私の幼年時代、最初の恋の対象になったのが他ならぬジャンヌ・ダルクだったからだ。唯、三島の小説の主人公と私が違うことは、私はこの若く美しい騎士が女であることによって心から狂喜したのだったから。

字がまだ読めない時だったから、三才位だったろうか。私は美しい色彩の絵本を母から与えられた。頁をめくりながら母に説明して

もらうのが私の稚けない喜びだった。その絵本の一頁にジャンヌ・ダルクの像があったのだ。白銀色の甲冑に身をかためて、旗を高くかかげ、足を鎧にしっかり踏まえている。顔は崇高なまでに清らかで凛々しい。しかも、眉根にどこか幼なげな優しさ、柔らかさがある。その美しい騎士像に私の眼は吸い寄せられはしたが、母の説明で一瞬私は顔が熱くほてってくるのを感じた。

それまでの私は、女は優しく弱くて、男にただ素直に従っているだけの存在と思っていた。いや、その当時ではそう考えることが幼年に帰せられる誤ちとのみはあながち言え



ないと思う。一人の可愛いとさえ言えそうな女性が、男の陣頭に立って敵を滅す。その敵は今までどんな猛将によっても容易に撃退できなかったというのに。私はこういう恐ろしいようなことがこの世にあり得ることを啓示のように知ったのだった。いや、こういう分析的な理由付けは大人の賢しらといえよう。

「男の姿をした女性」への恋情を、そしてその後二十数年に亘る慕情の萌芽を、私の心に映画紙のように焼きつけたものは一瞬の間の火花にすぎない。「男の姿をした女性」――

「美しい馬上の騎士」――「剣と長靴と乗馬服をつけた女性」こうしたテーマの展開は後の様々な経験によって次第に付加され、純化され、抽出された要素である。男は愛慕の対象である、女性の原型(イドラ)を持っているという説がある。ある人には、それが姉であり、母であり、女教師である。そして恋人として選ぶのは、そうした原型のヴァリエーション(変型)に過ぎないというのである。私は、科学的な根拠はしばらく問わず、この説を愛好している。そして私のイドラはジャンヌ・ダルクであると、踏うことなく明言できる。

やはり、その頃の事だったが、私はある日一人表で遊んでいた。よく晴れて金属的に乾燥したような感じの冬の午後だった。こうした日には、何か自分の生涯の転機となる目くめるめくような事象が起るのではないか、遠い空から轟き渡る稲妻のようなものの訪れがあるのではないかという予感が、幼な心にならなかつた。

その時、この予感に答えるかのように馬の蹄の音が聞えてきた。やがて木立の間から一騎の乗馬者が現れた。それを見ると、私はその場に打たれたように釘付けになってしまった。胸の動悸が昂まってどうする事もできなかった。馬上の騎者はうら若い女性だったからだ。黒いビロードの上衣に、黒い蝶ネクタイ、白い乗馬ズボン、白いベレー、そして何よりも私の心をひきつけたものは、白いズボンの下の残酷のなまでに磨き上げられた黒い長靴、そしてその先に光る拍車だった。

馬上の美しき騎手は、あくまでも白い秋の花を思わせる顔に冷たく冴えた笑みをちらと浮かべたかと思うと、ビュツと鞭を鳴らして馬の脇腹を蹴り、速足で駆け去った。私はしばらく呆然と立ちつくした。

その夜は仲々寝つかれず、やっと眠りに入

ったかと思うとうなされ、その女の人に鞭で力一杯打たれる夢を見た。勇ましく、力強い女の人がこの世にいるのだということをジャンヌ・ダルクの絵本によって知った私は、この乗馬をする女の人によって現実にも、そういう女性はいるのであるという事を知ったのだ。殊に長靴からショックを受けたのはこういうわけだった。私の家の近くには陸軍の将校がいて、朝早くカーキ色の軍服に軍帽をつけて出勤していたが、その時はいつも黒光りの長靴を誇らしげに鳴らし、サーベルを光らせていた。この将校は、いかつい、いかにも男性的な人で、私はああいう人間が長靴をはくものだという固定観念を持っていたのだ。そうした「豪傑的男性」――「長靴」という結びつきが、この優しく美しき女騎者の出現ですっかり戸迷い、対立する、矛盾するものがはげしくぶつかり合うような衝撃を私の心に生み出したのだと思う。そしてそれ以来「豪傑的男性」――「長靴」という連想の鎖は断ち切られ「優しい美しい女性」――「長靴」という鎖が私の心の中に形造られたのだ。そして、赤ら顔でがっしりした軍人や、それに近いものが長靴をはいていると何とも不釣合いな感じがする一方、若い女性が

すんなりした足に長靴をはくとそれは最も適応したアクセサリ、いやそれ以上のもの、むしろ体の一部と化してしまったような気持になった。といっても、前者の組合せはうんざりする程目にするのに対して後者の組合せは、この時出会ってからはほとんど例がなかったのだった。したがって男の場合でもやさしい容姿をしている場合、特に少年から青年



になったばかりのような若い将校などで我慢をする事にした。断っておくが、これはあくまでも若い女性の近似値として少年を考えるのであって「仮面の告白」の主人公の習性とは真ッ向から対立しているのである。

こういう性向を次第に帯びるに至った私は革の長靴ばかりでなくゴム長靴に対しても、特殊な興味を示すようになった。これはもと

より革長靴の代償物としてではあったが。

△3▽

国民学校に入ってから私は、最初雨や雪の日に対して複雑な気持を持っていた。他人が長靴姿であるのを見るのは喜びであったが自分も長靴をはくとなると途端に白々しさが先に立って苦痛だった。自分は全くの「観察者」の立場に置かない限り、この喜びには浸る事は出来ないのだった。だから私は雨の降る日には、あれこれと言訳けをして下駄をはいていたり、ゴムの短靴をはいていたりして自分は客観的に女生徒や美少年の長靴姿を楽しんだ。丁度、戦争中なので今のよういろいろな色のブーツなどなく、男も女も黒一色の、文字通りのゴム長靴だったのだ。そういう長靴を重そうに引きずって歩く、細っそりした色白の女の子を見ると胸があつくあった。空襲がはげしくなったため、男生徒の半ズボンや女生徒のスカートが禁止され、男も女も長ズボンになった。そうなるとズボンと靴との関係、調和などで更に楽しい思いがした。更に私はただ一足の長靴がいたみ、しかも配給制などというもののために二度と買う必要がなくなったので、下駄で登校でき、雨や雪の日は、はたの者の同情とは全く逆に

喜び一色に塗りつぶされたのだった。

同級生に、フランス人形のように目の大きな、うっとりするほど、あどけない少女がいた。成績がよく、軍人の家庭だったのでかなり気位が高かった。服装も戦争中にはめずらしく、気のきいた物を着ていた。この女の子の長靴姿には胸をときめかせた。そしてある雨の日、私は一緒に宿題をやらうとさそいかけた。彼女はよく出来たが算数は私が一枚上わ手だったので、彼女は勝気な子に似ず承知した。そして私の家にやって来た。私は雨が上ってしまうのではないかと心配し、どうかそんな事のないようにと祈っていた。彼女は私の願い通り長靴でやってきた。そして長い間はいていたので足がふくらんで脱げにくくなった長靴を敷石の上で苦心してはずそうとしていた。私は手をかして靴を引っぱってやった。靴の中から真白な足が出て来た。むれてゴムの匂いがした。

私はこんな空想をした。彼女は女王で、今遠乗りから帰ってきたのだと想像した。私は下男で家庭教師、女王の長靴を脱がせて差し上げる。しかし女王は勉強が気に染まず、御機嫌ななめであり、とうとうこの不らちな下男兼家庭教師は女王の手で処刑される事にな

る。長靴をはいた両足をふんばった女王は細身の剣で私の胸を突く。私は痛みに苦しみながら身もだえる。又一突き二突き、私は悶絶する。

勉強が終ると私は自分が幼い時のあの絵本のジャンヌ・ダルクを見た。そして彼女が目を輝かせはじめたのを見てとると、こう持ちかけた。

「翠子ちゃん、ジャンヌ・ダルクごっこしようよ。雨が上ったから庭でしようよ。君がジャンヌだよ」

「ええ、いいわ」

彼女はのってきた。翠子は長靴をはいて芝生に出た。そして、オルレアン羊飼いの少女が神の啓示で解放軍を率いてイギリス軍と戦う場面にまで来た。私は一人でイギリスの兵士を演じた。そして竹の棒で打ち合いさせた。そのうち私は狡猾にも

「さあ、今度は敵の將軍だぞ、刀は折れてしまった。組み打ちだ」と叫んだ。翠子はすっかりこっちのペースにのせられて正面から組みついてきた。私はしばらくもみ合ったあと芝生に倒れた。翠子は細い体でのしかかり二人は二度三度、組みついたまま芝生を転がった。やがて長靴をはいた二本の足できつく私

の足をはさんだ。そして腕で私の首をぎゅぎゅうしめはじめた。二人とも息が荒くなりお互いの息がまじり合った。温い体温も伝わり合った。翠子は細い指先で私の体をつねりまわした。

「参った、降参だ」

「いや、降参はさせない、首をはねるわ」と言うとき彼女は竹の棒を私の首にあててぎしぎしこすりはじめた。そして靴で力一杯けりとばした。その痛いこと。しかし同時にうっとりした気持ちになっていた。

△4▽

陰気な性質の私には遊び相手は少く、絵本を相手に、空想にふける事が多かった。当時氾濫していた戦争物語に、こんなものがあった。中支戦線である。若い少尉が一個中隊率いて出撃する。そこへ、敵の戦車がやってくる。その少尉（A少尉としておこう）は実に巧みに兵を指揮し、何台かは爆破するが味方の兵も多く倒れる。すると放胆なA少尉は匍伏して敵の指揮戦車に近づくと忽ち戦車の上に躍り上る。そして驚く敵の指揮官や乗組員を一瞬のうちに斬りすてるが自らも傷つく。そして最早や助かる見込みがないと悟ると、敵に向かって日本軍人の大往生を見とどける

がいい」と大音声に叫んで、その場にどっかり腰をおろす。敵の血にまみれた軍刀を布で拭いたあと、腹に突きさす。そして十文字に切りさいた所で「えい」とばかりに臓腑をつかみ出して敵に投げつけ、絶命するというのがである。色彩の絵があり、丁度少尉が戦車に躍り上って青い軍服の支那兵を軍刀で斬り倒した瞬間を描いたものだった。斬られた支那兵は空をつかんで不様にもがいている。他の支那兵はすっかり取りみだして色を失っている。と少尉の顔は、……これが驚きだった。今でも私はその挿絵画家が私のために描いてくれたのではないかと疑う位である。戦争中すべて軍国調にというのがあった。すべて国策に添わすとの目的で、逆効果のものもあった。その頃より少し前にある少年雑誌の口絵写真に一頁、当時の人気スター川崎弘子が、軍服に軍帽という姿の上半身像がのった事があった。ズボンは乗馬ズボンか長靴をはいているかは想像する他はなかったが恐らく上半身だけ軍服を着て撮ったものではなかったかと思う。それはそれとしてこうした倒錯的な写真ものったのだが、この美しい川崎弘子の女士官の顔と、獅子奮迅のA少尉の顔がそっくり

りなのだ。戦争実話からとったのだから、Aは美少年の少尉だったのだろうが果たしてこんな優しい顔だったのだろうか。しかし、それだけに私はすっかり宇頂天になり、想像の翼をのばしたのだった。もし、これが本当に女だったらどうだろう。こんな事も絶対ないとはいえないではないか。ジャンヌ・ダルクのような女もいる以上。

△5▽

隣組で防空演習があった。比較的閑な職についている男が指揮者になって殆どが奥さん連中によって行われた。竹ヤリの訓練もこうした時に行われた。戦争末期になると防空防火よりも敵との白兵戦の練習などといって武術をやるようになったわけだった。大抵そうした場合の奥さん方の服装は防空頭巾にモンペ、地下足袋というの九十九%までである。ところが私達の隣組に若い美しい未亡人が越して来た。女子大国文科出の才媛だが、一見つんとした感じだった。帝大出の秀才と結婚したが、夫はそのまま陸軍少尉で応召、一週間で戦死という、はかない縁だった。ところが相思相愛の仲だったので実家に帰りもしないで、夫の家を守ることにしたというのだった。この未亡人が隣組の演習に出て来たのを

見て一同は驚いてしまった。上衣は背広型の二号国民服だったがズボンは軍服用の短袴で茶色あざやかな光沢のある、殆ど真新しい騎兵用の長靴をはいている上、腰には軍刀を吊っているのだった。そして髪を宝塚の男役のように短くして戦闘帽を冠っていた。

「奥さん、大変ないでたちですな」

と団長がテレ奥さそうに笑った。

「夫の片身ですの。夫の分もお役に立ちたいと思いましたので」

未亡人はきっぱりと答えた。涼しい声だった。

「本土にアメリカ軍が上陸した時には、これでやりますわ」

と軍刀の柄をぎゅっと握った。ほっそりした腰に軍刀は如何にも重そうで痛々しかったが一同はその気魄に吞まれた。女学校時代には武道をやった経験があったというだけに藁人形を相手の試合では大股に進んでいくと一刀両断に敵の首はころげ落ちていた。この人はあまりにも整ってつんとすました外観にも似ず優しい人で、私はよくなついていた。

「もしアメリカ軍が来て捕虜になりそうになったら坊やも一緒に死にましようね。あたしがあなたを斬ってあげるわ」

とこの人は刀を叩いて珍らしく熱を帯びた口調で言った。私は、アメリカ軍がやって来て私達が死ななければならぬようになればいい。この人の軍刀で斬られる喜びをわくわくして期待していた。敵を相手に大暴れに暴れ、力尽きるとあの人は私のそばに帰ってくる。

「さあ最期よ」

上気した顔で刀を振りかざす。痛み、死：私は、この人は私を斬ったあと、あのA少尉のように敵の前で見事に割腹するのではないかと思っていた。しかし、この人に斬られるという予想はずれた。戦いは終り、私は生きのびた。あの人はどうしたか。天皇の放送があった午後、あの服装で外出するのを見た人があるという。宮城前では何人かの忠君愛国の男女がさしちがえて死んだという。私はどうもあの人がこの中にいるに違いないと信じている。しかし、名前を知らない以上どうやって知り得よう。だがあの人は私の胸に生きつづけている。

△6▽

こうした、いくつかのエピソード（挿話的）に私が経験して来た女人像は今に至る私の女性の原型を作り上げて来ており、私の

性向をも、支配するようになったのだ。そして私の愛好する芸術（映画、小説、演劇、絵画）すべてが幾分かはこの物物の投射であることを免れていない。否、現実の女性に対しても、そのままではまる事なのだ。

私は、若く美しい女性を見た時、これに乗馬服、又は陸軍将校の軍服を着せた場合を想定して見る。そして、それに適合した時、心は強烈に揺さぶられ惹かれていくのである。以前谷崎潤一郎が女性を見るとまず眉を落してお齒黒をつけた場合を想像して、その似合うタイプを愛するということを書いていたのを記憶しているが、その尺度が私の場合は男装なのだ。これは乗馬服、軍服から更に十二月号に記したように手甲脚絆に長脇差ぶちこみ、太腿あらわという女俠客姿のヴァリエーションの形をもとて来ている。しかも奇妙な事に両方共通なものとそれぞれが別の場合とがある。白川由美、小畑絹子、久保菜穂子、浅丘ルリ子、岩下志麻、藤由紀子、小山明子、三ツ矢歌子、鰐淵晴子は前者の乗馬服、軍服型美女であろう。この中、浅丘は皮ジャンパーに長靴、ネッカチーフが似合うだろう。久保もこうしたラフなものがいいが、凝ったオーソドックスな乗馬服もいいだろ

う。白川、藤、小山は黒のシックな乗馬服の胸元から清潔なレースをのぞかせる。岩下、鰐淵は近衛騎兵のような赤や金色の刺繍や胸に竜骨のついた鮮やかな盛装に前立てのついた帽子、サーベルを持って貰おう。小畑と三ツ矢は陸軍の軍服、カーキ色のものに胸をバンドできつくしめ、肩からは参謀肩章を凛々しく掛けて軍刀を吊る。白の手袋をはめる。更に白川や藤はナチドイツの将校のような紺の軍服に舟型の帽子、腕に赤いブレイチ、ピストルを腰にぶら下げてもうてもいいだろう。鰐淵は又フランス十七世紀の三銃士のような華やかな服装もいいと思う。といった具合である。

一方、女俠客型に属するものは、どういうタイプのものがあるだろうか。まず宇治みさ子、近藤美恵子、浦路洋子、三条江梨子、松山容子、それに意外に思われるかも知れないが新劇の大塚道子である。いずれもどこかに憂愁を含んだような表情の持主がぴったりとしていると思う。

△7▽

この章では宇治みさ子を中心に書いてみたい。宇治は寂寥感のある顔立ち、小柄なひきしまった体軀の持主で、どちらかというと良

家の令嬢的なおとなしい感じの人である。名脇役田中春男の娘としてデビューも地味で可憐な娘役が多かった。男装をするというだけでもすでに倒錯的な興味があるのに「女剣戟王」などという大袈裟なタイトルまで冠せられて全部毛利正樹監督の演出で「謎の紫頭巾」「姫君花吹雪」「天下の鬼夜叉姫」「緋ぢりめん女大名」と立てつづけに四本、前髪若衆姿の男装となって活躍したのは大蔵社長の特異な視点であるがこれには先輩前田通子が裾まくりを拒否して代役が立てられるという偶然があった。一つのシリーズとっていい作品だが若衆姿にはそれほど新味がないのこのスタイルでは着ぶくれがして、背の低い彼女はころした感じになるのとで余り私には面白いとは思わなかった。ここまでは一応良家の子女的イメージを特にきつ破った企画とはいえないだろう。それが「緋ぢりめん女大名」の一場面に、ある親分の所に身を寄せた小夜姫がある武士を探すために着流しの姐御スタイルに身をやつすシーンがあるあたりからこうした事に敏な企画者大蔵貢には次作「大暴れ女俠客陣」の腹案ができ上りつつあったと見られる。つまり宇治みさ子に彼女の持ち味である固い、武家娘の品の良さとは全

くうらはらのくずれた女やくざをやらせて見るといふ冒険であった。昭和三十三年九月「緋ぢりめん女大名」が上映された直後、東京新聞の芸能欄では宇治にインタビューをしている。この記事で宇治は「今度はムシリのカツラをつけ女ヤクザの役をさせられますの。台本を頂いて読んだら一人で殴り込みはかけるタンカは切る、という凄いい役なんでしょう、どうしようかとこわくなっちゃって余りチャンバラをしていたらお嫁さんの貰い手がないんじゃないかしら」と記者に語っている。ここで私は次作では宇治が女俠客役をやる事を知らされて喜んだ。このあと九月下旬に発売された「近代映画」十一月号にはグラビア一頁を使って「男伊達・宇治みさ子」というタイトルで彼女のスタイルを紹介した。ごぼんじまの着物の裾をはしおり、たすきをきりりとかけ、白い太腿をあらわに出している。カツラは男物とはいえ、女である事を暗示する髪を長目に結び上げたもの、それに手甲脚絆をきりりとしめて、胸元からは匂やかな肌がこぼれ、白いさらし木綿が見えている。手には長脇差を中眼にかまえ、ハッタとにらんでいる。傍には三度笠と合羽が置かれている。何とも潔い喧嘩仕度だった。その凛々しさは

可憐といってもいいような容姿と合まって殉教者的な悲壮感を醸し出していた。日活と東映の御用雑誌のような「近代映画」としては大胆な紹介だった。この姿には、東京新聞のインタビューの不承々々のトーンは消え、この役に賭けた役者根性が現れていた。しかし、この捨身さが外から駆り立てられたものであることは悲愴な表情にもうかがえ、マゾ的なものとも考えることが出来て興味深いものがある。(前に高倉みゆきについて、藤山秀緒氏が、強いられた男装というとらえ方をしていたが、宇治の女やくざ役にも共通なものがあつた)映画は三十三年の十二月四週から三十四年新春にかけて封切られた。筋は以下のようなものである。

大利根河畔にある村に古い縄張りを持つ親分がいるがこれがもう中風で半身不随、後継ぎの長男(松本朝夫)は身体が弱く、新興の親分(阿部九州男)は縄張りを譲らせようとする。しかし松本の妹のお竜(宇治みさ子)は美しい顔にもかかわらず男まさりで彼女は剣道の達人、若侍(明智十三郎)と道場で相打ちになる位の本格的な腕前、明智とは恋人の間柄である。悪親分阿部は松本を亡きものにしようと刺客浪人(小林重四郎)をそその

かして殺させるが、お竜は小林が江戸に発つや、男姿になって後を追ひ、仇を討つ。その留守に父の乾分の一人(杉山弘太郎)が親分の若い後入り(魚住純子)と密通して親分を殺して駆落ちする。しかし途中重荷になった魚住を締め殺して逃げようとする所を、江戸から帰ってくるお竜とぶつかり斬られてしまふ。お竜が故郷に帰って見ると阿部親分が悪代官(芝田新)と共謀して一家の縄張りを奪っている。たまりかねたお竜は喧嘩状を叩きつけ、大立ち廻り、明智の助けで見事に阿部や芝田を斬るが代官の悪事がお上に聞えたのでおとがめはない。以上のような筋である。

次にこの映画のシーンを見ていく。最初は道場の場で黒のはかまをつけ、鉢巻をした宇治が明智と互角に打ち合っている。ここで宇治本来の武家娘のような格調高き折目正しさを出している。しかし、しばらく見てみるとお竜が真白な肌を見せて入浴している。浜野桂子の乾分役が背中を流す。めずらしく艶っぽい表情をする。ここでお竜の女としての美しさを出す。(宇治のはじめての入浴シーンだろう)次に、小林を追っていく所は「近代映画」のスチールの時の着物である。途中、ある賭場によってバクチをする。ムシロの上

に、きれいなむっちりした膝小僧を見せて坐る。(かなり肉感的である)しかし、いかさまで見破ると「なんでえ、いかさまは御法度のはずだ、承知しねえぞ」と伝法なタンカを切って壺を引っくりかえして暴れるが、ここで小林を見つけるが逃げられる。しかし江戸で首尾を果す。こういう凄む場面は宇治はつい分無理を強いられるようであったが、それだけ努めた演技だったと思う。最後の阿部一家との出入りでは宇治は仇討の時とちがって白無垢に黒いえりの喧嘩支度である。(たしか映画の広告で「男嫌いの白無垢鉄火」と書いてあった)そして河原で相手と斬り合いする。そしてバツバツと派手にやつつけるが例えば蹴り倒した相手を足に踏まえている所に後から突いて来た男の胴をぐっさり斬るといった具合で一度に三人片づけたりする。そして最後に阿部を散々に追いつめて力一杯斬り倒す。この間、応援の明智とは情の通ったような表情は交わさない。正に男嫌いの表現にピッタリである。いわば明智は添えもので宇治の復讐の道具なのだ。私は宇治に倒されていく男達を見ながらああ、あの一人になりたいと心から思った。そのためにならわざとすごんで小林重四郎のような残忍さを

持とう。阿部九州男のように野心も持とうとさえ思った。さんざん凄んで見せて惚れ抜いた女に斬られるとはなんと果報者よと思われるた。中でも気に入った死に方は卑劣な乾分、杉山弘太郎のそれであった。二人の命を奪ったとはいえ一人は半病人、それも女にそのかされてやった事であり、一人は女なのだから弱者の行為である。しかも手にかけたあとみじみなほどとり乱している。そして、おずおずしながら山道を逃げようとする前に恐りに燃えたお竜が立ちふさがる。あっと驚きへなへなとなりながら言い逃がれようとするが魚住との口論の一部始終を傍聴目撃していたお竜は許さない。「男なら男らしく刀を抜きやがれ!」と迫る。今度は泣き落しにかかるがこれも駄目。やけになってかなわぬと知りながら相手のすきを見すまして斬りかかる。「くたばれ!」小気味よいたんかを浴びせかけお竜の長脇差は杉山の肩口にざっくり。杉山はもがいて倒れる。お竜は血まみれのドスを握ったまま冷たい表情でひくひく地に最後の命をふりしぼってのたうつ杉山を見下す。この哀れな杉山の乾分役は私はよく出来ていたと思った。現代劇でインテリの容姿でかなりいい役をやる杉山がこの役についたものも

卓抜な配役だと思った。もっと普断は善良なもうけ役をやっているもの、例えば和田孝などだともっとよかったろう。このシーンは勸善懲惡のテーマを追い、筋の通った復讐のモラルに基いているようでありながら最も本能的残酷さが露骨に表現できていると思った。ここでは宇治みさ子が「女ヤクザをやらされ

てどうしよう」と思ったり「チャンバラをやらされすぎてお嫁の貰い手がない」ことを心配する、お嬢さん女優から無理やりに強くなされる段階を通り越えて男をせめ、さいなむことに本能的な情熱、快楽を感じる一個の悦虐者になっているのではないかと思う。

宇治みさ子はこの映画の後、加戸野五郎監

バンド・フォト雑感

安田高夫

女性にだけしか用のない品物、しかも月に一回訪れる女性の生理の処置にのみ使用されるメンスバンドに、男性である私が何故このように魅せられるのでしょうか。

私のようなバンド・マニヤにとっては、あの前開き式の月経帯は、月経という女性特有の生理の処置の為に作られたものであるという感が愈々深いのです。

最近、本誌より発売されたバンド着用フォトや、バンド着用の縛りフォトは、私達マニヤには、又と得難い全く素晴らしい贈物でした。あのフォトに着用していたバンド

は、前開きというよりも、股間全部をヌメヌメとしたバンド・ゴム・カバーに覆われた型の特別製の月経帯で、私達の共感を呼ぶこと大なるものがあります。

着用している梨花悠紀子さんは、又の大好きなモデル嬢ですが、私の好みからの欲を言えば、男性がバンドを着用し、悠紀子さんが着衣のまま、その男の傍に立っているといった構図のものがほしいです。

男が縛られて美しい女性から強制的にバンドを穿かせられているといった場面でしたら、どんなに素晴らしい事でしょう。若し

督の「剣姫千人城」に若衆姿で活躍したのを最後に同じ加戸野監督の「姐妃のお百」の主役を丁度、自分が偶然前田通子の役を貰ったように後進小畑絹子に譲って男装役とも、新東宝ともおさらばしてしまった。それだけに「大暴れ女俠客陣」は女剣戟王という名誉ある称号を貰いながら女やくざの役は一度しかやらなかった彼女にとって記念すべき金字塔であり、表面上は似ている数多いふざけた女やくざ映画の出演者達（中田康子、水谷良重、美空ひばり）と、この映画での彼女とは厳正に区別すべきである。この映画はこの種の類似作のコミカルな味はなく、全体に何ともいえぬ暗さ、陰惨さがある。かなり好色的な観点はあるとはいえ、この映画は単なるストリップ剣戟的刺激を指摘しただけのものはいいないものがあり、宇治みさ子という一人の女優も一個の研究課題になると思うのである。殊に大映に入って女役に徹したがぱっとせず、現在、映画界は退いてテレビの若奥さんなどをやっている彼女。今年の六月末、朝日の夕刊「気に入った顔」に登場して新東宝時代三十四年の正月（といえは「大暴れ女俠客陣」の封切られた頃だが）に撮した、美しい日本髪和装の写真について「当時、男

梨花悠紀子さんに支障があるようでしたら絹川文代嬢でも結構です。私達フェチスト、マゾヒストにとって、文代嬢こそ、その前にひれ伏したい程の女王様です。

素肌の上にじかに月経帯を穿かせられている哀れな男を立ったままでじっと美しくも冷たい視線で眺めている文代嬢、といった場面のフォトが私にとっては最高です。

そして、その哀れなバンドを無理矢理穿かせられている男に、私自身がなってみたいのです。もし、代理部の分譲品として、そのような構図でフォトを撮影するのでした是非私に、その哀れな男の役をやらせて下さい。いや、代理部に於てそこまで積極的な意欲を燃やしてほしいものです。

引続いて、東浦ひかる嬢のバンド着用フォトとバンド着用の縛りフォトが発売されました。いろいろの変った型の月経帯をいろいろに着こなしたフォトは、バンド・マニヤの私にとっては、悠紀子さんの時と同様に、非常な感動を以って拝見させていだきました。しかし今回も同様にフェチ・マゾヒストの私は、自分があのひかる嬢の穿いているバンドを無理矢理にはかされた

いという念の方が強かったのです。

従って、肉づきのよい東浦ひかる嬢がむっちりとした太股に喰い込むように、四つ這いになったり、股を大きく開いたりしたポーズの中に、自分を置き換えて見ているのです。月経帯そのものに対する憧れが、他の方々とは幾分違うように思うのです。

読者の中のバンド・マニヤの方々にお伺い致します。皆さま方は私と同様に若い女性の使用するバンドに対して強い関心をお持ちのことと思いますが、それは一体どのような形に於てなのでしょう。悠紀子さんとか、ひかるさんが、その若々しい全裸の姿態にバンドを着用しているところがよいのでしょうか。無理矢理バンドを着けさせられている娘の羞恥のポーズに魅力があるのでしょうか。若しそうだとすれば、私とは全然反対の立場になります。

バンドを着用させられて縛られた女性の構図からして、私は当然そういう予想を抱いていたのですが、他のマニヤの方々の御意見なり御感想をおきかせいただきたく思う次第です。SMF、どのような立場からでも――。

装が多く色気がないのかしらと歎いていましたので、私も女らしい姿をしたいと思って撮ったのがこの写真です」というようなことを書いていた。そして文の終り(テレビ女優)という断り書がついていた。丁度その朝、東京テレビ「お好み映画館」で「大暴れ女俠客陣」が放映されたばかりだった。(テレビ女優)たる宇治みさ子、というより田中春男氏長女、美咲子さんといった方がい位、家庭に入ってしまった。宇治みさ子は(女剣戟王)という肩書のついた、この映画をどう見たろう。何か皮肉な気持ちにさせられた。

△8▽

以上でこの稿は終りたい。このシリーズは私の材料の続く限り、想像力の続く限り、続けてゆく。△7▽のような映画や女優の特殊研究もやるつもりだ。

次に、さしあたって心に浮かんだ題材のテーマを予告する。読者の中で(特に藤山秀緒女史)このテーマの中で自分が扱いたいという希望のものがあれば自由に扱って頂いて良い。私は私なりに処理していくつもりだし、私とは別の面を強調させようとする人も居られよう。(例えば私は切腹にはさほど興味はない。)

(完)

愛^{あい}

の

惑^{まど}

い

被虐愛ざんげ

万田不仁

その年の八月半ば、思い掛けない日笠の訃報を受取った私は、休暇に入る前、大学の傍の喫茶店で

「これ、時間があったら読んでみませんか、まあ僕の日記、いや、手記かな、兎も角そういったぐいものなんです。君のような健康な人には縁のない、だが、結構奇妙な人生が覗けますよ」

と、翳った薄ら笑いを浮かべた日笠から押付けられた紙袋の中の大学ノートが、その儘書棚の隅に放ってあるのに気付きました。

翌朝、一番の汽車で、私は日笠が帰省中だった、その生家に向かいました。

汽車は長い海岸線を走り、日のなかの秋とは名のみの暑さを思わせる張りのある日差にきらめくライトブルーの海面を眺めながら、昨夜憑かれたようにあの大学ノートを読み了えた私は、日笠の突然

の死が自殺であるような気がしてなりませんでした。

日笠早雄と私は、同じ私立大学の哲学科に籍を置いていました。学生生活に意欲のなさそうな日笠に私が初めて会ったのは、新学期が始まって大分経ってからで、六月初旬のある日でした。他に誰もいない午後の研究室で、西田哲学の解説書を読んでいますと、そつとドアを開けて一人の学生が入って来たのです。度の強そうな眼鏡をかけた、色の極立って白い、女のような小さな唇のへんに赤い男で、背中がこんもり盛上がっている男、つまり偏癡でした。

その学生は、暫く書棚のガラス戸の前に佇んでいましたが、やがてほっと溜息をつく、ひよいと此方を振向いて

「あなた、この中のこの沢山の本、みんなお読みになる心算ですか

？」

と、いやに丁寧な調子で聞くのでした。それは彼にその気はなくとも、質問の性質上どうしても皮肉のひびきが蔽えず、私は不快になりました。

こうして私は、僂僂の学生、日笠と知合ったのです。そのことは初対面の人間には大方先ず何か敵意のようなものを感じる。そしてその悪感情を屢後まで持越してしまふ偏屈な私には決して嬉しいことではありませんでした。幼い時の怪我がもとで、左足が跛の私は自分も含めて不具者が大嫌いだっただからです。かたわ者、幾つになってもその劣等感から脱け出せない、自分に責任のない不幸を達観出来ない私でした。往來で向こうから私同様ステッキをついた、あるいはステッキもつかず、両手で調子を取りながら、ひよこひよこ跛の人が来かかるのか見付けると、私は、急いで脇道へそれましたし、脇道のない場合は止まって、そのちんばが通り過ぎるまで待ったものでした。道の両側からちんばが歩み寄り、すれ違う、その双方の姿のいたましき、滑稽さを私は自虐的に誇張して頭に描いて、いつとき泥沼のような自己嫌悪の底に落ちるのでした。そんな私が僂僂の男と附合い、一緒に行動することに何の抵抗も感じないでいられる訳がありません。私は日笠を嫌いました。不具の他に、いつもうっすらと脂の浮いた角張った顔も、笑うと歯茎の丸出しになるところも何か淫びな感じで厭でした。

しかし、日笠はそんな私に、弱々しい微笑を湛えながらどこか粘り気のある態度で、親しみを寄せて来るのでした。

「お茶を飲みましょう」

講義が終ると、日笠は必ず学校の附近の喫茶店へ私を誘い、私も

内心うんざりしながらも彼とひと時を過ごすようになりました。彼はよく喋るたちのようでした。

「あなたは勉強家みたいですね、僕はあまり学校に足が向かないんですよ、別に突詰めて哲学をやってみようっていうんじゃないんですよ」

「昨日、『ブルグ劇場』を観ました。御覧になりましたか、少々エロティックじゃないですか？」

「昨夜ネ、『地中海』を読み出したら面白くて寝られないんです、到頭三時まで起きてました」

無口な私は黙って、テーブルの薔薇の鉢などへ眼をやって、退屈してしまふのでした。心の底で嫌っている人間とは儀礼的にも話はずませられない私でした。

日笠は、中学時代から叔父の家に同居しているそうで、生家は父で三代続く古い旅館だといいました。

「是非一度遊びに来て下さい。叔父といっても父親同然なんです。事業で忙がしくしていますが、僕のことをとても心配してくれてます」

教室で会う度に日笠は熱心に誘いました。

「おいでになる日に電話して下さい。僕、駅までお迎えにいきますよ。なに、解り易い処ですが……」

くどい程度々誘われるので、秋の一日、前触れもせず私は日笠の寄寓する家を訪れました。

映画『望郷』のシーンを思い出させるような、下町と海を一望にする石階を上った高台に瀟洒な和洋折衷のその家がありました。

小柄な、ひどく顔色の悪い女中が引込むと



「やア、やア、いらっしやい、びっくりしました」

廊下の向こうから、態とらしいくらいおどけた身振りで、日笠が飛んで出て来ました。

二階の和室に通されました。それは、玉子色の壁に誰やらの色紙を入れた朱の雲盤が懸かり、擬物らしい鉄斎の軸の下がった床の間に梅擬の活けてある八畳間で、紫檀の机をはさんで、満面に笑みを浮かべた偏倭男と向かい合ったものの、私はもう何かぐっと気の詰まるような白けた空気を感じて、ここへ来たことを後悔したものでした。

「僕の部屋でもいいんだけど、ひどく散らかってるので……」

女中の運んで来た上等の菓子を勧めながら、日笠はその日主に小説の話をしました。私は日本の小説は勿論、翻訳物まで彼の読書範囲の広いのに一驚しましたが、当時あまり小説に興味のなかったこととて只開き役に廻って、胸のうちで、こんな部屋より取散らかしてあっても彼の居間の方がまだしも親しめたのではないかと不服をいっていました。大きなガラス戸から澄んだ秋の日が部屋一杯に差込んでいました。しきりと鏡花の文学について喋っている日笠の言葉をつるに聞流しながら私は何時か向かいの家のベランダに気を奪われているのです。

池のまわりに大きな石を矢鱈配した、あまり趣味のよくない此方の家の庭を隔てた、その家のベランダに二人の女学生風の少女がいて、そのうちの一人が手摺に馬乗りに跨って、両足をぶらぶらさせているのです。クリーム色のセーターに、臘脂のスカートをはいたその娘は相当活発な気性のように見えました。日笠の饒舌にいい加減な合槌を打ちながら私の眼は何度もベランダの方に向く始末で、

それは極端な高所恐怖症の私には、今にも手摺から落ちはしないかという不安もありましたが、それよりも婦人の騎乗姿に異常な刺激を受ける、私の精神の病巣に蠢めく暗い嗜好を些か疼かせる風景であつたからです。

庭で、突然甲高い女の声がして、つづいて犬の吠える声がひびきました。日笠がつと立って、ガラス戸の傍にいきますので、私も座をはずして庭を見下しました。その若い女は紫と白の矢絣の着物の裾を乱して、何かエクセントリックな叫び声をあげながら黒いドーベルマン種の犬と激しく戯れていました。長い黒髪を乱して、手にした革の鞭の尖で犬の喉を弄ろうとする、それを嫌って犬は綺麗な毛並を日に輝かせて跳躍します。そのうちに女は一寸よろけて、苦しげに咳込みだしました。

「ああ、あんまり走るから……」

日笠は顔を曇らせて、私をちらっと見返り

「恵子です、叔父の養女なんです」

と、呟くようにいいました。

「病氣なんですよ、胸をやらねましてネ、庭球の選手で無理した為です」

女は、やっと咳きをおさめると、また犬とふざけようとしてましたが、ふと、私達の視線を感じたのか、きつと二階を見上げて、鋭い眼差を二人の男に注いだ後、ゆっくりと階下の部屋へ入ってしまったのです。その一瞬の女のきつい表情が私には誠に印象的でした。

日笠の家は、どこか荒廃感さえ漂う古びた旅館でした。白布に包まれた日笠の遺骨の安置された祭壇の前に額突いた私は、いかつい

顔付きの日笠の父親と、黒い着物の襟元からほっそり白い顔を浮かべた母親に口籠りがちに悔みをいい、一年余りの短かい交際の間の思い出など語りました。

聞けば日笠は、海辺に育っても、全く泳げないのに、一夜泥酔した挙句、浜辺から舟を出して漕ぎ廻っているうちに誤って隠れ岩に舟をぶつけて溺れ死んだということでした。地元の赤新聞なぞには、失恋による厭生自殺と書き立てられたそうです。話を聞きながら私の頭には、今となつては日笠の遺書ともいえそうな、あの文学ノートの中の乱暴な文字が浮かび、それはぐにやぐにや一斉に動き出して、それぞれの意味を喚き出しているような一種の惑乱に取付かれそうになりました。

泊っていけというのをやっと断って、喪の家を辞したのは涼風の立つ夕べ近くでした。私には殊に歩きづらい砂地を踏んで駅へ向かう時、潮騒が耳を打ち、今更のように私は孤独を感じました。考えてみれば淡い交遊、まして偏った不具者憎悪の念を抑え難い、所詮しんから馴染めなかった私の日笠に対するひねくれた態度は、もうどうしようもないものでした。

駅の近くまで来ると、丁度下り列車が着いた後で、十人程の人が改札口から出て来ました。その中の一人、白服を着た背の高い女に私は見覚えがありました。すれ違った時、夕焼の明りに、そのひとのひどく憔悴した彫りの深い横顔、暗鬱な光を湛えた大きな眼が私をはっとさせました。そのひとは去年一度日笠の叔父の家を訪ねた折、庭でドーベルマン種の犬と遊んでいた恵子という女でした。大股に歩いていく、その後姿を見送る私の耳元に日笠の呟くような声が蘇りました。

——病氣なんですよ、胸をやられましてネ……
それに重なって、あの大学ノートの頁がさらさらと翻えるかのようでした。

日笠早雄のノート

☆僕は、もう哲学科に入ったことを後悔している。研究室の本棚のガラス戸の前に立って、カントやヘーゲルの著作を眺めると、改めて学問のきびしさというものを痛感して寂しくなる。ドイツ語も碌に出来ないし、とても体系的に観念論を勉強しようという意欲もない。こういう学生を真の意味で不良学生というのだろうか。

☆恵子は、今日気胸したといって、苦しそうに引籠っている。一寸部屋を覗いたら険しい顔で睨まれた。傷ついた女王という感じだった。ああ、中学三年、僕が笈を負うてこの家に来て間もない日曜日の朝、馬場へいく乗馬服姿の恵子を初めて見た時の驚き、あの驚きは今尚新鮮だ。恵子は庭の池の傍に立っていたが、きっちりとした乗馬服に褐色の長靴、細い鞭を剣のように扱って、騎士のように気取った礼をしたつけ。長い間会わぬうちに何時か美しい処女になった恵子の前に呆然としたが、美しく凛々しい女（モーパン嬢のような）のイメージを常に胸の奥深く抱きあためている私に恵子の乗馬服姿は正しく強烈な刺激だった。

☆万田という学生と研究室で一緒になる。話しかけたが、彼は僕を避けたいらしく冷たい素振りだ。ひとりの時は、不具者特有のささくれた自己嫌悪、自虐の淵に救いようもなく沈みがちな癖に、不具者に会うと僕は殊更明るく振舞って、相手の肩を叩くぐらいのことをして、しかつめらしい顔をほぐしてやりたくなる。が、そうすると、その行為は既に不毛の、虚しい演技になっているのだ。

☆大陸の戦場から宇治中尉の便りが届いたそう。恵子は喜んでい。軍国の乙女の感傷にひたるのもいいだろう。宇治は曾て恵子の乗馬友達であった。彼が訪れると僕は二階の自室の窓掛けの隙から青年将校の均整のとれた体軀をそっと眺め、庭を歩き廻って叔父の自慢の植木を褒める太い彼の声を聞いて、息をひそめていたものだった。宇治と恵子が駒を並べて草原を疾駆する光景を思い描いて、僕はどんなに苦しんだことだろう。僕は宇治中尉に敵のチェッコ機銃の弾丸が命中するよう今日もひそかに真剣に願っている。

☆静かな浪の音で眼が覚めた。戸の隙から朝の光が差している。引潮らしく磯の香が濃く部屋の中に漂っているようだ。小花は少し口を開けた顔を此方に向けて俯せに眠っている。苦しげな寝相だ。腹這いになって一服すると、こういう朝の佗びしさがしんと湧いて来る。感傷的な甘さなぞ些かもない、暗いデスペレートな気分。この待合に、川津が出征する直前に遊んだ。小学校時代の友達の懐かしさ。しかし彼は僕の内側のくらやみを知る筈もなかったろう。あの晩呼んだ小花に僕は自分の渴望を訴えたのだ。

☆何時の頃からか僕は周期的に死を思うようになった。死——一歩踏み出しさえすれば、茫漠とした太虚にこの腐った精神も、背中に突起した醜い肉体も雲散霧消してしまうのだ。甘美な装いをした、しつこい誘惑だ。恵子にこんな話をすれば恐らく

「さっさと死になさいよ、陰気な顔して、こっちまでくさくさしちゃう」

とでもいうだろう。吐き出すように。

☆恵子の不意の咯血、その後の安静生活は私に思設けぬ幸せを齎らした。恵子の不幸を喜ぶのはいけないことだが、叔父の意向では、

なるべく早く恵子に婿を取るということで、もう叔父の頭には何人か候補がいたらしい。宇治中尉もその一人だ。が、恵子が胸疾を持つ身となつては、その計画の実現は大分遠のいたといえる。情ない話だが、僕は、もし恵子が誰かと結婚したら、昔、ヨーロッパの宮廷にいた道化のような倭小な男と化して、一生恵子の身のまわりに従つて、その気まぐれな愛情や虐待を受けることが出来たら……などと思ふまでも他愛ない空想に耽ることによつて、僅かに悲しみを紛らせていたのだ。

☆元来お天気屋の恵子は、病気になつてそれが一層ひどくなつたようだ。チエとは最初からうまくいってないし、看護婦をつければ直ぐ喧嘩してしまうし、事業で飛び歩いている叔父もこれには弱っている。この間に僕は何かと恵子の用事を足してやる人間になつていった。何時も青ぶくれしたような顔色の悪いチエの皮肉な針のような視線を後に感じながら、精々図々しく忠実な看護卒然と恵子に伝えているあたり、僕の心臓も仲々のものではある。

☆医者者の注意で、度々入浴出来ない恵子は汚れた体を気味悪がる。チエを嫌うあまり僕に拭かせる。アルコールを脱脂綿に含ませて、女王に仕える侍童のように丁寧に、慎重に恵子の襟足を拭く。

「足拭いてよ、指の間をよくネ」

静脈の浮いた足首を膝に乗せて、指を一本一本腫物に触るように扱う。青白い指は、拭くうちにうっすら桜色になる。ベッドに腰掛けた恵子の前にうずくまっていると、病臭と淀んだ、甘ったるい女の匂いが漂う、僕が最も好ましく思う貴婦人の侍童みたいな気持になる。

「垢が出るでしょ、面白いように」

恵子は笑う。

「いや、綺麗だよ」

「きれい？ ふん、厭な臭いしない？ するでしょ、ほら、よく嗅いでごらんさいナ」

機嫌のいい恵子は、健康の時は羚羊のようにコートを駆けめぐつた、女の足としては少し毛深いふくらはぎを露わにして、左右の足の裏を交互に僕の鼻先に突付けた。それから両足を僕の肩に当てると、力をこめて僕を仰向けに倒した。

「私は金剛力士、キングコングかな、こうして踏み潰してあげる、さア、どうだ」

恵子の右足が僕の腹をぐいぐい踏みにじる。

☆今日、万田が来た。学校で会う毎に遊びに来いといったから来たのだろうが、本当は友人を必要としないのに、不具者に対する例の悪癖がひよつと瓢箪から駒だった。兎も角、変り者らしい万田は来た。自分の書棚を見られるのが厭だから二階へ通した。何ともつまらない彼の訪問だったが、ことによると彼もあれかも知らん。前の家のベランダの手摺りに跨った娘を眺める目付、あの眼だ。

☆小花は、僕の嗜好を難かしく考えずに、いわば母性的な愛情で包んでくれている。

「恥ずかしいことをさせるのネ」

とはいうが。母と多くの弟妹を養っているという、体臭の強い、大柄な白目の多いこの芸者は、私の希望する儘に様々の「辱しめ」を与えてくれる。しかし、それはやはり馴合いの、予め約束済みの演技であつて、一応の感動以上のものを得られないのは、是非もない。刺戟は更に刺戟を求めて、僕の後暗い情欲を満足させる機会は

偶発的な人事を俟つはかないのだろう。

☆病状の安定した恵子は度々家を抜け出して友達の家や映画館に行く。昨日は僕を連れて百貨店のスケートリンクに滑りにいった。叔父の関西方面出張が長びいているので羽を伸ばしている。午後早い頃だったからリンクは空いていた。電気の光に鈍く光る氷の表面を恵子は軽やかに舞った。緋のトッパーを纏ったままなのが僕に恵子の病気を考えさせた。三十分も経ったろうか、円い帽子をかぶった大学生が二人現れると、恵子に親しそうに挨拶した。恵子は真鍮の手摺りに凭れて見ていた僕の処へ来て

「もう帰ってよ、私あとで一人で帰るからいい」

突放すようにいった。そのことが幾らか気になっているのか今日は愛想がいい。モロゾフのチョコレート箱を出して

「食べない」

という。僕がひとつ摘むと、途端に、恵子は嬉しそうに笑いだした。首をすくめて

「それ、私が昨日嘗めといたのよ。あなたは赤い色好きだから赤い紙の取ると思ってた。私の病気伝染るから、結核は死に到る病よ、フフフフ」

☆例の待合にいき、小花をかけたが出ていた。酒を飲んで待ったが仲々来ない。十一時過ぎやっと現れたが、何が当たったのか間もなくひどい下痢が始まった。すみません——というが実に頻繁だ。しまいに

「お尻が痛くなっちゃった」

と、情なそうに微笑った。僕は続けざまの上廁の為、厠臭くなった小花の傍で非常な興奮を感じていた。痛いというアヌス！僕は

舌が痺れ、生唾を何度も飲んだ。

☆仲のいい者同士お喋りをしている場合でもふっと何方かの気持がこじれて来ることがある。自分のこじれた気持を露骨にではなく、それとなく相手に解らせるような方法で、段々気持をささくれ立ていく、何とか抑えようとしても自分ながらどうにもならぬ、友情がある飽和点に達した頃によくある、そんな悪魔的な時間を誰も経験したことがあるだろう。昨夜、恵子のベッドの傍の小さな円椅子に腰掛けて、恵子の好きな「三銃士」を読んでやった後、雑談の間にその悪魔的な時間が吾々の上に来た。恵子がしきりと宇治中尉の男らしさ、逞しさを讃えだしたのが発端だった。それ自体としては事実をいったままで反撥すべき話題ではなかったが、そこに僕は颯爽たる青年将校と僂僂の大学生とを比較する口吻を感じたのだ。僕は日頃の従順ぶりにも似ず何時になく真綿に針をひそませたい方をした上に遂にあのことをいってやった。堂々たる陸軍中尉が驕り高ぶった恵子を背中に跨がらせて、八畳の座敷中を不様に這い廻った、去年の春の生温い夜のことを。卑劣にも僕は覗き見たのだがその僕には特に、と思える刺戟的なその情景、年増女のような恵子の含み笑いを僕は到底忘れられぬ。ベッドに横臥し、片手で頬杖した恵子は唇をゆがめて笑った。そして毫も悪びれず

「あなた焼餅やいてんでしょ。中尉は私のこと好きだから、ああいうことして遊んだのよ、楽しかったわ、いいじゃないの、あなただっただけああい風にしてあげてよ、頭を下げて頼めばネ」

と、高圧的な口ぶりであって、今度は僕がそれまで見たこともない妖しい微笑を浮かべた。ああ、それから僕は背中に恵子に乗せたのだ。僕の背負っている重い十字架、僂僂の瘤の上に恵子は跨った

のだ。
「ああ面白い、私ネ、いっぺん、ここんどこに乗ってみたかったのよ、フッフフ、駱駝の瘤に乗ったみたい。そら、右へ廻って、廻って。やけにぐらつくわネ、しっかり」



僕は宇治中尉のように、いや、彼とは較べものにならぬ不様さで部屋中を這いずり廻っているうちに次第に狂熱的な興奮に駆られるのだったが、恵子は、あるいはもっと興奮したらしく、低く動物的な笑声を洩らし、僕の髪の毛を掻き毟って止まなかった。

☆チエが用事が出来て帰郷した。ことによるともう戻らぬかも知れぬ。恵子の我儘、この家のデカダンスな雰囲気、厭気がさしていたことだろう。午後、休講で早く帰宅したら恵子が風呂に入るんだという。午まえまどろんで、「怖い、怖い」夢を見て、うんと寝汗をかいた、と妙に童女めかした甘ったるい口調だった。まだ温いうちに恵子は湯船に飛込んだ。蓮の花咲く頃ウなぞと暫く唄った後、ひっそり湯の音もしない。やがて

「ねエ、背中流して下さらない？」

それは、僕の心に染み入る不思議な優しい声音だった。僕は吃驚した。恵子がベッドの上から何か言付ける声音には、近頃全くドミナ（女主人）のひびきが加わっている。それが又、正直の処、ぞくぞくする程嬉しい僕だが、恵子のいる湯殿へ入っていくことなど到底考えられなかった。しかし、僕を威圧的に、無造作に、時にはへんに物柔らかに、弟か下僕のように扱うことに恵子ははや何の抵抗も覚えならしく、風呂桶に腰掛け、此方に背を向けて待っていた。窓の絵ガラスから差込む初夏の光の中で、軽からぬ病に蝕ばまれているとはいえ肉置のいい、青白い女の体の傍に立つ

た僕は動悸を鎮めることが出来なかった。アルコールで襟足を拭いてやる時のようにスポンジを丁寧に、そっと使っているうち、結局女は女じやないか、小花と卑しい遊戯に耽溺した後の灰色の倦怠感を思い起したりして、強いて三助の職業的無感動さを装おうと努めていた僕は漸く息苦しくなってきた。庭で雨蛙が啼いて……僕は不覚にも自制力を喪った。

「あっ、何するの！」

飛上がって、恵子は無言に接吻しようとした僕を突放した。そしてキョロットを着けただけで、病間に駆込んだが、直ぐに足音荒く引返して来た。手に競馬の騎手が使ような短かい鞭を持って。僕はそれで凄しく打ちのめされた。鞭は非情にもこの背中に集中した。

「バカ！ バカ！ バカ！ バカ！」

激しい痛みに唸きながら僕は恵子が思付きで罌を設けて、見事に僕を陥れたのではないかと勘繰った。年上の女の奥深い心根に今更戦慄し、呻いたが、嵐のような折檻が執拗に繰返された結果、息を切らせた恵子が湯殿の上がり口に腰を下ろして、僕を睨みつけ、犬のように喘いで咳入った時、僕の胸は異常な歓喜に震え、傷ついた体が陶然と痺れた。

☆あの恵子の鞭打は、日が経つにつれ甘美な蠱惑と化して、僕の体を疼かせる。あの苛烈な、女に征服される歓喜の一刻、小花の職業的技巧を以っては味わおうにも味わえぬ充実した時間だった。

☆恵子は鞭打を後悔しているのか、人が変わったような余所余所しいおとなしやかな態度で僕を避けたがっている。心ひそかにあの鞭打場面の再現を期待している僕に砂を噛むような空疎な日が続く。

☆被虐を望む僕の鬱屈した欲望は隠密裡に脹れて、陰惨な夢になった。一夜、白装束の恵子は恐ろしげな仮面に顔を覆うて僕に迫り、弓の折れを揮ってひしひしと僕を打据える。その仮面は以前、金春流を嗜む父の居間でちらっと覗いた能楽雑誌の口絵にあった「瘦女（やせおんな）」で、それは地獄の苦患をあらわすおもて（面）であつた。打擲の末に恵子は僕を押倒し、胸の上に馬乗りになると、帯の間にはさんだ懐剣を抜き放って、僕の頸を搔切ろうとする……僕は自分の声ではっと眼が覚める。

☆叔父は事業の大陸進出を目算んで愈々忙しがっている。どうやら恵子の婿が決まるらしい。円い帽子をかぶった、おっとりした感じの大学生が頻りに出入りするようになった。

チエが帰ってきた。

「お婿さんはお嬢さんの病気を承知の上だそうです。愛の力で癒してあげると仰有ってるそうです」

チエは僕の胸のうちを知り尽くしている。厭味たらしい言葉だ。而も恵子はチエと俄に嘘みたいに仲よくしている。それで僕が存在が何か浮き上がったものになっている。あの男がこの家に入れば、僕はいつらい。でも出てくれといわれぬ限り居続けることも可能だろう。恵子の花嫁姿を見るか。これは喉に焼玉を入れる程の苦しみだろうが、僕は少しも永く恵子の周辺に、この醜い偏癡の身を置きたいのだ。

☆佗びしい心を抱いて、小花に会いにいったら珍らしいことに客と遠出していた。恵子はこの頃また咳をしている。金襴緞子の帯しめながら、花嫁御寮は何故泣くのでしょ、どういふのかこの頃ともしれば口誦んでいる。

☆ 体臭の濃く染み込んだ あなたのそのゆもじに うづく額を

埋めて僕は嗅ぎたい 凋れた花のような僕の恋のなきがらの
饅える甘い匂いを

部屋に籠って「悪の華」を読む。

☆父が夏休みには一度帰れといって来たので、この際帰省してみよう。

日笠の家を叩いて下宿へ帰った私は、白々と空虚な旦暮が続く
儘に日笠のノートを何度か読返しました。ノートの終りの一頁が、
それまでの彼の恵子への愛執の強さにもかかわらずあっさりしてい

る点、何かへんに思われるのでした。恵子の結婚を目前にして、彼の胸中に嵐が吹きすさんだであろうことは容易に想像されるのですが、そんな物狂わしい懊悩の末に来たもの、それは周期的に死を思ったという彼を忽然と押包むように襲った冷々としたうつろ、一切を放棄させる程の白茶けた世界であったとでも考えなければ、何だか辻褄が合わない——そんな気もしたことです。それにしても彼がその秘事の記録ともいふべきノートを何故私に預けたのか、それは病膏育に入った露悪趣味からでしょうか。それともノートに書いてあるように彼は私という人間にその背徳的情欲の「同類」を認めた為でしょうか。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9X6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

五十組	四十組	三十組	二十組	十五組	十組	五組	一枚
五十枚	四十枚	三十枚	二十枚	十五枚	十枚	五枚	一枚
二〇〇〇円	一七〇〇円	一四〇〇円	一〇〇〇円	五〇〇〇円	三〇〇〇円	一八〇〇円	

Y1	Y2	Y3	Y4	Y5	Y6
全裸荷造棒しぼり	乱れ黒髪裸見本	観念した胡座	兎事な飾り物	浴室股間縛り	麗しの緊縛裸像
(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(愛川悦子)

Y7	Y8	Y9	Y10	Y11	Y12	Y13	Y14	Y15	Y16	Y17	Y18	Y19	Y20	Y21	Y22
逆十字後手縛	裸身の捕われ人	逆エビ後手足吊り	全裸ねの縛り	なまめかしき緊縛	全裸フトンむし	蒲団裏裸またぎ	初々しき裸全身像	ヌード股間しぼり	全裸脚掌股間縛	セーラー後手縛り(川辺砂登子)	庭園ヌード縛り	全裸全身自慢	豊満双丘くらべ	追いつめられた裸女	遅ましきヒツプ
(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(田中芳代)	(花坂道子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(岩井知子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)

Y23	Y24	Y25	Y26	Y27	Y28	Y29	Y30	Y31	Y32	Y33	Y34	Y35	Y36	Y37	Y38	Y39	Y40	Y41
大の字晒し	縛り正面正坐	胸のボリウム自慢	麗人受難の巻	もうこれで許して	むしろれたズロース	全裸縛りの全身	鎮座する縛り女神	囚女後手柱縛り	全裸強烈股間縛	ベッド縛りのポーズ	開股一番一直線	縛り腰巻色模様	亀甲股間縛正面	全裸椅子またぎ	妖艶闇のしぼり	椅子またぎ裸後手	強烈後手首縛り	ハダカ縛り人形
(絹川文代)	(絹川文代)	(愛川悦子)	(益田房子)	(益田房子)	(花坂道子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)

Y42	Y43	Y44	Y45	Y46	Y47	Y48	Y49	Y50	Y51	Y52	Y53	Y54	Y55	Y56	Y57	Y58	Y59	Y60
濃艶ハダカ縛り	あられもなき開股	全裸変形股間正面	後手立木縛り	全裸後手壁ハリツケ	全裸寝台羞恥責め	振袖令嬢後手責め	長襦袢後手しぼり	ワンピース縛り	手吊り裸身の乱舞	柱縛り観念の図	不行儀姿態の美	カメラに晒す全裸	緊縛女体の開陳	膨隆突出した臀部	前手錠全裸像	股間縛開股の絵	聖壇のさらし者	エビ責めの表情
(絹川文代)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)

ルポルタージュ

女房連の女相撲

圓 山 景 三

毎年一月十四日の夜。私達の村では『御日待ち』と云う行事が有り、夜十時頃から十五日の日の出迄、町内の戸主が集り飲食する風習があるが、其の席上、外畑老が大変めずらしい話を聞かしてくれたのである。

それは外畑老の甥で北海道で出世している信吉さんから一度遊びに来いと再三云ってくれるので、昨年の暮に信吉さんの兄と二人で遠い北海道迄行かれたのであるが、信吉さんの居るアバシリへ行つて落着き、あちらこちらと見物の予定が大変な雪で、どこへも行けなかった由で、大部分は信吉さんの家で過したそうである。

信吉さんは若い頃、終戦で除隊すると、そのまま四国の娘さんと夫婦になり養子となられた。毎年北海道迄猟に出られていたそうであつたが、二十五年頃信吉さん始め仲間十一人が北海道のアバシリ附近の町に住み、そこ

を基地として猟をして居られたのだが、今では市場の仲買人をするかたわら魚の加工工場も経営し多数の工員も使う程出世している。

仲間の人達も四人は仲買人になり、他の人は信吉さんを助けて工場を切り廻して居る。遠々故郷を離れた此の人達は毎年正月三日には信吉さんの家で昔の仲間夫婦が集り無礼講で飲食し散財するのだそうだが、今年は特に遠来の外畑老を迎えたので例年以上にぎやかに行われ、大変めずらしいものを見せてもらったと云うことである。

それは信吉さん始め仲間の人達は大変な角力好きで、又細君達も亭主連中に負けない程の角力好きと来て居り、話題が初場所近くの為か角力の話になると細君達も大鵬が好きだとか、いやだんぜん房錦よ、又開隆山がいいとか、それぞれいきの力士を云っていたが細君達も少々のお酒が入って居った為か、豊

山の好きな細君と大豪の好きな細君とがひいき力士の事で話がつれ、あんたが豊山なら私大豪よと云つて取組まれたのがきっかけとなり亭主達のすすめもあつて、次々と他の細君も加わり女房連同志の角力が行われたのである。

始めの中は晴着を脱いだ長じゅばん姿だったが、ほころびるので、長じゅばんも脱いだ処、互につかむ処が無いと都合が悪いので、信吉さん宅にしまつてある帆布の褌を締めて見たらと云う事から亭主達のすすめも加わり本式に褌を付けて取組む事になった。大変なさわぎの内にも、細君達もだんだん大胆になり、ショート・パンツにブラジャーと云う素裸に近い姿となつて褌を付けられた時は、さすがに角力好きな細君達も苦笑して居た。

亭主達の「しっかりやれ」「負けるなよ」と色々な声援を受け広い畳上俵で取組んだ。いずれも、二十七八才から三十五六才迄の油の乗った十五六貫から十七貫位の立派な駅格揃いでポリウムが有り全くすばらしかった。

角力も段々と熱が入り亭主連の「頑張れ、負けるな」の声援を受ければ、細君達も少量の酒の勢も手伝つて互に体からゆげを立て、



ハッハッと息使いも荒く只相手を倒そうと本気になって闘ったので仲々見ごたえがあった。

亭主達もヤンヤのカッサイをしていたが、さて自分の細君の取組みとなると懸命になり、「そうだ」「もう一押しだ」「それ足を掛ける」「そこをひねって」と大声援の内に、投げられる人や、又折重なあって、どしんと倒れる人もあり、その度に、部屋全体がビビンビンとひびき、特に同体我倒れ、どちらが勝ったか判定のつき難い時など、亭主達は自分の細君の勝を主張して仲々ゆずらず、結局取直しになるのなんか熱戦がもう一度見られるというので仲々面白かった。

又畳土俵の為、溜がないので熱戦の末に組合ったまま俵の外で倒れ、ふすまを破り、ふすまを骨ごと一枚こわしてしまふと云うおまけまであり、あまりの激しい角力に外畑老も細君達がケガでもせぬかと心配し乍らも只手に汗して見物したと云う事で、その時の様子を手振り身ぶりおかしく口からツバを飛ばしての話振りで一同うらやましく聞いたのである。さもあろう。互に亭主達の声援を受け

取組む細君達も少しはお酒が入って居り少々寒さも何のその、素肌に近い姿に褌をしめて十人余りの亭主達の前で取組むのだから何負けるものかと本気になって闘ったのも当然と思われる。

話を聞いた一同も、女の角力が有れば面白いのにと云う話から年寄りの人の仲には昔、見世物の女角力を見たと言ふ人も有り、私も今日でも行われている長崎県彼杵郡式見村の娘角力、又伊万里市や新潟県温海町の主婦達による素人女角力のある事が新聞記事や週刊誌等に載っていた事等を話した処、昔大変興味をもって聞いてくれたのである。

中でも一番年長の大山君は、私同様女角力の愛好者と分り、後日私の集めた女角力の文章を見せた処、非常に喜び語り合っている内に、「どうだ円山君、一つ君の細君と俺の家内とで角力を取らせたら面白からう」と云い出したので、私も異論がなく亜夫二人何とかして各々家内をくどきに懸ったが、「いやよそんなこと」と房枝さん。「そんな事、はずかしい、いや」と美恵共にひじ鉄を喰い未だに実現の可能性がない。

一度裸体に褌一本をきりりとした肉體美人同志の女角力を見たいと思っている。

銀杏屋敷の女

いちやうやしきおんな

三 条 卓 史

「おい徳さん、どうしたんだい」

古い格子戸をガラリと開けて入って来た芳の市は、ランプに灯も入れないで、臥っている徳の市の枕許へ胡坐を掻くと、赧ら顔を覗き込んだ。

「うん、芳か」

と徳の市は、頭をもたげて起き上ろうとしたが、急に

「あ痛ッ」

と呻いて、また頭を枕につけてしまった。

「おい、しっかりしねえ、一体どうしたと云うんだ」

「うん、まったく馬鹿な話だ、済まんがランプに火をつけて呉れ、おかねの奴、ちよっと使いに行っているんでね。」

「うん」

と芳の市は立って吊りランプに火をともした。そして再び腰を下すと

「まだもうろくするには早いぜ。夜道につまづいて腰でも打ったか」

と、徳の市の半白眼を見ながら、冷やかすように云った。

「なあに、お互に按摩が商売だ。夜道には馴れていらァな。」

と笑ったが、

「丁度一昨日の晩のことよ。おめえ田町に銀杏屋敷ってのがあるのを知ってるだろう」

「ああ、あの元侍屋敷だったとか云う大きな銀杏の樹が何本も邸の中にある土蔵に囲まれた家だろう」

「そうだ、俺がな、あの邸のはずれまで流して、さて引返そうとすると、その邸の潜り戸が開いて呼び込まれたのだ」

「へえー、そりや何時頃の事だい」

黒眼鏡をかけた奥の芳の市の眼が、その時キラリと光ったが、徳の市には気が付かない

ようで、その夜の出来事を話し出した。

○

その晩、徳の市を呼び込んだのは、銀杏返しに結って黄八丈を袴に着こなした二十七八の女であった。古い建物の勝手口から上って薄暗い廊下を、その女の後について行くと、其処だけ明るく灯の洩れる座敷に導かれた。

「へい、毎度ごひいきさんで」

障子を後手で閉めて頭を下げた。

「ふん、こいつじゃアないな」

床柱を背にどっかりと坐り、銀煙管を片手にしていた四十がらみの図太そうな眉の濃い男が、徳の市を見てそう呟やいた。

「へえ、何の事で……」

と、徳の市はげげんそうに云った。按摩を頼むのには全く不釣合いな、何とも異様な部屋の有様であった。

男の前には足付の膳があつて、酒席の風であつたが、その膳の前に三十才位の丸髻の女が、裾を乱して転がされている。両手が見えないのは、一目で後手に縛られているのだと察せられた。髻が少し崩れて、後れ毛が二三本白い頬にかかっている風情が妖しくも痛ましい。

その男は、八端の厚い座蒲団の下から一本

の笛を取り出すと

「どうだ、これに見覚えはないか」

と云いながら、徳の市の膝頭の前へ転がした。それは紛れもなく、按摩の使う笛であつた。

「さあてね、この町にも、あつし達按摩は十人ばかりおりやすが、はて、これは誰のものだか……」

徳の市は、その笛を取り上げて、例の半白眼でためつすがめつしていたが、同業者の笛など、しみじみと見た事のない徳の市にとって、それが誰の持ち物か、判断のつく筈はなかった。

「で旦那、こんなものが、どうして旦那のお手に」

と徳の市は、げげんそうに胡坐の男の顔を窺った。

「ふん、こいつの間夫が落して行きやがったんだ。こいつ、人の眼を掠めて、按摩などと乳繰りやあがつて。」

と憎々しげに転がされている丸髻の女を睨みつけたが、

「おお、そうだ。こいつは按摩が好きだからこの笛の先で、思い切り按摩を堪能させてやるう」と云うと、徳の市に向つて

「お前も折角呼ばれたんだ。この阿魔をそのみそか男の笛で揉み療法をしてやれ」

と、さも妙案を思い付いた口調で云った。

「あの、指でなくてこの笛の先ですかい。弱ったな、どうも」

と徳の市が面喰つて、ためらっているのを躊躇もなく銀杏返しの若い女に

「おいお吟、按摩がよく効くように、衣服をくつろげてやれや」と云いつけた。

「ほんに、旦那に随分可愛がられながら、まだその上に間男をするなんて、なんて図太い人だろうね。さあ、そっちへ向くのだよ」

と、お吟と呼ばれた女は、横たわっている女の袋帯のおたいこを解くと、ぐるりと女を強く突いた。仰向けにされた女は、

「旦那様、おゆるし下さい、志津は……」

と、切れぎれな声で哀願したが、男は

「ふふん」

と、鼻でせせら笑っただけである。お吟は大蛇のようにのたうつ襦袢の帯を、たくし上げるようにして、志津の腹から解くと赤い鹿の子の腰紐の結び目に手をやった。

「ああ、お吟さん、それはやめて……」

志津という丸髻の女の必死に哀願する顔を徳の市は眩しいようににめすみ見た。富士額で

面長の、抜けるような色白の美人である。

「でも、お召物の上からでは、折角の療治が役に立ちませんものね」

お吟は、いやに丁寧な言葉付きで、手は容赦なく、腰紐を捌いて志津の腰から抜き取った。

「びくびく動くんじゃないねえ、じっと上を向いているんだ。」

と男が云うと、お吟は手早く着物の前身を左右に開いて長襦袢の紐も外してしまった。そして

「どうだろう、この肌は。いやにすべすべして、男を迷わす餅肌だよ。小憎らしいこと。」

と云いながら、肩もあらわに、志津の素肌



を、剥出しにしてしまった。紅絹の湯文字と対象的に、志津の乳白色の上半身が、煌々たる燭台の灯の下に曝された。

「さあ按摩、用意はできた。この阿魔の身体の、何処でもええ。その笛の先で、力を入れて突いてやれ……。おいお吟、じたばたしねえように、お前はこいつの両足をしっかりと押えているんだ。」

男はそう云うと、銚子の酒を、吸物椀の蓋に注いで、一気に呷った。

「旦那、そんな、ひでえ事はわっしにやア出来そうも御座んせん。どうか堪忍なさって……。」

徳の市は、少し後退りしながら、両手を膝の前で擦った。

「何だど？」

男の眼が急に陰しくな

った。そして

「おい、按摩は人の身体を揉むのが商売じゃアねえのかい。若え女を、こんな揉み方でなぐさむなア、一生に一度、あるかねえかぐれえなもんだ。ちえッ、その笛をこっちへ貸せ」

男はそう云うと、やおら立ち上って徳の市から件の笛を取り上げた。お吟は、拒もうとする女の両足を無理矢理大きく引き開き、その間へ自分の膝をこじ入れて、膝脇でしっかりと足首を押えている。志津の両手は無論後手に縛られたままなので、上体を自由に動かすことはできない。なまめかしい曲線を描いて盛り上った二つの乳房が、丸味を帯びたみぞおちが、真上を向いて、男の突きおろす竹笛をまともに受けねばならないのだ。

「ふん、こうだ。按摩ッ、よく見ておれ」

男が左手で、右の袖口を掻き上げて肘を大きく張った。

「あらッ、もうかんにんして……」

ちようど、羽二重餅を指先で突いたように女のみぞおちのあたりに竹笛が喰い入った。

それを、ぐりぐりと捻り廻されて、女は思わず悲鳴をあげて、右肩を上げ、その異常な圧迫感から遁れようとする。丸髻のびんがほつ

れて、眦に必死の形相が見える。

徳の市は、そうした生々しい姿を坐視することが出来なかった。

「あの、あッしや、これでご勘弁なすって」と、ずるずると後退りして敷居の外へ出てしまった。そして

「この意久地なし野郎ッ、とッ々と失せろ」と云う男の罵声を後に聞きながら、手さぐりでその邸を飛び出してしまった。

「ふうん、ひでえ事をするなア」

と芳の市は、徳の市の話しに膝を乗り出した。

「俺もなア、その女の事がどうにも気がりでならねえ。そこで、止しやアよかったのだがその翌の日だから、昨日の事よ。町を一ト廻り流したあと、夜もかなり更けた頃を見計らって、土蔵の崩れからあの銀杏屋敷に忍び込んだんだ。と云うより、あの女に取り憑かれたように、ふらふらと迷い込んだと云う方がええかも知れねえ」

「ふん、それで」

「勝手は分らなかったが、前の晩案内された勘を頼りに、植込の繁みに転々と身を潜めながら、邸を窺うと、雨戸の隙から、すうと光

の洩れている処があったので、足音を忍ばせて、その雨戸に吸い付くように近寄った。

「で、中の様子は？」

芳の市が先を促がすようにたたみかける「雨戸の隙間から覗いたが、廊下を隔てて障子が締め切つてあるので、中の様子はさっぱり分らなかったが、物音と声の様子で、お吟とやら云う女と、此の邸の冷飯食いらしい若い二人の男が、花かるたをしているらしいんだ。女が『どうだい、やくは出来たのかい』と聞くと、一人の男が『いや、さっぱり駄目ですア。今夜はついていねえかな』などと云っているんだ。やがて女の声で『もう間もなく旦那が帰って来る頃だよ。さあ、ここいらを片付けて。頓平は台所へ行って、橙を絞る道具があるだろう。あれを持って来な。相州はランブを持って、こっちの部屋へ来るんだよ』と、云うと、さらりと襖を開ける音がした」

「するてえと、女は隣りの部屋に」

と、芳の市は、息を呑むようにした。

「そうなんだ。雨戸の隙間から灯影がすーっと動いて、あとは声だけしきや聞えねえ。」

「ふん」

「なまじ姿が見えないだけに、却って惨まし

さがまさると云うのかな。『その蒲団をはがしてご覧よ』と云うお吟の言葉に次いで『おッご新造ッ』と云う男の驚いた声。『お前さん達のご新造は、裸で衣紋掛に手足を縛られて、粹な格好さ。いいかえお前達、よく見てお置き。みそか事などした女は、こんな風にして可愛がってやるもんだよ。そら頓平、その橙のノ木をお貸し』『姐御、ご新造をどうなさるんで』と頓平のおろおろしたような声に続いて『姐御、そんなことを』と相州の思わず制止しようとする気配であったが、『何を云ってるんだい。相州ッ、灯りをもっとこちらへ寄せな』と、お吟の癪高い声につづいて、お志津さんの身を切られるような声で、『あッ、痛ッ、お乳が千切れるッ』と、身も世もあらぬ苦悶に震える声が、俺の耳に突き刺さるように聞えて来た。俺は思わず固い雨戸に獅噛みついて、地団駄を踏んだ。雨戸を蹴破って、其の場へ飛び込んで行って、お吟という女を思いッ切り擲り付けてやりたいような衝動をこらえるのに一生懸命だった。お吟は『なんだえ、お乳だなんて、おぼこ娘のような言葉を使ってさ、そんなせりふが第一気に喰わないのだよ。なァに、これ位のことだ、乳房が千切れて落ちはしないさ。どうだ

え、このふくらみ具合は』と、橙のノ木を使って、さんざんお志津さんの胸を責めている様子なんだ。お志津さんの悲鳴が一きわ激しくなり、今にも悶絶するかに思えた時、俺は思わず『ゴトリ』と雨戸に大きな音を立ててしまった。

さあ大変、立ち聞きしていたのを覚られたと思つて、慌てて逃げ出した途端に、足許の庭石にけつまづいてはったり倒れたたかに向う脛を打ちつけた。『誰だえッ』と云うお吟の声と諸共に、雨戸をこじ開けて飛び出した二人の若い男に、わけもなく取押えられてしまった。『おやッ、昨夜の眼ッかち野郎だね。こいつ、女の匂いに餓えやがって、野良犬のようにほっついてやがんだね』と言うと『こいつを痛めて叩き出しておやり』だってサ。二人の若い男に踏んだり蹴ったりされた上、裏木戸から、ドスンと路地に抛り出されて、いやもうさんさんのていたらくだ』

「それで徳さんご不例かい。ご苦労さんだったとも云えないなァ」

と、芳の市は同情とも冗談ともつかない口振りをした。

「おいおい、変な云い方をするねえ。俺は何も助平根性からやったわけじゃねえ。あ

のご新造が気がかりで、じっとしていらなかったんだが……あの様子じゃ、しまいはあのお吟とか云う女に、虐め殺されるかも知れねえぜ」

「大分気性の強い女らしいな」

芳の市は、徳の市の言葉に調子を合わせながら、何か思案の風である。

「だがなァ芳よ。あのご新造の情夫ッてのは一体誰だろう。あの旦つくは、按摩だと云っていたが、真逆我々仲間にそんな気の利いた奴がいるとは思えねえし……」

「そうさ、そりや何かの間違いサ。そんな綺麗なご新造が、貧相な按摩風情を相手にするもんか」

「うん、俺もそうは思っているんだが、でもたしかに按摩の笛を持っていたぜ。按摩の笛なんてものは、何処にだってあるもんじやアねえやな。するてえと……」

と、徳の市はしばらく例の半白眼をばちばちさせていたが、

「おい芳ッ、まさかお前は笛を紛失しやしめえな」

と、開き直るような調子で云って更めて芳の市をじっと見た。

「ふん、俺がかい。どうしてそんな事をきく

んだい」

芳の市も、心持ち更った口調で訊ね返した。

「どうしてって、ふっと、そんな気がしたのよ。第一、おめえは我々仲間では若えしな」
「変な勘繰りは止しにしようぜ。ほら、笛はちゃんと持ってるぜ」

芳の市は、右手を袖口から引込めると、懷中を探って、笛の先端からヒヨイと覗かせて見せた。そして

「笛がなくっちゃア商売は出来ねえ。だいいち俺らの顎が干上っちまわアな」
と云って微かに笑った。

「そこでだて、するてえと、一体これはどう云うことになるのかな」

と徳の市は、眼を煤けた天井に向けて、全く判らないという表情であった。

○
芳の市が徳の市の家を出たのは、それから間もなくであった。

路地を抜けて堀端に出ると、岸の柳が五月の風に揺れていた。芳の市は堀割りに沿って思案しながら、歩いていた。彼が材木置場の処まで来ると、その沢山立てかけた材木の影から、女の影がずっと出て来た。女は徳の市

の女房のお兼であった。

「おお、お兼ねさんか」

芳の市は、お兼ねが傍へ来るまで、全く気付かない風であった。お兼は素早く周囲を見廻してから、

「芳さん、お話しがあるんだよ。ここでは工合が悪い。こっちへお出でよ」

と、芳の市の袖を掴むようにして屏風のように立掛けてある丸太の蔭へ誘い入れた。
「お兼さん、先刻は無理を云って済まなかった。これは返すよ」

と、芳の市は懷中へ手を入れると、竹笛を取り出して彼女に渡した。

「はいはい、じゃ、たしかに返して頂きましたよ」

と、帯の間に深く挿し込みながら
「ねえ、芳さん」

と殊更に親しみをこめた口調で云って一足芳の市の傍へ寄り添った。

「え？」

と芳の市が反射的に一歩後へ退こうとする手をぐっと握って

「あたしもあんたの頼みを聞いて上げたんだから、あたしの頼みも聞いてお呉れだろうねえ」

と、絡わりつくように云う。

「そりや、徳さんのおかみさんだから、出来ることは……」

と、少したじろぐのを

「おや、殊更に徳さんのおかみさんだなんて変な云い方をするのね。あたしア、芳さんから、そんな云われ方をしたくないのよ」

「だって」

「だってどうしたの。ねえ、芳さん、分ってるでしょ。あたしの気持。」

「ああ、でも今夜はいけない。」

「なぜ今夜はいけないのよ。あたしや今夜でなくちゃいや」

「お兼さん、頼むから今夜はこのまま返して呉れないか。」

お兼はなおも執拗である。

「そう。芳さんはそんな人なの。ならいいわ。あたし、芳さんの事をうちの人にぶちまけちまうから」

「ちょ、ちょっと待って呉れ。俺の事って……」

と芳の市は慌てたが、お兼はつんとすましている。

「ええ、大概想像はついてるわ。ねえ、そんなに慌てて、見っともないじゃアないの、何



も、あんたを取って喰おうと云うのじやないの。人間は相見互いよ。誰にだって秘密はあるわ。そこよ芳さん」

「しーッ」

芳の市が急いでお兼の口へ手をやった。

へ梅にうぐいすー、品よくとまる——

足駄の音がカランコロンと鳴って、酔客が材木置場の前を通り過ぎた。

お兼は黙ったまま芳の市の上体を押すようにして、更に数歩奥まった方へ歩を移した。

そして、そこに横積みにしてある角材の上へ二人で並んで腰を下した。
不意の闖入者に驚ろいたか、蝙蝠がバタバタと飛び出していった。

○

二年程前の事であった。

芳次は垢じみた久留米緋の裾を端折ってあてのない旅を続けていた。今日も丘つづきの街道を、尻切れ草履に足を埃だらけにして歩いてしたが、先刻から尿意を催していたので、それとなく適当な場所を物色していた。ふと藪と灌木との間の横道を見付け、そこに踏み込んで行った。数間ゆくとどちらからも人の眼につかぬ場所に出たので、彼はやっとの思いでゆっくりと用を足した。彼が裾の塵を払って元の街道へ戻ろうとした時、異常な女の声を聞いた。芳次はふいと立止って耳を澄ませたが、再び女の声を耳にすると、咄嗟にその横道を奥に進んでいった。すると、深い杉の木立の中に小さな堂があって、その前に黒塗りの人力車が横倒しになっているのが眼についた。またその車の足踏みから、色褪せた赤ゲットが地にこぼれていた。更に古びた堂の木の階段に女履きの利久下駄が片方だけ、仰向けに引

くり返っていた。

芳次は躊躇なく階段をかけ上ると、風雨に曝されている狐格子をはね開けた。

案の定、当時流行の夜会巻きという髪型の若い女が、着物を剥ぎ取られ、肌襦袢に湯文字という惨めな姿で後ろ手に縛られて引据えられていた。傍には女の紹の着物と博多の帯とを丸めて、腰紐で一纏めに括って転がしてある。女は相当抵抗したものであろう。饅頭笠を飛ばされて、台座だけを頸紐で結えた変な格好の五十がらみの髷面の車夫が、豆絞りの手拭を数条に裂いて繋いだ急造の細紐で女の胸乳のあたりを、更に一卷きして二巻きしようとしている処であった。

「この野郎ッ」

芳次は夢中で、車夫の頸を下から蹴り上げた。

「わァッ」

と云って、車夫が、後ろへのけぞるはずみに、女も仰向けに倒れた。車夫は思わぬ邪魔物に動揺したか、芳次の拳固に追い立てられて慌てて人力車を起すと、赤ゲットを残したまま逃げて行った。でこぼこの横道を、人力車の背が大きく左右に揺れながら、木立の間に見えなくなると

「ざまァ見ろッ」

と吐き出すように云って振り返ったが、芳次は全く眼のやり場に困ってしまった。

その時の女が徳市の女房のお兼であった。お兼は実家へ用事があって行つての帰途、この災厄に遭つたのであったが、芳次は、これが縁で、徳市の厄介になり、名も芳の市と改めて、暫らくの間徳市の家へ居候していた。半年ほどして芳の市は少し離れた処に空家を見付けて、一人住いをするようになったが、その後も徳の市の宅へは足繁く出入りしていた。

芳の市もお兼も、あの最初の出会ひである古堂の事については徳の市には話さなかったので、徳の市は、今でも芳の市は道すがらの道連れであつたと思つていたのである。

だが、お兼は、芳の市に対して冷淡としてはおられなかった。何かにつけて変つた素振りを見せるのだが、芳の市は、現に世話になつてゐる徳の市のおかみさんに対しては、そんなに浮わ付いた気持ちになれないのであつた。

——このまま徳の市の家に厄介になつてゐては、どんなはずみで変な事にならないとも限らない——

と思つた芳の市は、不自由を覚悟で進んで一人暮しに踏み切つたのだが、

或る日の夕方、芳の市が仕事に出ようと思つてゐる頃からぼつぼつ降り出した雨が、夜になるとますます激しくなつて、とても稼ぎには出られないので、諦めて早寝でもしようかと思つてゐる処へ、ずぶ濡れになつたお兼が入つて来た。

「おやおや、こんな大降りに、大体どうしたので」

と芳の市が不審げに、でも手早く火鉢に火をおこして

「さあさあ、そんな格好では風邪を引きますぜ。早く脱いで、これでもお着なさい」

と、洗い晒しの自分の浴衣を出して着換えを促がすのであつた。

「何アにね。つい川向うまで用事に出掛けたんだが、帰りに雨にあつて、こんな格好なのさ。また芳さんの前で肌を見せるんだね」

と云いながら、隅の壁に向つて手早く着換えたが、芳の市には何とも困つた事態になつてしまつた。

二人はお兼の濡れた着物を両方から火鉢の上へかざした。やがて、ほのぼのと湯気が立ち昇つたが、仲々全体は乾かなかつた。

「芳さん、あんた女の人を縛った事ある？」
と不意にお兼が云った。

「いいや、どうして？」

と、芳の市は吃驚したようにお兼の顔を見た。

「ねえ芳さん、あたしを、あの古堂の時のように縛ってくれない？」

「姐さん、冗談を言っちゃアいけねえ」

「冗談じゃアない。あたしやア本気だよ、恥かしいけれど、お前さんの手で、この肌を、ぎゆうぎゆうに縛られているのを、時折夢に見るのだよ。何かこう、せつない、それでいて、何とも言えないうっとりとしたような気持、夢だからかも知れないけれど。ねえ、芳さん、お願い……」

お兼はそう云うと、火鉢の上に翳していた着物を、芳の市の手から引きたくって、丸めてぽいと抛り出すと、芳の市の手首を両手で確かりと握って揺さぶった。

「だって、此処は野中の一軒屋じゃアなし、隣近所もあることだし」

芳の市は、突然のお兼のこの変った頼みをどう捌いたものかと、いろいろ思案をめぐらしていたが、自分の気持を、ここまで曝け出したお兼は、必死であった。いつか一度は、

とひそかに待ち望んでいた、今宵の雨を幸いに、わざわざ傘を途中の道端の天水桶の蔭に隠して、濡れて来た彼女である。

「どうしても云う事を聞いてお呉れでないなら、いいから、あたしや大きな声で『芳さんがあたしを引ッ張り込んで乱暴をしようとしているッ』って、喚いてやるから」

「姐さん、いくら何だって、そんな無茶な」

芳の市は、お兼ねのがむしゃらな気持に氣押されてしまった。

「仕様がねえなア姐さんは一途なんだから。じゃアほんのちょっとだよ。真似事ぐらいだったら」

「ああいいよ真似事でも。そんなら誰か来ると工合が悪いから、入り口の戸に心張り棒をして来てお呉れな」

「えらいことになったもんだ」

芳の市は、つとめて軽口をたたきながら、庭へ下りて、一寸表を覗いた。雨はまだ小降りの様子もなく、皆んな戸を閉めて人通りもなかった。

その間に、お兼は部屋の隅にある破れた枕屏風を持ち出して、その向うに畳んであった煎餅蒲団を引ッ張り出した。そして、火鉢を枕屏風にくっつけるようにして置き、先刻丸

めた生乾きの着物を、テントのように屏風へ掛けて火鉢を覆った。そして

「こうして置けば、じきに乾くだろうよ」

と云いながら、更めて薄い蒲団の上に横坐りになった。お兼の小肥りの身体に、芳の市の縞の紬の着物は丈ばかりが長くて横身が合わないらしく、胸も膝も合いかねて、白い肌が覗いていた。

「弱ったね、どうも」

芳の市は、真実困った顔をして、右手で軽く頭を掻いた。

「どうしたえ？」

と、お兼が——今更何を——と云いたげな表情で芳の市を見た。その眼が、妖しく燃えている。

「いや、縛る物がないんだよ」

「え？」

と、お兼もハッと気が付いた。そう云えば一間きりで、押入れもないこの部屋を見廻しても、紐切れ一つないのである。

——こんな事なら、綱か紐を用意して来ればよかった——

そう思ったが、後の祭りである。

「その扱帯を解いてお貸しな」

お兼は、芳の市の締めている黒いモスリン

の扱帯を指した。

「これをですかい」

「そうさ、それを三本位に裂けば、手頃なものになるだろう」

「だって、俺ら、これ一本きりしか持っていないんだぜ」

「いいから早くお出しよ。扱帯の一本ぐらいあとで買ったらいいやな。お代は出して上げるからさ」

「そんなじゃ済まねえが」

芳の市は仕方なくずるずると帯を解いた。

お兼はその端を口に咥えると、糸切歯でピリりと裂け目を入れ、両手でビリビリと引裂いた。

「これじゃア前はだけだ」

と芳の市が慌てて裾前を合せるのを

「これでも締めてお置きよ」

と、お兼ねは自分の腰紐をするりと抜いて

芳の市の方へ投げた。

「これじゃア、紐の交換だな」

「何でもいいから、さあ出来た。遠慮はいらないから、存分に縛ってお呉れよ」

お兼は、そう云うと、裂いた帯の端を持っただまま、両手を後ろに廻してくりりと芳の市に背を向けた。

「仕様のない姐さんだなア」

芳の市は、そう云いながら、そろりとお兼の傍へ寄って裂いた帯を取った。そして、差違いに重ねた白い手首を二巻きして引き解きの出来るように結んだ。

「もっときつく出来ないのかえ」

「この位でいいだろう。それでも抜けはしないのだから」

芳の市は、あまり固く縛って、縛り跡が残っては、後でお兼が困るだろうと思った。

「じれったいねえ、その帯で、この胸をぎゅッと締め付けてお呉れでないか」

両手が自由にならなくなったと思う事で、

お兼は一層昂奮していた。

「俺ら、ほんとうにこんな事はした事がないんで、手加減が判らねえ」

「手加減なんか入らないコッタ。それとも芳さんは、あたしの肌に触るのが恐いのかえ」

「いや、何も怖ろしい事なんてありはしないさ」

「なら、もっときびきびして呉れたらどう。まるで意久地なし見たい」

そんな風にお兼に云われると、そうそう遠慮をしてもおれなかった。

「姐さん、少々痛くっても知らねえよ」

と云うと、思い切って黒い帯をお兼ねの胸に廻した。背中のでぐいと締めると、杓元がずれて、半分以上覗いたお兼の両の乳房が乳首を上向けに引き緊まる。

「もっと、もっと締めて……」

とお兼ねは、より以上の緊縛を求めて上体を左右に大きくくねらせた。またたくランプの灯りに照らされて、仰向いたお兼の顎の下に、青く静脈が浮いていた。

芳の市は、そうしたお兼の姿を美しいと思った。平常は彼よりも年上であり、さして美人という程でもないお兼ねに対して、余り関心を持てはいなかったが、前はだけの乱れた姿で縛られている彼女を見ていつかの古堂でのあらわな姿態を想い出したのであった。

「姐さん、肌に縛しめの痕が残っても構わないのかい」

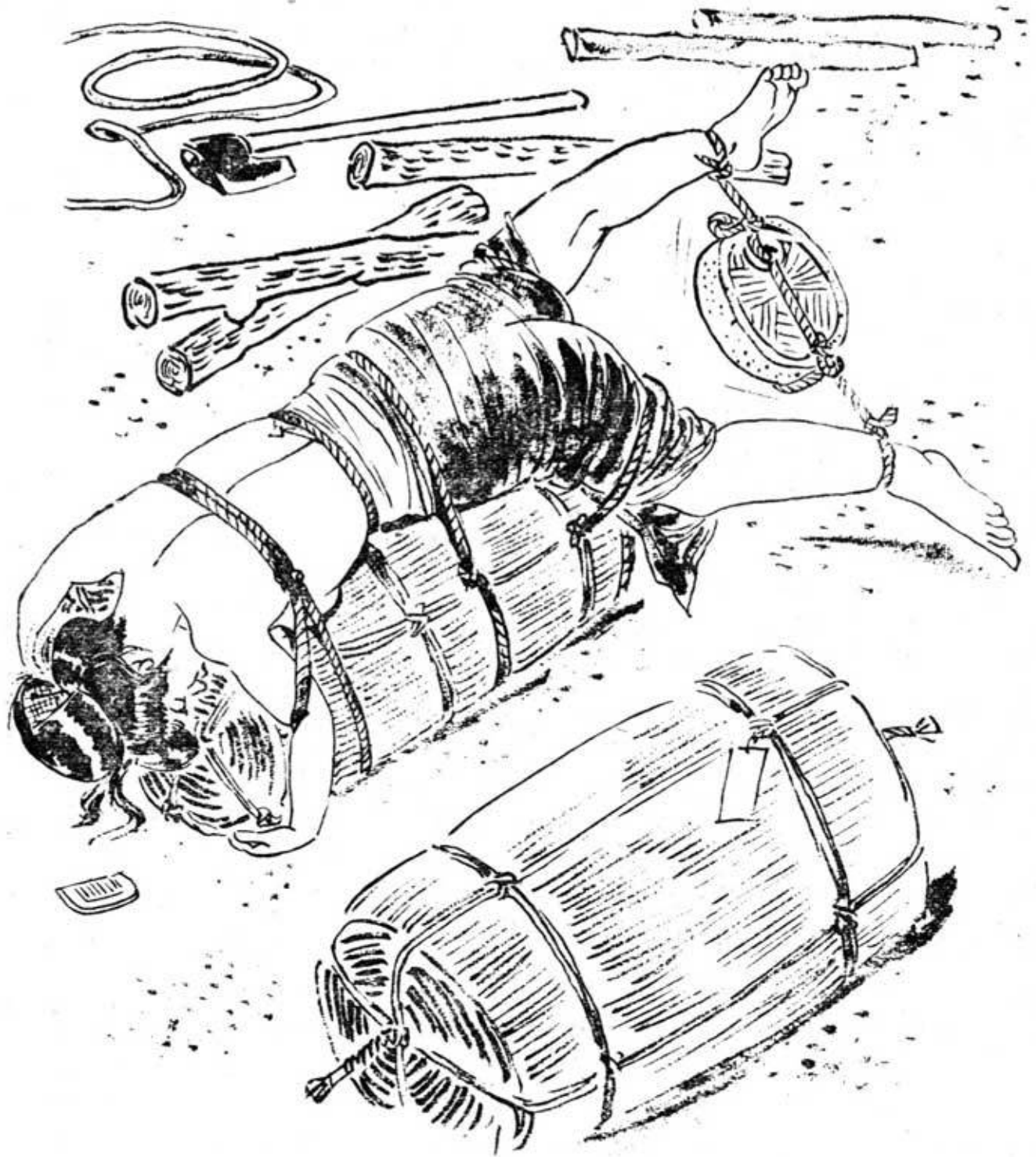
「あいよ。胸をもう一卷きして、両足も縛って、あたしを踏ん付けて呉れたらいいさ」

「ばかだよ姐さんは」

「ばかだよ、ばかでもいいのさ。だからよう」

お兼は急に海老のように上体をウンと反らすと、その背中をドンと芳の市の膝へ打っていった。

ランプの芯がジジッと鳴って、炎が二三度



またたいた。

○ 運河沿いの材木置場の奥で、お兼は芳の市

に、先夜の雨の夜の灼きつくような昂奮を求めたのであるが、今夜の芳の市はどうしてもそうした気持ちになれなかった。

「姐さん、頼むから、今晩は勘弁して下さいよ。そのかわり、明日、そう明日の夜なら、俺どんなにしても都合つける。そして、姐さんの気の済むようにするから」

「へーえ、明日ねえ」

と、お兼ねは一寸疑い深そうな眼を芳の市に向けたが、

「芳さんに明日の晩があるのかえ」

と、妙な事を云った。

「姐さん、そりゃ何の事です」

「いやサ、暁方は西にあるッて事サ。真ッすぐ西だよ」

「一体何の意味で」

突然の、お兼ねの不審な言葉に、芳の市は彼女の心を解しかねて問い返したが、

「じゃア明日の晩は、よしんば雨が降らなくても押しかけて行くからね。稼ぎに出ないでキッと待っていてお呉れよ」

と云うと、そのまますいと立って材木置場を出ていった。

——こんな場所で、無理を云って困らせるか——と思っていたのが、案外素直に帰って行ったお兼の、黒い後影を眼で追いながら、芳の市はほッと胸を撫で下す思いであった。

○

その夜――

銀杏屋敷の物置小屋の屋根の上に、やもりのようにへばり付いている人影があった。深く頬冠りをして、ふくらんだ風呂敷包みを首に巻きつけ、草履を尻の上の帯に挟んで這いつくばっているさまは、まるで泥棒そっくりのいでたちであるが、その影は、早や一時間近くも動かなかった。

空には細い弦月がかかっていたが、幸い銀杏の繁った影が屋根に落ちて、その男の姿を隠していた。

男は耳をぴたりと屋根瓦に押し付けて、小屋の中の物音に聞き耳を立てている風であった。

ややあって、ゴトリと軋みながら小屋の戸があいた。そして

「強情な阿魔だ。今夜はそうして炭俵を抱いて、好きな男の夢でも見てるが良い。明日は身体中の髪の毛を一本抜きにして、尼さんにしてやるから」

と云う女の捨てぜりふと共に、長襦袢の袖をまくし上げた女が出て来た。左手に紙燭を持ち、右手には太いステッキを携げている。

紙燭の明りに浮き上った顔はお吟である。お吟は一旦傍の庭石の上へ紙燭を置くと、再び

ガタンと小屋の戸を閉め、そのまま母屋の方へ去って行った。屋根の上の男は、紙燭の灯が見えなくなっただけでも、なお暫らくはじつと様子を窺っていたが、やがて、傍の銀杏の樹を伝って、そろりと小屋の横に降り立った。異常なまでに四囲に注意を払いながら小屋の戸口に来ると、たてつけの悪い戸を、下の方へ手をやって、音のしないように静かに引く。やっと横身で入れるだけ開くと、そのまますりりと滑り込んだ。

小屋の中はまっくら闇である。ただ奥まったあたりで微かに呻く声が聞える。男は暗やみの中を這いながら手探りで、その呻き声のする方へいざり寄って行った。

「し……ず……さ……ん」

小さい、まるで聞きとれない程の声で呼びながら一膝一膝にじり寄って行く男の右手に柔かい女の踵が触れた。二の足、股、臀部、と伝って、思わずその手を引込めた。下半身は素肌である。臀部が殊更に熱ッぱいのは、ステッキでたたかたに打ちのめたからであるう。

男は思い切ったように懷中からマッチを取り出すと、股を大きく開いた中でシュッと擦った。それは、マッチの光が外部へ洩れない

ための所作である。一瞬、小屋の奥半分がマッチの光に照らされた。

「おおッ」

と男は思わず声を上げると同時に全身を大きく震わした。そのはずみにマッチの灯はふッと消えて又もとの闇になったが、男には女の無惨な姿態がギクッと脳裡に灼きついた。

炭俵を二俵並べて、その上に裸に剥がれた志津が俯伏せに、両手で炭俵を抱くように縛られている。炭俵から肌が離れないために俵の下を通して背と腰に二本の荒縄が巻き付けられ、なおその上に両膝が揃えられぬよう、開いた両足首は漬物石に使う古い石臼の穴に通した縄で繋がれていた。その抜けるように白い素肌の頸筋に背に腰に、赤く、また紫色に無数に筋が入って激しい折檻の痕が生々しい。

「志津さん、俺だ、わかるかい……芳次だ」

男は女の耳に口を付けるようにして呟やいた。その間も、手探りで素早く志津の両手の縄を解きほぐしていた。

「あッ、芳さん……」

志津は、やっと自分の傍にいたのだ誰だか判ったようであったが、それと同時に「いけない、私は、もう駄目、早く、はやく

此処から逃げて……」

と云うと、再びぐったりと頭を炭俵に押し付けた。

「何を云う。志津さん、おいッ、元気を出すんだ」

マッチの光で瞬間見ただけであつたが、あとは闇の中でも手先は早かつた。女の手足から縄を解き放すと

「大方こんな手だろうと思って、着る物を持つて来た。さあ、しっかりして、これを着るのだよ」

「あーッ、痛いッ、とても動けない」

「我慢しな、早くして、一刻も早く脱け出さなくちやア」

何時、見咎められるかも知れない。芳次は気が焦った。痛がる志津の身体を抱くようにして袖に手を通させ、細紐で前身を合せるとそのまますしりと背に負った。そして庭木の蔭を伝い、地を這うようにして土蔵の崩れから、やっこの思いで銀杏屋敷を遁れ出た。

——さて、どっちへ逃げたものか——

一瞬、迷っていた芳次の頭に、宵に材木置場でお兼の云った言葉が泛んで来た。

——西だッ——

背中志津は重かつたが、芳次は夜の町を

西へ走った。今にも追手が来るようで、気が気ではなかつたが、思うように足が進まなかつた。

「芳さん、もういいの、私をここへ放って行つて。あいつらきつと追つて来るよ。今度捉まったら、芳さんも私も、きつと鬭り殺しだよ。わたしはもう、どうなつたつて構やしない。あれほど逢いたかつた芳さんに、めぐり逢えたんだものね」

「何を云うんだお志津さん。此処で捨てて行くくらいなら、はなから銀杏屋敷へ忍び込んだりしやしねえ。さあ、もう一ト元気だ。しっかり肩につかまっていなせいよ」

芳次は、肩の志津を揺り上げて再び西へ向つた。

やがて、曉方近くになって、芳次は大きな河の川岸に出た。芳次はこの辺りには来た事もなく、土地の様子も判らなかつたが、さして広くもない道は、その川岸で行きどまりになつていた。

「しまった。えらい道へ来てしまった」

と、志津を葦の茂っている水際に降して、吐胸をついている時、葦のしげみがガサガサと鳴った。芳次が思わず志津を庇うようにしてきつと身構えると、葦の中から出て来たの

は徳の市の女兼であつた。

「あッ、姐さん」

「やっぱり来たのね。そちらがお志津さんとか云うの」

芳次は不意のお兼の出現に、暫らくは声も出ず、棒立ちになつていた。

「銀杏屋敷の奴等らはしつこいからね。やがてここまで追ッ手をかけて来るよ。そう思つてあたしや芳さんを待ってたんだよ。ねえ、ここは渡しで、あの葦の蔭に渡し舟が繋いであるのさ。その舟に乗つて、この岸を離れれば、どうやら一安心と云うわけだが、芳さん鱸は押せるの」

「いいや、漕いだこたアねえ」

「そうだろうね。でもいいわ、舟には水棹があるから、舟ばたで水を掻いていりゃ、次第に向う岸に近づくだらうよ。若し向う岸に着けなくても、あんな博徒に鬭り物にされるより余ッほど増しさね。さア、早く乗りなさいよ」

「ああ、姐さん、済まねえ。で姐さんは？」

「芳さんと一緒に木の葉舟に乗つて、二人きりの世界へ行きたいわさ。でも、そんな綺麗な人がいたンじやア、それも、出来ないしねえ」

「この志津さんとは、それな仲じやアないんだ。ただ師匠の……」
 「お師匠さんの娘さんかい。どんな仲でも好いじやアないの、命懸けで生きて行こうとす

る二人だろ。まったく羨やましいみたいなものさ。さア、舐を押すよ。じつと腰を据えてなきや、はずみで引っくり返るよ」
 「姐さんッ」

「好い男が、泣き声なんか出すンじやアないの。ばかだねエ芳さんは……」袂を口に咥えて、舟の舳を力一ぱい押したお兼の二の腕の白さが、芳次の涙でうるんで見えた。――

【最新版分譲品案内】

相撲 褌

略号 (そい)

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

雲斎の相撲褌をはちきれそうな若々しい裸身に締め込んで正面、背面、側面、或は両股を開いた蹲踞の姿勢など、相撲褌を締めた娘の裸姿をあますところなく皆さまの眼前に晒した女体褌フォト。従来の六尺褌から一歩前進した狙いの趣向。

吊り打ち

略号 (やり)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

両手を鴨居に吊られた全裸の関谷富佐子夫人。これこそ夫人の待ち望んでいたムチ打ちのポーズである。眼前に無防備でさらされた丰满な臀部に激しく炸裂する革ムチ。吊り縄をねじるようにして悶え、泣き、哀願する夫人の被虐の表情。全くこれこそサドフォトの圧巻である。

褌裸女血闘場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号 (らは)

モデル 絹川文代、大塚啓子

黒フンドシをきりりと締めた二人の裸女が、必死になって渡り合い、遂に倒れた一人に対して脇差でもって咽喉元に止めをさす凛々しい姿を血紅を使用して写真化した夢幻的な美しさと惨酷美溢れるフォト。勝誇った美女と血を流して倒れる可憐な乙女との血斗交響楽。

介添切腹

略号 (あか)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木春子 外

切腹マニアの読者の提供による野外切腹フォトの第二弾、柔肌を切る方も切られる方も痺れるような恍惚境の中でプリプリと切りさばかれてゆく切腹プレイの一シーン四カット。

股間縛法悦境裸身

略号 (めこ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

素晴らしい美しさと均整のとれた肢体に厳しく黒縄が喰い込む全裸

の股間縛。足の指先に至るまで溢れる色気を漂わせたとおきのお秘蔵品。入手して絶対悔いのない完全無比な緊縛フォトをどうぞ。
浣腸マニア東浦ひかる特集

一、只今浣腸実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (かみ) モデル 東浦ひかる

責めの中でも浣腸が一番好きだという東浦ひかるに対して、実際に彼女のためのプレイとして実施した浣腸の場面を特にマニアに分譲するために撮影したもののワンカット。

二、強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (かく) モデル 東浦ひかる

彼女の好む空想のアイデア。お腹の中にドンドン空気を入れて蛙腹したらという要求でエネマシリンジを用いて、最大限に空気を注入したときの、腹部膨満の状態をごろんにいれる珍しい浣腸作品。

三、百CCの硝子浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

四、浣腸責のムード

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (かむ) モデル 東浦ひかる

浣腸が好きだというモデルでないと、中々出来ない芸当。彼女なればこそこういった、強烈な浣腸も容易に、しかも何の抵抗もなしに実施できるのである。

水本茂美緊縛特集

一、強烈エビ責め

大手札 一組三枚 三〇〇円

略号 (えひ) モデル 水本茂美

二、ゴム衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 (みす) モデル 水本茂美

春霞六尺二景

百田章二

去る日、田舎の古本屋の一隅から大正期の小説本を買った時、中に古色蒼然たる和紙の帳面を裂いた何枚かに筆や鉛筆で細かくぎつしり書綴ったものが挟み込んであったのを、私は好奇心で読んだ、見出しが禪雑記とあり「これは変わったものだ」と一気に終読した。言葉の前後の誤り、文字の判らぬ処、重複等があり、今私がこれに改訂補筆して皆さんへ公開しようと思う。

此の筆者は想像する処、慶応生れの古老の主観や思想を禪に依って現わしたかったかも知れないが、亦、強いマゾ的なものもあったと思う。

ある古老の話

「あの家へ行くと極まって前を捲って見せろと言いやがる、厭な野郎だよ」

「アアあの親爺か、と言っても末だ若い奴だが、行くのも癪だが、商売じや止めるわけには行かねえし」

「何時かとも言われた通り禪を見せたが、いい若え者がそんな緩るフンでどうする、もっと締めなけりや元気な生きのいい仕事は出来ねえぞと脅かしやがる」

「手前も——か、俺もやられた。ハハッハハ」

「笑えごとじやねえや畜生」

大工や魚屋、植木屋もろもろの出入の若者が噂する主は町でも名の通る丸金の主人、金物商なのだ。

昔気質の頑固さはあるが反面人情家で、古事記等に趣味をもっている。それが出入りの若者を掴まえては遠慮会釈なく禪見参を要求する。緊禪一番と言うように、常に清浄純白

一分の緩みないピッチリ締めた禪を理想としている。だからそれに相違すると叱りつけて強意見するので若者達に敬遠される。

「緩るフンで真黒な奴で何で仕事が出来、男の魂は禪だ、真白で締め上げた禪をしている奴には金も独りでに入ってくる、俺のを見る」

とパツと——成程腰骨に掛っている量位と言ひ、切立てのような純白でピッシリ締め上っている。

「へえ、なーる……だから金もうかるんで」と感心すると

「まアそうだ」と哄笑するのだった。彼の禪に就いてのいろいろの真説が、酒席で滔々と披露される。

日本の原始時代からの変遷、鎌倉時代に入り、モッコ禪のようなものから白布の六尺が

侍階級に用いられ、町民や農民はモッコが主であつたようで、徳川初期になれば凡ての階級に六尺褌が常用された。將軍様や殿様がよく白絹等をしている謂われるが、滑り易く、薄いので全部のお偉ら方が好んだか否はつぶさでないが一応は首肯出来る。庶民階級では褌を略して六尺と言つた。越中褌等は三尺そこそこだし「六尺」ではない。町民の一部には越中を用いていたが後期に至り殆ど六尺褌になつたようである。勇肌、若衆や遊び人、やくざ、俠客等は十二尺程の布を締めてその余りを腹に巻いたものもあるが、普通は六尺、きつかりである、前布を股へ通さず横に広げて前上へ挟んでおくのも多かつたが、これでは締まつた感じが鈍い。

歌舞伎芝居や映画に現われる尻端折りの侍等が広々と前へ出すのは、此の「前上挟み」を拡大した架空のものである。道中雲助の黒褌、漁夫の赤褌は前者は汚れを防ぎ、後者は蟻の襲撃を避ける確たる理由がある。

誰でもだろうが、褌の感触は春と秋が一番良く、夏は汗ばみムレて、冬は寒々して上へ股引でもはくと、窮屈で締めている気がしない。晒の寿命は割りに短いが潔癖な人は一月足らずで新らしく替える。素衿をパツと脱ぐ

と切立ての純白な六尺を見ると男でも気持ちのいいもの、締める位置は腰骨の稍下あたりがよく勿論ヘソの下になる。高々に締めているのも居るが、何となくだらしく見える。モッコや越中は褌の内に入らない醜惡な物と言ひえる。

男は六尺褌！ その感触は体を血を湧き立てる魅力的なものである。今は徳川後期、時代は移り変わつても日本男性から六尺褌は永遠に去らないだろう。

仲居お芳の話

丸金さんは親爺と呼ばれてるけれど末だ若くて三十五、六の体の良い苦み走つた美しい男よ。十年前にお内儀さんを亡くし子供もないので、香気な暮らして後添えをすすめる人もあるけど、どう言う訳かはね付けて独りで偶々茶屋遊びをする位い、それも面白そうじゃない様子だわ。

「好きな女は確かに居るの、田舎芸者上りの一寸凄味のある眼付きで二十三、四位いかしら、それを何時の間にか囲つて妾さんみたいな風よ。あたしが丸金さんの秘密を知つたのは、つい先頃の大雨の日だわ、いいえ妾のいる秘密じゃないの、そんなのはとうに人に判

つてることよ。神田明神様の上の湯島の方へ行く途中、淋しい原っぱの高い板塀に囲まれた小さな家が妾の処、名前はお銀と言ふの、その雨の日の昼前、あたしは用達の帰り近道だし家の裏の草っ原を歩きながら、此処が丸金さんのとヒョイと気が付いて、小じんまりしたい家らしい庭越しに一寸覗いてみると、丁度板塀に小さな穴があつたので覗いて見たの——。

その時縁側で単衣に伊達巻一つのお銀さんと、これも単衣に帯をした丸金さんが立つて空や庭の雨水を見ていたわ、その内お銀さんが中へ入つたと思うと水商売らしい若い女が十七人、お銀さんと一緒に出て来て縁先で何かを観ようという様子、女達は末だ寒いと見え、袷で襦袢も重ねているの、お銀さんがね「ゆっくり御覧な、こっちから頼んで見て貰う位いだから」ってみんなを座らせるの、

お銀さんが座っている丸金さんへ「いい雨だわねえ——利三さん。丸金さんは利三郎って名だわ——仕度はいいかえ」って凄い程の声で言うの、利さんが唇を噛むように「お銀ッ」って言うのと、お銀さんが「利三さん！今日はみっちりやってやるよ、サツ、裸におなり」て何が始まるのかとあたしは一生懸命

よ。

面倒だから、さん付けは止して
——男は衣物をパツと脱いで裸、
真白な六尺褌一本になるとお銀に
ドーンと雨の庭へ蹴落されるの、
凄うことするわ。

お銀も衣物をかなぐり捨てて真
赤な湯文字一つで庭へ下りて仰向
けのまま顫えている男を見て「ホ
ホホ」と笑ってびっくりしている
女達へ「ホホホ利三さんはあたし
の情夫だよ、あたしやアね、六尺
一本の男へ惚れる女だよ、切立
ての六尺一本の男ア女も惚れるん
だ。利三さんは寒くないうちは家
の中じやア六尺一本ッきりだよ、
七日目にやア真ッさらな切立をす

るのさ、ホホホ、あたしやア六尺一本の男へ
惚れる女だよ」て伝法の巻舌で恰で、あば
ずれ女みたいたなお銀だわ。

六尺褌の男っていくらも居るのに、利三だ
けがキット気に入ったのよ。お銀は洗髪にな
ると長い長い皮鞭へ水を含ませて腰のところ
の褌を掴んで長鞭でピシリッピシリッ、男の
尻から腰を打ち据えるの。



申
多

男は「お銀ッ」て仰向けになったり下に
なったりもがき苦むわ——ずっと前、何とか
お時と言う女が男を責め殺したって話があっ
たけど、お銀よりも男の方が苦しみながら嬉
しそうよ、併も……大勢の女の前で……あた
し初めてこんな男を見てよ。今が始めてでは
ないらしく、男の体には鞭の跡が薄く残って
いるわ。ピシリッピシリッ、お銀が肉付きの

いい股を濡れた赤い赤い湯文字か
ら出して打って行くの。

「ムムム……ム……」て男の
尻から腰へ赤い筋が引くわ「お銀
ッ、此の態ッ」て苦しむ男の褌は
ズルズルに緩む程よ。お銀がここ
で仲居達を下の広い軒下へ下駄ば
きで下りて貰って近くで見せよう
というの——。男は両手首は後へ
細引で縛られ褌は側の木の枝へ引
ッ掛けられて、此の褌が後で身顫
いするような凄う責め道具になる
の——お銀が「ホホホ、骨の髄迄
通る苦しみをし度いのかい」て又
鞭打ちになるの。

男は仲居達の方へ「六尺一本許
されない態ア！ 此の態だ」て口
惜しそうに言って「お銀ッ……手緩い真似は
……存分にやってくれッ——」スッパリ躰を
うつ向けに投げ出した男は、お銀の長鞭を一
杯に受けるのよ。「ムムムッ、ムム」尻から
腰、股が忽ちミミズ脹れだわ「ム——ツムッ
ッ」て苦しみがぐだけよ——。
仲居達はどうかって、そうね、怖々見てい
る者も、汚らわしそうに見るのもいるわ。

「マァあんなに……」「随分ねえ」て顔見合せている——足下へ、男が苦しみで慄えるようにして「ククククク」て這いにじって行くわ——。男は誰かに足蹴にされ度いのよ。お銀が仲居の一人へ「力一杯蹴るんだよ」て下駄のままドーンと腰を蹴られると「ムッ!」男は水溜りへノメるのを、仲居三人が交る交る蹴るの。

「態ア見ろいッ」て男が薄泥水にまみれながら苦しそうよ。「お銀ッ……手緩いッ真向から掛けてくれッ」と、もっと苦しみ度いのよ「態ア見やアがれッ」お銀がスッパリ仰向けになった男の腰や股を打ちノメすの。「ウムッ……」ってノタ打つわ。お銀の泥足で顔を踏み付けられて、必死の苦しみよ。お銀が、「ホホホ苦しいかえ、まだまだ序の口だよ、男の苦しみてこんなもんじやないよ、生き態を晒らすんだよッ」

まるで毒婦のような凄さ——。「ホホホ利三!六尺晒しに掛けてやるよ」て言うとお銀ッ」と男が顫えるの。あたしも見るのも馴れッこになったけど、こればかりは余り凄いのので思わずゾツとしたわ。どうって……利三にとって六尺禪がどれだけ大事なのかってことを死に物狂いで見せるの。「これから六

尺晒しに掛るんだッ口惜しいッ」て男は仲居達の方へ向って顫えるわ、雨は小降りになったわ、お銀が仲居や女中四、五人に手伝わして、木の高い頑丈な枝へ男を宙釣りにするの。足は下から三尺位離れていて、お銀はさっきの六尺禪を持って来て仲居達へ笑い笑いで

「ホホホ、これから此奴を六尺晒して奴に掛けてやるよ、男一匹がキリ迄苦しみ抜くのさ、此の六尺アピッチリ端から端迄六尺あるのよ。此の前で男がどんな態になるか、ホホホ惚れ惚れする位い男らしいよ、死ぬ程の苦しみをさらけ出すんだ」六尺を男の腰の辺りへ斜ッかいに枝から枝へ掛けて、百目蠟燭を二本、火をつけて枝とりつけて、チャンとい具合に仕掛けが出来ているの。垂れる蠟燭が男の腰の上から尻へ落ちるようになってるわ——お銀が長鞭を一振り振って「ホホホ、七人もの女衆の前だよ、男らしく苦しむんだッ」て一打ちピシリッと打つと蠟もポタポタ垂れ出すの。「お銀ッ……」て男は苦しく「ヒッヒッヒッ……」て苦しさで足の爪先迄波打っているわ「ヒ——ッヒ——ッ」蒼い程男の躰が波のようにくねるの。顫えるのをお銀が「ホホホ凄いい男らしさだねえ」て仲居へ見

せるの、男は苦しそうな風をするけど、本当はうっとりしてるのよ、きっと……こんな凄いい男始めてだわ、お銀は初めは男の言う通りにしていたのが、重なるにしたがって責めることが好きになったらしいわ……。

こうした六尺晒しがずーと続いて、やっと終るの。二人きりの秘密で、見物の女達には沢山の金を使って口止めしているのよ。恐ろしい見せものを見たような気がする、あたしよ。

完

【代理部だより】

○本誌旧号の中、復刊号の分(白表紙)は全部売切れとなり在庫がございませんので御諒承願います。○長篇悦唐小説『青い廃院』定価二百円(特価百円)悦特第一集、第二集、第三集、第四集、第五集、各冊定価三百円(特価百五十円)サド特集号第三集、定価三百五十円(特価百八十円)別冊第一集、告白手記特集号、定価三百円(特価百五十円)は少し在庫しております。まだお求めにならない方は、売切れにならない中、御注文願います。○別冊特別号の方は、第一弾、第三弾、第四弾(定価各五百円)と在庫、別項にて広告してあります。

〈モデルの手記〉

いけにえの幸福

(花田一郎さんの「モデル嬢の縁談」に寄せて)

大塚 啓子

フラッシュが一瞬、部屋のすみずみまでを照らし出します。カメラの距離と向きから判断して、自らの大腿部までが、四角の枠の中に切り取られたことを私は知っていました。

今まで何回となく経験したことではあっても、それは一つの鞭なのです。女の生肌に灼けるような痛みを与えるのが、現実の鞭であるならば、この光線の鞭は女の心理の奥底を打撃する一番辛い鞭なのです。

こうして一枚一枚の写真に閃めくフラッシュが、女の恥を思い知らせる鞭であることを読者の皆さんにわかっていただきたいと思います。

同情を乞うているわけではありません。現実の鞭にあき足りなくなった私は、こうした光線の鞭で女の誇りをふみにじられて、始めて

ほのぼのとした満足を得ているのです。激情のおもむくままに、こういう世界にはいつてしまいました。もう私は自分のことを普通の女だなんて、そんな大それた考えなど持っておりません。花田さんの評された「牛馬以下的人格」というお言葉を甘んじてお受け致します。

古代の社会は無数のいけにえを必要とし、それを祭壇に捧げました。私は自分のことを今の社会が祭壇に捧げるべくえらんだ必要な生贄の一人だということを知っています。こう思うと、少女時代に父の書齋で見た百科辞典のさし絵のアンドロメダ始め、多くの昔の生贄たちに非常な親しみを感じるので。私のいいたいことは、次のことなのです。この昔の生贄たちは、本当にいけにえになる

ことがいやだったのでしょうか、ということなのです。魚心水心ともいいます。心の奥底に莫然と、いけにえになりたいという願望を持っていない女がいるのでしょうか。この願望が女性特有のしなで、ふと外に表われたのを見つけて、白羽の矢が立ったのではないのでしょうか。

莫然とした願望が急に現実となり、自分の生命が絶たれることに気づいて、がく然としても、九分の恐怖と苦痛の残りの一分は、多くの男達の羨望の視線を集めている嬉しさの中で、彼女たちは息をひきとったのではないのでしょうか？

アンドロメダが自分の婚約者に愛想をつかしてペルセウスの妻となったのは、彼が自分を海岸の岩に鎖で縛りつけたからではなく、自分が海の怪物に喰われて絶命する美しさを見てくれようとしなかったからではないのでしょうか？

でも、私の苦しみ悶える姿は、全国の読者の方がたに見守られています。だから私は少女時代に憧憬したアンドロメダよりも更に幸福な女です。この女の幸福を与えて下さった奇巧のことを私は有難いと思っています。今日も四角な枠の中に切り取られた私の肉



体には「大塚啓子」という商品名——もうそれが自分の本名のような錯覚におちいるのですが——をはられて、来月の二十五日には全国の書店の店頭に、定価二百円でさらされます。そして主に男の方がたのだと思いますが数万の射すような視線につきさされ、時には

に生まれてきて、その一つ一つの——恐らく一つ一つが、世にも残酷な、みな様の所望される通りの死刑にかかってさしあげたいと思います。

もう娼婦の段階すら通りこした牛馬以下の白い肉塊です。存分に拷問の上で火あぶりに

同性の方々の目にもとまり、小わきに抱えられ、その方がたのアパート下宿、山間のお部屋に留められ、そこで又、ズタズタに切りさかれることでしょう。

読書の方がたの空想の世界では、私はもう何万回となく死刑台にのせられていることでしょう。私がもし何万回となく生れかわれるものならば、その何万人の死刑囚、大塚啓子

打ち首に、絞首刑に、股裂きに、逆さ吊りにお好きなように処刑下さいませ。

私は奇巧の誌面を新婚の夜具のように甘みな身のおき所と考えております。そのページをひらいて下さるだけで、読者の方がたを純潔を捧げる恋人のように敬愛しております。

どうか愛読者の皆さん、大塚啓子という、このいくら責められても痛めつけられて、不死身のようにタフな一人の女性を、思う存分にしいたげて下さい。

私は毎月の新刊の口絵からも、又代理部の分譲品からも新しい微笑みで皆さま方を見守っています。私は自分のモデルになった写真には殆ど目を通しております。中に気にいったものがあった時は、お願いして焼増していただくことにしています。だから私のハンドバッグの底に忍ばせてある写真と、皆さまのお目に触れる写真とは、全く同じなのです。私はその写真を通して、全国の愛読者の皆さまに親愛の情を捧げたいと思います。そしてこれからは、この全身を投げ出して、もっともっとと素晴らしい写真をとってもらおうと考えています。

みな様、お身体お大切に。

かしこ

妊婦秘蔵写真特集

ここに分譲いたします妊婦写真、読者有志の提供になるもので、モデルは二十才になる美貌の若妻です。本誌上にて関谷夫人が登場したことに対して感激された某氏が特に自ら撮影の秘蔵のネガを提供されたのでありますが、提供者の希望により誌上での公開が許されませんでしたので分譲品としてのみ発表いたします。

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

妊娠八カ月の二十二才の若妻がベンベンたるはちきれそうな大きな腹をつき出して立った全身裸像、しかも可憐な美貌でチャーミングに微笑んでいるというマニヤ垂涎のアイデアに加うるに妊婦の股間縛りという最高のアイデアによる秘蔵品。

○妊娠八カ月のヌード縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にあ)

後手に縛られ猿ぐつわをされた八カ月の妊婦が大きなお腹をつき出してすくくと裸で立った正面像。見事にふくらんだお腹が妊娠線もあざやかに、目の前に見ることが出来る妊婦写真の決定版！

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にこ)

同じモデルの妊娠五カ月のときの緊縛フォト。八カ月のときのお腹の大きさと比較すると如何に差があるか一目で見分けることが出来て面白いです。

○妊娠前のヌード緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(まさ)

妊娠中の写真と比較するため同じモデルの妊娠前の常態の写真を増しいたします。如何に妊娠中のお腹が大きいかということがよくわかりますから一緒にお求め下さい。

大好評 妊婦緊縛写真分譲追加発表

先月号にて児玉昌子さんの妊娠中のヌード並に緊縛写真の分譲を開始しましたところ、妊婦マニアの方から非常な喜びを以って迎えられ、その膨満した腹部は、まさにマニヤ垂涎の逸品として絶讃を博しました。ここに更に変わった姿態の臨月近き妊婦写真を御覧にいたします。何卒はちきれんばかりの巨大な腹部に御期待下さい。

○妊婦、股間縛 (九カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号(にふ)

妊娠線もあざやかに、ふくくと膨隆した腹部は、妊婦ならではの美しさをぞくぞくとする魅力をもってあらわしている。黒ずんだ乳暈を中心に、大きくふくらんだ巨大な乳房は、紐に締めつけられて、なお一層素晴らしい盛り上りを見せている。あのほっそりとスタイルのよい昌子さんが妊娠したら、このようなポリウムのある腹部、腰部になるのだろうか。芳紀二十二年の美しい若妻のはちきれそうな妊娠時の健康体をごらんに入れます。更に近々、同じモデルの分娩後の緊縛フォトも分譲できる予定です。

○妊婦、股間縛 (六カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(にと)

提供された同じモデルの中、比較的便をはかるため、更に六カ月の股間縛りを分譲いたします。御参考にごらん頂くと面白いと思います。

○妊娠初期の緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(ぬろ)

膨らみかけた腹部を露出して恥かしげに顔を掩ったヌードの妊婦と洋装の高手小手縛り。なお、妊婦フォトについては、今後出来るだけ発表したいと考えておりますので、モデルについて御心当りおありの方は御連絡下さるようお願いいたします。

「今月の新版分讓品」

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

代表的なサジスチン春日ルミ女史がバーのマダムという忙しい仕事の寸暇をさいてモデルとして登場。野性的な肢体の持主、愛川悦子嬢を相手に、組んずほぐれつの激しい争斗場面。互いに相手の急所を攻めて完全に屈伏させた上、尻の下に敷いてしまおうと全力をつくして争うシーンの数々。

○オムツの股間しぼり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「むく」

モデル 東浦ひかる

口には頬もくびれよと厳しい猿ぐつわ、ゴムのオシメカバーの半ばはずれかけたボタンの間から浴衣地のオシメがむざんにものぞいている。胸から腹、そしてカバーの上からの股間縛り。荒々しい男の足で踏みつけられて喘ぐひかるの豊かな裸身。

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号「りお」

モデル 梨花悠紀子

完全に飼育し終えた梨花嬢が吊責めやエビ責め、逆エビ責めなどにも満足せず、被虐の

終局点として誠に強烈きわまりない縄目を、全身くびれきつてしまう程施され、男の手でさいなまれ足で踏みつけられ、感極まって嗚咽の叫びを挙げた数コマを生来の天性による被虐モデル梨花悠紀子の代表的ポーズとして紹介します。

○乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「とお」

モデル 大塚 啓子

乳房の上下に紐をかけて、ねじり上げ締めつけ、豊満な乳房をむっくりと盛りあがらせて可愛い啓子の苦痛にもだえる顔を見る。

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きか」

モデル 絹川 文代

臀部を高々ともち上げて髪ふり乱して浣腸のポーズを無理矢理にとらされた後手しぼりの文代嬢に対して、もろもろの浣腸器具が男の手によって悪魔のように襲ってくる。

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「きえ」

モデル 大塚 啓子

後手縛りの縄と両足首の縄とが若々しい女体がしなう程締めつけられて、その連結した縄をぐいぐいと持ち上げられる。全身は背中を二つ折りとなり、さすがの啓子嬢もその激痛に、うううと呻めきながら目に涙をためて

許しを乞う全くトリックのない迫真的な強烈な逆エビ責めのシーン四態。

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きん」

モデル 絹川 文代

絹川文代の美貌にきっちりかまされた豆絞りの猿ぐつわ、一糸まとわぬ麗身に黒ずんで手垢に汚れた縄が厳しくまといつき、しなをつくって悶える表情と全身のうねりとを刻明に描写して絹川文代ファンに捧げる。

○腰元吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「こり」

モデル 村井知可子

高島田に矢張り、白足袋姿の腰元が、一人の武士のために庭の木に、後手縛りのまま高々と宙に吊り上げられ、刀の鞘を縄目にこじ入れられて折檻される時代劇映画の一場面の如き華麗にしてロマンな被虐シーン。

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「こく」

モデル 村井知可子

昨日までは腰元として御殿に仕えた身も、今は敵方の間諜として、庭の樹に縛りつけられ、情容赦なく白状を強いられる哀れな一人の乙女に過ぎなかった。刀を手にした侍は、庭に晒された可憐ないけにえに対して、嗜虐的な興味をもって拷問の手を下すのだった。

新版特殊フェチ・フォト

△バンド・マニヤ向作品の部▽

一、パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おい) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製の前開きのオーソドックスな月経帯を着用し、前開きを当てゴムをとり出して両手でひろげて見せている縛りなしのバンド着用フォト。うつぶせに蒲団の上に腹這いになってバンドの替ゴムの着用部分をあらわに見せ、自らの手で黄色いゴムにふれていく諸々のポーズを開陳します。

二、パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おは) モデル 東浦ひかる

両手首を背中に回して厳しく胸に二巻き三巻き黒縄で縛られた東浦ひかるが、替ゴムもすっかり露出した開股のポーズでパリスバンドを着用させられ、両手の自由のきかない身をくねらし、両足をばたつかせる表情。

三、パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おか) モデル 東浦ひかる

越中禪型の白い布製のバンドに替ゴムが直接ついたままの解放型の白月経帯を着用し、全身の正面のポーズに、大きく両足を八の字

に開いて替ゴムの部分をはっきりと表した大胆な月経帯着用フォト(縛りなし)

四、サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おた) モデル 東浦ひかる

黒フンドシ型の解放的なメンスバンドで、二本の紐で固定されています。黒木綿に直接アテゴムがついて、着用したままですっきりゴムの有様がわかります。豊満な女体に着用した縛りなしの軽便型バンド。両股を大きく開いてバンドの有様を鮮明に表す。

五、パリスSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おこ) モデル 東浦ひかる

ズロース型の黒メリヤス製の月経帯で、着用したそのまま替ゴムが見えるという準解放型のバンドです。ぴったりと腰部にはりついた月経帯が恥かしげに皆様の目の前に展開しています。縛りなしのフォトです。

六、パピアバンド(大型替ゴム)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おし) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製の前開きで、大型替ゴムのついたパピアバンドです。ひだの多いどっしりとした替ゴムを裏返して、着用したままに殊更に自らの手でお見せしようという縛りなしの、いかにもメンスバンドの特徴をもったフォトです。

七、サカエバンド(百合)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おえ) モデル 東浦ひかる

黒木綿のフンドシの股部にボタンで替ゴムをとりつけた解放型のバンド。白のゴム紐で両脇をとめたフンドシ型の標準品。豊満な臀部を白々と裸出した中に、替ゴムが可愛いと輝いている。大きく開いた股の間にちんまりと鎮座しているヌメヌメした替ゴム。

◎以上七点の月経帯着用フォトは、現在市販中のズロース型、解放型、フンドシ型のメンスバンドを裸身にまとわしめて、殊に替ゴムの部分にヒントを合せて、ポーズをとり極めて鮮明に作成したものです。マニアのために各種それぞれ型の変ったものを取り揃え、お求めの便宜をはかりました。

△ゴムマニヤ向作品の部▽

一、ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こみ) モデル 東浦ひかる

二、ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こは) モデル 東浦ひかる

三、ゴムと女体のアップ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こあ) モデル 東浦ひかる

今月の新版案内

六尺 褌

略号
(ろい)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

セイカンな若々しい姿態にきりりと締めた白い晒の六尺褌一本の裸体(褌をしめさせると殆どの娘は大変恥かしがる)にて四股を踏む躊躇の構えで正面。立って正面背面、側面、といろいろの舞姿のポーズをごろんにいます。

蒲団に悶ゆ

略号
(なき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

裸身に喰い込む麻縄、激しいムチ打ちに追い立てられて蒲団の上で転げまわって悶える若き夫人。足の爪先立ててムチを防ぐ太股に痛烈なる革ムチ。顔は悲痛に泣きむせぶ感きわまった悦虐の表情。

悦虐の果て

略号
(なみ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

この全身の表情をちよつとごらん下さい。殴って殴って殴りつけた末に、今まさに倒れんとした刹那、やっとキャッチした貴重なポーズばかりです。この写真から従前にはない強烈なすさまじい責めのムードを擲んで下されば幸甚。

椅子エビ責

略号
(おき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

このポーズの撮影で半日を費した強烈きわまりないエビ責めマゾヒスト東浦嬢の熱意と若さを以てしなければ出来ないポーズ。椅子の上に縛りつけられ、両足を頭の上まで高々と折り曲げ、ぎゅうぎゅう締めつけ、一時間ばかり放置した上でシャッターを切ったフोट。勿論これはひかる嬢の注文で忍耐の限界を試したものの。

六尺 褌縛

略号
(ろは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺褌を前の垂れもなくしてきゅつと締めつけ、恥しきにもすれば両手を前にやろうとす

るのを制して、両手首を背後で括りつけて、殊更大きなお腹をつき出させるようにしたフンドシのしぼりフोट。

東浦の切腹

略号
(えん)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

東浦ひかるの腹部は最近皮下脂肪が増したか大変膨隆してきた。一日、彼女に切腹のことを話すと自分の下腹に刃を立てると言うことには興味を持っていた。まに短刀を渡してポーズをとらしてみた。これはその時のフोटである。端座して刃を下腹にかまえ、したたかに突き刺したところ。扶くって痛さに倒れ伏したところ等、好ポーズばかり五点を選び出した。

浣腸シリーズ

略号
(れち)

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

梨花悠紀子が、いちじく、ガラス製三〇〇CC浣腸器、イリガートル、オシメ、オシメカパー、差込便器、等を用いて連続に浣腸と排便を模様を近い距

離から手にとるように仔細に描き出した浣腸関連シリーズ、愛川悦子、大塚啓子の(ちよ)(ちし)(ちふ)に続く浣腸マニヤに捧ぐ第四作。

弓吊り責め

略号
(つき)

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

両手首と両足首とを反対側にして別々に吊り上げ背を上にして高々と宙に浮いた梨花嬢。吊りを第一に好む悠紀子にして始めて出来た本格的な吊りポーズ。さすがの彼女も顔を垂れて苦痛に耐え、頭を上げて悶えるさまは、素晴らしい。

手足宙吊り

略号
(つた)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手を手摺に水平に括られ、両足を八の字に開いてその両首を各々左右に釣り上げて縛られた強烈な宙吊りのポーズ。辛抱づよい悠紀子嬢も美しい眉をひそめて苦痛に耐える懸命の責められぶり。ハすべて略号にてお申込み願います。

新版代理部分讓品案内

関谷富佐子夫人緊縛特集

一、強烈、エビ縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(もい) モデル 関谷富佐子

肥り肉(じし)の白い女体をくの字に二つ折りにして、着用のバタフライもかなぐりすててエビ縛りのまま受ける強烈なムチ打ちに真白い臀部は忽ち紅に染まり、頸にかかった縄をピンと張りきらして悶える美体。

二、乳房責の苦悶

大手札印画紙 二枚一組 二〇〇円

略号(もろ) モデル 関谷富佐子

脂ののりきったコリコリとした固い乳房に加えられる手と足の暴虐の嵐。猿ぐつわに息もできぬくらいの口から洩れる苦悶の悲鳴。

三、全裸ムチ打ち

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(もた) モデル 関谷富佐子

豊麗な臀部に、太股に脛に、情容赦なく炸烈する革製のムチ。白い肌にはミミズばれが赤黒く走り、後手に縛られて身動きの出来ぬ彼女は、只ヒューヒューと喋って転げまわるばかり。ムチ打ちに命を捧げる彼女に対して行っ

た手加減のない本格的なムチ打ちの成果。

四、六尺褌の女性像

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(くる) モデル 関谷富佐子

恥しさに顔を赤らめた関谷夫人が、そのボリウムのある堂々たる体格の裸身に、白晒の六尺褌をきりりと締めて、前後左右から、その見事な姿態を十二分に見て頂くため、皎々たる電光下に立つ。(縛りなし)

五、強打に泣く裸身

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(むち) モデル 関谷富佐子

裸身に六尺褌一丁の彼女が前手しぱりにあって、その可憐な身をかわうことができない哀れな膝立のポーズで、むきだしになった臀部に、背中に乱れとぶ皮ムチの強打。彼女の全身はエビのように曲り、或は倒れんばかりに逆に反り、ぐねぐねと曲り屈み、ムチの痛さに悶えぬく悦虐の極の姿態。ムチ打ちつつシャッターを切った二十数枚のネガの中から選びだした絶妙の表情のものばかり。

フェチッシュ緊縛の部

一、レインコートの拘束

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(いろ) モデル 大塚 啓子

裸の肌に直接ネチネチとしたレインコートをまとい、フットをまぶたにかかった大塚啓子の柔肌をぐるぐると荒縄で厳しく縛り上げれば、ゴムの裏布がジカに肌を圧迫して、その感触に、てんてん反側するさまを彼女の足の先から頭のとっぺんまで刻明に捉らえた。

二、ゴム布に包まれて

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こま) モデル 梨花悠紀子

後手に縛られた梨花悠紀子が頭にはゴム帽子、首にはゴムの前掛け、ゴムのズロースをはき、手にはゴムの手袋、足にはゴムの靴下と、全身これすべてゴムづくめ、縛られて次第に時間が経つてくると、ゴムのあのヌメヌメとしたタッチが直接肌を刺戟し、特有の臭気が鼻をついてくると、彼は、そのままじっとしていくことができなかった。

三、狙われた和装の娘

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(ねい) モデル 愛川 悦子

珍しく和服に身をかわためた娘、愛川悦子に襲いかかった縄の暴虐。忽ち羽織は剥がれ着物の前は押しはだけられて、赤い長襦袢があらわに乱れ、縛しめられた愛川嬢の周囲は帯や腰紐、羽織などが百花繚乱と咲きほこり時ならぬ目の正月が現出した。

女体切腹（現代篇）絵巻

略号（えま1）

四馬孝画 B 6判感光紙焼付 六枚一組 五〇〇円

将校と女学生の情死切腹

煉瓦のくずれた廃家の一室にて軍服姿の将校が軍刀にて双手突き立腹を切り、その前に可憐な制服姿の女学生、スカートを脱ぎすて、白いブロースを托し上げて九寸五分の短刀をぐさりと臍下に突き立てる。

女間諜、夕に切腹す

敵国潜入のうら若き女将校、スパイの露見を知った彼女は軍服姿に身を固め、前をくつろげて軍刀でしたたかに下腹を切れば、青黒き腸が傷口からのぞき血は床にしたり落ちる。乱入した数人の兵士の驚く表情。

大和撫子、乙女の自刃

敗戦で凌辱の手の迫ってきた女学校の寄宿舎。操を守るため次々と自刃する乙女たち。未婚の女教師、暴徒を前にして下腹を切りさばき、最後に咽喉元に短刀を突き立て飛び散る血汐の中に大和撫子の見事な自決を遂げる悲壮な女体切腹シーン。

雨中、美女の立腹プレイ

横なぐりの雨が降りつける深夜の林の中。レインコート一枚を素肌にとった麗人が、夜目にも白く浮ぶ下腹を洋式ナイフで深々と切り、創口からはむくむくと腸が溢れ出て、血汐は下半身を紅に染める凄絶さ。

夜会服貴婦人の切腹

黒皮手套に黒皮長靴の外は裸という大胆な服装の貴婦人が夜会服を肩にかけたまま、大の字に突っ立っての壮絶な覚悟の切腹。海軍将校用の短刀の切味は思うさまに素肌を裂き太い腸管がうねうねと這い出てくる。

女子大生の切腹自殺

美しい女子大生が失恋の結果旅館の一室を選んで思うさまに自らの下腹を掻き切って死のうと、パステル一枚の裸身に、腸ののぞくまで深々と刃を突き立て壁に身を寄せて自分の死を待つ哀婉きわまりないシーン。

女体切腹（時代篇）絵巻

略号（えま2）

四馬孝画 B 6判感光紙焼付 六枚一組 五〇〇円

落城の姫君、火中の自刃

火焰に包まれた天主閣の一室、城主の姫君は迫りくる火焰と敵兵に囲まれながら、十八の花の命を自らの手で絶とうと双肌ぬぎとなつて下腹を家宝の脇差でしたたかに切りまくり、血汐に塗れて自刃を遂げる。

武家の娘、覚悟の切腹

女ながらも死を賜った武家の娘は介錯のために派遣された藩中の青年武士に対して介錯を断り、白布の上に正坐して古式にかなった覚悟の切腹。柄も通れと突き立てきりりと引き回せば血汐と共に腸が溢れ出る。

恋人に抱かれての切腹

白装束に身を固めて覚悟の腹切りを行う娘と抱き起して顔をのぞき込む恋人の青年武士。娘の下腹は一面血の海で腸さえ溢れ、蒼白な顔を挙げて両の乳房を恋人の掌の中に委ねながら、満足そうに絶

命してゆく。

介錯に落ちる女の首

カガリ火の熾える御殿の庭。双肌ぬぎとなった若い女が殿の御前で悲壮な切腹。前かがみになった下腹のふくらみに短刀を突き立てた途端、白刃一閃して娘の白い首すじにさつと飛び散る血汐。首は哀れにも落ちる。

死を賜った腰元の切腹

局のザン訴によって死を賜った腰元は、その憎い局の見ている前で無念の切腹を遂げる。えいッとはかり激しく下腹に突き立てる刃飛び散る血汐と共に思わす口をついで出る絶叫、臍の上を切り裂く十文字腹。

操を守る若妻の切腹

夫の出府中、かねて横恋慕していた上役が無理無体に迫ろうとするのを、かくし持った懐刀で下腹をしたたかに切る。二寸ばかり、ぐいと切りさばけば血汐は白い内肌に飛び散る。操を守る若妻の悲壮な切腹場面。

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

二、立木//宙縛り//

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

三、凄惨//乳房責//

大判印画紙 三枚一組 二五〇円
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

四、//妊婦の緊縛//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) モデル 某女

五、//全裸の仕置//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) モデル 東浦ひかる

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) モデル 大塚啓子

二、女体切腹マンダラ

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) モデル 甘木春子外

三、悲愴女体自決

四、哀艶女体割腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) モデル 大塚啓子

五、凄惨血紅女体立腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

六、苦悶切腹表情

大判印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号(ひさ) モデル 大塚啓子

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(せく) モデル 梨花悠紀子

二、バンド着用の縛り(後手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

三、バンド着用の縛り(前手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

四、女性の六尺褌

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(めは) モデル 大塚啓子

五、ゴム・マニヤ

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(ろく) モデル 梨花悠紀子

六、メンス・バンド

大判印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

七、ゴムカバー着縛り

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(かは)

八、脱がされたバンド

大判印画紙 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めに)

九、アテゴムの猿ぐつわ

大判印画紙 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めほ)

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こう) モデル 絹川文代

二、変態強盗侵入

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(こと) モデル 絹川文代

三、和洋争闘場面

大判印画紙 六枚一組 五〇〇円
略号(らり) モデル 田中芳代 外

四、裸女争闘場面

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(らし) モデル 田中芳代 外

◆強烈マゾ絵画

春川ナミオ画

//巨臀に屈伏する//

略号「まか」

B 6版感光紙焼付

四枚一組

五〇〇円

人間トイレ

洋式トイレの中、美しい女御主人の御用便の下に仰向けとなつて人間トイレの使命を果すコプロマニヤの天国の図。

人間椅子

逞ましい豊満な臀部が男の顔の上にデンとのっかって、全体重で押しつぶすと瘦せた男は今にも押し潰されそう。

臀部に潰された顔

洋椅子の上に仰向けになったMの顔の上に、ぴったりと大きなお尻を据えた娘のニヤニヤした誇らしげな表情

太股に埋れたM男

男の首はポリウムのある女の両脚に跨がれて、その間に埋れてしまい今まさに窒息寸前の恍惚境にあえいでいる。

新作マゾ・フォト

「股責の地獄」

大塚啓子嬢の新作

男の首の上にどっかりとまたがり股で責める大塚啓子嬢の新作をここに分譲品として発表いたします。従来マゾ物の御注文がS物に比してその何十分の一しかありませんでしたが、マゾ画の「まか」と共に要望が多いようでしたら、更に引続いて新作を発表する予定です。今回の

大手札印画紙焼付

四枚一組

五〇〇円

略号「まそ」

分はすべて啓子嬢の股の間に挟まれたM男が鼻をあぐらにかかされ、首を両股で力いっぱい締めつけられるなど、大切な男の顔が女の太股によって、さんざんになぶられ辱められ、上から侮蔑の目で眺められるといった汚辱ぶりを表しました。御注文の如何では、M物はこれにて一応発表中止します。

滝れい子画

△娘と娘の斗争場面画▽

女体血斗『女が女を降伏させるまで』略号「りる」

A 5版感光紙焼付

七枚一組

一〇〇〇円

○若々しい肢体のはちきれそうな健康美の二人の娘が組んずほぐれつのあられもない死闘を繰りひろげる女斗美絵巻を滝れい子さんの麗筆によって絵画化して頂きました。

○激しく相争う二つの美しい女体、やがて、一方が力つきて屈伏し勝者の大きな臀部の下に首を顔を下敷きにさせられ、涙に

むせぶという過程を順を追って描いて貰いました。

○女斗美、女斗マニヤ、女相撲マニヤの方々に捧げるべく、写真では表現できない味を出すため特に寸暇をさいてれい子画伯に描いて頂いた画集です。マニヤの方々のお気に入れば幸いです。

どうか御一見下さい。

東浦ひかる 『黒フンドシの女』二題

第一組

股に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とし」

豊かな尻の割目にぐっと喰い込む黒フンドシの有様を三枚のフォトによって、刻明に描き出し、揮マニヤの方々にその美しさを味って頂きます。

第二組

股を開いた黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とひ」

ぴったりと股に締められた黒フンドシのしめ具合を正面から十分に股をひらいてマニヤの方々にごらんにいれようという特殊フェチ・フォト。



二、四月号大塚啓子嬢の素晴しいMフォートに接し今迄の啓子嬢のイメージとはまるで違ったS女性としての新鮮な魅力に圧せられると共にひたすらマゾへの願いに想いを託すものにとってこの上ないプレゼントだったと思います。今後の啓子嬢の新しい一面の発展を同嬢のファンとして心から期待し声援をおくりたいと思います。私は二十七才になるM愛好者ですが、私達Mにとって何時かはこの様に生来のマゾを理解して下さるS女性の出現を信じつつも、実際にはなかなかその機会に恵れないのが現実であり、又それ故に尚一

層SMの世界への憧れに心を悩ますゆえんでもあります。被虐をのぞみ奉仕と服従を誠意をもって誓い、捧げる奴隷を思うさま駆使したいと思われるS女性はいないのでしょうか。女王様の御連絡を心からお待ち申しております。又女性読者の方でSMやアヌスに己れのアブノーマルな悩みをお持ちの方と奇巧を通して互いの意見や満されぬアブニストとしての思いについて遠慮なく語る機会を持つことが出来たら、どんなにか心も安らぎを覚え有意義な日々を過せることかと存じます。そして秘やかなアブノーマルな思いを抱きつつ良りよき社会人として明日への励みにしたいと心から祈ります。ではどうかよろしく。(大阪市八小野生V)

二十才のBG、相撲の大アフンです。大相撲がはじまると、ソワソワして仕事ができなくなります。職場の人から目つきがちがつてくるなどヒヤかされます。夜は大いしこをふんだり仕切りのマネなどをプレイします。私の部屋は二階なのであまり大きな音は立てられないのですが、それでもつい力が入って母からこごとを

いただいたこともあります。美容体操をしているのだということにしてありますので、のぞきにきたりはしません。最初はやはりブラジャーとパンティをはいてプレイしていたのですが、だんだんおもしろくなくなったので、今ではマワシを締めてプレイします。お相撲のマワシがはしかったのですが、どこへ行ったか良いかわからず、人にもたのめませんのでデニムなどの生地を買ってきて自分でつくりました。そのかわりいろいろの色があるので気に入ったものを買います。今はグリーン、ブルー、むらさき、コバルトの四本もっています。本屋さんで相撲の本を立ち読みしてマワシの締め方をおぼえましたので今では本当のお相撲さんと同じ締め方ができます。一番好きなグリーンのマワシを締めて土俵入りのマネをしたり、足を一ぱいに開いて体を前にたおすお相撲さんのたんれんのマネをして楽しみます。こんなことをしていたらおヨメにもらってくれる人はいないかもしれないと思ったりしますが、やはり裸になってマワシを締めると体中がシビレてくるような気持ちで、何ともいえないのです。それでも一人でプレイしてい

るのでさびしくなってきたか相手になってくれる人がいないかなあと考えたりします。通勤の汽車の中で体格のいい女の人を見ると、こんな人とプレイできたらいいなあと思ったりします。東京の村田さんはA子さんという相手があるものでうらやましいと思います。岡平さまの企画が実現したら私もぜひ、参加したいものです。そのときは私の一番好きなグリーンのマワシを締めて出ます。ブラジャーやパンティはつけなくてマワシを締めただけの裸の方がすっきりすると思いますけれど、男の人たちの前へ出たらやっぱり恥しくなってしまうでしょうね。どなたか近くの方で私の相手をして下さる女の方はいらっしやらないでしょうか、そしてどこか人に見ていない所で力一ぱい取り組んで見ませんか、私は一メートル六十で五十一キロあります。それから代理部で相撲マワシをお世話下さるとうれしいのですけれど。(新潟市八石山正枝V)

K・Kファンの皆さま今日は。僕は雪国に住む一男性です。K・Kは半年ほど前から毎月愛読させていただいております。僕もそろ

そろ一人前の社会人となって行くんですが、どうも年のわりにはかわい顔をしてるといので、皆から「坊や」などと呼ばれているありさまで。こんな僕はちよつと変わったM男子なんです。つまり、ただムチで打たれたり、蹴とばされたりするよりはむしろ、おもちゃにされたいという気持が強いのです。例えば尻の下でぎゅうぎゅうと顔を圧迫される。太もものあいだに首をはさまれる。無理やり褲をはぎとられ、ズロースやパンティをはかせられる。浣腸をかけられ、あわれな排便の醜態を見せた上、おしめをさせられる。等こつこつした恥辱を一度でも良いから味わってみたいといつも心に描いておる毎日です。このような僕をいじめてみたいと思われる女性の方、だれでも結構です。すぐにお手紙下さい。編集部の方が転送して下さい。編集部の方が転送して下さると思います。貴女のご住所が判れば、遠近にかかわらずこちらから行きたいと思ひますし、秘密は絶対に守ります。初めてなのになれなれしい文章でどうも失礼いたしました。(会津若松△B生▽)

K C 誌、御愛読の皆様御元気で

すか。私、はじめて便りを寄せる者ですが、今後とも宜く御願ひ致します。私はS四十%、M六十%の当年二十八才になる男性です。K C 誌を毎月かかさず入手して楽しく読ませていただいておりますが、発行に御尽力下さる諸氏先輩に厚く御礼申し上げます。さて私はかねがね一度はプレイを身をもって味いたくうずうずしている昨今です。どうかプレイの相手をして下さる女性の方、出現して下さい。私は女性からどんな恥しめを受けても責られても、かまいません。排泄物の洗礼でもかまいません。ただける方は名乗り出て下さい。又、浣腸はじめ強い責めを求められる名古屋の寺島様はじめM女性の方も是非とも御連絡下さい。同好者がともにプレイの出来る日を楽しみに待っています。(愛知県八鹿島吉三郎▽)

「妊婦秘蔵写真」のモデルの児玉昌子様、お写真を拝見しました。八カ月ともなれば、着衣の上からでも、お腹の膨らみを隠すことは出来ませんのに、そして、普通の女の人なら大きなお腹が目立つのを恥じて、なかなか人前へは出た

がらないものですのに、分譲品に限られるとはいえ、このような写真のモデルになられたあなたの勇氣に敬意を表します。三十三年に妊婦のヌードをわたしが提唱してから、五年も経たないうちに、あなたのような方があらわれたことは、思いがけないよろこびです。いずれは実現することと確信しております(には)。うち、帽子で顔を隠した一枚が、とくによかったと思います。妊娠後期の見事なお腹の膨らみは、真正面からよくとれている妊娠乳房とともに、あなたのお腹の中に、相当大きな赤ちゃんが入っていることを、うたがう余地なく示しています。お臍が紐に隠れているのが残念ですが(には)の二枚の正面像では、すっかり浅くなった妊娠臍窩とその下にたてに入った筋とを見せて、それ以前の(にこ)や(まさ)の写真とはっきりちがう特徴が出ています。いよいよ本格的な妊婦のヌードがあらわれてみると、妊娠八カ月もの異常なはだかのからだを、こうして鑑賞されたいとねがう昌子様の心情が、わたしにはよく分るような気がします。妊娠中のはだかをむき出しにして、人間という動物の雌である女の生理の結果がこうして人目にさらされているという想念は、わたしをゾクゾクするようなマゾヒスト——ナルチシストであるわたしは、昌子様をうらやましいとさえ思うのです。奇クがこの方向に

佐保忍案・四馬孝画

時代風俗責場面八景

略号

「さほ8」

B 6判 感光紙焼付 八枚一組 五〇〇円

△時代風俗凌辱場面ばかりの被虐絵巻▽

- | | |
|-----------|-----------|
| 第一景 乞食と美女 | 第五景 戦陣の血祭 |
| 第二景 目明裸吟味 | 第六景 駕籠昇人足 |
| 第三景 腰元の逆吊 | 第七景 杉葉いぶし |
| 第四景 親分の折檻 | 第八景 井戸責の姫 |

ふみ出した以上、さらに二歩も三歩も進みて下さい。辻村様や塚本様の「妊婦写真撮影の実際」などの出現を、一日も早く実現して下さい。とくに臨月の妊婦は、もっともすばらしいものです。(八羽村京子)

編集部の皆様御苦勞様で御座居ます。毎月の出版は大変な御苦勞があると思いますが、それにもめげず、我々女角力マニヤにとりましてはただ一つの本であります。最近男の方又、女の方も共に女角力マニヤの方がおられ読者通信に投稿してくださいます事を、小生かげながらよろこんでおります。三月号の読者通信に投稿いただきましたました群馬の三山生様のいわれまます様に友の会を作り文通交換等をいたしたいと思ひますが、女角力マニヤの方にもう一度読者通信を通じて皆様におねがい致します。私達女角力マニヤは女性が一本となり両力士共力のあるかぎり取組合をして相手の輝を引合、乳房と乳房を合せて押し合いそのあけく両者とも土俵下へかさなり合つて、ころがるのも、女角力ならではの場面であります。又勝ちほこり輝が乳の下までずり上りゆ

るんではずかしそうに引上げる顔も又いいのではないのでしょうか。では女角力マニヤの方男女とわず御便よりください。(岐阜県海津郡八服部不二夫)

中川フミ子様、あなたのお便り

拝見しペンを取りました二十六才のM男です。私をあなたの「ペット」にして下さい。あなたの汚れた下着を身につけ首輪をはめられ鎖につながれてチンチンもすればおまわりもします。四つんばいにして馬のりになってムチを当てたり、荒ナワで縛ったり、ハイヒールでふんづけたり、足の裏をなめさせたり、腰掛の代用にしたりして思ふ存分可愛いがって下さい。私はそれをこの上ない喜びと致します。連絡は発売日二十五日から一番近い水曜日の夜九時に川崎駅タビル側出口伝言板にて致しませう。私の身長は一六二センチ。体重は五五キロです。(東京都大田区八田中二三男)

寺島美千代様「奇ク」四月号の貴女のお便り拝見しながら、僕こそ貴女にお相手出来る男性と思ひさっそくペンを取りました。小生は「奇ク」は近号よりの愛読者で

四馬孝画(女斗ファンと裸女争斗マニヤのために)

大奥裸女決闘場面

略号(おく5)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

〇〇禪裸女の争い
大奥の裸女格闘

〇〇首級を挙げる
庭での果し合い

すが、浣腸マニヤの方は、それ以前からですが、「奇ク」を愛読する様になり、読者の皆様の内には色々の浣腸の方法がある様です。で、小生も色々と研究し始めました。今迄にイチジク、石鹼液、ガラス製、ゴム管と行つております。寺島様ぜひ僕とブレイをして下さいませんか、真面目でけつして無謀な事もしません。秘密は絶対守ります。貴女の指示に従います。又、オムツカパーも持っておりますので貴女にしてあげてもよろしいです。僕は二十四才、一・六五米、体重十五貫。所も岐阜近在ですので貴女とも身近にお会出来ると思ひます。ぜひお返事下さい。そして貴女の住所と詳しい地図をお知らせ下さい。又、「奇ク」発売日後始めての日曜と次の日曜日の午前十一時より十二時迄名古屋駅前地下鉄、改札口にて手

△近藤勇三

にクツペラ持って、待っていますか

かけますが、本当に自転車になりたい様な気がします。私を思い切りふくらまして下さる方はおられませんか？ なた様でも結構です。ぜひ御一報下さい。秘密は守って下さい。お願い致します。(大阪難波八林敬一)

はじめて投書させて頂きますがどうか没にしないで下さい。三年前より愛読していましたが、今迄投書する勇氣もなかった小心な四十才のM男です。既に人生の半ばを過ぎて生活にも一応の安定を得ました現在、せめて一生に一度でよいから崇拜するS女王様の鞭のものとに例え一日でも良いから御奉仕させて頂く事が出来たらと思ひ恥を忍び勇を奮い投書させて頂きました。どうか世のサジスチンの女王様方、御仁慈を持ちましてこの哀れな大男の願いを叶えて下さいませんか。貴女様のお美しいおみ足に踏まれ蹴られて、鞭で打たれ激しくビンタされたら、どんなにか幸せでしょうか、どんな御命令にも御要望にも絶対服従し心からの忠誠をお誓い致しますと共に如何なる秘密も守ります。「東京の川田幸子様そして大阪の佐川奈津子様」数多くの志願者がいる事と

存じますが、どうかこの私にもテストの機会をお与え下さいませ。一生飼いきれしにして下されば望外の喜びですが、せめて一日だけのプレイでもお情けをかけて下さいませ。必ずお気に召します様完全御奉仕をさせて頂きます必ず必ず努力致します。お美しい世の女王様方は非奴隷御入用の方は御命令下さいませ。時に強烈な印象で記憶に残りました佐川様、そして二月号で呼びかけのあった川田様御連絡下さいませ。大地にひれ伏してお願申上げます。(静岡県賀茂郡八小野悦夫)

名古屋千種区の寺島美千代様、奇ク四月号の御便り愛読者の一人として又同好マニヤの一人として力強く大変うれしく拝見させて頂きました。小生二十四才の男性、中学教員を致しております。熱烈な浣腸マニヤです。小生在学中、病院生活を送った経験があり、その時毎夕行われた浣腸が病みつきとなり、今では近くの薬局で薬液を求めて一人ひとりに楽しんでおります。しかし小生の念願は若い女性に無理に浣腸を施して見る事であり、又浣腸される事が大きな夢でしたが、本誌読者通信で貴女

の便りを拝見し、小生のこの念願を夢を満して頂けそうな文面に勇氣を出してお応えさせて頂きました。同じマニヤの方で貴女とのプレイを希望される方も多い事と思えますが、小生もその一人に加えて頂ければ幸福に思います。そしてお互いに秘密は守り貴女にも御満足頂けるプレイを行う事が出来ると思っています。もし小生とのプレイを許して頂けるならば住所は編集部にありますから御返事頂けます様御願い致します。最後に本誌の発展と愛読者諸氏の御多幸を御祈り致します。(福井県八河野啓一)

最近、特に女角力ファンから読者通信によせる数がふえている。私もその一人として長らく貴誌を読んでいながら私見を述べてみたいと思う。私は昭和三十年頃、畔亭数久の戯画娘角力以来貴誌を購読

するが、それは女角力の記事が掲載されている場合に限るので愛読者とまではいかないであろう。貴誌に限らず月刊誌、週刊誌において女角力の記事のあるものはすべて購入、スクラップブックに保存し折りながめて楽しんでいる。扱て女角力ファンが増加しているにも拘らず貴誌の編集においては却て女角力関係を黙殺しているのはどうしたわけか。勿論一部の投稿によって編集方針が変更することはないとしても、せめて分譲フォトによって、ファンの要望に答えるぐらいの誠意はあってよいのではなからうか。他の偏向にある分譲フォトは今日まで絶えず発表され、ひそかによく売れるものと思っていたが、女角力に関しては、一回の分譲フォトすら見当たらない。分譲フォトの売れ行き如何によって他の偏向の読者とのバランスが判り、これを今後の編集方針

四馬孝画 (若き女性の美しくもいたましい変死体)

変死女体惨酷場面

略号 (へし4)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

- 一、首吊り屍体発見
- 二、溺死体の検屍
- 三、縊死体の検屍
- 四、溺死体の解剖

に反映させることが即ち読者のための雑誌という真価が発揮されるのではなからうか。一回の分譲フオトすらなく女角力ファンがその数に於て極少とみる態度は一種の独断と非難のそしりを受けることをまぬがれまい。編集子の考慮を願いたいものである。分譲フオトは三月号で殿田氏が指摘するように黒の締込みを正しく締めることが女角力ファンの共通の要請と思われる。力のこもった、迫力あるポーズであることはいうまでもない。十年來の読者でありながら、初めて私見を述べる心情を是非とも考慮してもらいたいと切望し筆をおく。(一女角力愛読者より)

○ ゴム引の黒いカッパは、カッパマニヤは何にも変えられぬ魅力的なものです。あのヌメヌメとした手ざわり、そしてゴム独自の冷たさ、肌にまといたし時に体温をとおして、しなやいだ感じ。使う程に香りが出てきて肌にそってくるカッパは此の道のマニヤ以外には、単なる雨具以外に何もものもないものですが、マニヤにとっては実に魅力があります。小生は三十年來のカッパマニヤです。フトンのシートは三十年この方カッパにて致

して居ります。夏はゴムの方を裏むけにして布の方を使い、冬はゴムの方を表につかいます。夏は肌の汗ばみによりずいぶんとむれまですが、冬は肌に少し冷たい感じがります。しかし、少し経つと良い感じになりますので捨てたことはありません。戦時中の物資不足の時は少し困りましたので郵便配達夫の古い払下のマントを手にいれてひろげて寝ましたが、最近は一巻単位にて買い入れて使っております。一枚は約一カ月程移には新しくしかえませんが、古くなったのは捨てます。それからカッパ布にてネマキを特別に仕立させ使用しております。丁度表にゴムの表面を出し、腰から下の裏にも、ゴム引の部分をあてて使用しております。あのゴム肌の冷たい感触は冬夏を問わず素晴らしいものです。一度カッパマニヤに拘らず御使用されては如何ですか。(一カッパ・マニヤ)

○ 男性にとって、女性の魅力的に感じる所が様々だと思います。或る人は女性の目、又は口或は太腿乳首、尻、鼻、耳、胸などと数えあげればきりがありませんが、色々あると思います。私はその変っ

た所の一つ、女性の鼻に興味と魅力を感じているのです。ただし同じ鼻でも、鼻孔に特殊の魅力を感じるのです。お笑いになるでしょうが、私自身も、どうして女性の鼻孔になんか魅力を感じるのか解らないのですが、とにかく現実にはそういうのです。従って、ずっと鼻いじりの写真とか鼻責めとか、或は鼻孔のよく写っている写真を集めています。女性が仰向きになつて鼻の孔が、その奥まですっかり見えているような写真以外には興味がないのです。雑誌のグラビアでも私の趣味にあう写真が時折り見つかりますが、やはりそういう写真の数も少いし、びったりしたものも稀です。分譲品の中にでもそういう私の好みに合ったものがないものかと、私の切り抜きを同封にてお送りします。(鼻マニヤ・鼻孔生)

○ 四月号口絵の中、四馬孝氏の「女城主の最期」の切腹画は、私にとっては近來にない佳作にうつりました。女性の切腹画の中で、今後共強く印象に残りそうです。畔亭氏の「切腹幻想」(29年5月号)の中の、刺青姐御の立腹の図も強く印象に残っていますが、今度の

も、これに次ぐ出来栄えと思えます。今落城せんとする城中で、この城の女城主が、寄手とわたり合つてこれを討ち倒した末、火に包まれた城と共に運命を共にするところでしょう。薙刀を振つての奮戦も空しく、城は燃え、今しも胸に寄手の矢をうけて、今はこれまでと立腹をかつさばく女丈夫の表情も四馬氏の麗筆で生々と描かれています。とにかく私のイメージにピッタリの作品でした。今後の作品に期待します。室井様の通信も嬉しく拝見しました。私のささやかなイメージが御意に叶ったよう、喜んでいきます。御指摘のギリシャ娘とエヂプト娘の血斗のイメージも結構なものです。白い肌、金髪長身のギリシャ娘が真紅のふんどしをきりりとしめ、手には短剣を持ち、一方のエヂプト娘は黒髪、小麦色の肌に金糸の縞のある紫ビロードのふんどしをしめて、アラビア風の半月刀という風に、古代文化の源を代表する国の美女の血斗模様は楽しいイメージです。イメージばかりではなく、これを「奇ク」編集部の手で次々と具体化して絵画として欲しいものです。しかし最近我々のこの願いが次第に編集面、企画に反映し

〔優秀緊縛フオト紹介〕

●絹川文代強烈股間縛

美貌と均整のとれた肢体を誇る絹川文代嬢に対して遠慮なく肌にも喰い込めと強烈な股間縛りを敢行、各組とも開股の痛烈さに足の指をくの字に曲げて喘ぎもがくさまを刻明に描写しました。

●鐙利用股間縛 (略号)

大手札三枚一組 二五〇円
豆しほり猿ぐつわ、朱色ロープ使用、首縄、鐙利用股間縛り両脚大の字開き強烈なしほり。

●キの字股間縛 (略号)

大手札三枚一組 二五〇円
白布猿ぐつわ、白色綿ロープ使用、乳房の上下二条、二の腕の二筋、高手小手、強烈股間しほり開股、足の指を屈げ、反らして苦痛に耐える表情もいたいたしい。

●花坂道子裸身の開陳

●剥がれた腰巻 (略号)

大手札三枚一組 二五〇円

裸の肌を見せることに非常な羞恥を覚える花坂道子が乳房も潰れよとばかり締めつけられた高手小手、これだけは許してと願った腰巻さえも無惨にひきはがされて...

●若い妓の寝室 (略号)

モデル 愛川悦子
大手札三枚一組 二五〇円

三味線の御用もすんで行燈の灯かげもひそやかな蒲団の上に横になった若い妓は、思わぬ好事家の客の手で豊満な乳房がむくくりと盛り上るまでに厳しく縛り上げられている。白い胸が白い臀部が身動きできない縄目のもだえに、うごめいている。

●トバクの代償 (略号)

モデル 愛川悦子
大手札三枚一組 二五〇円

タオルの猿ぐつわをされて素裸のまま、手首と足首を括られてベッドの上に投げ出された娘丁半トバクで勝った男の餌食になるのだ。今や彼女は観念して只豊満な裸身を衆目に晒しているばかりであった。

つつあると思いますので今後に期待する次第です。「和風サロメ」は第一に具体化して欲しいことは私とても同様です。同号の畔亭数久氏が描いておられたような妖美の世界で再び「奇ク」の誌上に飾って欲しいものですし、それが不可能ならば代理部分譲品で企画して欲しいものです。(女斗彦)

○ 回を重ねるにつれ充実して行く貴誌を見るにつけ又読者欄に投稿される我が娯愛用者の増えた事に限りない喜びを覚えます。それに特筆すべきは女性の方々がボツボツではありますが、出て来られた事は嬉しい事です。これから先、各号に必ず一つは娯の写真か記事をもせて戴きたいと念じております。私が今まで投稿された方々の娯記事を総合してみましたところ、大半の方々が六尺の愛用者であり、相撲帯の愛好者は少い様ですが娯美から申すならば六尺に優るものはありませんし、いささかも異論はないのですが、女斗美とか斗争といった場合には考えさせられるものがあり、所見なるものを書いてみました。なんといっても娯は、しめ方が第一でありこれが乱されると美しさよりみに

くいものとなります。大体六尺をしめるとき前帯になる部分を肩に上げておき股間を通して臀部から右又は左に横帯を廻した後で一たんクロスさせてから肩に上げていた部分を股間より通してクロスした横帯と結ぶなりねじって横帯にまきつけるといった方法をとるのが普通であり、たまたま前帯に垂れをもたせて横帯の末端をクロス部で結ぶ方法もあります。相撲帯はと申しますと六尺の後者の方のしめ方になり前垂れは二重の横帯のとき末端をおりまげて横帯に差し込む様にし、たいがい、横帯は三重特には四重といった事もありまゝ。横帯の末端は臀部より右に廻して横帯に上から通して脊筋の方向に横帯をくぐらせさらに下におりまげて左横帯に上から通しきつくしめて出来上ります。これはあくまで斗争を主としておりますので、かくも嚴重になるのですが、次の私の経験した例からいっても女斗美、斗争にはこの方を使用なさる様お奨めしたいと思っております。と、申しますのは斗争となりますと必ず横帯をお互にとり合いい、おしたり、寄ったり、吊り上げると、ふり廻すといった事になりますが、六尺の場合は横帯は一重

であり、如何しても前横は中心によりがちになりますし、横禪は上にずり上るといった様になり一たんこうなつた六尺は仲々旧には復しません。男性ならばさほどは考へないかもしれませんが、若い女性の方々はこうなつて仕舞つては好んで禪をしめて争う気にもならないでしょう。私が小学生の頃海岸で遊泳があり砂浜で遊んでゐるうちに先生から命ぜられて友人と相撲をとつた事がありました。この時六尺をしめていたのですが相手はやせていたにもかかわらず背は私よりはるかに高く力も相当あつたようです。二人は立ち上るなりお互に横禪を引き合い相手は私を吊り上げようと懸命です。私も負けるものかと体の重心を下に下げるよう努めましたところ海水でしめつていたにもかかわらず前禪は段々中心によせられ横禪は胸のあたりまで上つて股間に禪はくいこんで仕舞い痛くてたまらなくなりました。慌てた私は横に廻りこもつともがいたはずみにとつと腹下は露出してしまひはすかしさのあまり四つ這いになつて負けてしまつた事があります。又つい最近私のいきつけの酒亭に相撲の好きな女性があり、色々話しをし

てゐるうち禪の事になり一度しめてみないかという事で、とうとう内諾させ、あの日その人の居間で六尺をしめてもらひ、女性の禪美をまざまざとみせて貰つた事がありました。その時取組について手をとつて説明してゐたところ横禪をつかんで吊り出しにかかる前禪は中央により横禪は上に上つてしまふのでおとなしい女性でしたがとても嫌つてどうにもならなくなりその日は取止めにして翌日新らしく運動具店からとりよせた相撲帯を持参してようやく私の満足する色々な美しい型をみせてくれました。しかしながら木綿で出来た相撲帯は新らしいうちにはゴワゴワしてゐて股間はしつくりしません。腹に当る感じは六尺とは比べものになりません。只値段が張るのと容積が大きいので秘かに禪美を楽しむには不向きかもしれせん。奇クに掲載される女斗美図は襦子製の柔かい禪を着けている様で仲々堂に入つたものですが横禪が二重位と見え又細い感じが致します。しかし実際にはやせ型の女性にはやはり太い巾のものを三重以上廻す方がかえつて美しいものですし、又斗争場面としては斜上よりみたものよりも斜下（土俵

全裸後手縛

略号 (みに)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンスーとして活躍する平野笑子嬢が一糸まとわぬすべすべとした姿態にロープをかけられて後手高小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフォト。

寝台の全裸

略号 (みほ)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

ぐつと凹んだお臍、伸びやかな下股、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベツド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作（みに）と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフォト。

全裸の羞恥

略号 (みる)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐な

BGのアルバイト作品。本人の希望によって特に口絵には大々的に掲載しなかつたのでお馴染みも薄いと思ひますが、清純なフェイスと姿態の田原美佐子嬢が恥しさに耐えて衣服をすっかり脱ぎ去り、縄のいましめに哭くポーズ。

股間しばり

略号 (みと)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しばり、首縄高小手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもだえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

全裸股間縛

略号 (みへ)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

全裸になつた文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだら夢幻的な股間しばりのムードを全面にはのほのかもし出して、見る者をして恍惚境へさそひ込む。

どなたか素敵なお便り下さい。私は自身一七〇センチ、五三キロです（福岡県柳川市八山本慎一）

三月号巻頭の、告白「風の中から」を拝見していろいろと考えさせられました。山辺さんは武蔵野の近くにお住まいの御様子、そしてBGの経験をお持ちになり、御結婚後に御主人のリードを得てMの道へつかれたとのことですね。それから間もなく御主人が交通禍で他界されたあと、被虐の性に苦悩されるという筋道を私は心痛く想うのです。偶然の一致ともいえそうなの現実を私は感慨深く眺めてみました。私自身はこれまで数年来、誌上に頭わして来た性格の持主ですが、別に自己嫌悪に陥ることもなく、社会人として元気に生きて来ました。現在適度なM的資質を持つ配偶者を得て、精神的にも肉体的にも満ち足りた日々を愉しんでいるのです。そういう自らを顧るとき、得難いマゾヒスティンの佳人が、心身の渇きに身悶えしておられるのを観て心が痛むのです。私は古川裕子さんを忘れることができません。それ故に山辺まゆみさんを強く印象づけられ忘れ得ないと思います。SとM

の立場の違い、それぞれの強度の差こそあれ、私たちはKKを愛しお互いに幾らかの親しみと好ましさを感じるほか、誰にも何の罪も犯していない筈です。みな、それぞれに幸せになっていい筈です。主観的に生きる欲びを擲むべきです。そのために私たちは誰もが「正常な人たち」以上の努力を続けていると思います。例えば悦虐の姿態美を曝して下さった数多くの女性にしてもそれがいえるでしょう。ベテランと呼ばれるようになってしまった絹川さんや大塚さんにしても、それだけに生命の永い意気があります。辻村氏、塚本氏の育て上げた個性的モデル梨花、東浦の両嬢やこれに準ずる竹野、水本両嬢の美体にはそれぞれ体当りの熱気が感じられました。それなのにあまり幸せを擲み得た報告がないのは何故でしょうか。かつて私達の友として私達を愉ませて下さった川端多奈子さんも伊吹真佐子さんも愛川悦子さんも静かな諦観に満ち足りておられる程度ではないでしょうか。ひっそりとした平穏が安堵の境地というのは寂しいと思います。私が殊に好感を覚えたモデル諸嬢は、すべて積極的な幸福を味わって欲しいので

五月号の新版

バンド開股

略号「はこ」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

ナマのアテゴムもあらわに、月経帯をびったりと肌に密着するように着用して、両股を大の字に開いて、バンドの中心部分を大寫しでごらんにいます。

バンド責め

略号「はん」

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

後手にひしひしと厳しく縛られた豊満な女体は、メンスバンドを無理矢理つけさせられて、手当てをする部分をさらけ出させ、両股を八の字に開かせられる。脱がさせられた月経帯が股のまわりに散乱していても自分ではどうすることも出来ない。

バンド足挙

略号「はと」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

月経帯を穿かされ、あからさまにアテゴムを見せるのさえ恥しいのに、男の手で片足を高々と無理に真直上に挙げさせられるのは、耐えられない恰好である。縛りなしの片足挙のポーズを強要する触手。

目下着用中

略号「もか」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

メンスバンドを自らの手で穿きつつある様子を前後からキャッチした。

夫人の表情

略号「せや」

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

いろいろの事情から口絵には発表できない関谷夫人の素晴しい悦虐の表情をとっておきのネガから特別提供します。一回の撮影に僅か数ポーズか撮影できなかった際のムチ打ちに悶える夫人のすべてがこの三葉のフオトに集約されています。

若妻の切腹

略号「わか」

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木 春子

お臍の下に、ぐっと刺し込まれた短剣の刃先が皮下脂肪に突き刺った有様をフォト化した切腹マニヤとそのパートナーによる若妻の介添切腹。豊かな下腹部を男の手によって切り裂かれる若妻の被虐のポーズ。自らの手は用いずに他人の手によって切腹させられているといった介添切腹の新作。

す。前記のほか桜井葉子さん、萩千恵子さん、そして、津川路子さん、加茂良子さん等々、近況を案じて俟っています。誰もが愛されるべきマゾヒスティンの誰もが、死ぬ程愛されて、せめて関谷富佐子夫人のように生きて欲しいと思うのです。この世の努力は、この世で報われるべきです。幸せは各自の心の中に創られるものでしょう。他人の観察の結果ではなく、誰にも迷惑をかけない心の中に当然築かれるべきものと思います。山辺まゆみさん、勇気を出して御自分の選んだ道を歩いて下さい。小さな蹉躓に失望しないでKKを信頼して行きましょう。箕田氏、塚本氏以下KKの本筋は明るく嬉しい雰囲気になっていくのですから。(東京八近藤一V)

○ 四月号では早々読者通信原稿を御取上げ下され有難う御座いました。女相撲女斗美ファンの多い事を心から楽しく思います。前号で書きました豊島の村田さん、本当に失礼しました。四月号を読み運動具屋から、お買いになったそうで何よりです。村田さん、A子さん、二人仲良くして下さい。そして楽しい通信をファンとしてお待ち

ちしております。又小生は新潟出身で豊山の大ファンです。蔭乍ら豊山に応援して下さい。東京都内に居住する女斗美(女相撲)ファンの方、小生とお便り交換をします。出来るだけお逢いして、夜も忘れて話し合いたいと思います。(連絡は本誌)作家の皆様にも今後どしどし連載して下さい。う。編集部の方々店売りでなくファン丈でも女相撲特集号を作ってお届けば光栄です。勝手なお願とお詫び方々この通信を終わります。女斗美ファン方、編集部の幸あらん事を祈ります。(東京都豊島区八間和志男V)

○ 豪雪の北陸よりお便り申し上げます。三月号の発売が交通の朴絶によりひどく遅れましたので、奇くを読むのが待遠しく、入手するまでは三米も積った雪の中を毎日の様に書店へ通いました。漸く店頭で奇くを見つけた時の喜びは我々マニヤでなければ判らない心境であらうと思います。三月号にはMフォトのなかったのが一寸淋しかったが、奇譚三十九夜の第二話が辻村先生一流の流麗な筆致で夢幻の境地に誘われたのと読者通信欄

の関美代子様を発見したのが、一大収穫であった、関様は現在奴隷を一匹御飼育なされて居られる由その御様子を御聞きしたいものです。特に神酒奉戴式の実況、貴女様の御氣持を知りたいものです。斯く言う私も神酒信者ですから、戴く方の氣持は良く判ります。私は器を使わず直接戴いた経験がありませんが、決して呑み難いものではなく供給して下さいる方にもよると思いますが、如何なる飲物にもない特有の美味しさを感じました。現在は暫く戴いておりませんので神酒を恵んで下さる方を探しているのですが、仲々御会い出来なくて困っております。年に三、四回上京致しますので東京の方、又は近県の方で神酒を供給して下さいる方が御座居ましたら御便り戴けませんか。最近鷹島みどり様、中川フミ子様、川田幸子様と新しい女王様の御登場は大変嬉しい事です。女王様方にはいろいろ雑用があつて御忙しい故か、でも以前森山美歌様の様に永続きされる方が少い様です。勝手な御願いで恐れ入りますが、今後もしどし告白や通信を発表して下さいます様御願ひ申し上げます。又、編集部の方にも御願ひがあるのですが、

市八西村貞一V)

○ 四月号の切腹画、「女城主の最期」は全くすばらしいマニヤへの贈物でした。落城迫る城内で最後の奮斗も空しく寄手のくり出す槍矢を胸にうけて、今日これまでと太刀で脇腹を自ら抉ぐって果てようとする女城主の悲壮な最期の様を活写して余りありました。白い肌、豊かな胸の隆起に、それから深々と抉ぐった脇腹から流れ出す鮮血はこの最後の表情を飾って余りあるように思います。この頃はようやく我々マニヤの要望を満すような企画が誌面に現われてくるようになりまして喜んでいます。女相撲、女斗美マニヤの方々も活発な動きがみられるのもたのもしく思います。東京の岡平様の企画も誠に結構と存じます。いずれ機会をみて参加させていただきます。女斗彦様、北斗星

様、川下米子様らの生首マニヤ、無惨絵マニヤの方々、如何お過ごしですか？女斗彦様の裸女血斗場面のアイデアは仲々新鮮なものがあります。本邦のみ止まらず、洋の東西の女性を血斗の舞台に引き出すというアイデアには私も及ばぬ新しい魅力がありますね。それもやはり貴方の主張同様、時代物にすることに大賛成です。裸の女性はそのなりに美しいものですが、われわれにはふんどし一本をきりりとした姿により一層のあこがれを感じさせます。特に私は日本髪を結い上げた女性のそれに異常と云ってよい執着を感じているのです。その女性の血みどろな争闘図絵が今私の最も望んでいたところ。他の類似誌がかなりはつきりした傾向を打ち出しつつある時に、「奇ク」もぼつぼつこの方面で特長づけてもよいのではないのでしょうか。同好の方々の便りを待っています。（大阪市八室井英山）

○ 寺島美千代様はじめK誌御愛読の皆様御元気ですか、四月号の寺島様のお呼びかけを見て早速御返事致します。私当年二十二才になります。以前よりK誌を愛読致

しグラビヤや皆様様の告白等を見致し、楽しんでまいりましたがいつの日か実際のプレイを行い度く思っていました。何しろ相手が得られず残念でなりません。ところが寺島様のお呼びかけで急に元気が出ました。以前より浣腸器具や薬品を集めており最近では輸入品の特種浣腸を入手致し持っています。浣腸マニヤの寺島様にも、きつと楽しんでいただくと信じます。是非一度お目にかかって一緒にプレイをお願い出来ませんでしょうか、秘密は厳守致します。連絡方法は毎週土曜日午後六時国鉄千種駅の正面玄関にて片手に新聞紙を持って立って下さい。それを目じるしに私がさりげなく話しかけますから。では寺島様是非ともお出かけ下さい。一日千秋の思いで待っています。（名古屋市八武田）

○ 編集部の皆様、女相撲ファンの皆さん、始めて通信します。最近岡平氏の活躍で我々を楽しませてくれ、有難う。特に四月号の「女力士会見記」は面白かった。事実に基づくものとして、小説類より引き付けられるが、二十年前の出来事というのが残念ですね。最

近の出来事か、具体案を発表してもらえないか、岡平氏にお願いする。小生は数年前の女プロレスを度々観戦して肉弾相打つ面白さが、柔肌の女が水着で闘う様子を見てからすっかり大ファンとなった。が、水着で闘う女プロレスより裸一本で死闘する女相撲の方が、遙かに面白く思います。小生は始め女プロレスが面白かったのですが、貴誌が女相撲の記事があるのを知って受読者となった。が、貴誌がこの方の記事のある事は一般に知らないのではないかと思います。ね。大体サドとかマゾとかとは違うのだから、無理もないが、何とか一般に広告してもっとファンを集めたらどうですか。出来る事なら女相撲と女プロレス一本の特集にしてもらいたいですね。サドやマゾファンには悪いが本を買うのに気が引ける（ごめんなさい）。四月号の分譲品に相撲権が出ていたが、女相撲ファンの求めているのは肉弾相打つ取り組みなんだから余り興味がない。どうせ分譲品を出すなら取り組みを願いたい。欲をいえば、岡山市のファン同様大塚関谷夫人のコンビがいいですね。関谷夫人は素人でむずかしい

れば、大塚、絹川の両嬢に願いたい。し禪も黒か紺それに下りがほしい。大塚嬢の長い髪を相撲髪にしたらムードが出ますよ。勝手な事ばかりいってすいません。要するに女相撲のファンは多いと思います。が、貴誌を知らないか、知っていてもサドやマゾに間違えられるので買いくない。又記事が連続的でない事や少な過ぎるので愛読者となれないのではないか。度々読者通信をする事もないからファンの隠れた声として受け取って下さい。（埼玉県八三好照彦）

○ 名古屋の寺島美千代様、四月号でああなたの通信拝見しました。私は今年二十六才の青年ですが、今まで一度でいいからあなたの様の方と合って見たいと思っていました。若しあなたが私の様な者でもよければ一度あって心ゆくまでプレイをしたいと思えます。私も色々やって見ましたから、あなたにもきつと喜んでいただけるだろうと思います。又あなたも私に色々な浣腸責をして下さい。お願いします。とにかく一度文通をしましょう。私の方では先は編集部の方へ問合せ下さい。（大阪市八形部生）

初めて御便りを致します。昨年六月号に掲載されました田中文男様の記事を読み、誠に同好の志が身近におられる事を知り嬉しく思いました。仲々自分の体験はあの様に書けるものではありません。

真実味溢れる一字一字我が事のように感じました。私としては貴君に負けない程マニヤの一人と思っておりますが又貴君としても東京の隅に刺青マニヤの集いが御座います事を御存じと思います。時々テレビ、新聞、週刊誌などに掲載されています。江戸彫勇会という団体が御座います。会員組織になつていまして会員は刺青の彫つてある方、準会員は刺青をなさっていない方によって構成されていますが私としては籍は有りますが二、三度出席しトビ職人によって運営されていますので、三十代の私達は数人で温泉などに一年一度又親しい友人の所に遊びに行く程度です。貴君などは職業柄彫物があつても不思議でも御座いませうが、友人の一人は歯医者を開業しております。それも東京で指おりの高級住宅街にあつてです。未完成ですが、色んな身体（小柄）に誠に大変美しいものです。その上江戸

ッ子的な気風に浅草育ちと大変思ひやうがあり物心両面から親切な人です。貴君など職業柄大衆の面前で公表する事が出来、うらやましく思います。ぜひ一度御会して色々語りたいと思います。（東京△吉村芳夫△）

白表紙時代に本誌を飾った絵や写真といえはしほり、叩き、猿ぐつわオンリーで、読物もそれと歩調を合せ、大幅なスペースを占めて参りました。他には浣腸とか揮美物がお添え物として連座し、次いで切腹（それも台詞、というよりは絶叫過剰のフンパン物語）が加味されて生首愛好に關した読物といえは陽のあたぬほんの片隅に時折かいま見を許さる程度のものでした。マンネリ化した縛りや責めを排除して切腹ものが堂々と画や写真となつて口絵をかざるようになったのはこの二、三年來の事。そうなるを待ってましたとばかりに伏在していたファンが雙手を挙げての大讃辞を雨霞と誌上にそそぎ、ますますその比重は増加の度を加えました。一方生首愛好に對するサービスは如何といえ、ここ二、三回生首シリーズめいたものが登場したつきりで後

は二、三、四のいずれの号にもシヤットアウトを喰っている始末、不服があれば代理部へ御申込みをといわんばかりの編集態度も結構でしょうが、真にマニヤの意に叶う秘蔵大絵巻とやうが、解説によれば、皆無とはどうした事でしよう。それでは分譲の主旨も逸脱しいくら声を大にして売れ行き香んしきなき折には、などとPRしてみた処でいっこうに踊り手もつかないものと思われまう。実をいう

東浦ひかる強烈縛写真特集

第一集 後手吊り足挙げ縛り 略号「うら」

大手札印画紙（13×9 糎）焼付 五枚一組 五〇〇円

肥り気味の割に柔軟な姿体のひき足首にも縄をかけ、その縄をぐいやるの辛抱強さと柔軟さを試すたぐい吊り縄にて引き上げ、恰も一め、後手縛りの縄で両足先がやっ本足の力カシのような哀れな姿でと床につく位に吊り下げ、片方の許しを乞うまで晒しておく。

第二集 二つ折りエビ責め 略号「うり」

大手札印画紙（9×13 糎）焼付 五枚一組 五〇〇円

これは、流石辛抱づよいひかるとを連繫、両方の足が高々と挙りも、早く解いてくれといつて悲鳴丁度赤ちゃんがおシッコをさせてを上げた一コマ。丁度腰のところ貫うときのような恰好で床に坐らで二つ折りになるように膝と後手されて許しを乞うひかる。

第三集 足挙げ椅子責め 略号「うる」

大手札印画紙（9×13 糎）焼付 五枚一組 五〇〇円

責めが終つてからマゾ女性ひか足の間から顔がのぞくといった、苦痛が最も素晴しかつたと述懐した。かきうぎうぎう力一杯締めつけた、両足が高々と頭の上まで挙つて両試みるこの出来なない索一ズ。

と四月号も購買の意志を失ったのですが、室井英山氏の一文にひかれて、読者通信のうちにひかす。誌上での発表が困難でしたら先述の如く分譲品扱でも大賛成、むしろ価格の方も倍層であろうと三層倍であろうと問う処ではあります。ひとつ、こちらで思い切った笛を吹き、大鼓を叩いて戴けません。揮一本で渡り合い力つきて斬り落される御殿女中の生首組み敷かれ止めを刺された揚句に刎ねられるお姫様の首級、土壇場に引き据えられて浅右衛門の一刀の下に血溜りの中に転がり込む妖婦の首、断頭台からバスケットに落ちて行く貴婦人の首、食人種にガールハントされた女流探険家の生首等々、凄艶妖美な画題の他にモデル嬢をつかったの生首写真などもぜひ作成願いたいものです。反響は正に期して待つべきものがあるかと存じます。末尾乍ら室井、女斗彦、南方、川下その他諸氏の御健斗を祈って止みません。(新潟市寄附町八前川成雄)

中川様、川田様、貴女の御意見私、奇巧の二月号にてはからずも読みました。読者通信のうちでもこういった女性のお方は数少く本

二月号だけでも貴女が二人だけしかなく大切な存在です。しかし女性のサジストなんて、どんな事をする方かしらなんて思うこともありますが、加虐症と被虐性であるのは判っているのです。貴女の読者通信の中にもむちで打つとかしばるとか、馬のりになるなんて書かれてありますけど、そんなこと、私は嫌いです。私も被虐七〇%にあと三〇%がまあやわらかいサジスト的と云いますか？つまりやわらかい感じの責められ方や責め方が好きなのです。奇巧でも写真には余り興味なく、美しい責めの画や、浣腸小説、レスボス小説などが文句なく好きです。浣腸小説といっても、実際好きなのは浣腸ではなく、浣腸に似た音の発生する事が好きです。サジスチックな貴女方にこんな事をしたら、どんな事をされるだろうと思うと、こわい様になくわくする様な気持ちになってしまいます。むちや棒、ヒモなどはきらいで、そんなものは用いずに息苦しくなる位、貴女方みたいな方に責められたいと思ふけど、なかなかね。まだ異性に未経験な三十一才の男性ですが、この際、中川様と川田様、文通だけ致したいと思えますから、出来

代理部分譲品御注文の栞

○代理部分譲品はすべて前金にて御注文願います。直接の御訪問並に代金引換はお取扱ひ致しておりません。

○御送金は現金書留、小為替、定額小為替、振替等にてお願い致します。切手の代用は当分の間お断り申し上げます。

○御注文品名は雑誌にては何年何月号或は略号、フォトはすべて略号にてお願い致します。送料は日本国内に限り当方にてすべて負担させて頂きます。

○局留にてお受取り御希望の方はお受取りになられる郵便局名(特定局でも可)と御名前とを御連絡いただければ、御指定の局宛お送りいたします。その局にてお名前お申出の上お受取り下さい。お名前は仮名にてもよろしいです。局が認印の必要な局もあります。局に於ける留置期間は十日間です。

○御注文の宛先は阿倍野局私書函第十四号天星社です。

○お送りいたします。

○尚、御注文の際、第二希望品がございましたら添記下さい。分譲中止又は品切れ等の場合、迅速に処理が出来ますので大変助かります。

○分譲品の新しいものは毎号新案内として掲載しておりますが、御希望の趣向がありましたらお申出次第、出来る範囲のものは作成に努力いたします。

○分譲中止になったものは、漸次誌上にてその旨広告いたします。御留意願います。

○お送り先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。

○未着品につきましては、御送金の月日、金額、品名等をお書きの上御照会下さい。調査の上お返事或は再送いたします。

○御注文品の返却交換等は原則としてお断りいたします。但し郵送中の破損等の場合は、この限りではございません。

○金額にして五千円以上まとめてお申込の際には一点、八千円以上の際には二点、一万円以上には三点の優秀フォトサービス品を贈呈いたします。

ましたら書いて送って下さいね。
記名は千原弘としておりますが、
本当の住所氏名は編集部へお尋ね
下さいね。又、全国のサド的な女
性達とも文通をしたく思います。
逢うことは嫌いです。(千原弘)

○
全国の愛読者の皆さん今日は。
私はある紡績会社の寮に住んでお
ります女工員です。どうかよろし
くお願いします。もう二年ばかり
引き続いて愛読しておりますので
一かどの奇クファンになつていま
す。最初は寮の部屋で誰かが持つ
てきた奇クを見て大変興味を持ち
それから、古い号を古本屋で探し
たり、だんだんと知識をひろめ、
このごろでは毎月の新刊の発売が
待ち遠しいくらいです。はじめの
うちは只珍しい一点張りでしたが
今では、いろいろな言葉も覚えて
原稿の一つも書いてみたいと思っ
ています。寮ではいろいろと面白
い体験もあり、私自身のことでも
いつも同じお蒲団の中で夜は一
緒に寝る特に親しいお友達が二人
ほどあり、(一人の方は結婚して
しまったので今は一人ですが)そ

の方のこともお知らせしたいと
思います。九州の田舎から中学を
出てから上阪してすぐ工場の寮へ
入った私たちですから、あれから
数年経った今でも、まだ何も知ら
ないうぶな娘なのです。それだけ
に好奇心も人一倍強くてどんなこ
とでも知りたいと思っています。
そのうち、何か文章を書き、全国
の皆さんに読んで頂きたいと思いま
す。関谷さんの勇敢な態度には只
々感激です。私ももう少し身体に
自信があつたらモデルにでもなり
たいのですがその勇氣もありませ
んの、せめて体験談でも書かせ
て頂こうかと思っています。読者の方
々の中には、女の下着に関心をお
持ちの方も案外多いのです。私
の寮の窓の外なんか、毎日、下着
の陳列で大変なんですよ。特にお
天気の良い日曜日なんか、それは
見事なものです。でも、中には押
入れの中に汚れた下着をまるめて
押し込んでいる人もあります。き
つと無精なんですよ。愛読者
の皆さん、私の文章が誌上に発表
されたらお便り下さいね。お待ち
しています。(大阪市泉佐野市八

次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

坂本和子V

○
津沢秋子様、もう五、六年前の
ことですが、空気を吹きこんで大
きくふくらましたビーチボール、
浮袋、空気枕などに強い魅力をお
ぼえる一群の人々の告白が掲載さ
れました。私も、そのひとりでし
た。これらの人々は男性で、そう
した愛着の対象になる品物はゴム
製品にかぎられていました。その
意味で、これらの人々はゴムマニ
アといえます。ただ、それらのゴム
製品は、あなたもお書きになった
ように、空気を入れてふくらまし
たものでなければなりません。そ
れで私は「ビーチボールマニア」
と呼んでいます。しかし、厳密に
は「ゴム製空気吹込み製品のマニ
ア」というべきでしょう。ただ、
こうした趣味は男性の告白ばかり
で、女性の方の報告がないのを淋
しく思っております。全裸の女
性が、大きなビーチボールをふく
らまして、しっかり抱きしめたり
その上にまたがったりする光景。
あるいは、大きな浮袋を股にはさ
んで眠る光景。そうしたことに興
味をかんじる女性はないのだろう
かと空想しておりました。空気で
充滿したボールや浮袋のあの弾力

感に魅される女性はいくらもい
るはずだと思っておりました。しかし
私はついに今までそうした女性に
出会うことなく暮してきました。
あなたが、かならずしも私と趣味
を全く同じにされるかどうかは存
じません。しかし、あなたの方法
をさらに快適にするかもしれない
いくつかの意見を参考に申し上げ
ましょう。お尻の下に敷くための
ものとしては、円座は、やや感触
があらすぎます。つまり、両面と
も、ギザギザの模様が浮き出して
あるからです。円座と同じもので
ギザギザのない滑らかなゴム製品
としては、スクーターのタイヤの
中に入れるチューブがあります。
これはゴムもじつに丈夫で、ぜっ
たいにパンクしたり空気洩れした
りしません。ただ空気を入れる弁
は特殊なもの(一たん入ったら逆
流しない)なので、これを加工し
てふつうの金属管にし、それに適
当な長さのゴム管をはめこみ、さ
らにその端にふつうの口金(こわ
れた浮袋か空気枕からはずして利
用する)をはめこめばよいのです
そのほか、馬蹄形をした特殊なク
ッションや各種の洋袋も持ってい
ますが説明が長くなるので省きま
す。(東京八佐田春雄V)

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかあったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等に関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、或いは読者相互間の交歓、誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のため、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭にして原稿をどしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、オースドックスなSMに連れた小説、創作、研究、資料、体験、告白、紹介、論説といったものを始めとして、流暢、女装、切腹、フェチ、女相撲、女闘美、美、身体各部に対する狂崇等に連したものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。一、原稿の枚数は別に定めません。一、原稿の短めは、便箋や鉛筆が都合によつては、自由に、必ずしも、未発表のものに限ります。一、掲載の作品は特別に定めません。掲載可能な作品は、最近号から漸次表にはいたします。優秀作品の投稿者には、編集部から題材を提供して、一、採用原稿に對しては、相当の原稿料をお支払致します。一、誌上で匿名は御自由です。一、投稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません。故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の榮

予 約 料

一月分 (1冊)	二百円	送共
三月分 (3冊)	六百円	送共
半年分 (6冊)	千二百円	送共

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品総目録」を準備しております。一、代理部分譲品は、お申込み願います。目録は十円切手同封にてお申込下さい。急送申し上げます。○雑誌は厳重包装の上第三種郵便にて、写真類は密封の第一種郵便にて、その他は第五種郵便にてお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、等にてお願いいたします。切手代用は当分の間、都合によりお断りいたします。○本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

五 月 号

(第十七卷第五号)
(通刊第百七十六号)

昭和三十八年 四月二十日印刷
昭和三十八年 五月一日発行

編集印刷兼発行人 箕 田 京 二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二二号)